



名桜大学10年史

正誤表

ページ	(誤)	(正)
(目次) 第3編 第3章	1 付属図書館	附属図書館
(目次) 第4章(5行目)	大阪国際学長	大阪国際大学
(目次)第4編 追想(11行目)	名護市職員 大城 政行	大城 弘行
(目次)第6編 資料(11行目)	教育研究奨励 期金	基金
108	大阪国際学長	大阪国際大学
203(14行目)	英語購読	講読
205(22行目)	生物の物理的 基礎	物質的
205(23行目)	環境科学	化学
207(37行目)	漢文購読	講読
208(6行目)	高等英語購読	高等英語講読



名桜大学10年史





山原のイタジイ林





名護市為又の自然環境に恵まれた高台に
位置する名桜大学のキャンパス



発刊にあたって

理事長
比嘉 鉄也

名桜大学開学10周年にあたり、ここに記念誌を刊行できますことを心からうれしく思います。

名桜大学は、関係各方面からの格別のご指導、ご支援により平成6年4月に「平和」「自由」「進歩」を建学の理念とし、徹底した外国語教育によって地域はもとより世界に貢献できる人材の育成を目標に、公設民営型の大学として開学しました。ここに名桜大学開学10周年を迎えたのでありますが、今日では学生数約1600名が在籍し、異文化を深く理解するとともに国際語を駆使し、高度情報化に的確に対応するための授業が行われ、約2400名の卒業生が巣立ち、社会の各分野で活躍しております。

名護市は昭和55年ごろから「大学誘致委員会」を発足させ大学誘致について検討をしてきました。しかし当時は新規の大学設置を規制する方向にあり、大学誘致運動もなかなか進捗しない状況でありました。ところが高等教育機関の誘致運動から始まった大学設置の動きは、北部地域住民を巻き込ん



だ大きなうねりとなりました。大学誘致がだめなら自分たちの手で大学を設置しようと、北部12市町村が力を結集してきたのが名桜大学であります。

本年度で開学10周年を迎えるわけですが、今までの10年間は少年期であり、いろいろな人々のお力添えをいただいて今日までできました。今後の10年間は青年期として自立、飛躍をしていかなければなりません。

本日、開学10周年を迎えることができますことは政府、沖縄県、名護市をはじめとする北部12市町村並びに関係各位のご理解とご支援の賜物であり、ここに深甚なる感謝の意を表する次第であります。

名桜大学といたしましては、地域の皆様と連携し、地域に開かれ、地域の人々のための大学を目指し、大学を運営してまいりますが、大学の更なる発展の為、平成17年度に向けて人間健康学部の設置や野球場の整備、温水プールの建設、学生サービスセンターの建設、等学習環境の整備を行っています。

さらに、「北部生涯学習推進センター」が名護市により建設され、それを名桜大学が運営することにより、今後は名桜大学が生涯学習を通じて、地域に恩返しをするべき時だと思いますので今後とも皆様のご指導、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。





発刊にあたって

学 長

安田 晃次

平成6年に創立された名桜大学は、本年度で開学10周年を迎えることとなりました。先ずは創立に当たり、幾多の困難を乗り越えて今日の姿にまで創り上げてこられた、行政・地域住民・企業をはじめ多くの学校関係者皆様のご尽力に心から敬意と感謝の意を表します。

本学は、北部12市町村の皆様から、北部地域に高等教育機関は是非とも必要であるという強い後押しがあり、その情熱と、12市町村の苦しい財政事情の中でやりくりしながら資金を結集して平成6年、名護市為又の自然環境に恵まれた高台に「学校法人名護総合学園 名桜大学」として、公設民営の形態で誕生しました。

開学に至る関係資料を見ますと当時の比嘉鉄也名護市長が、北部出身の東江康治琉球大学長に「大学を創ってほしい」という話をされ、それから東江康治先生の広い人脈により大学設立に必要な教職員等の人集めが具体的に動き始めて、大学創設の話が具体化して始まっております。

もともと北部地域は教育に熱心な地域で、戦前、旧制中学校が那覇・首里・名護（一中、二中、三中と呼ばれていた）とあり、戦後、他の地域に大学があるのに名護にないのはおかしいという声が強くなり、地元から通える大学を設置して若年人口の流出に歯止めをかけ、地域を活性化するということが狙いでありました。

本学の名称については、名護は日本で一番先に桜の咲く所でもありますので、名護の桜をイメージした「名桜大学」の名が県内の高校生により選ばれました。



沖縄は第二次世界大戦中、日本で唯一の地上戦を経験し多くの犠牲者を出しました。その事を踏まえ、本学の基本理念として「平和」「自由」「進歩」を掲げ、1学部（国際学部）3学科（国際文化学科、経営情報学科、観光産業学科）で開校されました。本学はお蔭様で、平成10年に第一期生を社会に送り出して以来、今年で7期生、計2418名の卒業生を世に送っております。これら名桜大学卒業生が、県内外で社会人として活躍し、貢献している話を聞くことはうれしい限りです。本学最初の10年はいわば、大きな第一節目、基礎作りの10年ともいえると考えます。次の10年は改善と改革を常とし、基礎から飛躍の10年にしたいと思います。本学も大学教育の「質の保証」を目指して、1年から4年まで一貫ゼミの導入を決めるなどアクションプログラムも昨年からスタートさせ、学生へのきめの細かいサービスを推進していきます。学生に依る授業評価はすでに実施していますが、教員の教育能力向上のためのファカルティ・デベロップメント（FD）の充実を図っていきたいと考えています。

開学10周年記念事業として専用野球場および滞在型研修棟を含む北部生涯学習推進センター（北部振興策）も10月に完成しております。学生サービスセンターや屋内プール（平成17年3月予定）も記念事業として建設に着手しております。このように本学キャンパスの環境整備は一段と充実しております。施設・設備の充実だけでなく、この10周年を機に新学部「人間健康学部—スポーツ健康学科」（申請中）の設置を図っているところです。

今後も、開学の理念を大事にしながら、「地域に開かれ、地域と共に生きていく大学」として地域に愛され、また、貢献できるようにますます発展していきたいと考えます。

10周年を迎えるに当たり、これまで様々な形で支えてくださった関係各位の皆さんにあらためて感謝とお礼を申し上げますと共に、今後とも「名桜大学」の発展に御協力と御支援をお願い申し上げます。





祝 辞

沖縄県知事
稲嶺 恵一

名桜大学開学10周年をお祝い申し上げます。

名桜大学は、やんばる12市町村と北部地域の皆様の並々なぬ御熱意により「公設民営」の大学として平成6年に開学し、以来、「平和」「自由」「進歩」を建学の理念に掲げ、時代の変化や社会の要請に応え、グローバルな視点に立った実践的教育に取り組んでこられました。

これまで、地域の産業・経済を支える優れた人材の育成の成果として多くの優秀な卒業生を輩出するとともに、若者定住の促進にも寄与し、地域に開かれた信頼の高い大学として人々に愛されています。

10年の歩みは決して平たんな道のりではなかったかと思いますが、安田学長をはじめ、歴代の役員、教職員並びに関係者の皆様のたゆみない情熱と努力により、晴れて節目の日を迎えられたことに対し、深く敬意を表します。

「知の時代」とも言われる21世紀において、少子高齢化の進行、科学技術や情報通信の発達により、社会が複雑・高度化する中、名桜大学には引き続き社会のニーズに対応した人材育成及び学術研究を行い、本県の未来を切り開く北部の教育拠点としての役割を果たされることを願ってやみません。

県としましても、私立学校の重要性を認識し、個性あふれる人材育成を促進するなど、特色ある学校づくりの支援に努めてまいります。

これから名桜大学が、10周年を契機として更なる飛躍を遂げられることを期待するとともに、関係者の皆様の益々の御健勝を祈念しまして、お祝いのことばといたします。



祝 辞

名護市長
岸本 建男

名桜大学開学10周年を心からお慶び申し上げます。

かえりみますと、当時、緑豊かなここやんばるの地に若者が集い、にぎわいのある街づくりを目指した各種施策が検討されるなか、北部12市町村が一体となって、「自らの力で大学を創り、街を活性化しよう」との声が高まり、平成3年7月に学校法人名護総合学園設立準備委員会を発足し、本格的な大学設立への取り組みがはじまりました。

その後、国、沖縄県のご指導と多くの皆様のご支援により、名桜大学が平成6年4月に開学しました。

その後当校では、県内外はもとより、ブラジル、チリの在外公館派遣員をはじめ、ボリビア、中国、マレーシア等世界各地で活躍する卒業生を輩出してきました。

これもひとえに、学長並びに理事長、教職員の皆様のご尽力の賜物であり、ここに深甚なる敬意を表する次第であります。これまでの環境整備が着々と進められるなか、本年度は、北部振興事業により「北部生涯学習推進センター」も完成し、産・学・官が連携した高度な専門的人材の育成が図られるとともに地域住民への学習機会が充実し、地域に根ざした大学が確立するものと期待を寄せる次第であります。

名護市といたしましては、本校と沖縄工業高等専門学校を含めた学園都市構想の実現と、バイリンガル教育による国際的人材の育成を図るための計画検討に着手し、本市の目指す「小さな世界都市」の実現に向けて努力してまいりますので、皆様のご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。

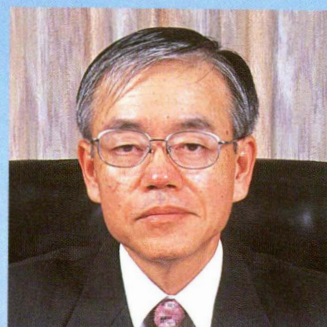
結びに、学生の皆様におかれましては、尚一層研鑽を積み大大きく飛躍することを希望するとともに、名桜大学のますますのご発展を祈念いたしましてご挨拶いたします。



理事長 比嘉 鉄也



学長 安田 晃次



副学長 生見 哲郎





初代理事長・初代学長 東江 康治



第2代学長 東江 平之



目 次

発刊にあたって	理事長 比嘉 鉄也	6
発刊にあたって	学 長 安田 晃次	8
祝 辞	沖縄県知事 稲嶺 恵一	10
祝 辞	名護市長 岸本 建男	11

第1編 通 史

第1章	高等教育機関設置への長い夢	18
1	やんばるの教育土壌	19
2	大学誘致への模索	21
3	大学設置の構想	24
4	大学設立準備室発足	27
5	大学設立準備委員会設置	30
6	文部省との交渉	32
7	認可	38
第2章	名桜大学の開学	39
1	大学の名称	39
2	建学の精神・教育目標	40
3	入学試験、センター試験の導入	44
4	入学式	45
5	開学1年～4年	46
6	開学5年～10年	50
7	大学院	55

第2編 重要事項と証言

座談会	名桜大学開学までの足跡	58
	名桜大学創設当時の回想	74
	法政大学名誉教授 外間 守善	

第3編 大学教育と地域サービス

	カリキュラム構成	国際学部	76
第1章	学科紹介		77
1	国際文化学科	Department of International Cultural Studies	77
2	経営情報学科	Department of Management and Information Sciences	81
3	観光産業学科	Department of Tourism	83
4	スポーツ健康学部保健体育学科を文部科学省に申請		87

第2章	大学院紹介	88
第3章	大学の施設	90
	1 付属図書館	90
	2 総合研究所	94
	3 多目的ホール	99
	4 体育館	100
	5 サークル棟	100
	6 福利厚生棟	100
	7 留学生センター・借り上寮	102
	8 名桜大学の協力団体	103
第4章	国際交流協定・単位互換協定大学紹介	105
	名桜大学の創立10周年にあたって	放送大学学長 丹保 寛仁 106
	開学10周年に寄せて	沖縄国際大学理事長・学長 渡久地朝明 106
	地域の時代に花開け名桜大学	沖縄大学学長 桜井 国俊 107
	開学10周年記念を祝して	沖縄キリスト教学院大学学長 神山 繁寛 107
	開学10周年を祝して	大阪国際学長 金子 敦郎 108
	名桜大学開学開学10周年に寄せて	文教大学学長 石田 恒好 108
	ますますのご発展を	文教学院大学学長 島田 燁子 109
	開学10周年を祝して	横浜商科大学学長 久保 清治 109
第5章	学生生活	111
	1 学生の生活	111
	留学生センターでの生活	金 玫恵 111
	名桜借り上げマンション	深澤 友博 112
	2 クラブ・サークル活動	113
	3 大学祭スナップ	126
	4 海外留学・交換留学	128
第6章	地域貢献と公開講座	131
	1 公開講座	131
	2 高大連携	138

第4編 追 想

名桜大学での思い出	1期生 仲里幸一郎	140
なさくら大学	2期生 東江 益子	142
思い出	3期生 平良 和義	143

名桜大学開学10周年に寄せて	4期生	銘苺 奈真	145
思い出	5期生	張 瑞	146
思い出	6期生	沖山 貴志	146
「名桜エイサー」から学び得た私	7期生	伊波あゆみ	148
開学と学年進行中の教育	教員	瀬名波榮喜	150
七人の侍	教員	住江 淳司	152
10年の思い出	教員	芝野 治郎	153
思い出	名護市職員	大城 政行	155
目を見張る施設整備	名護市商工会会長	荻堂 盛秀	157
海外からの声	元在伯沖縄県人会会長	宮城 滋	159

第5編 将来に向けて

第1章 座談会	162
1 名桜大の歩む道	162
2 名護総合学園の将来構想	167
第2章 将来計画	178
1 学長の方針	178
2 中、長期計画	182
第3章 期待の言葉	188
住民との交流を活発に	北都市町村会会長 宮城 茂 188
地域に好かれる人材を	北部振興会会長 島袋 清徳 190

第6編 資料

大学の歩み	194
歴代役員	195
現役員	197
教員紹介	198
職員紹介	201
カリキュラムの概要	203
年度別入学志願状況	215
在籍状況	233
就職状況	234
10周年寄付者一覧	236
教育研究奨励期金、その他特定・一般寄付者一覧	244
新聞に見る名桜大のあゆみ	254
貴重な講演会	265

編集後記	278
------	-----

通史 第一編



第1章

高等教育機関設置への長い夢

波静かな名護湾の奥まる所、名護市為又の高台に居を構え、桜の名所・ナングスク（名護城）の連なる山々、青く輝く海原をキャンパスから眺めながら、国際舞台を目指し、学問に勤しむ21世紀を担う若者たち。総合学園・名桜大学10年の軌跡は、教育に情熱を燃やす地方公共団体、教員、そしてヤンバルンチュが一つになって長い夢を成し遂げた快挙といえよう。



名桜大学より名護市街地を望む

／ やんばるの教育土壌

教育こそ大きな財産

山原（やんばる）ほど教育土壌に恵まれたところはないが、那覇から遠隔の地にあり山原の教育事情、環境は決してよくなかった。だから教育の機会均等を目指す北部地域住民にとって高等教育機関（大学）設置は、大きな願望であり、夢だった。「すきっ腹に藁（わら）帯を締めても子弟には教育を受けさせよう。子弟の教育こそ大きな財産である」という父母、地域住民には強い信念があったのである。

中学校、高等学校がなかったころ、北部地域が一体となって、力を合わせて学校を造る運動が始まった。教育、農業振興を目指していただけに農学校設立を優先した。国頭郡の各間切が一体となって金を出し合い、出来上がったのが国頭郡間切組合立「国頭農学校」だった。地元の農家の後継者や教員を目指す人たちがいた。また、地元ばかりでなく、中南部からの入学者もいたほどだ。教育にはもう一つの方針があった。当時、海外への移民、関東、関西への出稼ぎも多かっただけに、ウチナンチュとして恥ずかしくない基礎教育を施すこと、さらに地域興しに役立てることが目的だったのである。

農学校が嘉手納に移転

1902（明治35）年4月13日に開校した甲種国頭郡各間切島組合立農学校（国頭農学校）は、学校運営も軌道に乗り多くの素晴らしい人材を輩出していった。父母や各間切の首長らは農業振興に自信と誇りを持ち始めていた。ところが1916（大正5）年、県が国頭農学校を嘉手納に移転させた。県内唯一の農学校だったため中部、那覇、南部からも入学できる機会を——というのが理由だった。1923（大正12）年4月、林科を設置して沖縄県立農林学校に改称し、日本3大農学校として全国に、その名をとどろかせた。嘉手納移転は山原の人々に大きなショックを与え、まるで名護の町から灯が消えたように、当時の新聞は伝えている。県立農林学校は30年後の1946（昭和21）年1月28日、北部に移転、県立北部農林高等学校として開校した。

挫けてはいけない。町の地域の振興に学校は不可欠なものだと国頭郡民挙げて誘致運動を展開したのである。それほどヤンバルの人たちの教育に対する情熱は高く、一丸となって県に要請行動を行った。そのおかげで1928（昭和3）年、県立第三中学校が開校した。また1920（大正9）年に清華高等女学校としてスタートした国頭高等女学校は1930（昭和5）年、県立第三高等女学校となり再出発した。入学者も多く両校の繁栄は名護町はじめ北部の活性化に大きく貢献したことはいうまでもない。

学問をさせるには金が掛かる。それは昔も今も変わらない。それでは父母はどのようにして子供たちを学校に入れたか。蓄えがなくなると親戚、友人から借りる。さらに模合、土地などを売って対応した。まず長男を学校に入学させ、卒業すると長男は働きながら次男の学費を出し、卒業まで面倒を見る。次ぎは次男が三男の卒業までというように家族ぐるみで教育に力を注いだ。もちろん女の子も同等に対応し育ててきた。特に畑や田んぼの少ない地域ほど教育熱は高かった。

このように教育土壌、環境は自然のように育まれていったのである。

程順則の教え

教育土壌といえは程順則の影響も大きい。1729年、66歳の時名護間切の総地頭になった順則は政治的功績だけでなく教育者としても名高く、中国から持ちかえった教訓書「六諭衍義（りくゆ・えんぎ）」には、人が人として守らなければならない6つの教えが分かりやすくまとめられている。この本は八代将軍に献上された後に和訳され、江戸時代の寺小屋の教科書として全国に広く普及し用いられた。今では小學校の社会科の副読本として活用されている。



程順則像

六諭（聖諭）

- | | |
|------|---------------|
| 孝順父母 | 親孝行しなさい |
| 尊敬長上 | 目上の人を尊敬しなさい |
| 和睦郷土 | 村里にうちとけなさい |
| 教訓子孫 | 子孫を教え導きなさい |
| 各安生理 | 各々の生業にあまんじなさい |
| 母作非為 | 悪いことをしてはならない |

戦火で壊滅の学校造り

山紫水明の地と謳われた北部・名護市の町は、1945（昭和20）年3月の大空襲によって緑の山々の草木は焼けただれ、家々も瓦礫の山と化した。東江国民学校、第三高女、第三中学校も海空からの攻撃で破壊された。住民は中南部の避難民とともに山に入り、難を逃れた。地上戦に巻き込まれた中南部に比べて悲惨な被害こそ少なかったものの多くの住民に深い痛手を残した。45年6月下旬、終戦と同時に山を下りてきた住民はまず、住む家を造り、荒れ果てた田畑を耕す日々が続いた。そして山の木を切りだし、かやを刈り、学校造りに奔走した。

戦後、いち早く小、中学校が開校したのは北部で、沖縄初の英語学校が誕生したのも名護市だった。校長は宮城清吉氏で、教鞭を執っていたのが、元琉大学長の東江康治氏、元県知事の大田昌秀氏、琉球大学の宮城悦次郎教授らだった。同校には中南部からも入学者が多く、入学者のほとんどが下宿をした。当時からすれば経済的メリットは大きかった。やっと住民の顔にも明るさが戻り寂れていた名護市に活気が甦ってきた。学生は英語学校を卒業すると米留学を目指した。2～3年留学し帰ってきた若者たちは琉球政府など公職に登用されるなど政財界で活躍した。留学経験者を中心にした親睦団体・金門クラブを造り、交流を深めると同時に将来の沖縄の自立、発展を誓い合ったのである。

2 大学誘致への模索

若者の流出に歯止め

復帰直後、1972年頃から北部の高校を卒業した200人から300人ともいわれる若者たちが中南部へ流出していた。親は子供をいい大学に入れるために小、中学校を卒業すると同時に中南部、那覇の中学校、高校に入学させ塾にも通わせた。いい学校に入れるため中には家族で引っ越しする者もいた。北部に大学がないから、ほとんどの高校卒業生は那覇の私学、琉球大学へ入学、あるいは本土の大学へと流れた。進学だけ

でなく就職希望者も地元で就職したくても企業が少なく、やむなく中南部で就職した。過疎化が進み、町や村はお年寄りが目立つようになった。若者のいない町は寂れ、次第に活気がなくなってきた。また経済力の乏しさから進学を断念せざるを得ない者も少なからず生じていた。山原から若者の流出を食い止めるにはどうすればいいか——。市や各団体、有志らが一緒になってカンカンガクガク、ついに議論は一般の人たちにも浸透していった。戦前から教育熱心なヤンバルンチュだけに高等教育機関の設置に絞られたのは言うまでもない。

しかし中には「北部に大学を造って受験者はいるの？ 高額な費用を使ってもったいない」と首を傾げる者も。そのほとんどが学校の先生だったというから当時の設置派は「なぜ先生が」と逆に首を傾げたのである。学生ら若者たちが町にいて、街全体が元気になる。そればかりではない。名護市農業の年間の生産売り上げは年々減少傾向である。40億円を割っている。農家に入る金は、その約半分20億円しかない。例えば1500人の学生の家賃だけでも、たいへんな収入で、そのほかにも経済効果は高い。例えば、飲食費や書物などの購入だけとっても街に活気が出てくる。

大学誘致委員会が発足

名護市は1979（昭和54）年、大学誘致懇話会を設置し誘致の検討を開始した。国立、私立、短期、総合大学にするかなど大学誘致のため市内部で基本的な事項について1年に渡って検討した。これをより具体化するため80年、市条例に基づく「大学誘致委員会」（高良鉄夫委員長）を発足させた。3年かかって地域にマッチした大学について話し合った結果、答申では「地域総合短期大学」の設置を目標に、地域における課題を総合的、学術的に取り組む大学で、学生は北部県域にとどまらず、広域的に募集することから国立または県立が望ましい。ただし名護市立、北部広域市町村圏組合立、私立などの可能性も検討していくこととし、要望として、北部広域市町村で一致団結して大学誘致を目指し、十分協議し検討を、と提案している。

大学誘致は困難

1984年（昭和59）年、北部12市町村で組織する北部広域圏市町村協議会は、誘致

委員会の提案に基づいて協議を行い、85年に「やんばる市民大学の展望」と題した報告書を提出した。それによると通常の大学誘致は困難だと判断し、キャンパスを持たない「市民大学」が提案されている。さらに名護市は87年4月に「大学誘致の可能性」と題し講演会を開催した。講師は紀の国屋書店副社長の吉枝喜久保氏で、大学設立等について長けた存在だった。講演会で吉枝氏は「日本の大学は年々増えている。しかも高等専門学校、専門学校など含めると増加率は大変なものだ。大学の募集人員に対し応募者数が不足の大学も多い。少子化の時代を迎え、国でもよほど独特な大学でない限り、設置認可は難しいだろう」と話し、通常の大学誘致には難色を示した。'88年から'90年に掛けて、アメリカのマiami大学とペンシルベニア州立大学から分校設置について関係者から打診があったが初期の段階で話がまとまらず、誘致委員会での検討に至らなかった。分校となると教授や講師らの移動経費だけでも大きいし、しかもアメリカとなれば想像もつかないのでは、と目を閉ざす関係者もいた。

文部省によると'70年から'90年頃までは18歳人口が増えるが、'92年をピークに激減期に移行すると見越していた。'94年開学を意図した計画に大学の専門家らが冷たい反応を示すのは当然だったかもしれない。

自分たちの力で造ろう

大学専門家の話を聞いても大学設立は、ほとんど否定的で厳しい答えばかり。公立にするには、これだけの自治体では不可能。広域圏は力が足りない。皆さんは、自分の体力を知っているのか——などと自治省から一蹴された。逆に自治省から市町村の3大赤字は①市営バス、②病院、③大学で、この3つが市町村財政を破綻させている大きな原因だとも言われた。国立、公立、私立大の誘致、設立なんてとんでもないと言わんばかりだった。

このように大学誘致に関して否定的、悲観的な回答ばかりで名護市をはじめ広域圏などに大きなショックを与えた。断念せざるを得ないのか。大きな夢が消えかけようとしている時、1986（昭和61）年、名護市長選に出馬を表明していた比嘉鉄也氏が「大学の誘致がダメなら自分たちの力で造ろう」と呼び掛けた。選挙公約にも掲げるなど再び大学設立問題が浮上してきた。半ばあきらめていた市民や山原の人たちに

「今度こそは」と意欲と勇気を与えると同時に固い絆が結ばれていったのである。

戦後「大学を造ろう」が3人も

教育土壤に恵まれているせいか、北部には教育に熱心な人が多い。戦後、「北部に大学を造ろう」という人が3人もいる。1人は沖縄で初の英語学校を造った宮城清吉さん。短大に昇格させようとした。ところが1950年に琉球大学が開学したため断念した。もう1人は「名護六百年史」を書いた比嘉宇太郎さんだ。周囲から「莫大な金を使い大学を造って何をするんだ」と聞かれた宇太郎さん、「大学を造れば大学の風が吹くさー」と名言を放った。

あと1人は「大学誘致がダメなら自力で造ろう」と悪戦苦闘して実現させた比嘉鉄也理事長である。よく不言実行といわれるが、これは違うと思う。有言実行でなければ。特に政治家は公約を実行しないと批判される。名桜大学設立には多くの人の協力、支援があったからこそ目の目を見た——などと14年前を振り返り、これからの人生も有言実行を、と強調した。

3 大学設置の構想

東江、外間氏が協力約束

1986（昭和61）年9月、晴れて市長選に当選した比嘉鉄也氏は公約を一つひとつ実践していった。中でも大学設立が大きな公約だった。名護市議会でも大学設立問題の質疑が大半を占めた。「大学用地の山を売ろうとしている」とか、中には、字所有地であるナングスクも、という非常識な質問もあった。教員や学科関係の質問に対応するため東江学長も答弁者の1人として待機させようとしたが、阻止された。このように大学設立に反対の議員もあり、朝10時から深夜、未明の3時ごろまで延々と続いたこともあった。「いつ造るんだ」の質問に比嘉市長は「1期目は提言、2期目は着工、3期目に完成させる」と明言したのである。そこには大学を設立するという強い決意と2期、3期の市長選にも当選するという自信に満ち溢れていた。

「自分たちの力で大学を」に感動した名護出身で当時、琉球大学の学長だった東江康治氏（初代・名桜大学長兼理事長）と法政大学教授の外間守善氏（現・沖縄学研究所長・名桜大理事）が1989年、名護市を訪れ、比嘉市長を激励すると同時に協力を約束してくれた。名護市は最初の設立は単科大学だが、将来、小学校、中学校、高校、大学、大学院を併合した総合学園にする構想を持っていた。もちろん高度な教育、研究によって人材を育成することが大きな目的であったが相乗効果で人口5万人（当時）を将来、8万～10万人規模に持っていく計画をしていた。これに対し東江学長、外間教授は、大学を造れば人口は次第に増えていく。両氏は人を話に乗せるのが上手だ。巧みな話術で大学設立に夢、希望を抱かせた。ふたりの侍の「助っ人」が大学設立を大きく前進させたのである。

この後も北部出身の教授や大学設立を支援する教授、県内の政財界で活躍する多くの人たちが、設立に向けて良きアドバイザーとして協力した。特に東江学長と外間教授は、よく名護市を訪れ、協力、相談者として助言してくれた。たまには桜満開のころ酒を酌み交わしながら話をするが、話が弾んでくると、もう大学が完成し、軌道に乗っているような気分になったこともあった。その中で、比嘉市長が「大学はいくらぐらいで造れますか」と聞くと外間、東江両教授が「35億円もあればお釣りが」と答えてくれた。当時、バブル崩壊の前だったので、35億の金だったらどうにかできる。市財政は、逼迫していたが市有地の山や原野の財産はあった。財産を売れば35億は達成できると自信を強くした比嘉市長が「資金は任せてくれ、その代わり時代に合った学部学科や教官の選定などは決めてほしい」と依頼、東江学長、外間教授も快く引き受けてくれた。

岸本部長が資金造り

'90年代に入って、大学設置への準備は急速に動き出した。学部学科と教員などの選定は東江学長と外間教授に任せた。名護市は資金づくりである。比嘉市長は資金担当に当時、企画部長だった岸本建男氏（現市長）を充てた。大学用地の選定をはじめ資金づくり（創設経費等）を全権委任した。岸本企画部長は目を輝かせながら「すべて私に任せてくれますか」と答えた。比嘉市長の思いどおりだった。これは県立大学

設立の時、西銘順治県知事が、当時、企画室長だった吉元氏に「設立に関して全責任を持ってやってくれ」と言われ、吉元氏は「学部選定、教員の人選などすべて私に任せてくれますか」と言質を取り、1回返事で了解した。吉元氏と懇意にしていた比嘉市長は大学問題でよく話し合いアドバイスも受けた。この手を岸本企画部長に実践したわけである。1回返事で了解してくれた岸本部長に、比嘉市長は「問題が起きたり、大学が造れなかった場合、全責任は私、市長が全責任を取り、市長を辞める。だから、心配しないで頑張ってくれ。まず設立準備室を立ち上げてほしい」と励ました。それほど大学設立に情熱を燃やしている市長に感激した岸本部長は、「全力投球し必ず成功させなければ」と心に誓ったのである。

東江琉大学長が退官

東江康治学長、東江平之教授（前・名桜大学長）、瀬名波榮喜教授、山里清教授、屋比久浩教授ら北部出身で琉大の仲間である教授や関係者を集め、学部学科や教員の本格的な選定作業をスタートさせた。県内には国立、公立、私立、短期大学など含め5大学があった。学部選定は慎重に行われ、確認したのは県内の大学にない新しい学部を発足させることだった。1984（昭和59）年から琉球大学の学長を務めた東江康治氏は1990（平成2）年5月をもって退官した。故郷での大学設立に全力投球するためだった。

故郷を思う心に涙

東江学長が任期満了間近のころ、琉大の事務局長の誘いで、東江学長、瀬名波榮喜教授の3人が桜坂のバーで静かに酒を酌み交わしていた。事務局長が、単刀直入に東江学長に「任期満了後は、どうなさいますか」と聞くと東江先生は「辞めます」とキッパリ。

大学のこれまでの習わしとして学長が任期を満了すると学部に戻り、教鞭を取るというのが普通だっただけにビックリした事務局長は、さらに「辞めてどうするんですか」と質問、東江教授は「北部地域から優秀な中学生たちが中部や那覇に流出している。これを食い止めるために名護の郷里に自由学園を造りたい。その準備に取りかかる」と真剣な眼差しで語った。

その時、事務局長は涙を流し、東江学長も目頭を押さえている。その後は言葉も出ないほど感動的な場面だった——と述懐する瀬名波教授。「学長の故郷のことを思う強い心に感動した」ことはいうまでもない。

4 大学設立準備室発足

準備作業着々と

1991（平成3）年3月、名護市議会は名護市総合学園（大学）設立に関する決議を行った。それを受けて同年4月「大学設立準備室」が発足、室長には琉大教授を退官した砂川栄右氏になった。北部にふさわしい大学造りを目指し、学部、学科の選定をはじめ、カリキュラムの編成、教員の確保、文部省との折衝——などが主な任務であった。設置へ向けた準備作業は着々と進められ、同年7月には名護市総合学園設立審議会が発足、会長に琉大の山里将晃教授、副会長に名護市の吉元嘉正助役が選ばれた。発足後、4回、会議を持ち校舎の敷地、大学の基本計画などを話し合った。このように教授や市代表らが一緒になって、多くの会議が持たれ、総合学園・大学設置構想は次第に具体化していった。

大学と街づくり・人づくり

設立準備室では、全国でも学部学科の少ない独特の教育、研究のできる大学を目指し、人材の育成、地域活性化に結びつけることを重点に置いた。当時、沖縄県の「学校基本調査報告書」によると子弟の進学率は全国平均31.7%に対し県平均は19.7%とかなり低い。特に大学のない、しかも中南部へ遠隔地の北部地区は県平均よりさらに低くなる。那覇の大学に入学すると衣・食・住など負担増となり、経済力の弱さからあきらめる人も多い。大学の設置によって進学率は増えることは間違いない——としている。また大学設立は人口増につながる。学生1700、教員・職員100人をはじめ家族を含めると2000人以上の人口増を見込んでいた。



設立準備室は琉球新報社北部支社の2階

学生は県内をはじめ
本土の各県から集まっ
てくる。アジアからの
留学生も含めて、そ
れぞれ文化の違う学生
が一堂に集い、学問、
スポーツに勤しみなが
ら交流を深めていく。
それが定着してくると
街はにぎわい、若者対

象の新たなビジネスチャンスも生まれてくるというものである。大学の研究機能の充実によって地域産業の振興につなげようというもので、大学との協同研究や大学への研究委託なども可能となる。そしてこれからの企業進出に大きなインパクトを与えると同時に「職」の充実に結びつくことになる。

拠点都市指定に自信

大学設立のため資金づくりに奔走した名護市の岸本建男企画部長（現・名護市長）は1992（平成4）年までに建設予定地を数カ所に絞り、売る段階になった。ところが'86年から続いたバブルがはじけてしまったのである。全く予想だにできなかった経済不況に直面、大きな衝撃を受けた。大学設立の財源に考えていた土地が全く売れなくなったわけである。関係者にいろいろ相談するが、なかなか解決策は見いだせなかった。

創設費が先決と東江康治教授ら教員も総動員して金策に走り回った。北部市町村を訪ね首長に補助を依頼したり、県にも補助金の要請をするなど資金づくりに懸命だった。ちょうどその時、「地方拠点都市」指定の話があった。政府の委託を受け県が指定するが、指定されれば銀行から融資が受けられるというわけだ。地方拠点都市は、'92年5月に成立した地方拠点都市法に基づき地方活性化、また「東京一極集中是正」の受け皿として県内の一定地域で基盤整備、企業誘致などを重点に進める。整備期間

は10年。県知事が1、2カ所を指定する。キーワードは「職・住・遊・学」で税制、起債などの優遇措置がある。

「これを使わない手はない」と1993年2月、北部振興会の会長だった比嘉鉄也市長は、さっそく北部12市町村に呼び掛け、北部地区地方拠点都市地域指定推進協議会を発足させ、策を練った。「やんばるビジョン」として基本計画をまとめ県に提出、基本計画は名護市を大学、文化、流通などの中核都市とする。北部全域を「やんばる自然ゾーン」などに分け魅力ある地域の形成を目指すとしている。最終的には国のヒアリングなど受け、指定を受ける。沖縄市を中心にした中部、宮古、八重山地域も名乗りを挙げていたが、中南部に比べて北部地域は人口の減少、教育、文化、商業などの都市機能の遅れ、しかも大学設立といった既に走り出している事業などもあり、指定を受ける条件はそろっていた。

大学設立へ本格的に動き出した時だっただけに関係者全員が胸を撫で下ろした。

結局、60億円のうち半分は、どうにか土地を売り、残りは拠点都市指定を受け、3年据え置きで毎年3億～4億円支払いの10年返済で2005年には支払いを終えるという計算を立てた。



地方拠点都市地域指定祝賀会

学生減で大学の新增設を抑制

1992（平成4）年から18歳人口急減期の大学のあり方を検討してきた大学審議会は「平成5年以降の高等教育の計画的整備について」と題する答申を1991年5月17日文科大臣に答申した。2000年の大学等進学率を40%と想定、入学者は昨春比で約9万人減るとし、これまで拡大基調だった大学・短大新增設に関し、初めて「原則抑制」縮小方針を打ち出した。一方で、「量から質への転換」を強調している。

第2次ベビーブームの波により、18歳人口は来年度の205万人をピークに急減に移行、2000年度には151万人にまで落ち込むといわれ各大学は生き残りに向け「冬の時代」を迎える。



名桜大学基金造成北部地区期成会結成総会

5 大学設立準備委員会設置

国際舞台で活躍する人材を

1991（平成3）年7月5日、名護市総合学園設立審議会が発足し、大学の基本計画及び敷地などについて検討した。続いて同年7月14日には大学の設立母体として、東江康治教授を委員長とする名桜大学設立準備委員会が発足した。副委員長は外間守善教授だった。初等教育から高等教育までの総合的な学園を目指し、当面は4年生大学を目標とした。文部省の認可が厳しくなっている情勢をにらみながら、文部省（当時）に提出する名桜大学設置基本構想などを制作する本格的な取り組みを開始した。

これまで準備室や審議会で協議したものを参考に基本構想の策定、大学用地などの取得、資金の調達、カリキュラムの編成、教員の採用計画、文部省への大学設立申

請——などを仕上げていった。

基本方針として、大学創設の理念は「平和」「自由」「進歩」を掲げ、教育研究を通して人類社会の平和の基盤を強化し、人間を無知・病苦・因襲等の桎梏（しっこく）から自由にし、人類社会の進歩、向上に貢献する。教育目標は、深い国際理解と高い情報処理能力を有し、創造性



設立準備室会議

豊かな幅広い教養を身につけ、社会情報にも精通し、国際舞台で活躍できる人材の育成を目的としている。

最終的な総まとめだけに委員も政財界や教授らのそうそうたるメンバーで組織された。山里清琉大教授、崎間晃県銀行協会会長(当時)、稲嶺恵一県経営者協会会長(当時)、比嘉幹郎ブセナリゾート社長、比嘉茂政北部市町村会長(当時)、安里進名護市議会議長(当時)、比嘉鉄也名護市長(当時)、阿部充夫放送大学理事長(当時)。

大学審答申にマッチ

文相の諮問機関である大学審議会が、1991年に、1993年から2000年までの8年間の高等教育のあり方、特に新增設の抑制を打ち出し、答申したことに設立準備委員会はびくともしなかった。答申には①学術研究や社会、経済的ニーズがある②地域社会の教育、産業、文化の発展に必要——の場合は「新設を認める」の但し書きがあった。さらに当学は国際舞台で活躍——が教育・研究の基本構想でアジアなどからの留学生を受け入れることにもなっており、設立に値するユニークな大学と信じていたのである。また、首都、近畿、中部各圏を除いた政令指定都市の大学、短大に関しては、地域の実情に応じて弾力的に運営する——という首都圏集中から地方分散への拡大を強調している。

県内初の公設民営の大学

名桜大学は創設経費のすべてを、名護市を中心とした北部市町村及び沖縄県が負担し民間の団体が運営をするという、いわゆる公設民営の私立大学である。この方法は地方に大学を誘致、もしくは新設する場合に採られている方法で、一般的には「公私協力方式」と呼ばれている。公私協力方式による大学は、全国的な例として、福井県の敦賀女子短期大学（1986年開学）は、21億円の創設費全額を敦賀市が補助している。新潟県の新潟産業大学（1988年開学）は28億円の創設経費のうち、22億円を柏崎市が補助、同じく新潟県の長岡造形大学（1994年開校）の場合は、90億円の創設経費のうち、長岡市が65億円を補助している。この方法は、1984（昭和59）年6月、文部省の大学設置審議会大学設置計画分科会が、1986（昭和61）年以降の「高等教育計画整備について」という報告書の中で、「地方の要望に適切に応じた高等教育機関を設置・運営する場合には、地方公共団体と学校法人の協力によって設置・運営することが一つの適切な方法と考えられる」と提言している。

6 文部省との交渉

第1次申請が受理

1992（平成4）年4月30日から文部省との本格的な折衝が始まった。まず文部省に提出したのは「学校法人名護総合学園・名桜大学設立基本構想」を提出した。いわゆる「第一次申請」である。申請書には大学設置の趣旨、国際学部・国際文化学科、国際学部・経営情報学科、国際学部・観光産業学科の3学科の入学定員、科目、単位数、講義内容をはじめ教員組織の概要を記してある。校地、校舎、体育館や図書館などのほか資料編では学术交流や企業実習なども添付するなど大学設立に関するすべてを克明に記してある。この基本構想は、提出と同時に受理された。

この基本構想を完全なものにするために水面下で動き悪戦苦闘したのが岸本企画部長だった。設立準備委員会が、まとめたのを文部省と事前に打ち合わせをしていた。

ところが創設経費など金目の補償問題が文部省から指摘された。第3セクター方式の設立だけに資金集めなどが適切に遂行されているか——などが主だった。名護市の担当職員に訂正部分を指示、直したものを職員は車で那覇で待機している岸本企画部長に手渡し、岸本部長は、訂正された申請書を持参して空路、上京するわけである。時には月曜日から金曜日までの5日間、名護市に帰って来れなかったこともあった。

準備委員会や市職員らの労苦もかなりあったが、多くの外部関係者の協力、サポートがあったことを忘れてはならない。東江学長が長年、教育関係で付き合っていた人に阿部充夫氏という人がいた。阿部氏とは文部省の教員養成課長時代からの知り合いで、後に阿部氏は文部省事務次官にまでなった。退官した後は放送大学の理事長をしておられた。東江学長も琉球大学を退官後、放送大学の沖縄ビデオ学習センターの所長をしていたので、いろんな会議で会う機会があった。大学設立の話に阿部氏は、設立準備委員会の委員も快く引き受けてくれ、いろいろアドバイスをしてくれた。申請作業はスムーズに運んだのである。

■ 名桜も大学設置審に諮問

文部省は1992（平成4）年5月15日、1993年度と1994年度に予定している公、私立大学、短大の新設などについて「大学設置・学校法人審議会」に諮問した。その中に1994年度開学を目指す「名桜大学」が含まれていた。諮問したのは、1992年度に開設の認可申請があったもので、'93年度の開設予定は公立の大学、短大の新設、学部を設置など36件だった。'94年度の開設予定は私立大の新設、学部を設置、私立短大の学科の設置など41件。この中で大学の新設は公立5校、私立17校の計22校に上り、諮問どおりに決まれば、第1次ベビーブーム世代の入学となり、'65～'67年以降では最高となった。

大学設立準備委員会では、文部省の審議結果は遅くとも1993（平成5）年1月中旬までには示されるものと判断、ゴーサインが出れば校舎建築に着手することを決め、1994（平成6）年4月開学を目指すことを確認した。

文部省審議会のヒアリング開始

1992年5月20日から文部省「大学設置・学校法人審議会」の大学設置・学校法人分科会によるヒアリングが始まった。ヒアリングには東江学長、比嘉市長らが出席した。審議会からは、大学設置の社会的ニーズ、大学の基本構想——などについては先に提出した認可申請書の内容を再確認、ほぼ問題もなく進んだ。ただ、審議会から指摘されたのは、'93年以降は18歳人口が急減するが、学生を確保する方法は、どうなっているか。国際化が進む中で英語は当然だが、中南米や東南アジアにも焦点を当て、スペイン語やポルトガル語などの導入まで必要なのか——などの指摘があった。これに対し設立準備委員会の東江委員長は、県内の大学にはない特色ある学部学科の選定を行った。特に中南米には沖縄からの移民が多く、移住者の子弟の留学生も受け入れ交流を深めるためである。本土学生の西洋中心と違って、沖縄では南米に目を向ける若者たちが増えている。このように東江委員長らは国際学部の趣旨等を延々と説明する一幕もあった。

文部省はじめ審議会の担当は細かいところまでヒアリング、設立準備委員会のメンバーも納得させるのにかなり苦勞した。学生の確保問題では高等教育機関がないことが北部地域の過疎化現象を生んでいるとし、中学校、高校を卒業した生徒たちは、いい学校を目指し遠い那覇や中部の高校、大学に入学する。これは教育の機会均等にも反する。どこにもない特色のある大学を造れば、学生は集まる。さらに高等教育、研究に恵まれた環境だけに全国から若者が集まり、地域の活性化にもつながると名桜大



文部省審議会で説明を行う東江学長

学設立の趣旨を説明した。この後も審議会の学校法人分科会、大学設置分科会と交互に合わせて6カ月に渡って4回、ヒアリングが持たれたが、外国語についても審議会は理解してくれた。その時点では、ほとんどクリアした形で進んだ。

1次申請の審査を終え、大学設置の動きが急速に進んできた。北部12市町村も開学に向け全面的にバックアップすることを各議会で次々決議した。名護市議会は創設費補助として72億円の補正予算と学校用地として市有地7万3千平方メートルを無償譲渡、14万平方メートルを無償貸与することを賛成多数で決議した。また、一般市民や団体から奨励基金の寄付金贈呈も次第に増え、関係者を喜ばせた。

■ 名護市が用地 21万平方メートル提供

名護市が大学用地21万平方メートルを提供、そのうち7万平方メートルを無償譲渡、14万平方メートルを無償貸与としている。大学の主な建物は講義棟（6011m²）、研究棟（2421m²）、図書館（2120m²）、本部棟（2655m²）、体育館（1427m²）、福利厚生棟（1291m²）、課外活動施設、留学生主体の宿舎など合わせて約1万8千7百平方メートルとなっている。

■ 県の補助 5 億円に

県は1992（平成4）年2月8日、名桜大学設立準備委員会から要請のあった建設補助金として5億円を拠出することを決めた。同準備委員会は県に建設補助金20億円、奨学金積立金5億円の補助を要請していた。県は奨学金については出さない方針を確認する一方、建設補助については私学に対し補助するのは例がないとしながら、北部の振興、県の人材育成といった観点、さらに'93年度の重点施策に謳われた「北部地域への高等教育機関の設置」に合致していたのが5億円の拠出理由だったのである。

設立準備委員会は既に文部省の大学設置審議会の1次審査も通過、第2次申請、審査に向け準備も大詰めだった。特に財源問題が難航していた。このため東江委員長らは大田昌秀県知事に面会を求め数回、要請した。これに対し、県は名護市の資金計画や整備状況をみながら対応することを約束、'94年の拠出について前向きな姿勢をみせた。

大学創設費75億円

大学創設経費75億円。これは校舎等建設費及び設備購入費の全額と開学から1997年度までの運営費の一部に当てられる。創設経費の72億円を名護市が、残り3億円は北部11町村が人口比で補助している。名護市が補助する72億円のうち沖縄県が10億円（1993年・5億円、1994年・5億円）を負担することになっており、名護市の実質的な負担額は62億円となる。設立準備委も大詰めを迎え、大学設置基本構想を次々決定した。

- 大学の名称を「学校法人総合学園・名桜大学」とする。
- 学長候補に東江康治前琉大学長、学部長候補に瀬名波榮喜琉大教授
- 大学の設置場所は「名護市為又1220番地の1」
- 県内初の「公設民営方式」とする。
- 【国際学部】国際文化学科、経営情報学科、観光産業学科からなる1学部3学科

校舎建設で起工式

来春開学を目指す名桜大学の敷地造成工事の地鎮祭が1993年5月6日、関係者約100人が出席、工事の安全を祈願した。それを受けて同年7月8日、校舎建設工事の起工式が行われた。起工式には、牧隆壽沖縄総合事務局長（当時）、大田昌秀県知事（当時）、比嘉鉄也名護市長（当時）、比嘉茂政北部市町村会会長（恩納村長・当時）



左より牧隆壽・比嘉茂政・比嘉鉄也・東江康治・大田昌秀の各氏

らが出席した。東江康治設立準備委員長が「名護市をはじめ多くの関係者の支援、協力を得て校舎建設の起工式にこぎつけ、大変うれしい。立派な大学を造り、素晴らしい人材を育成したい」とあいさつした。大田知事

は「沖縄の自立的発展を支える人材の育成は急務である。県としても可能な限り支援していきたい」と来賓祝辞。比嘉名護市長は「北部で初の大学である。21世紀を担う人材を育てるヤンバルの活性化の拠点にした



挨拶する比嘉名護市長

い」と述べた。大学用地は21万平方メートルで校舎、研究棟、体育館などの建設用地は10万平方メートル。

泊まり込みで書類づくり

設立準備委員会の東江康治委員長、比嘉鉄也市長は、1993年6月24日、文部省に設立審査に向けた財源書類や施設建設計画を内容とした追加書類を提出した。私大の設立審査は通常2年がかりで、同準備委は'92年12月に一年審査はパス。この日の書類提出の手続きは2年目の審査だったが、資金調達、施設建設計画の変更などがあったことから、文部省は「書類が整っていない」と保留。さらに文部省から「教員の定員も満たしていない。他の大学は校舎建設も済んでいるのに遅すぎる」と指摘された。また、社会人にも門戸を開く予定だった夜間3コース（3学科それぞれ定員30人）は文部省の指導で大学運営が軌道に乗るまで保留。一般学生の募集に全力をあげることになり、当面、夜間コースは見送ることになった。

6月30日、文部省から指摘された教員の定員、創設費など財源書類をつけた第2次申請を提出、同日受理された。受理されるまでには事務局や準備委員会の大きな苦労があった。第2次申請の前から名桜大学設立事務局の砂川榮右事務局長ら15人が都内のホテルに泊まり込み、万全を期した。文部省の担当からの指示に従って、書類を修正したり、新しい資料づくりに日夜ぶっとうしで、寝る時間もなかった。本申請で認可前の交渉ただけに文部省側も一字一句、点の打ち方まで指摘した。同じ資料を40部～50部作成しなければならず、一字訂正すると全部差し替えなければなら

ず時間が掛かった。名護の事務局には職員を数人残し、連絡を取り合いながら作業を進めたのである。文部省の「大学設置・学校法人審議会」による新設大学の答申は12月に行われる予定だが、第2次申請が受理されたことで、最大の難関をクリアしたことになる、名桜大学の設置認可へ大きく前進した。

■ 北部を拠点都市に指定

国土庁など5省庁は地方拠点都市について1993（平成5）年8月3日、北部地域など全国12地域を拠点都市に指定することを各都道府県に伝えた。県は同月6日付で北部地域を北部地区地方拠点都市に正式に指定する公示をした。これによって北部地域の離島を含む12市町村での活性化事業がスタートした。指定から10年計画で道路、港湾、住宅、教育基盤など整備していくことになった。そのほか公共工事や進出企業への税制優遇措置などがある。名護市は1994年開学の名桜大学を中心に教育研究の拠点都市として力を入れていく方針である。また指定によって創設費の一部として起債を起こすことが可能となり、財源で難航していた文部省との交渉も解決したことになる。

拠点都市の指定を受けた北部12市町村の関係者が出席して祝賀会が盛大に開かれたが、北部広域市町村圏事務組合理事長の比嘉鉄也名護市長が、翌年の名桜大学の開校と合わせて「北部の夜明けだ、と述べ、二重の喜びを表明した。

7 認可

1993（平成5）年12月21日、文部大臣から学校法人名護総合学園設立認可及び名桜大学設置が認可された。

第2章

名桜大学の開学

1 大学の名称

■ 高校生のアンケートで決定

大学の設置準備が開始されて間もなく、名称選びが本格化した。設置認可の申請書類には、大学の名称とその命名理由の明記が求められた。

本学の名称の選定にあたっては設立準備委員の方々をはじめ各方面から数々の妙案をいただいた。14～15種類ほど寄せられた名称から5～6案に絞り込んだ。「太平洋」「太平洋文化」「北山」「中山」などの名が挙がっていた。

寄せられた名称はどれも甲乙つけがたく、選定作業は困難を極めた。結局、将来の学生である高校生からアンケートを取ろうということになった。北部と中南部の高校生800人から名称を募集し、統計を取った。

その結果、「名桜大学」が圧倒的に多かった。ほかに「名桜文化大学」も挙がり、この二つの名称でアンケート全体の約8割を占めた。

アンケートの中には、「名桜ってすてきな名前ですね」というコメントなどもあった。この結果をふまえ、委員に提示した。協議の末、「文化」の名称も魅力的ではあったが、最終的に「名桜大学」で意見が一致した。

こうして北部12市町村の夢と希望がこもった大学名は、若い感性が圧倒的多数で選んだ「名桜」に決まった。

「名」の字は「名護」を意味するのではなく、桜の名所である北部という意味合いを持っている。文部省（当時）への申請書類には、命名の理由について「沖縄本島北部は、全国で一番早く桜前線が出発する所で、桜で有名な土地柄であるから『名桜大学』と名付けた」と記している。

春らんまんの希望に満ちあふれた明るい雰囲気の大学名は、学生や地域住民にとって好評である。海外の方からも「桜」を冠した名称に日本の国を象徴するイメージを受け、中身は国際的な大学だということで、大変魅力的な印象だという意見をいただいた。

また近年、名護市などでは社名に「名桜」と付ける事業所なども見受けられるようになった。ソフトで品格がある名桜大学の名称は、地域のシンボルとして着実に受け入れられ、親しまれている。

2 建学の精神・教育目標

創造性豊かな人材を育成

本学は、次の基本理念において創立された。

- 既存の大学と競合しない特色ある4年制大学とする。
- 基本理念は「平和」「自由」「進歩」とする。
- 地方文化の核として地方の適切な要望に応じ、時代のニーズに応え得るものとする。
- 広く地域に開かれた大学として市民の生涯学習の振興、産業経済の発展等地域振興に貢献し、且つ、国際舞台で活躍できる創造性豊かな人材を育成する。
- 教育・研究分野は「国際文化学」「経営情報学」および「観光産業学」の3分野とし、各専門分野の入学定員は110人とする。
- 大学の持つ本来の機能である教育と研究、そして地域への貢献を最大限に発揮するため、自主独立性を確保する。そのため新しい大学の設置者は学校法人名護総合学園とする。
- 大学の位置は沖縄県名護市とする。
- 大学の開学は平成6年4月1日とする。
- 学校法人の設立および大学設置に必要な経費は、名護市を中心とする北部12市町村（名護市、国頭村、大宜味村、東村、今帰仁村、本部町、恩納村、宜野座村、

金武町、伊江村、伊平屋村、伊是名村) および民間資金の寄付金を財源とする。

大学創設時(1994・平成6年)、本県における産業別総生産の割合は第1次産業2.5%、第2次産業20.7%、第3次産業80.2%(就業率70.7%)であった。第3次産業の中核である観光産業については特に研究と人材の養成が求められていた。そこで、新大学設立にあたっては、県内他大学に類を見ない学科として「観光産業学科」の創設は重要課題であった。

また、IT時代に対応した情報処理能力と経営感覚を身に付ける「経営情報学科」、グローバル化社会において国際的に開かれた人材を養成する「国際文化学科」など、本県において特色ある学科創設は意義深い。

本学の創設は、本県の教育の機会均等を図る上でも有効であった。本県の大学進学率は'94(平成6)年の統計でも28.8%(全国:43.3%)と低い数字が上がっている。県民所得も全国比約70%であることから、保護者の経済的負担を緩和し、県内で進学の手がかりが得られるよう大学を創設して高等教育への機会を提供する必要があった。

それと、県内でも特に過疎化が進行している北部地域の活性化に大学の果たす役割は大きいと思われた。本県では、高等教育機関が中南部に集中して所在、北部地域から若年者が流れていた。この流出を食い止める意味でも大学の設置が請われた。大学設置による人材育成、教育文化の向上、産業振興は地域活性化に有意義であるとの観点からも本学の設置が急がれた。

このほか、大学設立における地域への様々な波及効果は図り知れなかった。

- 学生、教職員等大学関係者人口の増加——学生1700人、教職員100人、家族を含めると2000人以上の人口増となる。
- 若者の交流及び定着による地域の活性化——学生が交流、定着することにより街ににぎわいが生まれる。同時に若者対象の新たなビジネスチャンスも生まれる。
- 生涯教育・生涯学習体制の整備——大学の研究者や教員、図書館やラボ教室の施設を使った一般の人向けの学習体制がつくれる。
- 研究機能の充実による地域産業の振興——大学との共同研究や大学への研究委託等が可能になる。
- 今後の企業進出に大きなインパクトを与え、かつ「職」の充実に結びつく。

本学創設にあたっての基本理念は「平和・自由・進歩」である。

教育研究を通して、人類社会の平和の基盤を強化し、人間を無知・病苦・因襲等の桎梏（しっこく）から自由にし、人類社会の進歩、向上に貢献することを建学の精神的支柱とする。

沖縄は、太平洋戦争で焦土と化し、住民を巻き込んだ戦禍で多くの犠牲者を出した悲惨な歴史を持つ。戦後約60年を迎える現在に至ってもなお、極東最大の米軍基地を抱える基地の島である。

平和を希求する県民の意志とは裏腹に、世界ではテロや戦争が頻発している。大学で学んだ叡智をもって「平和」を創造して行く人材の育成は重要な課題である。そして、本学において「放任」「わがまま」とは違う、自らの意思で行動し、自分の選択と行動には自ら責任を負うことのできる真の意味での「自由」を身に付けた学生たちが、人類の進歩と向上、発展に寄与して行くことを本学は願ってやまない。

そして、本学が掲げる教育目標は、「深い国際理解と高い情報処理力を有し、幅広い教養を身に付け、社会情報に精通し、しかも創造性豊かな人材の育成を図る」——である。

沖縄に必要であると認められながら、琉球大学など既存の他大学にできていない魅力ある学科、分野ということで、開学へ向けて学部・学科の選定作業が進められた。

その結果、学部として選ばれたのは「国際学部」。国際性と情報技術力の養成を目指し、実社会で役立つ人材育成を目的とした。「国際文化学科」「経営情報学科」「観光産業学科」の3学科で構成される。いずれも本学独自の学科で、沖縄の大学の個性として光を放っている。

国際学部は「国際文化学科」「経営情報学科」「観光産業学科」の3学科に分かれ、それぞれ関係科目を履修している。

国際学部の各学科における教育の目標として ①語学、②コンピュータリテラシー ③実践教育、④国際理解——を4つの支柱として掲げている。

①の語学については、「英語」は各学科共通科目。「英語を使える人材を育てること」が目標で、そのプログラムは充実している。

さらに第2外国語として中国語、韓国語、タイ語、インドネシア語、スペイン語、

ポルトガル語、フランス語、日本語（留学生対象）などが学べる。

②のコンピュータリテラシーは「コンピュータに関する知識と操作能力をしっかりと身につけること」に重点を置いている。必要かつ正確な情報を選び出し、的確な判断を下す情報活用能力と自己表現のための情報発信能力を高めている。

③の実践教育は、学習意欲や就職意欲の向上と密接につながっている。講義や演習などで学習したさまざまな分野の基礎や理論が、実際の社会でどのように応用され、実践されているかを体験を通して検証する。

国際文化学科では、国内や海外での現地実習（必修）があり、経営情報学科および観光産業学科では、県内の企業や行政機関などでインターンシップ（経営情報学科は必修、観光産業学科は選択）を行い、学生らは実践的な研修を受けている。

④の国際理解については、諸外国との交流に窓を開けている。異文化の理解をはじめ、国際人としての視点を養うため、比較文化、国際事情に関する教育を学部共通科目として学習している。また、多くの留学生を受け入れる一方、海外の交流協定大学へ積極的に留学生を派遣している。

本学は、以上4つの柱で国際化、情報化社会を力強く生き抜く学生を養成し、国内はもとより国際社会においても活躍できる人材育成を目標に教育の実践に取り組んでいる。

これら建学の精神、教育目標に基づいて、本学は名護市をはじめ北部12市町村が誇る高等教育機関としての発展の努力を続けているところである。



合格発表を見守る受験者たち

3 入学試験、センター試験の導入

■ 名桜大のイメージアップに有力

資金面のやり繰りや煩雑な文部行政当局とのやりとりなど、設立準備委員の方々ははじめ多方面の協力をいただいた上で、万難を排しての取り組みの末、本学は創設された。そして、いよいよ初年度の入学者選抜試験を行い、第1期生を受け入れることになった。

本学は、学生選抜にあたっては、時世に合った新しいものを模索していた。そこで、現在の独立行政法人大学入試センターが運営する「大学入試センター試験」（以下センター試験）を導入することになった。

センター試験は、基礎的な学力を幅広く評価するため、出題教科・科目を総合的に利用できた。本学自体の選抜試験科目については、学習上、基礎的なツールとなる国語と英語に絞り、社会、理科科目等についてはセンター試験の成績を参考にすることとした。



平成6年度名桜大学合格者発表

センター試験は全科目に平均的な学力を有するオールラウンド型の学生が受験するなど、従来とは異なった層の学生を開拓することができた。このほか、受験者が全国的に広がり、受験者数の増加や大学のPR、イメージアップにも有効だった。さらに、同一大学、学部受験チャンスが1回増えるなど受験者にも好評であった。

開学初年度となる'94（平成6）年の志願状況は計1823人。志願倍率は5.5倍。学科別の内訳は国際文化学科511人（志願倍率4.6倍）、経営情報学科799人（同7.2倍）、観光産業学科513人（同4.6倍）であった。

IT時代への黎明期であったことなどから経営情報学科に人気が集まった。うち初年度の県内からの志願者数は1663人で、志願者全体の91.3%を占めた。

初年度入学試験は同年2月11日、本学で行われた。受験生らは真剣な表情で、それぞれの課題と取り組んでいた。

4 入学式

第1期生は大半が県内学生

初年度入学者選抜試験の結果、全体で533人が合格。うち384人が入学した。入学者の内訳は県内が圧倒的に多く、344人、県外からは28人だった。さらに国際的に開かれた大学らしく海外から11人の留学生も迎え入れた。大学検定での合格者が1人。最終的に学科別では国際文化学科127人、経営情報学科128人、観光産業学科129人の学生たちが、晴れて真新しいキャンパスの門をくぐった。

本学としては、初年度の入学式はぜひとも



名桜大学第1回入学式＝平成6年

新しいキャンパス内の施設で行いたかった。しかしながら、諸般の事情で本部棟、体育館など一部の施設は開学までに間に合わず、整備は次年度へと先送りになった。このため、初年度の入学式は名護市民会館ホールで挙行されることになった。

第1期生たちは、本島中南部や県外からも多数が入学したため、会場には晴れの門出を祝う保護者たちも大勢祝福に訪れ、式典はにぎやかに行われた。

東江康治学長、瀬名波榮喜副学長は、アメリカの大学で学位を授与されたときのキャップ&ガウンのいでたちで列席。祝賀の雰囲気盛り上げた。

5 開学1年～4年

大開学のころ

名護市為又（びーまた）の眺望絶景の丘陵地帯に整備された真新しい学び舎での学園生活は、いよいよスタートした。東江康治学長はじめ教職員スタッフそれぞれが希望に燃えていた。

しかしながら初年度段階において、資金繰りの関係から本部棟やいくつかの施設はまだ着工に至っていなかった。この時点で完成していたのは講義棟をはじめ研究棟、図書館、それから食堂、売店など福利厚生施設であった。



整備中の駐車場と福利厚生施設

当初計画では、開学までに整備するはずの大学のシンボリック的存在である多目的ホールの建設予定地は、ぽっかりと「穴」が開き、周辺には石ころが転がっている状態だった。そこかしこが工事中で、学生たちは工事現場の

間をぬっての移動を余儀なくされていた。

本学運営の中心となる本部棟も未整備だった。学長室はじめ事務室などは教室の一部を代用していた。学長はじめ教職員は、冷房の入らない部屋で執務していた。



キャンパス内は不便でも授業は活気に満ちていた

初年度の施設未整備の点においては、1期生の方々には迷惑をかけた。大学設置計画から着工、開学までに世情の著しい変化で、キャンパスの整備は幾度となく変更を余儀なくされた。結果的に、学生募集の段階で広報したキャンパスの状況とは一部相違があったわけで、不便を強いられた1期生のみなさんに対して、本学としては不本意で残念な環境整備であったとわびざるを得ない。以後、年次的にキャンパスの環境は着々と整っていった。

開学時に必要な教職員は教員50人

文部省審議会規定では、教職員50人体制であった。ただし、教員は3年目に50人そろえばいいということだったので、初年度は約20人の教員でスタート。事務職員も約30人であった。1996（平成8）年4月から、当初予定の教職員100人体制が実現できた。以後、年次的にスタッフは拡充、強化されていった。

まだ、塗料の香りがかすかに漂う真新しい講義棟では、入学の初々しい緊張感を漂わせた学生と教員との和気あいあいの授業風景が繰り広げられた。開学2年時までは、まだ学生数も少なく、教室の空間はいくらかゆとりがあった。

開学前から国際交流事業を周到に準備

さて、本学は創設にあたって国内外に向けて開かれた学園づくりを標榜してきた。

語学教育と相まって海外や国内の大学と協定を結び、国際的な幅広い視野を持つ学生の養成を目的としてきた。開学後もこの点には力を注いできた。

国際交際交流事業は、毎年、海外協定大学から短期特別聴講生を受け入れているほか、本学からは書類審査、面接試験を経た交換留学生を各国の大学へ派遣している。また、県内をはじめ国内の大学とも単位互換協定を結び、国内留学も積極的に進め、現在に続いている。

本学は、設置に向けての準備段階から、積極的に海外の大学との交流協定を結び、留学生の受け入れや送り出しの環境を整備した。初代学長の東江氏らが東南アジアをはじめ中南米地域をつぶさに回り、各国の大学と国際交流の事業協定を結んだ。

留学制度の充実や学問を通じての国際交流には、学校間の協定締結は不可欠である。また、協定を交わしたところで、実際に交流が行われなければ「絵に描いた餅」でしかなく、本来の意義をなさない。

東江氏が各国の大学を回って知った事実がある。それは、欧米の大学の中には、アジアや中南米の大学と交流協定を結んだだけで、実際には留学生の交換は行われていない例が多々あるということだった。その点を踏まえ、本学は実効性のある協定を目指して、海外各大学との締結作業は慎重に行われた。

タイのチェンマイ大学やマラヤ大学（マレーシア）、グアム大学（アメリカ）などと協定。また、インドネシア、ペルー、ブラジル、ボリビア、アルゼンチン、ベトナム、カンボジアなど諸大学とも相互交流のきずなを結んだ。海外の各大学からは、本学との国際交流協定に関して、真に友好的で実効性の高い協定として、現在に至るまで高い評価を受けている。

Ⅱ 自由学園、の基礎づくり

開学から4年間は、東江康治学長の体制下でひたすら自由学園、の基礎づくりが行われた。大学は、創設から4年経過後、最初の卒業生を送りだして初めて文部省から「優」のお墨付きが得られる。文部省から設置認可を得て4年間は、国からの経常費補助金なしで運営される。4年が経過し、学術的にも経営的にも健全な運営が認められて初めて国から学校運営に関する補助金が交付されることになる。

開学にこぎつけるまでの金策も大変であったが、18歳人口の減少など荒波の中、国の補助が受けられるようになるまでの私大運営は至難であった。それでも、やんばるの地に自由学園の森を根付かせようという崇高な目標のため、各界各層の物心両面における援助で、荒波は無事乗り切った。

公私協力方式の運営で、名護市の大学用地無償譲渡および貸与があった。また、名護市以外の北部11町村が人口に基づき年次的に補助金を捻出。平成9年度以降の国庫補助金獲得まで、学校運営の大きな支えとなった。

懸案だった施設面の整備も進んだ。開学時、未完成だった本部棟は3年目の'96（平成8）年に竣工。翌'97（平成9）年には、名護市の中央拠点都市指定に基づく補助金を財源に多目的ホールの着工にもこぎつけた。

北部12市町村が運営する県内初の公設民営大学として'94年に開学した本学であるが、いよいよその第1期生の卒業式が'98（平成10）年3月20日、キャンパス内の体育館で行われた。

北部初の4年制私立大学ということで、周囲からの関心や期待も高かった。大学には「入り口」と「出口」がある。入り口ではなるべく優秀な学生を集め、出口ではいい職場に送り込まなければならない。

優秀な学生を集めるという点では、学長はじめ教職員が懸命な努力を重ねた。全国津々浦々を訪ね、優秀な学生が一人でも多く本学に関心を示すよう大学を宣伝した。出口という意味では、本学の学生は在学中から県内外の各企業で職業実習を行い、就職意識を高めた。その結果、第1期生の就職内定率（進学、留学を除く）は85%と、県内他大学と比較して極めて優れた結果となった。

その第1期生の卒業生は韓国、アルゼンチン、タイの留学生7人を含む327人。内訳は国際文化学科98人、経営情報学科118人、観光産業学科111人。日本の大学では珍しいキャップ&ガウンを身にまとい、本学のカラーである「国際性」を体現した。

式典は、名護市がハワイ・ホノルル市から招待したミヤシロ・ソーホカイの12人が琴演奏の披露で幕開け。国際交流協定校であるハワイ大学ヒロ校のウィリアム・ペアマン学長が来賓あいさつ。タイ・チェンマイ大学のチョーティ・チートウラノーント学長による卒業記念講演があった。

東江学長は、「北部12市町村関係者のご協力のたまものが本日の卒業生の晴れやかな姿」と地域に対して感謝。卒業生に向けては「『平和』『自由』『進歩』という開学理念の下に教育を受けたみなさんは、私どもの宝。21世紀の主役として国内外で活躍すると確信している」と激励の言葉を送った。

総代は社会人学生の重原保さん（当時41歳）が務めた。「大学祭や現地実習、卒業を控えてのゼミなどすべてが楽しい思い出。栄えある第1期生として気負う必要はないが、これを誇りに思うことに異存ある人はいないと思う」と、誇らし気に答辞を述べた。

卒業証書を手にした学生たちは、「名桜大万歳！」のかけ声で一斉にキャップを体育館の天井高く舞い上げた。この光景は、以後毎年、卒業式の華やかな伝統として残っている。

式典終了後はガーデンパーティーが催された。キャンパスでは、保護者や学生、教職員らが入り交じり、学生生活や地域行事に参加した思い出話などに花を咲かせた。留学生を交えて記念撮影などを行い、名残り惜しそうに卒業の余韻にひたっていた。

6 開学5～10年

さらなる飛躍への歩み

'94年に産声をあげた本学は、関係各位の心温まる協力を賜りながら、順調で健全な大学運営を遂行、最初の卒業生を無事送り出した。開学5年目からは、私学運営に対する国からの補助金も受給できるようになった。補助金による財政面での基盤を背景に、さらなる飛躍へ向けて歩み続けることになる。

ハード面では'99（平成11）年7月、多目的ホールと留学生センターが竣工した。多目的ホールと留学生センターは、沖縄米軍基地所在市町村活性化特別事業（島田懇）の一環として建造。多目的ホールは、総面積2872平方m、鉄筋コンクリート3階建て。総事業費は7億6950万円。451席の大ホールとマルチメディア講義室、衛星通信設備などを備える。この施設の完成で、衛星通信設備を使った他大学とのネットワーク授業が可能になった。また、市民公開講座などにも活用され、地域と大学との交流にも

役立っている。

そして、本学は意欲的で優秀な学生確保に向けて、入学者選抜試験で新しい制度導入に踏み切った。2000年度入試からAO (admissions office) 選抜制度を導入した。

AO選抜は「将来の夢を実現するために大学で何を学ぶか」といった意欲を重視。入学希望者の将来性を評価して合否を決める方法。自分を最もよく知る人にも書いもらった推薦状と、将来の抱負を書いたエントリーカードを用意。予備面談を含め3度の面談を受ける。また、推薦入試の枠を従来の30%から40%に拡大し、評定平均値が4.3以上の生徒は選考試験を免除するなど、より多様性に富んだ学生を選抜する方向に改めた。

このほか受験生向けには、大学の様子を直接自分の目で確かめて受験してもらおうと、'98 (平成10) 年から受験生の1日体験入学「オープンキャンパス」を実施。学内の見学のほか、英語やインターネットなど模擬授業を通して、受験生の意識向上を図っている。

地域との交流事業としては、本学各分野の専門講師がその知識と教養を地域住民と分かち合う「公開講座」を開学以来、積極的に展開。中学生から一般までが参加して、好評のうちに回を重ねている。

第2代学長へバトンタッチ～大学改革の時期へ

初代学長・東江康治は'99 (平成11) 年、2期6年間の任期を終えた。「やんばるの地に『自由学園、を』との強い意志を持ち続けながら、大学の設置構想から認可、開学、運営に至るまで煩雑で過酷な業務を粘り強く務め上げた。資金集めや教授ら優秀な人材の発掘、文部省との交渉、充実したカリキュラムの整備、海外との交流による国際的な学風の構築、地域に開かれた大学のイメージづくり——など本学の誕生から独立歩行に至るまで尽力した。これらの功績に敬意を表し、氏には退任後も名誉学長として本学の成長と発展を見守っていただいている。

第2代学長には、学長選挙の結果、東江平之教授が選出された。名護市出身で、心理学が専門。東江新学長は、開学理念のほかに本学のビジョンとして「創造と共生」を掲げた。「創造」とは真理の探究を示し、文化を創造し、自己実現を深めていく人間

形成を目指す。「共生」は平和の創造を基本に自然との共生、グループ間の協調など大学を取り巻く諸処との連携を図り、既存のものを引き継ぎ、大学レベルの研究をより深化させていく。これらのビジョンを基本に屋比久浩副学長と共に開学7年目からの運営が開始された。

折しも全国の私立大学は、18歳人口の減少などを受け、改革の嵐が吹き荒れていた。開学以来の4年間は、文部省の指導下にあつて、本学主導での問題点の改善等に着手できなかった。東江平之学長は、学長としてまず開学以来生まれた諸般の問題点を整理し、改革することに力を注いだ。また、懸案だった大学院の設置にも本格的に取り組んだ。

開学以来、特に改めなければならなかったことは、大学のカリキュラムを「学生重視」の本来の姿に組み直すことであった。

大学の教員は、その専門性から他大学での講義や会議等の講演に時間を割くことも多い。本学では従来、これら教員の側の対外的な事情をかなり汲み取る形でカリキュラムの時間割を行っていた。しかし、専任教員としては、当然のことながら本学の学生に配慮した時間割が責務であるということの反省と自覚の上に立ち、時間割を決めていくことになった。教員側の事情にはある程度配慮しつつ、時間の割り当ては教務が担当し、朝から夕方まで、科目をまんべんなく配置した。これによって、カリキュラムは学生が取りやすいかたちで提供され、科目選択の幅が広がった。

このほか本学は2000（平成12）年、県内他大学では前例がなかった講義内容に関する学生側の評価アンケート調査結果の公表も行った。本学の自己点検・評価委員会が、教授方法の工夫や研究の充実のために実施した。

調査は、「講義の目的が明確に説明されたか」「理解できるように講義をしたか」「質問やディスカッションをしたか」「学生の質問に満足に答えたか」など、講義に取り組む姿勢から内容まで20項目を多面的に尋ねた。その結果、講義に対する総合評価の平均は5段階評価で3.80。本学の判断としては、おおむね好意的との認識を得た。本学は結果を基礎資料にその後も調査を継続、講義の改善に役立てている。

そして、学びたい意欲を持ちながらも経済的不安から学業に打ち込みづらい学生の便宜を図るため、入学金免除や奨学金など各種助成制度の充実も図った。本学からの

奨学金としては学業成績、学生活動、人物ともに優秀で、他の学生の模範となる学生を対象に年間70万円が支給される「特待奨学金」をはじめ「一般奨学金」「スポーツ奨学金」「学資支援奨学金」など幅広い支援で勉学やスポーツに励む学生の支援体制を確立した。

学長選考についての規定も変更した。学長については、それまで本学の教授以外は就任できなかったが、規定の変更により本学の教育・研究に理解のある人材であれば、学外からも学長就任が可能になった。

ジョージフォックス大と交流協定など

本学の特長でもある実践的な語学教育の充実や海外協定校との連携を深める事業も着実に進めた。’01（平成13）年5月、本学は米オレゴン州のジョージフォックス大との交流協定に調印した。

ジョージフォックス大の語学留学生を対象とするESLコースに魅力があったため、協定を締結、相互交流を深めることになった。ジョージフォックス大で修得した単位は本学の単位に読み替えることが可能で、同大の授業料は本学2年次後期分を充てることができる。これを機に、学生たちの米国での英語学習の幅がより一層広がった。同年4月に始まった英語教員養成プログラムを選択した学生25人が2年次後期の半年間、ジョージフォックス大に留学。英会話や記述、読解など本場で基本を身に付け、帰って来た。

それと、特筆すべき海外の大学との交流としては、2000年の沖縄サミットを機に結ばれた米・ヒューストン大との協定である。これは、同年、開催された「沖縄サミット」で



沖縄サミット会場「万国津梁館」突端

当時のクリントン米大統領から提案された「クリントン基金」を活用したプログラム。同基金は、米国務省が3年間で12万5000ドルを拠出、研究やインターンシップなど交流を深めようというもの。本学と交流を希望する米国の大学の中からテキサス州ヒューストン大観光学部が選定された。

東江学長に国務省からの決定通知を手渡したベーカー駐日大使は「観光に焦点を当て、これほど理想的なパートナーはいない。沖縄サミットの成功と経済的必要性から専門的なマネジメントの要求を満たすもの。沖縄と米国の友情の絆になると考えている」と、本学との交流に期待した。

本学からは6人の教授でプロジェクトチームを組織。選抜した学生を1年間、ヒューストン大に派遣した。学生らは、米国のホテルなどでのインターンシップを行うなど貴重な体験をした。また、同大から教授を招いての研究プロジェクトなども推進された。

このほか、2002（平成14）年2月からはマレーシアでの海外インターンシップを実施。県の外郭団体・雇用開発機構の助成を受けて行われた。学内の面接などで選考された学生らが同地のホテルでフロントやレストランでのサービス、営業企画・販売、庶務など実践的なレッスンを受けた。

■ 地域に開かれた大学づくり

地域に開かれた大学を目指すため、市民との交流事業に関しては、ユニークな試みにも着手した。2000年8月、名護市の中心街に「名桜大学地域交流プラザ」をオープンした。市内の空き店舗を本学と市民との交流の場にしようというもの。

留学生や本土出身学生の学生寮として借り上げているビルの空き店舗にプラザを展開。学生らを中心としたイベントや街中ゼミ、公開講座などを行う拠点とした。プラザの留学生らによる市民対象の実用英語講座をはじめ留学生出身国料理フェアやIT講習会などを随時開催。市民と本学との絆を深めることに役立てることができた。

また、'02年には社会に5期生までを送り出したことを契機に、OBらによる同窓会も設立された。温かいサポート活動で、卒業後の本学出身者同士の親睦や母校の発展のために尽力している。

第3代学長の就任～新たな歴史の創造へ

東江平之第2代学長の任期満了退任に伴う本学学長選挙は'03（平成15）年2月13日に行われた。3人の候補者に対し、厳正に行われた選挙の結果、有効得票数（51票）の過半数を獲得して本学観光産業学科教授の安田晃次が新しい学長に選ばれた。任期は3年間。副学長には観光産業学科の生見哲郎教授が就任した。

安田学長は沖縄全日空リゾート社長、会長を務め、沖縄におけるホテル業先駆けの時代にかかわってきた経歴を持つ。40年間にわたる企業生活の中で築き上げた経営感覚と企業者精神を大学というフィールドで生かすべく、現在、任務を遂行中である。

7 大学院

高度な専門職・研究者を育成

21世紀は情報化、グローバル化が目まぐるしい勢いで進行している。このような時代に対応し、大きく飛躍するには、大学で学んだことをさらに深く研究し、資格を取り、キャリアアップを図るために大学院は必要不可欠である。本学は、開学前から理想とし、懸案であった大学院を2001（平成13）年4月に開設した。4つの研究領域に現役から社会人まで老若男女が集い、高度なプロフェッショナルの研究者として自分を磨いている。

本学の大学院は国際文化研究科で、言語文化、社会制度政策、経営情報、観光環境——の4つの研究領域に分かれる。国際的問題や地域の抱える問題を解決できる高度専門的な職業人、研究者の育成を目指し、情報産業や観光産業などで核となる人材を輩出している。修士号、英語教員の専修免許が取得できる。

留学生らに対応するため、授業によっては日本語と英語のバイリンガル講義を実施、社会人院生のために夜間、休日も開講するなど配慮している。大学院は開設当初から定員6人に対し、約30人が入学。以降も募集定員はそのままだが、多くの意欲的な学生が研究の機会にあずかっている。

4つの研究領域のうち「言語文化」教育研究領域では、琉球列島や東南アジアおよび中南米諸国など環太平洋地域、英米における特色ある言語文化と地域文化の研究を行っている。言語文化の専門家養成を目的としている。

「社会制度政策」研究領域は、地方、国、国際社会の各レベルにおける組織の構造と機能について研究。立法、政策立案、制度の在り方について、理論と事例の研究を行い、各種施策を推進する人材の養成を図っている。

「経営情報」教育研究領域は、グローバリゼーション、情報化、福祉化の進展しつつある社会の中で、高度の情報化技術を有し、産業活動を文化や福祉等の視点から位置付けることのできる人材の育成を図る。特に地域の産業、文化の活性化に関する理論と方法の研究を行っている。

「観光環境」教育研究領域は、総合科学と呼ばれる観光学を文化観光と自然観光の視点から研究する。熱帯・亜熱帯性・海洋性・島嶼性という素材を環境科学的、社会政策学的に研究する。これによって高度な知識を持ち、政策提案のできる人材を育成し、地域の社会発展、産業発展および国際社会に貢献することを目指している。

本学大学院は、各研究領域ともに国際色豊かな教師陣がそろっている。少数精鋭の学生が、教師からマンツーマンの講義を受けている。また、社会人に加え、各国からの留学生も多く、海外の大学で学んできた学生も在籍するので、学部から進学する学生にとっても大きな刺激になっている。博士課程への進学を目指す、またはe-ビジネス、環境など新しいトレンドを極める、出身地の社会、文化の研究に励むなど、様々な人材が集まっている。

2004（平成16）年度現在は、約40人が在籍。うち社会人、留学生が各12人いる。留学生はこれまでベトナム、中国、台湾、韓国、ケニア、インドネシア、南米各国などから集まっている。留学生の中には、台湾の企業経営者が毎週、空路講義やゼミに通っている例もあり、高い向学心がうかがえる。

卒業後、地域や国際社会で活躍する院生らのつながりは深く、大学院と卒業生、在学院生らで懇話会を開催するなど、ネットワークを強め、研究の深化に役立っている。

第二編 重要事項 と証言



2004年9月16日

於：那覇市・新星出版

■出席者 名桜大学初代学長 東江 康治
名桜大学初代副学長 瀬名波榮喜
名桜大学第2代副学長 屋比久 浩
司会 名桜大学大学院教授 小濱 哲

名桜大学開学までの足跡

やんばるは大学を求め、時代もまたやんばるの大学を求めている——。10年余り前、名護市為又の小高い丘の山林に響いた開拓の鎚音は、やんばるに新しい未来の創造を告げる本学の産声であった。幾多の困難を乗り越え、設立された本学は、地域と共存を図りながら、現在も成長と進化を続けている。

本学の設立と発展には、大学づくりに信念を持って邁進した鍵となる人たちのたゆまぬ努力と、陰でそれを支え続けた多くの人々の情熱が大きな力となっている。ここに、開学前後をよく知るメンバーの代表に集まってもらい、座談会の形で重要事項と証言を拾った。

座談会ではまず、開学のいきさつ、全体構想などを聞いた。次に本学の特色である英語、情報教育について語ってもらった。学科の特色や設備、体制などについても述懐してもらった。そして、初期構想から文部省とのやりとりと困惑、本学の認知と経過、そして10年間の変化など開学前後に苦労した時代の証人ならではの声が記録できた。

■ 北部に「自由で暴力のない学園」造りを目指して

司 会 今日は、まず開学のいきさつをはじめ東江先生が琉球大退官のころ持っていた全体構想の話、それから本学が開学に向けて描いていた理想的な話や資金面など苦労話、文部省とのやりとりの話を聞かせていただきたい。それから、スタートした名桜大学が、その後10年間で地域社会にどう認知されていったか、本学の変化について語っていただきたい。そして、先生方が本学の後輩に対して期待すること、思いなどをお話ししていただきたい。

まずは、東江先生、琉球大学学長退官前後から、北部に大学をとという構想を持っていたと聞いているが、そのきっかけや実際に思いが実現するに至った大きな動機など聞きたい。

東 江 私の琉球大学の学長任期は1990（平成2）年の5月末。'80年代の終わりごろ、比嘉鉄也さん（当時・名護市長、現・名桜大理事長）の任期3年目ぐらいのとき、

彼の次期政策の一つとしてやんばるに大学を造るという考えを持っていた。私は、法政大学学長の外間守善先生と2人、比嘉さんから名護市内の旅館に招かれ、飲食を共にしながら名護市長の私案としての大学設置構想を聞いた。

’70年代の後半ごろから、学園紛争で大学は荒れていた。学生によって教室が占拠されたり、先生方が拘束されたり、といった状況だった。私は、そのころから「自由な学園」「暴力のない学園」をつく



東江 康治

りたいと思うようになった。どうせつくるならやんばるにという思いがあった。そのような考えを温めているところに比嘉さんから話があった。私は、渡りに船とばかりに「一緒にいい大学をつくりましょう」と意気投合した。

司 会 屋比久先生は当時からその話を知っていたのか。

屋比久 最初にその話を聞いたのは、東江先生が琉大の学長を辞め、放送大学の主事をしていたころ。

東 江 具体的には、大学をつくりましょうと委員会を設置して、ハコものの関係は名護市が中心になって、ソフトの部分は瀬名波先生、屋比久先生、それから亡くなった山里将晃先生らに集まってもらい、屋比久先生はカリキュラムづくり、人集めのころからフルに活動していた。

司 会 瀬名波先生もそのころからか。

瀬名波 北部に「自由学園、をつくりたい」と私が初めて耳にしたのは、東江先生がまだ琉大学長のころ。先生の学長任期がやってくるそのころ。坂本事務局長から「東江先生からお話がある」とのことで、那覇・桜坂のあるバーに来てもらえないかと言われたので、私は行った。そこで、坂本事務局長は非常に厳しい表情で東江先生に厳粛な言葉で単刀直入に質問した。「学長はいったいどうするおつもりですか」。

そのとき東江先生は「大学を辞めます」と明言した。「辞めてどうなさるんですか」と坂本先生が聞き返した。すると東江先生は「北部の方に「自由学園、をつくりたい」ということをはっきり言った。そのとき坂本事務局長は涙を流して感激していた。東

江先生もそれに引きずられ、私も引きずられて涙ぐんでしまった。それほど東江先生の北部に対する思いというのが熱かったということだ。

なぜ私が坂本事務局長に呼ばれたかという理由は全くわからない。東江学長と親しいとか、あるいは北部の出身であったからとかいう理由からかも知れない。当時、私は琉大で学部長をしていた。実際に大学の話が出たのはずっと後だが、東江先生の話では、北部の優秀な頭脳が、どんどんと他の地域に出て行くのでそれを食い止めないといけないというようなお考えがあったようだ。優秀な中学生が北部から出て行くのを食い止めたいという話だった。

その話をふまえて、ホテル西武オリオンに何人か集まって、さて、どうしようかと話し合った。そのときに「自由学園、の1つとして中学を建てるとか、高校、大学を建てるとか」という話が出てきた。決定的だったのはやはり「北部にないもの」というようなアグリーメントが出来上がっていた。そこで、じゃあ大学にしようということになったわけだ。

司 会 東江先生は、桜坂のときにはもう腹は決まっていたのか。

東 江 そのころは恐らく、比嘉名護市長から話があった後だったかも知れない。桜坂で話したときには、既に腹を決めていたかも知れない。

司 会 今から思うと、準備委員会とか施設設備の委員会を開かれていたが、あれは名護市の予算で開いていたのか。

東 江 北部12市町村で大学をつくるという話だったが、開学するまではほとんど名護市の一般会計予算で仕事を進めていた。

司 会 設立準備委員会をつくるときには、東江先生が中心になったのか。

東 江 大学設置準備委員会というのを立ち上げて、それは名護市長をはじめ北部12市町村の代表、議会の代表、有識者が構成していた。それを立ち上げたときの委員長は私がしていた。

司 会 仕掛けは、坂本事務局長がだいたい動いていたようだが。

東 江 文部省との関係で色々な情報を教えてもらった。

司 会 屋比久先生もそのころ話を聞いて活動するようになったのか。

屋比久 設立準備委員会ができるずっと以前のころだろうか。今日、外間守善先生

がこちらに来ていたら話が聞けたのだが…。まだ、外間先生が琉大にいた1960年代のキャンパス騒動のころ、外間先生は独り言のように「女子大をつくりたい」と言っていた。それがだんだんと形になってきて、北部でという話になって、東江先生のアイデアと合体した。外間先生は当初、女子大という構想を温めていた。



屋比久 浩

東 江 女子大という考えは、北部に大学をつくるという段階ではもう無かったんじゃないか。外間先生は、かなり前から具体的に色々な構想を持っていたようだ。設置準備委員会が動きだして間もないころ、タクシーの中だったような気がするが、外間先生が僕にメモを渡した。それには「文化」「情報」「観光」の3つが書かれてあった。新しい大学はこれをメインに考えたかどうかということだね。それなら十分に成り立つと。

司 会 今、形になっている「文化」「情報」「観光」のアイデアというのは、外間先生のタクシーの中でのメモが端緒となっているわけだ。ところで、最初のころ「自由学園、をつくろう」という全体構想を話し合っていたときに描かれていた大学像というのはどのようなものだったのか。

東 江 名護を中心とした北部は、戦前は県立三中とか県立三高女があって、北部の少年少女が留まっていた。それが、復帰前後のころあたりから、小学校卒業と同時に中南部に行ったり、高校進学でも出て行くという状況だった。やんばるには、優秀な子どもたちがほとんど残らなかった。それら子どもたちを留めるような小・中・高校、できたら語学教育などを考えると幼稚園ぐらいからつukれないかと。その一環として大学が浮かんできた。結局、できたのは大学。みなさんの努力で大学院までできたのだけれど、最初の構想からすると随分しぼんだわけだ。

司 会 瀬名波先生が描いていた「自由学園、像」というのは、同じ感じなのか。

瀬名波 東江先生が琉大学長のころ、私的懇話会というのがあった。有志が時々集まって、琉球大の未来像などを話し合っていた。その中で沖縄の地理的、歴史的条件というものをどう生かすかという事が問題になった。そこで目を向けたのが東南アジア

アだった。私は、東南アジアという視点は非常に大事なことだと思った。飛び越して西欧にということではなく、近隣諸国の研究、交流は大切と思い、賛意を表した。

もう1つ、近代科学発祥の地はヨーロッパ。そこを無視して通るわけにはいかないということを私は主張していた。ところが、私的懇話会での話は、大学の事情もあってか、文部省の事情もあってか実現されなかった。それを名桜大学に持って行ったと言っていいと思う。それで、東南アジアや南米に目を向けることをコアにしようということになったわけだ。

もう1つは欧米であり、オセアニアだった。この2つも文部省までもって行った。でも、これらを交えるとあまりにも大きすぎるのではないかとということで、東南アジア、南米を中心にとということになった。欧米とオセアニアの方は、カリキュラムの中で補強的な意味で扱おうということになって、現在の形になった。

司 会 それがうちの大学の特色にもなっているわけだが、そんないきさつがあったのか。

東 江 日本の語学教育はあまり評判よくなかった。大学まで出て、英語を話せない。そういう教育の抜本的な見直しの一環として、自由学園、構想の中で、小学校から少しずつ外国語を理解していくというような教育をするような学園をつくりたかった。

司 会 語学教育という点ではかつて名護に語学学校があったわけだが、そういうものが自由学園、の素地としてあったのか。

屋比久 直接的にはないが、地域としては外語学校の名護分校ができた後、琉球民政府がつくった学校など（外語教育の）雰囲気はあったのではないかな。

司 会 開学したときから語学には力を入れていたし、アジアの言葉とかポルトガル語を入れたりして、外語大学かというくらい語学が充実した。その中で、英語教育について開学前はどんな方針だったのか。

国際学部の講義は英語

屋比久 全部とは言わないまでも英語で講義できればという構想を描いていた。ちょっと気負いすぎた感じがあるんだけど（笑）。1年目に集中的に英語をやって、2年目からは、日本語の話せない先生がいるから、その人の講義は英語でやるんだと

いうことを学生に言い含めていた。

司 会 瀬名波先生もその英語教育の一端を担っていたわけだが、思いとしてはどんな風だったのか。

瀬名波 まずは、国際的な教員を集めるということが大切だった。日本人だけで英語教育ということはできないので、アメリカやイギリス、東南アジアからも来てもらって「国際学部」にふさわしい人材を集めた。



瀬名波榮喜

私は開学当時、学部長をしていたので、英語教育をどのように実施していくかということに関してはだいぶ頭を悩ませた。というのは、まったく日本語が話せないという先生方もいるわけで……。そういう教員の講義の場合は、事前に講義の概要を学生に与えて、おおよそ分かれば学生の方も理解しやすいだろうということを工夫していた。それで、学生の方もだいぶ講義についていけたと思う。

私自身はどのような授業をしていたかという、私は比較文学を持つことになっていた。まず、英語で授業をした。それから、英語で言ったことを日本語で要約していくというようなバイリンガル教育をしていた。学生たちは全く分からないかという、そうではなかった。一期生の多くが、英語教育に関しては、ほかの大学と違うと新聞などで感想を述べている。そういうことで、先生方を国際化したということは、英語教育の面で貢献したのではないかと思う。

司 会 「国際」ということを打ち出したのは、やはりその辺の思いからなのか。

東 江 内容を煮詰めていったら、内容は「国際教養学部」というような形になった。それで学部の名称は「国際学部」ということになった。外間先生は「国際『文化』学部と、かなり「文化」という名称にこだわっておられましたけど。結局、妥協していただきました。(笑)

瀬名波 それと、もう1つは文部省の政策がだいぶ変わった。新しい大学はもう建てないという方針になっていた。ただし、特色のある大学なら考えよう、と。これは非常に大事なことなのだが。

当時は、原則として大学の新設は認めないという状況の中で、我々は、特色ある大

学をどのようにつくるかということで知恵を絞った。学部やカリキュラムなどユニークなものをつくらないといけない。特色をクローズアップする形で文部省に書類を提出して認可された。大学の中身はどうしようかということについては、ほかの大学とできるだけ競合しない分野を模索したところ、これが結局、特色に結びついた。

「国際文化学科」は当時、沖縄に無かった。「経営情報学科」についても経営と情報を抱き合わせて、情報に強い経営者を養成する学科はどこにも無かった。「観光産業学科」も存在しなかった。「沖縄の大学は共存しよう」という東江先生の考え方があった。

司 会 国際化という話については、カリキュラムの中でも総合科目をつくって、国際性のある科目を並べて、選択必修にした。そのようなところにも特色が出ていたように思える。

東 江 文部省とのやりとりの中で、東アジアも欧米もよそがやっているからいい。よそがやっていない東南アジアと中南米に力を入れた方がいいということがあった。認可もされていないのに、文部省側から「あなた方はちゃんと中南米とかに行って交流の話し合いとかをしているのか」と尻をたたかれ、結局、開学前にペルー、アルゼンチン、ブラジルなど回って来たといういきさつがあった。

司 会 現地の沖縄県人会が随分喜んで奮闘してくれたように聞いているが、南米というのは一つの特色になったのか。

東 江 留学生もかなりあちらから来だし、こちらからも現地実習という形で送り出した。留学生が来るだけでなく、こちらからも現地に積極的に行かせるということに特色がある。南米の大きな大学の先生が、その大学は欧米の色々な大学と協定を結んでいるが、実質的に交流しているのは名桜大学だけだと言っていた。

司 会 開学する前に世界中のあちこちの大学と提携を結んでいる。びっくりするほどたくさんの大学といっぺんに結んだ。

瀬名波 10カ国、11大学だったと思う。

司 会 瀬名波先生が話したように、先生たちも非常に国際感覚があり、国際的なネットワークを持っている方々が集まった。開学前後のばたばたした時期によく10カ国回ったと思う。国際学部にあふさわしく海外との提携を得て、語学スタッフもそろえた素晴らしいスタートだった。もう一つ力を入れていたのが情報教育。それについ

てはどうか。

屋比久 英語の教育と情報の教育と、どちらか一方を完璧にすればそのどちらかでいいと思う。それぐらい重要なことを学生は学んでいる。

司 会 開学前、新しい大学をつくるならインテリジェントビルにしましょうとわたしが提案したら、東江先生が「じゃあ、プランを作ってごらん」と言ってくれて、大変うれしかったことを記憶している。



小濱 哲

その話をNTTの当時の嘉陽支店長に持っていったら、彼は大変喜んでくれた。国道58号をほじくり返して、当時、楚辺と城間のNTT間にしかなかった光ファイバーのケーブルをうちの大学まで引っ張ってきてくれたのは非常に印象的だった。

それから、インターネットがまだ普及していない時代に、学内にLANを張ろうという発想があって、ビルを造っていく上で、全部光ファイバーのイエローケーブルを埋め込んだ。ああいうインフラが初期の段階で整備されたので、その後の学内の情報化はスムーズに整備されていったと思う。

学科の話に戻るが、今でこそ名桜大の3学科は何の違和感も感じないが、大学開設当時は世の中では、うちの3学科というのはかなり特異なものだったのではないかな。

東 江 とにかく、沖縄県内の大学に無い分野という意味では、割とすんなり関係者に受け入れられたと思う。

司 会 専任スタッフを集める上では苦労は無かったか。

観光産業学科の教授を学長待遇で招聘

東 江 観光とかは、小濱先生1人だった。先生は昔から焼き鳥食う仲なので、引っ張ってこれたが……。 (笑) 結局、学科を成り立たせるために立教大学の学部長クラスの小谷先生を引き抜いてきた。小谷先生には、学長待遇で迎えると……。これは、日本ではあまり考えられないような事かも知れないが、アメリカではごく一般的な事。私はニューメキシコ大学にいたが、そこには医学部が無くて、医学部をつくろうとし

たときに病理学の先生がいなかった。病理学は全国的に人が少なかった。その人が見つからないと医学部が成り立たない。アメリカではそういう人を引っ張って来るためには、相手の身分がヒラ教授であっても学長待遇で呼んでいた。相手が来てもいいという条件を作ってやれば、人は来ますということだった。結局、そのやり方で観光産業学科の人を集めた。

司 会 観光学科の人を集めるのに、当時、小谷先生は観光学会の学会長をしていた。立教大の学科長もやっていたので、小谷先生にお願いして学会を動かしてと言ったり、色んな人に相談して人を集め始めた。

小谷先生は、東江先生が上京のたびにこちらに寄ると。あるとき、小谷先生が「東江先生がどうして僕のところに尋ねてくるんだろう」と言った。わたしは聞いてきますと言ったところ、東江先生は小谷先生が欲しいとおっしゃって。僕はまず、先輩に可能かどうか相談した。すると、先輩たちはみんな「それは無理だろう」と言っていた。6大学の中でも立教の待遇というのは一番良かった。小谷先生はもうすでに自宅があって、安定していたし、あともう数年で定年退職だった。先が分かっていたので、結構厳しいんじゃないかと言われていた。あるとき、立教に呼ばれたら小谷先生は「腹を決めた、沖縄に行くよ」と言った。たしかあのとき、小谷先生の研究室の机の上から東江先生に電話したと記憶している。

それで、小谷先生も本学に来ることになって、あれで何か箔が付いた感じがした。観光学科は名桜が全国で4番目の開講だったと思うが、学会の中でも名桜大は一目置かれる存在になった。わたしとしてはプレッシャーがあって、小谷先生を招いたことで、先輩たちから「小濱は沖縄に先生を引っ張って行った」と言われていた。(笑)

さて、資金面の話になるが、学部の構想や場所も決まって、当初は127億円と記憶してるが、それくらいの規模でつくろうということになっていたのが、諸般の事情でどんどん縮まった。あれはなぜだったのか。

東 江 最初は、大学をはじめ幼稚園を含めて小・中・高校までつくろうという構想があって、予算的に膨らんでいた。大学だけで出発しようとなったときに、土地も名護市の所有地で無料で使えるし、大学設置のみに掛かる予算に絞られてきて、結局75億円の予算規模に縮小された。それでも資金づくりにはなかなか苦労して、市街地に

近い名護市の土地を売ろうとしても買い手が見つからない現状だった。結果的に文部省と掛け合って、学年進行ということになった。さしあたっては一般教育に必要な施設を造り、1期生が卒業するまでに年次的に必要なものを徐々に造っていくということにした。それでもなお、なかなか計画通りにはいかないものだった。

司 会 屋比久先生、あの頃はちょうど人事を決めたり、設備を考えたりする時期だった。結局、お金が足りなくなって不義理をしてしまった先生方も多かったし……。色んなことがあったが、先生は何か思い出すことはないか。

屋比久 外国語教育の部分で細かい教室がたくさん必要だという話になって、カリキュラムが1年間で一斉にこなさなければならぬ感じになって、そのときに毎学期使う教室の数が英語だけに使われて、教室が足りなくて、ほかの人たちが使えなくなるのではないかという状況はあった。英語教育については小さい教室をつくるというアイデアのおかげで充実したものができた。

瀬名波 東江先生が東奔西走して、資金集めをしていたのが昨日のように思い出される。議会や市町村を一人で巡ってお願いしていた。おかげで我々の構想通りのものができ上がったわけだ。本館ができたときに計画がだいぶカットされたことは、やはり経済的に厳しかったことを示しているのではなかったかと思う。

総額を75億円と決めて、名護市が52億、3億円を名護市を除く11市町村が出すという風に割り振りしていた。県は20億円出すということだった。5億円は出してもらって、次の5億円をお願いに行った。そのときはやんばるのおいしいミカンを携えて婦人会が同行した。(笑) 大田知事を訪ねたが不在だったので、仲井真副知事が対応した。そこで5億円出してもらえないかと切り出したところ副知事は「桁違いじゃないですか」と大きな声でびっくりした。(笑) しかし、いちおう5億円は出してもらえた。その後、東江先生も一緒に大田知事を訪ねたときは、もうこれ以上、県は出せないとはっきり言われた。それで、我々はしぶしぶ帰った。しかし後日、東江先生だけ呼び戻されて、追加で3000万円もらえた。そんなわけで、東江先生がどれほど資金集めに苦労したかということは、我々は傍から見て知っている。

東 江 とにかくねえ、お金が無くて……。大学をつくるのにいい学生、いい先生を集めるために頭を悩ませるのはいいけど、金が無いということでねえ……。金のこと

にうとい大学人が毎日そういうことばかりを考えていた。大田知事は結局、10億円という大金を出してくれたわけだけど、最初に5億、残りは3億、2億と分けて出すということで、こちらとしては県の10億円というのを見込んで建物を設計、建築していたので、その点ではきつい思いをした。

司 会 語学に力を入れるということで、瀬名波先生は「語学は少数精鋭でやるべきだ」と言って、教室を小さくしようということになって、施設的にはあれだけの学生が入ってきて16単位の授業をすると、ほかの学科で授業が開けなくなってしまう。それで、大学の方針としては語学は月～金曜までとした。それと、5時間目以降は無しにしようという話だったので、1週間が20コマしかない。どうやって運営したらいいんだろうと、運営の方がとても大変で、入学したときはホントにサーカスをやっているみたいな感じだった。教室の稼働率が大変良かったと思う。

話は変わるが、文部省というのは本学設立に関して協力的だったのか。

東 江 阿部充夫さんという元次官が委員にいた。阿部さんが委員を引き受けたということは、文部省としては認可せざるを得なかったわけだ。そういう仕組みになってみたいだ。あちらとしては、阿部さんのメンツを潰してはいけなかったんだろう。そのため、こちらは随分厳しく言われた。

瀬名波 文部省との関係では、学年進行ということがあって、年次計画でハードウェアは4年間ですべてが完成するということになっていた。ところが、財政的な面でだいぶ苦労していたこともあって、建設もうまくいかなかった。完成していれば1回の実地調査で終わるわけだ。ところが、名桜大の場合はいつもぎりぎりの線できているので、毎年、大学設置審のメンバーと、文部省からは係長級の人たちがついて来て尋問をやった。我々はその都度、戦々恐々だった。確かにバブルが弾けて、我々が苦境に立たされているということは向こうも分かっていたが、それにしても、設置審のメンバーによっては厳しく当たる人がいた。大声で「ほかの大学ならもうちゃんと終わってますよ」「こんな大学はありませんよ」など、厳しい批判を受けながらも耐えてきた。

それから、文部省を訪れたときに教職員などスタッフの書類を見せたところ「大学つくらないつもりですか」と言われた。聞き返すと「人員が足りません」とのこと。

教職員は47人でないと大学設置は認めないということだった。その場になって「じゃあ1人付け加えましょう」と急遽書き加えて、定員を満たしたということもあった。(笑)

カリキュラムの面では、名桜大は特色のあるものを提出していたのでそれほど問題にはならなかったが、語学の面でドイツ語、フランス語が入っていないことが指摘された。東南アジアの国々の言葉やスペイン語などを提供しているからいいだろうということで書類を持って行ったのだが、文部省にドイツ語、フランス語を提供しない大学があるかと言われた。それでは、東南アジアに関係するものとしてフランス語を入れようということになった。ドイツ語は後から入れようということで、結局、ワイツゼッカー氏が来沖したときにオリオンビールの協力で開講することができた。

東 江 だいたい設置審のメンバーの中には語学の専門の人が入っていて、ドイツ語の専門家がいたりすると「ドイツ語が入っていない大学はけしからん」と……。 (笑)

屋比久 わたしは文部省とのやりとりには直接かかわっていないが、外国語教育についての学長の最初のアイデアは、とにかく英語をとということだった。ほかの言語はできるならやろうという形で、英語を主体にしてカリキュラムを作った。ところが、文部省とのやりとりの中でだんだん東南アジアとかスペイン語、ポルトガル語とかがどんどん入ってきた。そのために英語全体が少し割かれたという感じがした。たとえばタガログ語なんかどうかと私は学長に進言してみた。そうしたら、まず英語をやってみて考えようということになった。

瀬名波 言語に関しては、東南アジア中心、南米中心ということと大いにかかわりがあって、英語を主体とするけれど、現地に行って現地実習をするということになれば、当然現地の人々と接することになる。だから、会話程度の現地語は身に付けさせておく必要があるだろうということで、4単位ぐらい課してある。けれども、主体はどこまでも英語だった。

司 会 この10年間で先生方が振り返って、名桜大学もだいぶ変わってきたと思うし、また、これからも変わっていくと思うが、名桜大学が地域社会にだんだんと認知されていった経緯だとか、あるいはいい方に変わってきたなと思うようなことを聞きたい。

東 江 名桜大学は、ある意味において苦労はしてきたけれども、いつも追い風が吹

いていたと私は思っている。その追い風の1つは、我々が大学をつくるんだと折衝を始めた翌年に、文部省が今まで大学をがんじがらめにしていたカリキュラムの制度を緩やかにして、個性ある大学には都合のいい形になった。それで、カリキュラムの件に関しては、我々は文部省からほとんど干渉を受けなかった。その点は非常に良かったと思う。

そのほかの追い風といえば、名護市を中心とする北部12市町村がつくった大学だということで、色々と国の援助が入ってきた。資金がなくて、長いことほったらかしにしてきた多目的ホールとかも国が名護市を支援する形でできた。総合研究所など構想にもなかった施設も建設でき、今も国からの資金で新しい施設がどんどんとできつつある。ラッキーな面がこれまであったし、これからもそのツキは付いて回るんじゃないかと期待している。

瀬名波 この10年で一番大きく変わったことは大学院が設置されたこと。2001年に大学院ができて、'03年に第1期生を世に輩出した、ということがエポックメイキングだった。東江先生の構想では、1994年に開校して4年後には大学院の修士課程をとということだった。結果的に3年ほど延びてしまったが、修士課程が本学に設置されたことによってどういうふうな社会的、国際的貢献ができたか、ということは評価すべきことではないかと思う。

たとえば、本学の卒業生は、大学院が無かったために早稲田や琉大、冲国大などほかの大学院に行かざるを得なかった。ところが、今は自分の大学で、学部を下敷きにしてできた大学院なので、一貫性のある研究ができるようになった。地域社会から見れば、社会人としての入学ができるようになったし、公務員や会社員、教員など職を持っている人々が入って研究ができるような体制を整えた。それから、国際貢献という意味では、やはり留学生をいつも採用してきた。そういう面で本学の存在価値は大きいのではないかと思っている。学部は7.5倍の競争率があるが、大学院の方は1年目の場合、定員6人に対して30人を入れた。できるだけ研究意欲のある人は採用しようということで、5倍採用した。それだけでも大きな貢献をしたんじゃないかと思っている。

将来に向けては、その上に博士課程の設置ということを忘れてはいけないだろうと

思う。我々ができなかったことを、ぜひ、後輩のみなさんにやって欲しいと思っている。

もう1つは、法人名が「総合学園」となっている通り、当初から一貫教育ということを目指していた。今のところ大学だけだが、幼稚園、小学校、中学校、高校と一貫教育を今後、考える必要はないか。特に、国際色豊かな総合学園ということを期待したい。恩納村に大学院大学ができるので、大学の方々がみえる。その子弟を教育するためにも名桜大の方がリーダーシップを発揮していいんじゃないかと思う。

屋比久 大学の創設から今日までで一番特色があるのは、大学の経営形態。公設民営という形態だが、一般の人は国立でも公立でも私立でもない、いったいどんな大学なのかという不思議な気持ちにかられたと思う。それがだんだんと認知されてきて、いい意味での公設民営の大学として名桜大のイメージは定着してきていると思う。この伝統は育ててほしい。

そして、東江先生を中心とした数少ない人たちの、大学をつくる以前からの努力を心に留めてほしい。私は南米に現地実習として学生を連れて行って感じるがあった。ブラジル、アルゼンチン、ボリビアなど現地に行くと、大学ができる以前から、このような実習をいずれやるだろうということで東江先生たちが根回しをしてくれていたことを肌で感じる事ができた。これはすごいことだと思った。東江先生は口癖のように「小さくても光る真珠のような大学を名護につくる」と言っていた。だんだんそういう風に磨きがかかってきたやんばるの大学が、そろそろできかけているのではないかと思う。最初の構想の通りに100%いったかというところではないかも知れないが、構想しなかった部分が新しくできていっているんじゃないかと……。南米との交流など名桜にしかできない部分もある。東南アジアとの交流も含めてその点を大事にしてほしい。

■ 今後の名桜大学に望むこと

司 会 最後になるが、大学に残って盛り上げていく立場のわたしたちに対して宿題や要望があったら伺いたい。

東 江 このごろ、地域に根を下ろした大学ということがよく言われるが、沖縄県の北部にある名桜大学は、地域の活性化や発展におおいに貢献してほしいと思う。琉球文化や健康・福祉など新しい分野にも挑戦し、地域に優しく、地域のニーズに応えられるような大学になっていって欲しいと思う。

瀬名波 先生方も一生懸命やっていて、明るい将来が見られるわけだが、教育を重視するということと研究ということをいかにバランスを取るかということ、今名桜の方で問題にされているかと考えている。教育を重視するということは非常に大事なことで、学生がいる以上、優先的に教育を重視せねばならない。ところが、教育を重視するあまり研究をおろそかにすることはいけないと思う。教育も研究もどちらも大切。両方、バランスを取って進めていってもらいたい。

そして、文科省の方では今、センター・オブ・エクセレンスというのを打ち出している。沖縄では初めて琉大が勝ち取っているが、名桜も特色ある研究を進めていったらその研究拠点として認められるだろう。それをぜひ目指していってもらいたい。

もう1つ、大学の理念というものを絶えず先生方は認知してもらいたい。果たして先生方の何人がそれを知っているか。今は「平和」「自由」「進歩」という3つを打ち出している。これをどう具体化させるかという課題が残っているのではないだろうか。言葉として知っていても、それがカリキュラムの中でどう生かされているかということになると、先生方の方でどう理解されておられるか。創立の理念を先生方は常に心に留めておいて、それをどう発展させるかを常に考えてもらいたい。

屋比久 名桜大はやんばるにあるということで、ローカルな大学と思わないでほしい。どちらかといえばそこから普遍的な問題、たとえば平和の問題とか環境の問題を見てほしい。やんばるという所は非常に面白い所だ。色んな違った集落があって、首里的な集落があるし、大島的な集落もある。まだ掘り起こされていない色々なものがある。平和というものを考えるときでも地域に根ざした平和があるのではないかと。平和というものを考えるときに、ただ戦争と平和ということだけじゃなくて、地域と平和講座を設けるべきではないか。「平和」を一番最初に打ち出しているのは名桜だ。だから、平和という講座を作っても全然おかしくない。ワイツゼッカー級の人を3年に一度ぐらい呼ぶとか……。平和という普遍的な価値を見据えながら、自分の立っているやん

ばる地区を耕すということをやった方がいいんじゃないかと思う。やんばるという所は南部から移ってきた集落があり、また、元々の集落がある。ここでは、社会学的な葛藤もあるし、色んなことが起こっている。そういう所を耕して行く。マスターレベルではできないことができるフィールドがそこにあると感じている。

司 会 長い時間にわたって色々と話をつかがってきた。開学のいきさつ、本学の特徴、今に至るまでの経緯、お金の面の話も出たし、文科省の話も出た。特色の変化や新しい芽生えみたいなこともあった。わたしたちに課された宿題というのは、原点に戻るというか、当たり前のことかも知れないが、より地域に深く根ざして、地域の発展のために役に立つ、頼りにされる大学にきなさいという言葉をもらえた。それと、教育と研究は当たり前のことだが、さらに深めて充実させるということ。本学の「平和」「自由」「進歩」という理念に常に立ち返って、その中でも特に平和というものを大切に考えていって欲しいというメッセージを受け取ったと思う。先生方にはこれからも名桜大学をよろしくお願いしたい。



名桜大学キャンパス



名桜大学創設当時の回想

法政大学名誉教授 外間 守善

沖縄県立芸術大学の設立準備委員（4人）を務め、まがりなりにも沖縄にふさわしい芸大を、10年がかりで発足させた。ほっとする間もなく、財界の数人から英才教育のできる大学を作って欲しいという依頼を受けた。その時の条件が那覇か浦添あたりに立地する大学を、ということだった。わたしはできるだけ山紫水明の地名護にしたい、自由と進歩を標榜する国際的な私立大学にし、教員も学生も学内に生活する全寮制度にしたいと申し出た。しかし、立地を名護にという私の意見はどうしても納得してもらえなかった。名護では学生が集まらないという理由だった。名護に執着した私と有志の方々との話し合いは決裂した。

私は、私が構想した大学の夢を捨てることができず、信頼する学友の東江康治さんに私の夢を話した。東江さんは当時琉大学長だった。しかし、東京の某書店の社長が名護に大学はできない、という話があったとかで私の夢にはあまり乗り気ではなかった。とにかく名護市長比嘉鉄也さんに逢いに行こうと同行してもらった。

比嘉市長も初めは半疑の態だったが、さすが敏腕市長で機を見るに敏、私の大学構想に決断をしたようだった。そこで比嘉市長を中心に設立準備のための理事会を構成する18の適任者を選び、理事会で初代学長に東江康治さんを選んだ。東江さんは教育者、しかも名護出身者として最適の人だった。設立準備委員には現役大学人の優秀な人たちを集め、衆知を絞って学部、学科、人事などを練り上げていった。当時を思い出して感慨無量である。

名桜大学誕生の陰には第一に比嘉鉄也市長の勇氣ある決断があったこと、次に東江康治学長のみごとな采配があったこと、そして設立当初の教員、職員が寝食を忘れるほどの情熱を燃やしたこと、などをあげたい。

名桜大学は時代の求めに応じながら構造改革をし、名護の地に輝き続けることであろう。名桜大学の自立と弥栄を念じつつ、創立10周年の祝いのことばを結ぶ。

第二編 大学教育と 地域サービス



カリキュラム構成

本学は、1994年の開学以来、「平和・自由・進歩」を基本理念に「国際舞台で活躍できる人材の育成」に情熱を注いできた。国家間のボーダーレス化が地球的規模で進み社会が高度に情報化していく現代、異文化を深く理解し、国際語を駆使し、高度なメディアを使いこなしながら、世界を舞台に活躍する国際人像が強く求められている。そのため、全学的に実践的な英語教育を行い、国際理解に関する科目や情報処理教育科目を充実させた学部共通科目としている。また、東南アジアや中南米・米英、日本・沖縄などにおける現地実習や県内の多くの企業や自治体でのインターンシップの実施など、実践的な教育も行い、海外、国内の交流協定大学への留学制度も充実している。独創的なカリキュラムの成果は本学の高い就職率として結実している。

国際学部

日々進展する高度な情報化に対応し、異文化を深く理解すると同時に、経済分野においても国際的視野と感覚を備えた国際性豊かな人材を育成していくことが21世紀の沖縄の自立発展に寄与することは確実で、国際文化、経営情報、観光産業の3学科はこれを兼ね備えたものである。国際学部には学部共通の科目に語学とコン



ピュータを取り入れ、国際性と情報技術力の養成に力を注いでいる。さらに就職に有利な資格取得も全力でサポート、実社会で役立つ実践教育を広範囲で展開している。

第1章

学科紹介

本学は現在、国際学部内に国際文化学科、経営情報学科、観光産業学科を持つ1学部3学科制である。大学設立準備委員会は全国の大学の学部学科を調べ、全国でも少なく、沖縄の大学にはない特色ある学部学科の選定を行った。しかも社会のニーズに応えただけに当時の文部省をはじめ県内の企業からも注目された。

／ 国際文化学科 Department of International Cultural Studies

日本・沖縄の文化を理解し、その基礎の上に東アジア、東南アジア、オセアニア及び中南米地域の文化、社会、歴史、宗教、芸術、民俗などを中心に考究する人材の育成は今や社会のニーズである。特に沖縄は昔から東南アジア、中南米地域と貿易や移民を通して密接な関係にあった。これらの地域の文化、歴史などを学ぶと同時に言語能力を重視し、国際共通語としての英語を中心に、教育、研究の対象とする地域の言語であるタイ語、インドネシア語、スペイン語の習熟度を高め、沖縄と外国各地域との懸け橋として活躍することが大きな目的である。

国際化時代に向けて、太平洋に面した沖縄の特色を生かして環太平洋文化圏に目を向け、英米文化、全国の大学にも少ない中南米文化、東南アジア文化、日本・沖縄文化の4コースを揃えているのは全国大学の中でも珍しい。さまざまな分野を専門とする教員からより深く学び、より専門的知識を習得することができる。

■ 英米文化コース

コース選択の学生には2つの道がある。英語教員希望なら教職関連の講義を履修し、ジョージ・フォックス大学で学ぶ。希望がはっきりしない場合は英米文化コースの講



北米での現地実習

義を取り、3年次は、北米で国際交流協定大学での現地実習、外書購読を履修することができる。実習はその地域の歴史、文化、住民を知る重要な体験である。日々のリアルな生活体験をするホームステイや大学の寮生活がある。

未来へのライセンスとして、それぞれの専門分野のさらなるスキルアップを目指して資格取得にチャレンジしよう。主に取得可能な資格は、中学校教諭一種免許状(英語)、高等学校教諭一種免許状(英語)のほかTOEFL、CRLA、英語検定など。

■ 中南米文化コース

ほとんどの大学が欧米志向なのに対し、本学にしかないユニークなコース。中南米33カ国の言語と文化、歴史、社会、民俗、さらに移民を重点に学ぶ。開学した1994年5月、最初の国際交流協定大学をブラジルのロンドリーナ州立総合大学と結ぶ。そしてアルゼンチン、ボリビア、ペルーと協定大学を増やしていった。

このコースでは1、2年で共通科目、専門の必修科目を学び、3年次には夏休みを利用、各地域の協定大学で3週間、集中講義を受ける。4年次は協定大学に1年間留学し、専門分野の枠を広げる。学生との交流、インカ帝国の古代遺跡調査、さらにサンバやカーニバルなどを見学、徹底して歴史と文化を学ぶ。

およそ90年前に沖縄から中南米に移住した県人会との交流を通して、次第に学生らは中南米への価値観を変えていく。これまで中南米といえば、治安が悪い、サッカー、アマゾンなどのイメージしかなかったのが、いろいろ学んでいるうちに、

「留学したい」「就職して、もっと勉強したい」などとそれほど中南米の魅力に取り付かれ「中南米病」になっていくのである。全国から1～2人ぐらいしか受からないといわれている難関の外務省在外公館派遣試験に当学から2人が合格した。平良和義さんと仲本末子さんで任期は2カ年。平良さんはリオデジャネイロの日本総領事館の職員に、仲本さんはチリ・サンティアゴの日本大使館に就職した。仲本さんは、このあと競争率12倍のJICA派遣試験をクリアし海外青年協力隊としてパラグアイ日本人連合会に就職した。そのほかボリビアから招聘され移住50年史の編集スタッフとして活躍しているのは押川進さんである。押川さんは2003年に本大学院卒の1期生。また崎原さんは、狭き門の国家試験に合格したがサンチャゴの日本大使館勤務をやめて、今は県国際交流課の中南米県人会担当として活躍している。

開学してわずか10年で国家試験や外務省の在外公館派遣、JICAの難関の試験を突破し、中南米で活躍している当学卒業生の実力は、きっと後輩の励みなること請け合いだ。

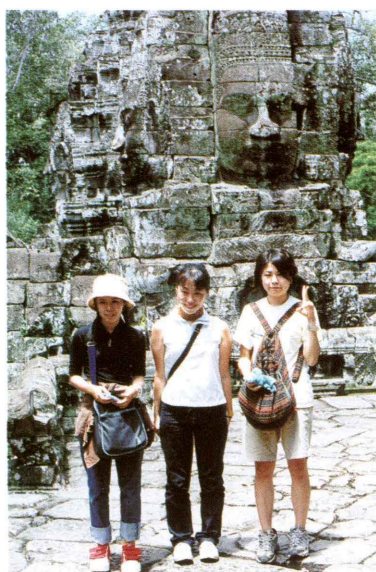


▲ブラジルのロンドリーナ州立総合大学との国際交流協定大学調印式

◀ ブラジルでの熱帯雨林の観察

東南アジア文化コース

多様で深く豊かな歴史、文化、言語があふれる東南アジアの世界。この東南アジアと日本・沖縄は、数千年前から現在まで、さまざまな分野において広く深い関係を持ち続けている。東南アジアコースは東南アジアに対する基礎的理解を通し、東南アジアへの関心を持ち、それを深く考察し、体験に基づく知識を得て、より豊かな東南アジアと日本・沖縄の共生関係の構築に貢献する人材を育てることが目標である。



カンボジア・アンコールワット



日本・沖縄文化コース

国際文化学科では共通専門科目として多くの日本文化論科目を用意。特に日本・沖縄の文化・諸問題に関心のある学生は、より深く学ぶことができる。中でも沖縄文化は豊かで奥行きが深く、興味が尽きない。沖縄を知り、日本を知り、世界に羽ばたこう。3年次の現地実習では、宮古、八重山など沖縄の各地域および日本本土の地方を調査旅行し経験と見聞を広める。



2 経営情報学科 Department of Management and Information Sciences

社会の情報化に伴い、民間企業は当然、国や地方公共団体のあらゆる分野において情報活用能力を備えた経営的視点が求められている。ここではシステム思考、科学的思考に優れ、具体的に問題解決ができ、地域経済の活性化と地域産業の振興に貢献できる人材を育成する。

経営情報は11年前の1993年頃から全国でもブームになっていたが、県内の大学にはなかった。授業では企業が実際に使っていた情報の事例や使い方、コンピュータの情報理論や基礎知識だけでなく、プログラム、システム開発などを実践させる。いわゆる企業などで即戦力を発揮させるためだ。

3年次の夏休みに3週間の企業実習がある。当初、実務を体験させるのは全国でも初めてだった。インターンシップである。理論と実務を経験するだけに学生の理解力はグーンと伸びた。開学3年後の1997年、最初の企業実習効果を聞いた文部省からはいろいろ聞き取り調査に来た。そして翌年から全国の大学にも企業実習の実施を呼びかけ、各大学で取り入れられるようになった。本学は、日本の大学教育の先鞭を付けた大きな轍であった。現在では企業実習をスムーズにするため毎週1回、企業の事前学習も行っている。2003（平成15）年から「情報」は、中学、高校でも必修科目になっている。本学は常に時代の先端を走っており、教員免許取得者が年々増えている。おかげで最初から卒業生の就職率は90%台である。

コンピュータが40台あるコンピュータ演習室は3教室ある。多目的ホールには衛星設備とつながれたパソコン教室もあり、早稲田大学など本土大学との衛星授業を1998年から始めた。本学から「サンゴと沖縄の自然」と銘打った授業や早稲田大学と共同ゼミを公開ゼミとして行った。両方の学生らから「リアルで楽しかった」と好評だった。

プログラミングにも力をいれている。2004年からは、週1回の時間制授業から1週間、プログラミング漬けにした教育を行うなどプロ養成に本腰を入れている。

情報システムコース

企業で必要とされる情報システムについて理解し、企業経営の問題点とそれを解決する情報システムの在り方が考えられようになる。またプログラミングの基礎から様々なシステムの設計、構築を行う演習もある。

情報技術コース

コンピュータの高度な知識を身に付けると同時に常に最新の研究に触れ、個人の感性を育てながら高い情報活用能力を身につける。また、新技術の開発を通して時代を読み、新しい発想を形にする。人工知能、画像処理、ロボティクス、ネットワーキング、データ通信、e-Learning などの技術習得、研究が可能である。

経営マーケティングコース

進化する社会情勢やビジネス環境に即応すると同時に、自ら新事業の開発や企業内での企画・マーケティングの具体的な提案ができる人材を育成する。将来、経営者を志す学生には、起業に際しての問題解決ができるような解説・支援をするプログラムを用意している。



産業社会心理学コース

職場の生産性を上げ、人間関係を発展させていくためのコミュニケーション・スキルとリーダーシップの在り方を理解し、心理学の知見を活かして問題解決ができるようになる。さらに地域社会や産業組織における人間の「心」を測定する様々な心理学研究技法を演習方式で学ぶことができる。

政策科学コース

企業や市町村では、魅力や活力のある組織づくりを推進しなければならない。組織づくりには不可欠な法律・経済・経営・情報・租税体系等の知識を養い、ディスカッションやディベートによってプレゼンテーションの力を高め、これからの組織に必要な人材を養成する。

3 観光産業学科 Department of Tourism

インターンシップやホテル実務の豊富な実践を通して、観光産業のプロを育成。自然環境、文化、交通運輸、都市計画などさまざまな要素を持つ観光産業を、心理学から政策論に至るまで幅広い側面から体系的に学んでいく。1年次学生への必修科目として「基礎演習」がある。これは週1回、指導教員と学生が会ってお互いをよく知り、学生個々に対して学業や生活面を含めて細かい指導を行うゼミ形式の授業である。また、地域ボランティア活動や共同研究を通して学生同士の助け合い精神やホスピタリティー精神を養成する。

観光は、これまでの「見る」「団体旅行」から「個人」「体験型」に変わってきた。マングローブの中を流れる川、海で自然を大切にしながらカヌーを楽しむエコ・ツーリズム、ダイビングも増えてきた。すなわち健康（ウエルネス）、スポーツを目的とした新しい観光の在り方を、沖縄観光の特色を通して、あるいは時代のニーズに対応したカリキュラムを構成して学ぶ。例えば、ヤンバルを舞台にしたエコツアーなどの

体験型観光や、ダイビング、ゴルフなどのスポーツ観光、さらにキャンプ・インストラクターやウエルネス・デザインなどの資格や保健体育教員免許取得を可能にするカリキュラム編成をするなど沖縄の基幹産業である観光をリードするスペシャリストを育成する。

このように進化する観光においては環境を重要視しなければならない。「3S」といわれるSea（海）・Sun（太陽）・Sand（砂）を備えた沖縄の貴重な自然である。環境問題はこれからの観光産業を左右する重要な分野で、県や旅行業がどのような施策を取るか注目されるが、将来、この観光行政の政策、立案のできるスペシャリストを育成する。環境生態学、環境関連法規など環境を中心の科目も多く、県内外はじめ海外での現地実習を踏まえた自然学習に重きを置く。マレーシアにオリックス系のホテルがあるが、そこで毎年2月から3月までの2カ月間、ホテルビジネスを学ぶ。

そのほか恩納村のリゾートホテルで実務学習を行う。ホテルで4カ月間、アルバイトをしながら単位が取得できる実習もある。「働くことの厳しさを体験させる」ことが目的。社会に出て、いきなり現場で働くことに少しでも慣れさせようというものである。

2000年のサミット開催を記念してアメリカのクリントン前大統領が、名桜大学を指名してヒューストン大学との交流を打ち出した。'01年から'03年までの3年間だったが、観光産業学科から年に2～3人を送り出し、計8人が留学、学生との交流を深めると同時に国際コンベンションについての講義を受講した。県もコンベンショ



ンには力を入れているだけに、今後も専門的なコンベンション授業を導入する計画である。新たなビジネスとして各界から注目されている。

ホテル宿泊業コース

沖縄のリゾートは日本のみならず世界から注目され、最高のコンベンションG8サミットがここ名護市にある万国津梁館で開催された。旅の魅力は、その地域の自然環境の美しさと心温まる風土に加えて、何といてもホテル、宿の多様で多彩な施設と、ホスピタリティーに満ちたサービスである。お客さまに感動と満足を与えるホテルマンを目指して、その理論と実践を学ぶ。

旅行業コース

旅行会社の組織や関連業者の仕組み、旅行業約款など旅行業の関連法令を学び、旅行業とはどのようなビジネスであるあるかを知ってもらう。また、旅行業の国家資格制度である「一般旅行業務取扱主任者」などを目指すことにより、就職活動に活かすのもこのコースの目的です。

スポーツ・ウエルネスコース

観光・リゾート産業の基礎理論とともに体育実技、体育理論を学ぶことにより、健康・安全や運動についての理解と運動の合理的な実践を通して、生涯に渡って計画的



に運動に親しむ能力と体育・スポーツの振興に寄与する資質や能力を育てる。また、健康の保持・増進のための実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かで活力ある生活を営む態度を育てる教員を養成するために保健・体育科目を拡充し、「保健体育免許状」が取得可能になった。

環境・エコツーリズムコース

本学の近くには国際的に有名な「ヤンバルクイナの森」がある。本コースは、沖縄北部の恵まれたヤンバルの自然環境を活かしたエコツアーなど野外実習を取り入れた学習を行う。陸上の生き物だけでなく、沖縄ならではのサンゴ礁の生き物の観察もまた魅力である。環境の見方、自然環境の在り方に対する深い洞察が生まれる。

観光政策コース

国や地域の観光行政とコンベンションビューロー、ホテル、旅行業、航空、運輸業など産業界が一体となった地域の開発と保全を学ぶ。まちづくりを中心に観光施設などのハード面とホスピタリティを体系的に学び、政策立案ができるスペシャリストを目指す。



4 スポーツ健康学部保健体育学科を 文部科学省に申請

来年1月にも認可

本学は2004（平成16）年9月に、'05年度開設を目指し、新学部「人間健康学部・スポーツ健康学科」の1学部1学科の設置認可を文部科学省に申請した。認可は来年1月にも出される見通しである。スポーツ健康学をはじめ医学、心理学、栄養学などの幅広い専門分野を提供し、総合的な健康支援ができる人材を育成する。定員は95人で、3年次編入も5人予定している。新学部の施設は今年、9月完成した「北部生涯学習推進センター」を活用する。本学としては来年中に潜水用プールを含めた室内プール、医学や心理学専用の実験・実習棟の建設を着工する。

新学部には医学博士や心理学者ら14人の専任教員を配置し、「臨床心理学」や「病理学」「解剖学」などの専門的な授業を提供する。また、空手古武道、琉球舞踊など県内独自のスポーツやゴルフ、マリンスポーツなど県内でニーズの高いスポーツ科目もある。

人間健康学部 名桜大に設置

沖大に大学院の設置諮問

中山文科相

中山成彬文部科学相は十五日、来春に予定される公私立大の新たな学部や大学院などの設置のうち九月申請分について、大学設置・学校法人審議会に諮問した。

学部では、弘前学院大（青森県弘前市）の看護学部、名桜大（名護市）の人間健康学部の設置が諮問された。

大学院については、沖縄大学大学院などの設置

沖縄タイムス
2004年10月16日

第2章

大学院紹介

優れた研究者と高度なプロフェッショナルの養成

大学で学んだことをさらに深く研究し、資格を取り、キャリアアップを図るために、本学は待望の大学院を開学6年目の2001（平成13）年4月に開設した。4研究領域に現役から社会人まで老若男女が集い、高度な専門的研究を続けている。

本学の大学院である国際文化研究科は言語文化、社会制度政策、経営情報、観光環境——の4つの研究領域に分かれる。国際的問題や地域の抱える問題を解決できる高度専門的な職業人、研究者の育成を目指し、情報産業や観光産業などで核となる人材を輩出している。修士号、英語教員の専修免許が取得できる。

留学生らに対応するため、授業によっては日本語と英語のバイリンガル講義を実施、社会人大学院生のために夜間、休日の開講やセメスター（学期）制等を導入するなど配慮を行っている。大学院は開設当初から定員6人に対し約30人が入学。以降も募集定員はそのままが多く、意欲的な学生を受け入れており、研究の機会にあずかっている。

4つの研究領域のうち「言語文化」教育研究領域では、琉球列島や東南アジアおよび中南米諸国など環太平洋地域、英米における特色ある言語文化と地域文化の研究を行っている。言語文化の専門家養成を目的としている。

「社会制度政策」研究領域は、地方、国、国際社会の各レベルにおける組織の構造と機能について研究。立法、政策立案、制度の在り方について、理論と事例の研究を行い、各種施策を推進する人材の養成を図っている。

「経営情報」教育研究領域は、グローバリゼーション、情報化、福祉化の進展しつつある社会の中で、高度の情報化技術を有し、産業活動を文化や福祉等の視点から位置付けることのできる人材の育成を図る。特に地域の産業、文化の活性化に関する理論と方法の研究を行っている。

「観光環境」教育研究領域は、総合科学と呼ばれる観光学を文化観光と自然環境の視点から研究する。熱帯・亜熱帯性・海洋性・島嶼性という素材を環境科学的、社会政策学的に研究する。これによって高度な知識を持ち、政策提案のできる人材を育成し、地域の社会発展、産業発展および国際社会に貢献することを目指している。

本学大学院は、各研究領域ともに国際色豊かな教師陣がそろっている。少数精鋭の学生が、教師からマンツーマンの講義を受けている。また、社会人に加え、各国からの留学生も多く、海外の大学で学んできた学生も在籍するので、学部から進学する学生にとっても大きな刺激になっている。博士課程への進学を目指す、またはE-ビジネス、環境など新しいトレンドを極める、出身地の社会、文化の研究に励むなど、様々な人材が集まっている。

2004（平成16）年度現在は、約40人が在籍。うち社会人、留学生が各12人いる。留学生はこれまでベトナム、中国、台湾、韓国、ケニア、インドネシア、南米各国などから集まっている。留学生の中には、台湾の企業経営者が毎週空路にて講義やゼミに通っている例もあり、高い向学心がうかがえる。

卒業後、地域や国際社会で活躍する院生らのつながりは深く、大学院と卒業生、在学院生らで懇話会を開催するなど、ネットワークを強め、研究の深化に役立っている。





図書館

／ 附属図書館

図書館は大学の顔といわれ、勉学に欠かせない施設である。さまざまな領域の学習活動を支え、自ら学ぶ力を育てる情報センターとしての役割が学校図書館である。蔵書だけでなく、様々な資料、レコード、テープ、フィルムなどを保管し閲覧させたり、貸出もする。

本学の附属図書館は、開学した1994（平成6）年に蔵書約4万6500冊でスタートした。以降、毎年4000～1万6000冊の図書を購入、開学から10年を経た現在、当初より2.5倍増の約11万5000冊の図書資料を所蔵し、閲覧、貸出のサービスを行っている。開学3年の'96年前後の年間増加冊数が多いのは大学院開設準備によるものである。開学の記念にと、今帰仁村出身でハワイ在住の湧川清栄氏から多数の洋書が寄贈された事などで当初は洋書の比率が53%という高い比率となった。洋書の比率が高いのも本学図書館の特色一つであるが、学生の教育（講義・学習）をサポートするための図書資料の収集と提供を基本方針としており、'02（平成14）年度では和書67%、洋書33%の構成比となっている。

蔵書数の推移（平成6～16年）

年度 区分	H 6	H 7	H 8	H 9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
和書	21,742	26,020	32,903	48,076	55,223	58,685	64,088	68,345	71,866	78,004	79,371
洋書	24,780	25,552	27,243	28,742	30,921	32,786	34,790	35,372	35,969	37,187	36,782
合計	46,522	51,572	60,146	76,818	86,144	91,471	98,878	103,717	107,835	115,191	116,153

※平成16年9月末現在

蔵書の構成

蔵書の構成を見ると本学の特色がよく理解できる。多い順に挙げると、政治・経済・経営をはじめとする社会科学部門が32%、言語・文学部門は24%、歴史・地理（沖縄関係含む）は16%、自然科学部門5%、産業部門4%、芸術部門、技術・工業部門がそれぞれ3%の順となっている。

入館利用

大学図書館は、貸出利用より学生の閲覧と学習活動が主である。授業のつなぎ時間やレポート作成、試験準備などの利用が多い。入館利用者数は、ブックディテクション（持ち出し禁止チェック）システムにより自動的に数えられる。入館者は'94年以降には4年生までの在学生在が揃い、年間9万人～12万人が利用している。しかし、学生一人当たりの入館利用は、開学当初から次第に減っている。開学当時の'94年度は150回（人）であったのが、'96年度は88回（人）、そして最近の'02年度は56回（人）と減る一方で、学生が図書館を利用しなくなったことの現れである。これは全国的な傾向だといわれているが、本学においてもその原因について調査し、利用させるような対策、方策を検討している。図書館は大学教育の中核機関である。'05年度から雑誌のリニューアルを実施し、サービス強化を行うのもその方策の一環である。

月別の入館者数をみると、当然だが、試験準備月の7月と1月に多く、夏季、春季休みである8～9月、3月には極端に少ない。本学の図書館は大学院の夜間講義もあり、ふだんは夜10時まで開館している。学生の長期休暇期間も夕方5時まで開館しており、図書館では学生の利用を呼び掛けている。

入館者数と学生の在籍数の推移（平成6～15年度）

年度 区分	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
入館者数	58,987	93,656	105,243	124,943	115,175	107,984	95,655	89,785	88,732	50,929
在籍数	383	791	1,193	1,684	1,713	1,692	1,641	1,700	1,587	1,561

※平成13年度から在籍数に院生も含む。平成16年3月末現在

館外貸出冊数

図書の貸出利用は極めて低い。近年の貸出冊数は年間1万冊～1万5000冊の水準で、貸出者数は5800～8000人である。学生の貸出権利は5冊・2週間以内で、いい条件だといえる。登録者（貸出者）数と貸出冊数との関係を見ると、ここ数年は2冊（人・年）で推移している。これからすると、よく利用する学生は限られているということである。



館外貸出冊数の推移（平成6～15年度）

年度 区分	H6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
学 生	1,903	6,030	10,521	14,268	12,953	7,919	9,965	9,096	9,888	3,685
大学院生	0	0	0	0	0	0	0	1,447	1,713	627
教 職 員	652	630	769	715	722	755	753	547	610	211
学 外 者	160	459	661	772	938	487	594	609	464	375
合 計	2,715	7,119	11,951	15,755	14,613	9,161	11,312	11,699	12,675	4,898

※平成16年3月末現在

館外貸出者数の推移（平成6～15年度）

年度 区分	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
学 生	1,218	3,436	8,597	7,294	6,539	4,240	5,148	4,628	4,875	1,926
大学院生	0	0	0	0	0	0	0	254	265	251
教 職 員	280	291	351	315	293	281	321	455	567	101
学 外 者	91	264	385	451	537	294	344	370	286	234
合 計	1,589	3,991	9,333	8,060	7,369	4,815	5,813	5,707	5,993	2,512

※平成16年3月末現在

健康学部の関係図書購入

本学の図書館では、2005年度開設を目指す新学部「人間健康学部」を文科省に申請していることから、この関連図書を同年12月から購入することになった。予算は2000万円で、12月に1000万円相当の図書、'06、'07年にそれぞれ500万円の図書資料を購入、新学部の教育、講義などの充実化を図る。これによって学生の学習意欲を掻き立てるわけである。新学部は「人間健康学部・スポーツ健康学科」の1学部1学科であるが、スポーツ健康学をはじめ医学、心理学、栄養学など幅広い専門分野を提供することになっており、幅広い図書資料となる。

北部の各学校とネット

「地域に開かれた図書館」と「情報センター」の役割を徹底するため、本学の図書館では北部地区の公共図書館、小学校、中学校、高校の学校図書館とをネットワークで結び、情報資源の共有化による学校図書館の機能拡充を図り、読書活動の充実化を図る。また本学の図書館を地域住民にオープンし、図書資料の貸出を行う。



2 総合研究所

■ 開放的な研究支援施設

沖縄は地理的に日本と東南アジアの接点に位置する。その独特の文化と豊かな自然に恵まれた環境は多彩な研究資源を有し、視野を世界へと広げる多様な可能性を秘めている。

そのような環境の中、本学の総合研究所は環太平洋地域を中心とする世界の研究機関や研究者と協力しながら、言語・情報・観光・自然環境など各分野に関する理論的・実践的立場から、総合的な研究を進めている。

さらにそれらの研究を円滑に推進するため、研究所内に「言語文化部門」「経営情報部門」「観光環境部門」「社会政策部門」の4部門を設置、部門ごとに専門的かつ学際的な活動を展開している。そして、シンポジウムや講演会、研究発表会を積極的に開催するなど「地域密着型」の研究所を目指している。

本学の総合研究所は、1996（平成8）年度に開設。2000（平成12）年度には国などの補助を得て、名護市の事業として鉄筋コンクリート2階建て、延べ床面積847㎡の研究所棟が完成した。共同研究室のほか特別研究員や客員研究員の研究拠点として情報機器等を配備した個人研究室、録音・編集室などが完備している。また、最大70人が収容できる研修室・会議室もあり、OA機器を活用した講演会などに利用される。

歴代所長は小谷達男（'96～'99年度）、山里清（2000～'02年度）、仲地清（'03年度～）。専任所員1人、所員47人で構成する。本研究所の特徴としては、学外の実験者（特別研究員、客員研究員）にも研究室を提供し、開放的に研究支援活動を行っている点も挙げられる。

沖縄の北部地域唯一の大学附属研究機関としての特性を生かし、サンゴやオニヒトデなど水棲生物やヤンバルクイナなど固有の希少動植物の研究を実施。また、北部地域の言語や文化、社会生活、習慣といった地域密着型のフィールドワークも積極的に展開している。このほか、地域の産業や情報部門における研究も成果を挙げている。

第2代所長の山里清理学博士は、長年の海洋生物研究が評価され、フランスのエコール・プラティーク・デゾウト・エトゥードゥ（国立高等研究大学院大学）から名誉博士号を授与された。

研究活動は、基本的には地域に根差したものが主だが、海外からの研究員が本研究所でアラビア語のソフト開発に携わったケースもあり国際的な広がりも見せる。地域住民を対象にした講演会なども積極的に行なっている。

現在は、①観光産業を基盤としている、②気候風土が似ている、③サンゴの研究が盛んである、④米軍基地がある——など沖縄との相似点を共有するグアム大学と提携した国際交流事業を推進しているところである。

本研究所は、従来の研究活動はもちろんだが、将来的には研究所として研究成果の文献を出版物として刊行できるような体制も目標としている。また、地域の諸問題を本研究所が主体となって地域を導いていけるような「シンクタンク」の役割を担っていけるような組織になるよう鋭意努力を積み重ねているところである。



▲総合研究所

▶
研修室
録音・編集室



名桜大学総合研究所の主な研究実績

年 度	研究テーマ
1996 平成8年度	特別研究（98年度まで3年計画） やんばる地域の産業活性化、情報化、および文化の振興に関する総合研究 一般研究 1、大学における言語研究、言語教育研究推進のための準備的研究 2、マルチメディアで作成したアイコンがユーザーに与える心理的影響の分析 3、タイ語、インドネシア語中級学習者用総合的教材研究開発のための基礎調査および資料収集 4、被支配層の葛藤解決の構造に関する一考察—民衆の視点から—
1997 平成9年度	一般研究 1、オニヒトデのサンゴ攻撃戦略の解明 2、ヤンバル・イメージの研究—地域リーダーを対象として— 3、名護十字路市街地活性化と同規模市街地の先進地の比較 4、国頭村奥区の「地域資料」に関する調査研究
1998 平成10年度	一般研究 1、砂浜の生物相とその環境的機能 2、沖縄在の外国人の沖縄（人）に対するイメージと国際交流に対する意見の分析 3、名桜大学における言語学習者のための自己効力促進カリキュラムの開発 4、地域社会における高度情報技術による販売技法の研究 5、マルチメディア情報の分かりやすさに関する認知科学的実証実験
1999 平成11年度	特別研究（2000年度まで2年計画） 21世紀の山原の課題と振興策

年 度	研究テーマ
	1、山原における地域資源の発見的評価と活用に関する調査研究 2、沖縄北部地域におけるホテル産業の現状と課題 3、山原の一般市民、児童によるマルチメディアの利用実験 4、G8サミットの名護市開催に至った原因とサミット以後の予測 5、山原における多文化主義の同能性（以下2000年度から） 6、サミット研究2（名護市および北部地域のサミット後の政治、経済、社会現象の分析） 一般研究 1、入院経験による価値観・コントロール認知の変容に関する研究 2、沖縄北部地域におけるホスピタリティ産業の現状と課題 3、データマイニングによる消費者購買動向の分析 4、名桜大学附属図書館所蔵「湧川文庫」資料の整理と情報化 5、インドネシア語・フランス語における視聴覚教材の制作
2000 平成12年度	一般研究 1、動画静止画処理技術を用いた物体認識とセキュリティーシステムへの応用 2、中国と日本の庭園様式の比較研究：北京と京都の庭園の発生と起源 3、沖縄南北軌道設置の可能性についての研究 4、ポルトガル語の視聴覚教材の作成 5、インターネットを利用した緊急福祉連絡網および福祉情報サービス提供システムの研究 6、マルチメディアとネットワークを利用したデジタル教育コンテンツの制作 7、データマイニングによる消費者購買動向の分析 8、Making Southeast Asia studies accessible in the ESL classroom

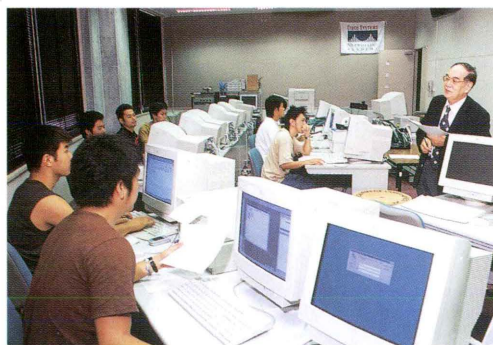
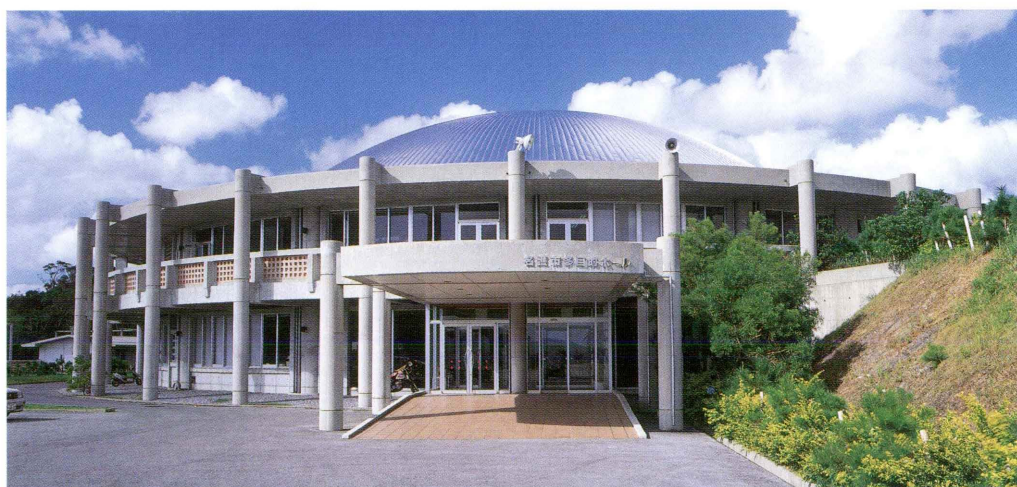
年 度	研究テーマ
	:Developing,Piloting and Implementing Pedagogy and Instructional Materials for Japanese University Students 9、水資源問題と水資源の活用 10、名桜大学附属図書館所蔵「湧川文庫」資料の整理と情報化に関する調査研究 11、ホスピタリティー組織における知識システムに関する研究 宿泊産業の従業員における組織同化を中心としての研究 12、入院経験による価値観・コントロール認知の変容に関する研究
2001 平成13年度以降	1、入院経験による価値観・統制感認知の変容に関する研究 2、動画・静止画処理技術を用いた物体認識とセキュリティシステムへの応用 3、南北鉄軌道設置の可能性についての研究 4、沖縄北部地域におけるホテル産業の現状と課題 5、水源地域振興のための水源地・水に関する意識調査 6、インターネットによる地域福祉情報サービスの提供 福祉情報サービスセンターの構築と利用者によるサービスの選択 7、G8サミットと名護市民一サミットの受け入れ方と生かし方の分析 8、ホスピタリティー組織における知識システムに関する一考察—宿泊産業の従業員における知識変換を事例として 9、分散オブジェクト技術を用いた学習支援システム 10、映画の詩学『タイタニック』のレトリック分析—韻としての映像 11、移入動物に関する研究—名護市におけるマングースの分布 12、ポルトガル語の視聴覚教材の作成について

3 多目的ホール

キャンパスの中で一際目立つ銀色のドーム型の建物。それは1999（平成11）年、名護市の中央拠点都市指定に基づく補助金を財源に完成した鉄筋3階建ての多目的施設で、メインとなる大ホールは451人の収納が可能。講義、講演会、会議、各種イベントなど学内行事はもとより一般のイベント等にも広く開放している。

大ホールのほかには、双方向衛星通信装置をはじめ、視聴覚機器やパソコン等を備えたマルチメディア講義室、マルチメディア編集室、会議室、交流研修室があり、講義やミーティング、就職の際の企業説明会等に利用されている。

また、講義棟側に面して野外ステージも設けられており、1000人規模のコンサートやイベントなどに利用されている。



マルチメディア講義室



大ホール

4 体育館

体育館には、アリーナはもとよりステージ、トレーニング室、会議室、男女のシャワー室や障害者用トイレなどが完備されている。



5 サークル棟

右側の建物は1階、2階あわせて14のサークル室があり、左側平屋には32室ある。それぞれ独自性を生かした部室として活用されている。

6 福利厚生棟

学内食堂

学生や教職員の福利厚生施設。昼食時には大勢の利用客で活気にあふれている。



座席数は458席で、全学生の約3分の1を収容できる。一般客も利用している。

営業時間は午前9時から午後6時まで。メニューは値段も300円から450円と手頃な価格で、沖縄そば、タコライス、日替り定食など各種定食をはじめ弁当も販売されている。

食事の利用以外にも、授業の合間の休憩や学生同士の語らいの場として利用されている。食堂入り口のテラスは、さわやかな風が吹く快適なコミュニケーション空間となっている。

ATM

学内食堂入り口左側にはATMが設置されている。琉球銀行と日本郵政公社の現金自動預払が可能。琉球銀行は午前9時から午後5時、日本郵政公社は午前9時から午後6時まで利用できる。



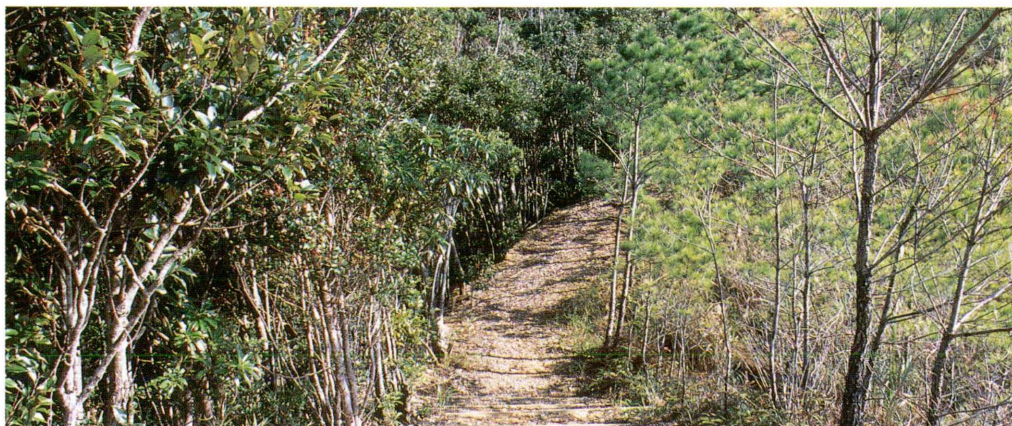
売店

学内食堂と並ぶ重要な福利厚生施設で、午前9時から午後6時まで営業している。陳列商品は講義で使用する教科書及び参考書、その他書籍、雑誌、文具、日用雑貨のほかカップ麺、スナック菓子等を販売している。



遊歩道

山腹の起伏に沿って全長800mの遊歩道が整備されている。大学構内も含めて名護市街が一望できる。勉強の合間の息抜きや体育系サークルの練習にも利用されている。



7 留学生センター・借り上寮

大学構内には、主に外国人留学生の居住スペースとして留学生センターが建設されている。部屋数は95室。留学生以外の日本人にも開放され、入居している。

部屋は全室個室で、バス、トイレ、台所、冷蔵庫、食器棚、机、椅子、本棚、ベッド、クーラーなどを完備、入居と同時に通常の生活ができるように考慮されている。また、既婚の留学生のためには家族向けの部屋も用意している。

留学生からは「全室個室で家具付き、設備もそろっていて、寮費も安い」などと好評。施設内で留学生同士の交流もあり、楽しい学生生活を送っている。

日本人向けには構内とは別に、市街地に「名桜マンションA棟、B棟」「サンシャイン名桜」「カリンシャ名桜」「カーサ名桜」の5棟の借り上寮がある。部屋の総数は258室。

名桜マンションは宮里の名護バスターミナル近くにあり、102室。サンシャイン名桜（55室）は東江のマクドナルド近く。カリンシャ名桜は宮里のマックスバリュに近く、30室。名護十字路付近にあるカーサ名桜は71室が設けられている。

部屋のつくりは学生向けワンルーム（約21m²）となっており、ユニットバス、クーラー、駐車場付き（カーサ名桜は駐車場別契約）。ほかに、名護十字路近くの「山内マンション」（16室）も借り上げマンション。

家賃が一般のアパートより割安に設定しており、名護市街地の各種商業施設にも近い便利な立地で、学生たちの評判も良い。



留学生センター



名桜マンションB棟

8 名桜大学の協力団体

学校法人名護総合学園名桜大学協力会

大学支援を全面に

地域に根ざした大学を目指す名桜大学は開学以来、地域と共に歩んできた。大学、学生、地域との連携を計るため、教育事業の支援を目的に2001（平成13）年8月29日に設立されたのが「学校法人名護総合学園名桜大学協力会」である。

地域住民が、大学を活用することにより人材の育成と地域の活性化を図るために、

①学生支援、②大学支援、③地域貢献などを活動の柱にしている。

学生支援事業として、課外活動やアルバイトの斡旋、就職活動、名護市商工会とタイアップしての就職運動をサポート、留学生の受け入れ、学割店の指定などがある。中南米や東南アジアからの留学生に対しては地域住民との交流や各地元でのホームステイ、イベントを通して、沖縄の歴史、文化、風俗などを学ばせる。

また大学支援事業としては、学生募集、大学キャンパス内の緑化活動が主な事業である。特に、北部地区からの名桜大への志願者が少ないため、会員の子弟に対し積極的に名桜大への進学を働きかける。

地域貢献事業は、大学で行われる公開講座や大学施設の利用案内について広報活動を行っている。

その他に学生や教職員が気軽に地域ボランティア活動へ参加できるようサポートする。なお、協力会の会費は、1口年額 1000円。

名桜大学同窓会

同窓会の更なる発展を

名桜大学同窓会は、2002（平成14）年1月に結成された。初代会長には第1期生の仲里幸一郎さんが選出された。同窓会は、卒業生が相互交流の機会を計り、母校の情報を共有すると共に、母校との緊密な連携をとり、双方の発展に寄与することが目的である。主な事業としては、会報の発行や会員名簿の作成、同窓会と在学生の交流、

同窓会ホームページの運営などが上げられる。また、在學生を、多方面から支援し、母校の教育研究活動の充実、及び母校から優秀な人材の輩出にも貢献している。1998年の第1期生から2004(平成16)年現在までに2400人が卒業した。しかし、同窓会会員は、わずか81人と少なく、活動に支障をきたしているのが現状である。

同窓会の大きな事業として、在學生の支援にも力を入れている。会員には、卒業生だけでなく、在學生、教職員も加入できる。卒業生の就職先は県庁、市町村、マスコミ、観光産業、さらに大学の講師、中南米領事館や南米の県人会組織など多岐にわたる。開学10年にして、それぞれが県内外はもとより、国際舞台でも活躍している。同窓会メンバーは、まだ若いがあと5年、10年もすると管理職になる。そうなれば同窓会は人材発掘と就職情報の重要拠点となる。そのため今以上に多くの在學生や全教職員の参加を希望し、同窓会と大学の連携を密にする必要がある。

■ 名桜大学後援会

大学と家庭の連絡網密に

本学で学ぶ学生の父母が中心になって結成したのが後援会であり、名桜大学後援会(荻堂盛秀会長)は開学3年後の1997(平成9)年10月に結成された。本会は学生の家庭と連携を密にし、教育事業および学生の福利厚生事業を援助するするとともに、会員相互の親睦を図るのが目的である。

主な事業は大学と家庭との連絡をサポートすることです。学生の近況報告など大学の意向も汲みながら、学生の家庭に連絡している。特に県外や海外など遠隔地から来ている学生の場合は、家族や本人からも喜ばれている。また、学生の課外活動の援助として、例えば家庭教師、商店やスーパーでのアルバイトの紹介などを行っている。そのほか、就職活動、教育事業に関する援助。大学の施設・設備・備品の整備など寄付金募集や基金造成でも援助している。

後援会は、名桜大学学生の父母または保証人を正会員とし、特別会員は、本学の教職員。また、賛助会員は、後援会の事業に賛同し参加して下さる方ならどなたでも受けつけている。なお会費は、正会員、年額1万円、特別会員と賛助会員、年額5千円となっている。

第4章

国際交流協定・単位互換協定大学紹介

本学は、国内外、特に本学が教育・研究の対象としている地域の諸大学と交流協定を締結し、教育や研究の相互交流を積極的に行っている。そして、単位の互換、地域・文化実習の協力体制を整えている。

国際交流協定大学（12カ国、15大学）への留学には、協定大学への授業料の免除、また、単位互換協定大学とは国内留学（県内4、県外8大学）の機会があるなど、本学に在学しながらさまざまな留学経験のチャンスが用意されている。

英語教職課程の学生には、米国のジョージ・フォックス大学で8カ月間の留学研修の制度がある。また、海外の協定大学から短期または長期で本学に留学する外国人学生のためには、初級から上級レベルのさまざまな日本語コースが用意されている。

国際交流協定大学

大学名	国名	協定日
ロンドリーナ州立総合大学	ブラジル	1994年5月25日
産業社会科学大学	アルゼンチン	1994年9月29日
ガブリエル・レネ・モレノ国立自治大学	ボリビア	1994年10月4日
パシフィック大学	ペルー	1994年10月7日
国立大学ホーチミン市校	ベトナム	1995年12月12日
チェンマイ大学	タイ	1995年12月14日
マラヤ大学人文・社会科学部	マレーシア	1996年2月1日
ロングアイランド大学	アメリカ	1997年7月1日
セントラル・ランカシア大学	イギリス	1998年3月13日
マニラ大学	フィリピン	1998年12月5日
耽羅大学	韓国	2001年2月20日
ジョージ・フォックス大学	アメリカ	2001年5月25日
ハサヌディン大学	インドネシア	2002年11月1日
メーファールアング大学	タイ	2004年2月2日
ゲラム大学	アメリカ	2004年3月29日

外国人留学生在籍状況

国名	人数
中国	33人
韓国	11人
ベトナム	4人
モンゴル	3人
ペルー	3人
インドネシア	2人
台湾	1人
ブラジル	1人
アメリカ	1人
ケニア	1人
合計	60人

H16年3月現在

名桜大学の創立10周年 にあたって

放送大学長

丹 保 憲 仁

「名桜大学が着々と成長発展され、有為な人材を世に送り続けて、ここに創立10周年を迎えられたことを心からお慶び申し上げます。

名桜大学は沖縄北部の諸市町村の人々に支えられて開学し、国際化と情報化の流れの中で実践的な教育内容を充実させ、公開講座や正規の授業を社会に公開するなど地域社会の核として発展してきました。平成13年度には大学院を開設され、更なる大学の飛躍を図られました。これまで名桜大学の発展に尽力された歴代の学長、副学長並びに教職員の皆様の弛みないご努力に深甚な敬意を表します。

放送大学は、名桜大学が開学した平成6年に単位互換協定を締結していただき、現在までに170人余の学生さんが放送大学の科目を履修されました。

日本の南の先端に位置する沖縄は、他の日本の地域に先駆け、アジアに開かれた日本の窓として、以前にも増して国際性・人間性豊かな人材育成の教育の充実と発展を図ることが重要課題ではないかとかんがえます。学長先生はじめ、教職員各位におかれましては、元気いっぱい学生諸君とともに、開学10周年を新たな出発点として、将来に向かってさらに大発展されることを祈念いたします。」

開学10周年に寄せて

沖縄国際大学理事長・学長

渡久地 朝 明

名桜大学の開学10周年を心からお祝い申し上げます。

名桜大学が、桜の景観で名高い名護為又の地に呱呱の声をあげたのは、ついこの間のように思われますが、あれから10年の歳月が経っていたわけです。それを思えば感慨深いものがあり、同時にまた、この間の教職員の皆様の心労と熱情に敬意を表します。

「平和」「自由」「進歩」という開学の理念は、この間に沖縄の地にしっかりと根付き、時代に即応した名桜大学の特色ある教学は、われわれも大いに期待するところがあります。実際また、有為な卒業生2000余名は、社会の各方面で活躍されております。

この地における大学の独自の文化的状況のなかで、地域に開かれ地域の人々のための大学、国際性豊かな大学、という高く掲げられた二本柱が更に確固たるものとなり、名桜大学が今後いっそう発展されることを祈念しております。

地域の時代に花開け 名桜大学

沖縄大学学長

桜井 国俊

開学10周年を機に、名桜大学が一層の発展をされますよう、熱いエールを送ります。

名桜大学は、世界に誇るヤンバルの豊かな自然に包まれた、素晴らしい大学です。この学び舎が、北部地域の市町村とその住民に支えられて開学してから10年がたちました。これからは地域の時代です。地域が開き地域に開かれた大学として、名桜大学が、北部地域の発展とともに、さらに大きく飛躍し花開くことを祈念します。

わたしたち沖縄大学は、南部地域にあって、「地域に根ざし、地域に学び、地域と共に生きる、開かれた大学」たることを基本理念として、県都那覇市を含む南部地域と様々な連携活動を展開しています。地域に根ざす大学の発展は、地域の発展と共にあると考えるからです。名桜大学のよきライバルとして、互いに切磋琢磨し、沖縄の発展に共に貢献する中で大学の発展を図っていきたいと考えております。

開学10周年記念を祝して

沖縄キリスト教学院大学学長

神山 繁實

御大学の創立10周年を迎え、心からお慶び申し上げます。第二次世界大戦前の名護市には、第三中学校と高等女学校が共に県内外及び海外に優秀な人材を送り出してきました。上記の学校は、戦後、新制名護高校として戦後の社会を支える優秀な人材を輩出してきました。私は、戦後、旧羽地村伊佐川に引き上げ、名護高校の一時期を過ごし、名護との関係も決して薄くはありません。私がかつて過ごした少年時代の名護の町は、沖縄北部の学問の府として若い脳裏に焼き付けられていました。当時の沖縄を顧みるとき、名護は中南部よりはるかに開けた街でした。大学卒業後、たまたま、名護の友人を訪ねたところ、彼は名護に大学を造りたいと熱っぽく話していました。その友人も大学ができる前に過労で他界しましたが、名桜大学の開学は、実に多くの方々の切実な願いであった、と言えます。今後、地域に根ざした教育研究の一層の充実を図り、若者の夢を実現する大学として発展されるよう心から祈念します。

開学10周年を祝して

大阪国際学長

金子 敦 郎

開学10周年を、心よりお喜び申し上げます。沖縄という日本でもっとも国際化の進んだ地域の大学として、貴大学がこの10年、国際舞台で活躍する多くの人材を育て、送り出してきたことに深甚の敬意を表します。

本学も貴大学と同じく、「国際社会に貢献する人材の育成」を基本理念に掲げて18年前に開学しました。貴大学と同じように成長期の若い大学です。両大学の所在地、名護市と枚方市が姉妹都市として結ばれていることがヒントとなって、私たちは平成12年、国内留学協定を締結しました。これまでに双方から計7人の学生の交換留学が実現しました。彼らは素晴らしい経験を積んでくれたと確信します。

今、私たちは「大学危機」の中で改革に取り組んでいます。両大学は、社会に開かれ、社会に貢献する大学を目指すという目標を共有しています。本学にとって、貴大学はこの上ない心強いパートナーです。貴大学のますますのご発展を祈るとともに、協力関係をさらに広げ、深めていければ有難いと考えています

名桜大学開学10周年に 寄せて

文教大学学長

石 田 恒 好

開学10周年おめでとうございます。単位互換協定校の名桜大学が10周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げますとともに、これを契機といたしまして一層の交流が進むよう望んでおります。

この10年間、開学の理念、「平和」「自由」「進歩」を具体化すべく、教職員のみなさまが一致協力されて、環境を整え、教育に力を傾注されて、名桜大学の基礎を築かれました。

教える者と教えられる者との心の通う大学という温かい校風が培われており、また、地域に貢献し、開かれた大学を心掛けられて、親しまれ、名護城跡の桜とともに、地域の人々が誇りに思う大学に発展させられました。

10周年を礎として、益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。

ますますのご発展を

文京学院大学長

島田 燐子

名桜大学の開学10周年まことにおめでとうございます。一口に10年と申してもここまでこられるまでの関係者のご苦勞を拝察いたしますとともに内容面の充実と驚異的なご発展を心からお喜び申し上げます。

ご縁あって創設もない頃に寄せていただき、その後平成14年11月には大学間で単位互換協定を結ばせていただきました。昨年平成15年3月には東江平之学長から安田晃次学長への交代に際しまして御礼とご挨拶におうかがいしたところ、キャンパスはしつとりと落ち着き、先生方と学生のみなさんの熱い活動が展開されていて感動いたしました。開学時に感じた日本のどの大学とも違う素晴らしい大学になるという私の確信が現実のものとなっています。

毎回お送りいただく「名桜大学広報」にも活発なキャンパスライフがぎっしりで何よりも学生さんの顔が見えます。21世紀の社会で大いに活躍する人が育っていますね。これからも困難を乗り越えご発展されますよう祈念いたしています。

開学10周年を祝して

横浜商科大学学長

久保 清治

名桜大学の開学十周年、並びに記念誌「名桜大学10年史」刊行を、心よりお祝い申し上げます。

北部12市町村が資金を提供して創設された、日本でもユニークな公設民営の名桜大学は、教育・研究の面で日本人だけではなく広く東アジアの人々にも大きな影響を与える地域に位置していることから更なる期待が持たれます。ここ10年間、教育の中心に「グローバル化や情報化に対応できる人材の養成」を掲げられ沖縄から世界に向け情報発信できる人材の養成に取り組まれてこられました。

このような大きな目的・目標をもった名桜大学と横浜商科大学は、昨年、「単位互換協定」を結び、互いに単位を認めることになりました。これを機会に両校が互いに影響しあって更なる発展を願うものです。

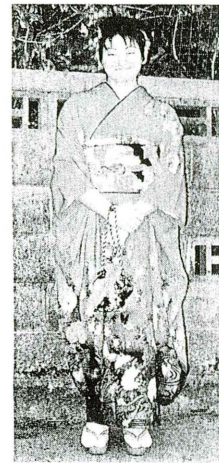
この10周年を大きな飛躍台とされ、貴大学の一層の飛翔を期待し、関係者の益々のご健勝とご多幸を衷心よりお祈り申し上げ、お祝いの言葉にさせていただきます。

国内協定大学

大学名	県名	協定日
放送大学	千葉県	1994年3月7日
札幌国際大学	北海道	1995年3月31日
沖縄国際大学	沖縄	1995年7月15日
沖縄大学	沖縄	1995年7月15日
沖縄キリスト教学院大学	沖縄	1995年7月15日
沖縄女子短期大学	沖縄	1995年7月15日
愛媛女子短期大学	愛媛	1997年11月4日
桜美林大学	東京	1999年3月12日
大阪国際大学	大阪	2001年1月28日
文教大学湘南キャンパス	神奈川県	2001年6月15日
文京学院大学	東京	2002年11月29日
横浜商科大学	神奈川県	2003年12月25日

※「単位互換協定（国内留学）」とは、6月間もしくは1年間、名桜大学のカリキュラムと関連ある科目を協定大学において受講する制度のことをいう。

アルゼンチンから研修生 第1号



【国司 国頭村の海外移住として、アルゼンチンから山崎（さ）の「国頭村」が、国頭村を住居とする研修生の第1号として、内マリヤ・ペレグリーニ（マリヤ）を訪ねている。「日本前巻」

「アルゼンチンから」と、緊張した面持ちながらも、意気込みを語る。

研修期間、一月から三月までの約三ヶ月間、村内の学校や名桜大学、民間企業などで日本語や経済などを学ぶ。

また、アルゼンチンで琉球を習得しているという山崎さんは、琉球はもう三線などの伝統文化も学びたいと意気込みを語る。

五日には、国頭村で行われた成人式にも参加、鮮やかな振袖で身を包んで、地場交流を楽しんでいた。

2001年1月11日＝琉球新報

学生交流や共同研究へ

名桜大とロングアイランド大

姉妹校協定締結で調印式

名桜大、東江康治学長は、米国ニューヨークのロングアイランド大と姉妹校協定を結ぶ。この日は、両校の代表者が調印式を行い、協定書に調印した。調印式には、両校の代表者、関係者、記者らが参加した。調印式では、両校の代表者が、協定書の調印を行った。調印式では、両校の代表者が、協定書の調印を行った。



定を結び、この日は、両校の代表者が調印式を行い、協定書に調印した。調印式には、両校の代表者、関係者、記者らが参加した。調印式では、両校の代表者が、協定書の調印を行った。調印式では、両校の代表者が、協定書の調印を行った。

定を結び、この日は、両校の代表者が調印式を行い、協定書に調印した。調印式には、両校の代表者、関係者、記者らが参加した。調印式では、両校の代表者が、協定書の調印を行った。調印式では、両校の代表者が、協定書の調印を行った。

1997年7月25日＝琉球新報

米大学と留学生交換へ 「クリントン基金」が補助



【名桜】名桜大学（東）と、米テキサス州立大学（テキサス）が、クリントン基金（クリントン・フナギ）の補助を受け、留学生交換事業を今年中に開始する。両校は、クリントン基金の補助を受け、留学生交換事業を今年中に開始する。両校は、クリントン基金の補助を受け、留学生交換事業を今年中に開始する。

クリントン基金は、クリントン大統領の基金で、国際交流事業を支援している。両校は、この基金の補助を受け、留学生交換事業を今年中に開始する。両校は、クリントン基金の補助を受け、留学生交換事業を今年中に開始する。

2001年8月1日＝琉球新報

第5章

学生生活

／ 学生の生活

留学センターでの生活

キム ミンヘ
金 玫恵



留学生で、韓国では耽羅（タンナ）大学のホテル経営学科で勉強していました。名桜大学の留学生センターは、全室個室で家具付き、設備も揃っていて、寮費も安く、韓国に比べると断然いいですね。快適に暮らしています。また、センター内には同じ韓国からの留学生や他の留学生が多くいるので、お互いの部屋に呼んだり、呼ばれたりしながら楽しくやっています。仕送りはなく、ジャスコでバイトをしながら生活費などはまかなっています。勉強もきっちりやっていますよ。将来は、東京の大学院に進学したいと思っています。



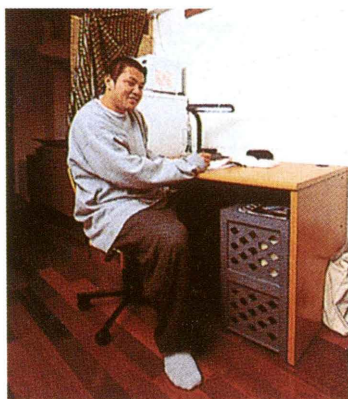
医務室



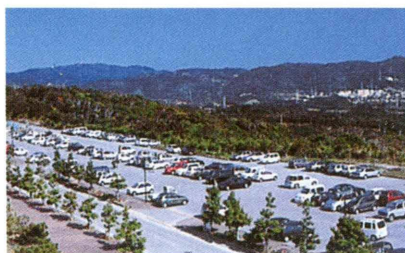
学生相談室

名桜借り上げマンション

深澤 友博



家賃が一般アパートより1万円ほど安く、部屋も広め、壁も厚い。ライトはこだわって手作りにしました。観葉植物はサークル室から枯れかけていたものをもらいました。名桜大学指定のアパートなので、名桜大生しか住んでおらず、友だちも増えやすい。柔道部に所属していて、そのメンバーの交流の場になってますね。周辺には本屋やレンタルビデオ店、スーパーや名護市街にも近く環境のよさも利点。バイト代の収入で全てをまかなうので、自炊は必須です。



無料送迎バスを、講議を行う日に1日8便運行。

また、自家用車で通学する学生のために580台余りの駐車場を構内に確保。

2 クラブ・サークル活動

■ エンジョイキャンパスライフ

大学生活になくてはならないものといえば、勉強にバイト、そしてサークル活動である。楽しいキャンパスライフを長続きさせたいなら、旺盛な好奇心とやる気が大切だ。それを大いに刺激してくれるのが、サークルの仲間たち。活動を通して友達やライバル、社会とのつながりが、あなたをワクワクドキドキさせてくれるはずです。

スポーツ、文化、音楽、言語、福祉、経済などいろんなジャンルのサークルがある。あなたも、自分に合ったサークルにトライし大学生活を謳歌しよう。これが社会へ飛び立つ時に大きなメリットになることは確実である。



名桜大学生涯学習まちづくり 研究会

NPO法人全国生涯学習まちづくり協会に属する研究会である。名桜大学の大学院生、学生、行政、企業などの社会人も含む会員で構成。「やんばる検地」と称して、沖縄北部地区、奄美群島の地域の人的資源開発調査を行っている。単なる研究会でなく、個々人の進路に生かされる「即実践力」として、学生のうちに身に付けていく学習プロジェクトである。2004年度は、「やんばる検地」の実施、6月に「韓国・大田大学生涯学習祭」に参画、9月に「第3回韓国生涯学習祭・斉州島」に参加、10月には「第16回全国生涯学習フェスティバル・愛媛」に参加するなど海外、国内の関係者と交流も深めている。



舞華桜太鼓（和太鼓サークル）

2000年に結成したサークル。男女関係なく大小の太鼓を扱う。自分たちで節を組んで曲に組み入れたり、沖縄民謡独特のリズムを取り入れたり、楽しみながら練習を行っている。主に名護市内で開催されるビール祭りや桜祭りに参加し、2003年には、ボランティアで養護学校を訪問した。太鼓を通して、いろんな人と出会い、たくさんの思い出をつくることができた。一緒に大学生活を盛り上げていこう。

バドミントン

バドミントン部は地域住民の方々と共に活動を行っている。このため練習は和気あいあいとしていて、とてもよい雰囲気の中で行っている。かといって、ただの仲良しクラブではなく、多くの大会にも出場し、2003年には、北部地区ダブルス大会で準優勝、混合ダブルスで優勝、県内大学対抗の大会ではダブルスで準優勝、シングルで



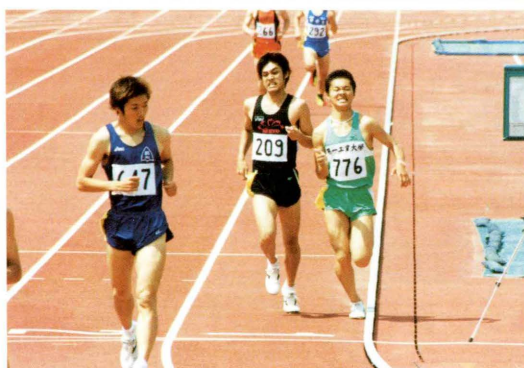
ベスト4入りの好成績を上げた。このようにバドミントン部は経験者から初心者まで楽しめる部活動である。

ムエタイ

ムエタイ部は心身ともに磨く部である。練習はシャドー、ミット打ち、筋トレ、首相撲など初歩的なことしかやっていない。部員数が少なく全員4年生で、これからはサンドバッグも入る予定なので、やる気のある新入部員に入ってもらい、部員数が増え、技術が上達していけばスパーリングなども行って、部活動を盛り上げていきたい。

総合運動部

総合運動部は、その名の通り、総合的に何でもスポーツをするサークルである。これといって、こだわってはいない。冬は屋内、夏は野外でいろいろと、みんなで楽しく汗を流すことをモットーにしている。最近、学校からバスケットボールとサッ



カーボールを支給してもらい、今まで以上にみんなに、やる気が出たようだ。せっかくの大学生活なので、みんなと楽しくやっていきたいという方でも、ダイエットでも、理由は問わないので、興味のある方は、ぜひ入部して一緒に活動しよう。

女子バレーボール部

女子バレーボール部は週に2回、学内の体育館で練習をしている。部員同士はとても仲がよく、練習の後は、そのまま夕飯を食べに行ったりして、交友をより深めている。ほかのサークルとも交流をしており、友達をたくさんつくりたい人、大学生活を謳歌したい人は、1度、遊びに来てほしい。

総合格闘技サークル

総合格闘技サークルは、今まさに盛りあがっている総合格闘技を中心に活動をしている。その中で、身体だけではなく精神も鍛える。そして練習を重ねて、県内で開か



れている総合格闘技の大会にも参加している。昨今は非常にぶっそうな世の中になってきているので、護身術を習う方でも楽しく参加できる。激しい打撃だけでなく、芸術的な関節技もあるので、興味のある方は、ぜひ参加してみてはいかがでしょうか。

硬式野球部

硬式野球部は、創部9年間で九州地区大会で準優勝3回、3位1回と九州地区の強豪大学と互角に戦える力を付けてきた。昨年、一昨年、今年と3年連続で九州地区代表の快挙を成し遂げた。地区大会優勝、全国大会出場を目標に野球の技術向上、野球の楽しさ、野球が好きだという心を養いながら、日々の練習に打ち込んでいる。また、ひとたび野球を離れると笑いの絶えない面々である。練習では自分に厳しく、試合では楽しく勝つを目標に、大学創立初の優勝を目指す。



男子ソフトボール部

男子ソフトボール部は、月、火、土曜日と週3回に分けて練習をしている。平日は夕方6時から9時までナイター設備を使用し、休日は昼1時から5時まで練習を行っている。練習内容は主にアップから始め、キャッチボール、トスバッティング、ノックをして、バッティングマシンを使い、バッティング練習をしている。先輩、後輩関係なくソフトボールというスポーツをひとり、ひとり楽しみながら、一生懸命練習をして、大学リーグやクラブ選手権、九州大会に出場している。

名桜大自転車競技部

自転車競技部は、2003年の全日本アマチュア選手権のケイリンで5位に入賞し、全日本選手権への出場を果たした。また、県民大会では、ロードレースで1位、ポイントレースとケイリンでは1位、2位を独占するなど、4種目中、3種目で優勝し、



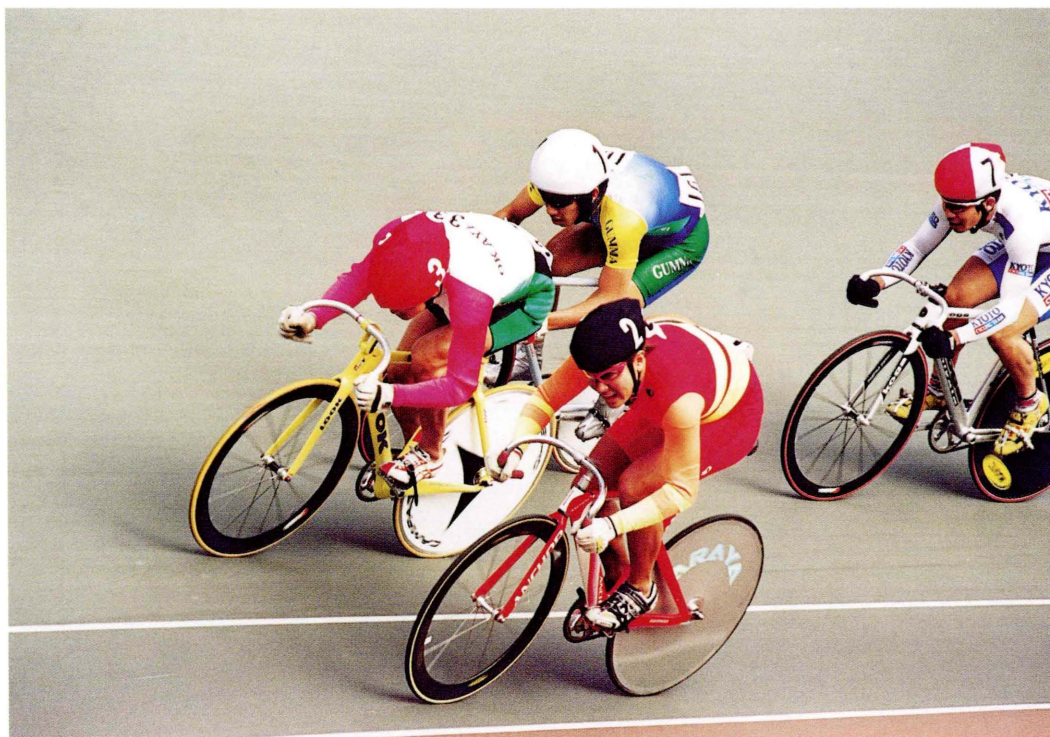
県内ではトップレベルにある。もちろん全国的に見ても決して引けを取らないレベル。今年の目標は、インカレなどの大学大会に初出場し、初優勝することだ。

ゴルフ

ゴルフ部は、部員数も5人と少ないが、県学生ゴルフ選手権大会の団体の部で優勝、個人の部でも1～3位を独占した。また、大会運営の手伝いや、プロゴルファーのキャディーなどのボランティアもやっている。私たちゴルフサークルは、ゴルフ経験者、未経験者でも男女問わず募集しているが、中途半端な気持ちでの入部はお断りする。

ハンドボール部

男子ハンドボールは、2003年から出場している「九州ハンドボールリーグ」の4部リーグで優勝、3部でも優勝して、2部リーグに昇格し、準優勝した。1部昇格ま



であと一步のところまで登り詰めた。次のリーグ戦では、念願の1部昇格を目指して、日々、練習に励んでいる。インカレ出場も夢ではない。名桜大学に入学して、共に「勝利」の喜びを分かち合いたい。皆さんの入部を心から歓迎する。

英語ディベート

ディベートとは「討論」という意味である。つまり私たちの活動は、英語で討論することだ。取り上げた議題は新聞やニュースなどで意見が賛否両論に分かれていて、答えの出ていない、controversial issue「議論の余地のある問題」である。英語ディベートは単語力、文法、スピーキング、ヒアリングのすべてがひとまとめになっているので、効果的に英語を学ぶ最適の方法である。メンバーから英検準一級取得者も出た。

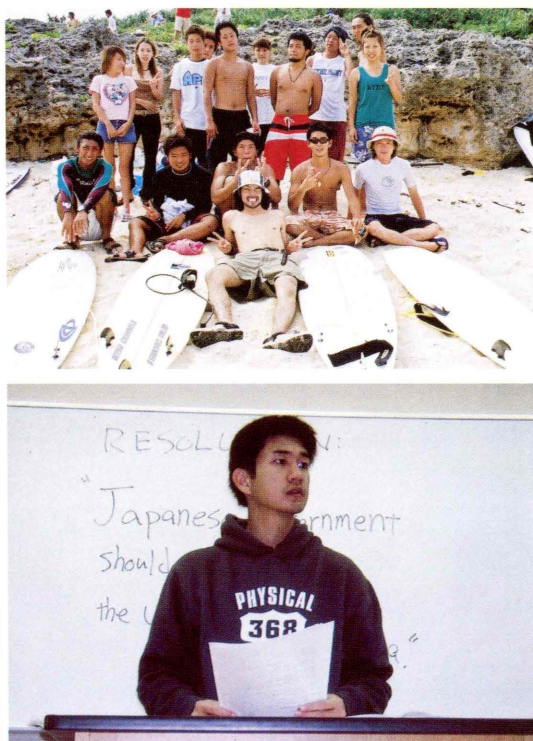


Nouvelle Vague

ヌーベルヴァグは、自主映画制作サークルとして4年前に発足した。それ以来、アクション、時代劇、ラブストーリーなど、幅広いジャンルの映画を作り続けている。普段は週に数回、火曜日の5時限後にサークル室に集合し、映画や撮影に関する技術について意見交換を行い、先輩、後輩は関係なくみんなでアイデアを出し合い、とても和やかな雰囲気で行っている。これからも楽しく映画をたくさん制作していく。

International E.C.C.English Conversation Club

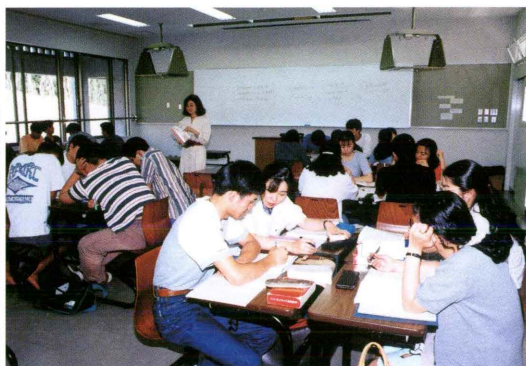
Meio University's oldest club,ECC, has truly become International ECC this year with students from around Okinawa, Japan and the world and students who have studied & lived overseas or plan to do so ! Our



advisor is Prof. Caroline C. Latham. We have game nights, Movies, chats with international guests, special dinners, beach parties, camping, etc. and we do volunteer interpreting in local schools, special events, etc. We also coordinate the annual Yanbaru English Speech Contest. We keep active Have fun! Join Us! Welcome! めんそーれ!

ポルトガル語研究会

ポルトガル語研究会は、本学の文化クラブの中では2番目に古い部として承認されたサークルで、ブラジル・ポルトガル語の文法やブラジル地域の研究を中心に週に2回ほど昼食時間を中心に活動している。主な活動は、ブラジル料理を作ったり、ボサノバの演奏をしたりしている。年間行事で特筆すべき活動は、開学以来行っているポルトガル語暗唱・弁論大会である。



大正琴

名桜大学の大正琴サークルは、誕生して1年になる。昨年、12月下旬に沖縄県留学生親善交流パーティーで、名桜大学の留学生代表として出演し、県内から集まった留学生の皆さんと共に祝いすることができた。名桜大学学園祭の時にも、私たちは大正琴を通して、地域の方々とコミュニケーションを持ちながら学内外との交流や名桜大学の発展に貢献した。そして異なった文化を持ったメンバーたちがお互いを理解し尊重し合うことが、かけがえのない自分を見つけ出すところに大きな意義を感じる。異文化を学びながら、大正琴を弾くことによって、日本文化に触れ、メンバー同士が親睦を深め、サークルの目的を果たしてきた。今後も地域社会における文化活動に加わり、人の知、心の輪、学習の輪が一層、広がることを願うとともに、一人ひとりが明るく、楽しく、元気に活躍できるようなサークルを目指す。





その他のサークル活動

- Blue Crash (サーフィン)
- スペイン語サークル
- 女子バスケットボール部
- 会計研究会
- テニス部
- 琉舞サークル「結」
- 女子ハンドボールサークル
- 茶道部
- 男子バレーボール部
- 旅行部
- 名桜エイサー
- キャッパ (キャンプ活動)
- フットサルサークル
- 情報技術研究会
- ラグビー部
- 写真部
- ダイビング部
- Hip Hopサークル「MAJESTIC」
- 男子バスケットボール部
- ボランティアサークル
- サッカー部
- アカペラサークル
- 柔道部
- ミュージックサークル
- 陸上競技部
- 美術部
- 軟式野球部
- パッチワークサークル
- 女子ソフトボール部





4 海外留学・交換留学

英語教員を目指し米大留学

本学には、海外12カ国の15大学と国際交流協定を締結し、積極的な国際交流事業を展開、その実践的な効果は高く、学生からの評判もいい。毎年、海外協定大学から短期特別聴講生を受け入れている。本学からは書類審査、面接試験をパスした交換学生を派遣している。

2002（平成14）年度からは、「英語教員養成プログラム」を推進、交流協定を締結しているジョージ・フォックス大学（アメリカ・オレゴン州）に毎年、20人余の学生を派遣している。このジョージフォックス大学の8カ月間に渡るプログラムに参加し、地元大学生との交流や授業を通じて異文化を学んだ国際文化学科の学生の体験をまとめた。

英語力アップと異文化体験

ジョージ・フォックス大学（GFU）校内には、図書館、コンピュータ室はもちろん、ピアノレッスン室、カフェテリア、ブックストア、郵便局などがあり、いつでも使うことができる。校舎周辺には、多くの寮があり、ほとんどの学生が寮生活だ。私たち留学生が英語生活に多く触れるようにと、ネイティブスピーカーのルームメートと一緒に組まれた。

GFUのESL（English Second language）クラスは、A、B、Cの3つに分かれ、英語への理解力が、ある程度つけば、上級のB、Cへと上がっていく仕組みである。通常、Cクラスが修了するとESLの修了となり、普通の学生らの授業を受けることも可能である。授業内容は、リーディング、ライティング、リスニングの3つの授業を行う。授業では、英文小説を読み、読解力をつけ、単語の持つルーツを学習する。辞書を使わなくても単語の意味を推測することができる力を身につけていく。また、文の書き方や文法の学習では、アカデミックなエッセイを書くテクニックをしっかり習得する。またネイティブスピーカーの発音を、聞き取る練習、自分で発音する練習を

何回も繰り返し、スピーチの練習を同時に行う。毎日というほど宿題が出される。宿題が予習で、授業はそれを理解していることを前提に進められる。宿題の大半が成績を決めるだけに、ちゃんとこなさないと成績に響くわけである。英会話の授業は、1対1で行われ、チューターによっては、家に招待して、友人のように普段の会話を実施し、指導する。留学して感じたことは、日本の受身的な授業と違い、学生一人ひとりが自分の考えをしっかりと持ち意欲的に授業に参加していること、また教師と学生のコミュニケーションがうまく取れているのも印象的だった。

■ 沖縄の文化や三線を披露

留学期間中に、GFUの学生の家でホームステイをして異文化に触れることも重要な学習である。11月には、Cultural Weekという行事がある。私たち留学生が主体となって相互の文化を学ぶことである。名桜生は、沖縄のいろいろな写真や織物、そして資料などを展示、また、菓子類や茶の試食などさせ、三線を引き、沖縄を紹介した。これにGFUの教師や学生らは珍しがり、興味を示し、好評だった。ほかの留学生の文化にも触れ、いい勉強になった。本場のハロウィンやクリスマスを存分に体験した。ホームステイでも校内でもコミュニケーションの大切さを実感した。相互の文化を知るにも、教えるにも会話が必要であり、スピーキングやリスニングの勉強になった。まさに一石二鳥であった。

■ ヒューストン大学に第1期派遣学生

本学は2001（平成13）年から3年間、観光産業学科の学生、教員をヒューストン大学（アメリカ・テキサス州）に派遣、国際コンベンションについての講義、さらに国際コンベンション・カンファランスコース開発の協力体制を敷く特殊なプログラムである。この派遣は、2000年の沖縄サミットの時、当時のクリントン米大統領が名桜大学を指名し、沖縄とアメリカの大学間交流を提案したことで実現した。観光産業で有名なヒューストン大学に派遣先が決まり、派遣が開始された。「クリントン基金」を活用し、3年間で8人が研修を終えた。その体験などをまとめた。

コンベンションコース設定へ

ヒューストン大学訪問での教員の目的は、ヒルトンカレッジと共同でコースを作成することと、オンラインコースについて研究することや、国際コンベンションコースなどの開発だった。沖縄県も国際コンベンションを重要視しており、世界各国の各界の国際会議を誘致する活動を推進している。これに伴い、コンベンションビジネスなどの新たな産業に応える人材を育成するコースが必要で、観光産業学科では、今後もヒューストン大学との提携を持続していく方向で検討している。また、本学とヒューストン大学の教授による共同研究を推進し、同大学から学生を積極的に受け入れる交換留学制度も作っていく方針だ。

校内にビッグなホテルも

ヒューストン大学といえば、ホテルマネジメントの有名な大学で、校内には、ヒルトンホテルがあり、そこではインターンシップの形で、多くのヒューストン大学生が働いていた。実技と学科が同時に学べ、ホテル内にある講義室で、授業が受けられるというユニークな大学である。

本学から派遣された学生は、LCC (language and culture center) という施設で授業を受けた。英語力の養成と相互の文化の違いについて学んだ。沖縄の人は人前で話すことが苦手だが、学期の後半頃になると、緊張感もなく、クラスの中に溶け込むことができた。一人ひとりに発言させる時間などを設けてくれたおかげで、伸び伸びと発言できるようになった。

大学内の寮にはダラス出身の学生と同居、ルームメイトがネイティブで親切だったので、互いの文化について話し合ったり、楽しく過ごせた。寮内のジムで体のリズムを整え、リフレッシュもできた。大きな目標であった英語力はTOEFLの結果、スピーキング、リスニングなどは少なからずアップしたと思う。異文化の中での生活は、不満も理解しがたいこともあった。また学んだことも多く、今までより広い視野であらゆる事に対応することができるようになった。派遣学生全員が出発前より、一段とたくましくなったのは確かである。

第6章

地域貢献と公開講座

1 公開講座

本学は、教員スタッフの持つ知的・情動的蓄積を名護、北部地域住民に提供し、やんばるの文化・産業の進展に寄与することを目的に、開学初年度の1944（平成6）年度から「公開講座」を実施している。これまで、社会人や高校生を対象にパソコン講座をはじめ語学、やんばるをテーマとした講座など広範囲にわたって提供してきた。

公開講座は、本学を会場とする主講座と、本学から地域に講師を派遣する移動講座を実施している。受講者にとって身近なゲームなどをテーマにコンピュータや情報技術に関する知識を深めたり、言語や近辺の集落をつぶさに調べた結果、浮かび上がった社会問題などを論じ合ったり、内容は濃密かつ多岐にわたる。また、身近な問題から国際的な問題へと視点を転ずるグローバルな感覚も備えており、参加者の好評を博している。

本学では、今後も多種多様な講座を企画し、随時広報して幅広い市民参加を促し、知の財産、の共用を図っていききたい。



パソコン講座



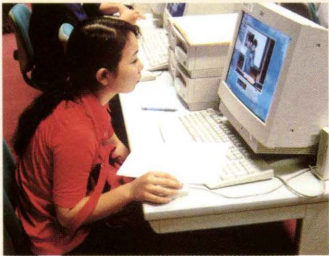
「やんばるの自然とその活用」講座

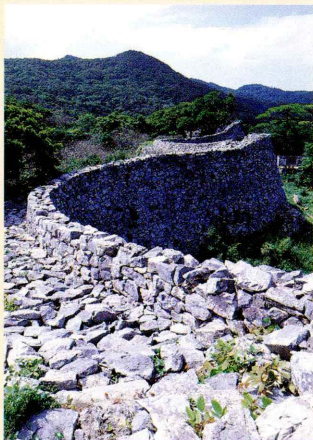
名桜大学公開講座

年	開催日	講演テーマ
1995 平成7	1月23日 ▼ 1月27日 全5回	映像社会・知識社会の到来で地域社会は どのように変わるか？ 変えるべきか！ ① ゲームに見る技術革新と芸術 ② 情報という商品の経済性について ③ マルチメディア・タイトル（ソフト）の全体像 ④ 情報過疎地における大学の役割 ⑤ アニメ世代の映像社会、その行方—エンターテインメントの 立場から
	11月27日 ▼ 12月1日 全5回	国際化時代と地域社会 ① 沖縄北部地域をめぐる国際環境 ② 地域づくりにおける国際化の視点 ③ 国際化時代の伝統文化 ④ 国際化時代における企業の経営情報管理 ⑤ 国際化時代と北部12市町村インターネット化計画
1996 平成8	1月29日 ▼ 2月2日 全5回	環太平洋の最新海外事情・1 ① タイ国—くらしの現在 ② 南米におけるスペイン文化と沖縄県系人 ③ 東南アジアの政治の現在 ④ ニューカレドニアに未知の言語をたずねて ⑤ 台湾・アミ族の100年
	3月19日	ゆんたくフォーラム『奥の地域おこしを語ろう』
	6月19日 ▼ 7月17日 全5回	沖縄の歴史と文化・1 ① 21世紀に向けた沖縄研究の課題 ② 沖縄の言語 ③ 八重山における琉球処分 ④ 沖縄の食文化 ⑤ 沖縄のグスク—最近の発掘調査から
	7月19日	伊平屋の文化 伊平屋島と世界を結ぶインターネット
1997 平成9	1月22日 ▼ 2月19日	やんばるの未来と観光 ① やんばるの未来 ② 国際観光の動向と日本・沖縄

年	開催日	講演テーマ
1997 平成9	全5回	③ 文化人類学と観光、ホスト&ゲスト ④ ホスピタリティー事業の維持と沖縄の課題 ⑤ 観光と情報
	6月25日 ▼ 7月23日 全5回	人体の働きと情報システム ① 脳とコンピュータ ② 人の言葉を認識するロボット ③ 遺伝子をもったプログラム ④ 新しいコミュニケーションと社会生活 ⑤ マルチメディアと脳
	10月30日	島の活性化と観光リゾート開発
	11月19日 ▼ 12月17日 全5回	21世紀へ伝える山原の自然—山・川・海 ① 山原とは—市民・学生の山原イメージ ② 羽地大川—戦前の山の生活誌 ③ 山原の川の現在と未来—アユをめぐる ④ 山原の山のいきものたち ⑤ 沖縄の沿岸海洋の特徴
1998 平成10 く 1998 平成11	11月25日 ▼ 1月27日 全10回	山原の水とくらし・文化を考える ① 沖縄の水物語 ② 沖縄井戸・泉とくらし ③ 沖縄の気象・気候と水 ④ やんばる水めぐり・1 ⑤ やんばるの水と川の風景 ⑥ おいしい水とは？ ⑦ 山原・沖縄の川の水の現在 ⑧ 沖縄の水行政の現在と課題 ⑨ やんばる水めぐり・2 ⑩ フォーラム：山原の水とくらし・文化を考える
	3月17日	海の話
	6月19日 ▼ 12月11日 全10回	企業に関する法律入門講座



年	開催日	講演テーマ
1998 平成11	6月16日 ▼ 7月18日 全5回	やんばるの自然資源とその活用—エコツーリズムを中心に ① 琉球の植物—やんばるの植物を中心として ② やんばるの海—浜～イノー干瀬 ③ やんばるの自然資源を活用するエコツーリズム ④ 海を楽しむ ⑤ 比地川流域を歩く
	8月7日 ▼ 12月4日	名桜山原学講座 ① 山原学のテーマを求めて—自然と生活を中心に ② 山原学のテーマを求めて—歴史・文化・生活を中心に ③ 山原学のテーマを求めて—地域おこしを中心に ④ 山原の村踊りを楽しむ—屋部を例にして ⑤ 山原の川魚の話 ⑥ 山原の山羊文化—食とオーラセー ⑦ 山原の泡盛 ⑧ 山原のエコツーリズムの課題と展開を考える ⑨ 山原の野生生物を保護する ⑩ 1950年代の沖縄・山原
2000 平成12 ～ 2001 平成13	1月22日 ▼ 2月12日 全5回	パソコン入門講座 
	6月25日	第1回高校生対象『やさしいパソコン講座』（集中講座）
	8月20日	第2回高校生対象『やさしいパソコン講座』（集中講座）
	10月18日 ▼ 11月15日 全5回	やんばるとIT（情報技術）革命 ① ITによるまちおこし ② 21世紀における「やんばる」の人材育成 ③ 図書館サービスとIT革命 ④ 即戦力となる企業人材育成 ⑤ ITによる地域福祉サービス

年	開催日	講演テーマ
2000 平成12	10月16日 ▼ 11月18日 全5回	簿記の基礎 
	12月15日	ITと村おこし
2000 平成12 く 2001 平成13	12月9日 ▼ 2月24日 全10回	第2期名桜山原学講座 ① 字誌づくりの現在とこれから ② 藍を作り、染め、織る ③ 今帰仁グスクてってい探検 ④ 徳田球一とその時代 ⑤ 羽地大川・山の生活誌を歩く ⑥ 山原の地域おこし(1) ⑦ 山原の地域おこし(2) ⑧ 源河川で廃鶏をさばいて食う ⑨ 羅府の時代—戦前米国西海岸の青春群像—宮城与得を中心に— ⑩ 明日の山原を考える 
	1月11日 ▼ 3月15日 全10回	ふらんす各駅停車——言葉と文化
	1月19日 ▼ 3月23日 10回	中国語入門講座
	4月20日	ハブ（毒蛇）対策講座

年	開催日	講演テーマ
2001 平成13	10月13日 ▼ 12月8日 全5回	社会人向けやさしい パソコン講座 
	12月6日	やさしい電子メールとインターネットの基礎講座
	11月12日 ▼ 12月19日 全7回	インドネシア文化への誘い 
	10月10日 ▼ 11月21日 全9回	山原各地の地域活性化の活動において 環境保全をどのように考えるか ① 山原の環境保全と地域活性化の現状・動向そして課題 ② 東村の環境保全と地域活性化—エコツーリズムを中心に ③ 国頭村の環境保全と地域活性化 ④ 野外講座：国頭村・大宜味村・東村をめぐる ⑤ 大宜味村の環境保全と地域活性化 ⑥ 野外講座：本部町のカルスト地域を歩く ⑦ 沖縄・山原のエコツーリズムをとりまく諸課題 ⑧ 野外講座：今帰仁・本部町・名護市 ⑨ 山原の環境保全と地域活性化の課題と解決策
2002 平成14	3月7日	与論移動公開講座
	2月26日 ▼ 3月24日 全7回	山原学講座 ① 金武町並里の区公民館と地域づくり ② 山原の自然を楽しむ ③ 山原のグスクをあるく（野外講座） ④ 東村有銘の地域づくり ⑤ 山原の津口・宿道をあるく ⑥ 今帰仁ユートピアグループの活動 ⑦ 羽地の歴史をあるく（野外講座）

年	開催日	講演テーマ
2002 平成14	7月27日 ▼ 9月7日 全6回	ICT (Information and Communication Technology) 活用講座 ① パソコン利用実習ノート1 ② パソコン利用実習パート2 ③ パソコン活用事例紹介 ④ 学校と地域が一体となってIT活用した国際交流 ⑤ JEARN102のプロジェクト紹介テレビ会議実践デモ ⑥ NPO北部地域ITまちづくり協働機構の紹介～ほか
	3月9日	やんばる学シリーズー今帰仁村乙羽岳で 春の野草を摘み食しましょう
2003 平成15	3月16日	やんばる学シリーズー大宜味村のクガニ岳を歩いてみよう
	4月24日	ハブ（毒蛇）対策講座
	10月14日 ▼ 12月16日 10回	沖縄のサンゴとサンゴ礁
		

2 高大連携

1999（平成11）年12月、中央教育審議会から出された「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」という答申をきっかけに、大学が高校生を対象とする講座を開設したり、大学の教員が高校に出向いて講義をしたりする「高大連携」の取り組みが推進されている。

本学においては、北部12市町村等の協力支援により創設された経緯から、北部地域の高校と連携し、地域の高等教育機関として先導的役割を果たす責務があると考えている。北部地区高校長会から要望を受け、本学は2004（平成16）年3月、8つの高校と調印、'04年度からこの事業を実施している。

高校と大学との教育的連続性と活性化が一層重要となっている状況があることから、双方が組織的な連携を図り、大学側は高等教育の提供を通じて地域への教育貢献を、また高校側は高等教育の活用による進路選択や学習意欲の向上を図る必要がある。

将来的には、地域の小、中高校と大学が連携した「やんばる教育コンソーシアム」を組織し、北部地域はもとより沖縄県の振興を担う多様な人材を育成するための取り組みを推進していく考えだ。

ねらいとしては、本学の正規の授業科目や高校生のための特設講座に受講希望者を受け入れ、大学の授業の進め方や学習内容を体験することによって大学への理解を深め、高校生の進路選択の参考にしてもらう。同時に、多様な学問領域について生徒

の興味を育んでいく。

連携の内容は①大学科目の受講、②公開講座の受講、③出前講座——の3つを柱とする。高校サイドの要望に応じて具体的な受講科目の調整も行っている。また、高校との教育懇親会を定期的に開催、教育活動の連携、大学のガイダンスなどを進めている。



高校生対象やさしいパソコン講座

追想

第四編





学生

名桜大学での思い出

名桜大学同窓会会長 第1期生

仲里幸一郎

名桜大学に入学した1994年から、早いもので、すでに10年の月日が流れた。よく「10年ひと昔」というが、「早いもので」という気持ちとは裏腹に、名護の街、そして大学の変わりようはひと昔どころか、ふた昔、いやそれ以上も違うように感じてしまう。入学当時は、テニスコートも野外ステージも総合研究所も、今や名桜のシンボルとなっている多目的ホールもなく、駐車場も整備されておらず、留学生寮は1階建てだったし、職員の事務所も教室を代用してのものだった。名護の街にしてみても現在のようなコンビニエンスストアや大型ショッピングセンターはほとんどない上、アパートも足りないような状態であった。さすがにアパートが足りないのは若干困ったが、大学施設や名護の街にはなんの不満もなく、新品びかぴかの大学に胸躍らせ、多くの友人が強い希望を抱いていたのを覚えている。

4年間の学生生活で特に私の心の糧となっているのが、1年時の大学祭である。学園祭実行委員を務めていた私は他の委員と共に名護を中心に北部の人たちに協力をお願いをしてまわった。その時の街のみなさんの温かい言葉は、手探りで学園祭の準備を進めている我々にとって大きな励ましであった。学園祭当日、お客様の入りは予想以上のものであった。そして学園祭の目玉であった、当時人気のバンドのコンサート。前売りチケットの売り上げ

もほぼ完売状態で、ある程度の自信はあったもののやはり不安がよぎった。「人が来なかったらどうしよう」「雨が降ったらどうしよう」と、尽きない不安。学生らしい考えなのだろうが、「赤字でもいい。みんなが楽しんでくれれば」というのもあった。様々な不安が交錯する中、開場。なんと、お客様の列は会場である学食前広場から留学生寮の前まで続いているではないか。結局当日券も完売の超満員。実行委員全員で手を取り合って喜んだ。あの時のがんばり（自分で言うのもなんだが）、地域のみなさんの支え、そして超満員の会場は、今でもつらいとき苦しいときの自分を励ましてくれる。

あれから10年。大学は施設も充実し、生涯学習センターも大学内に完成した。来年度からは新学部も設立されるということだ。この充実した環境の中で、後輩たちが何かをつかみ、そして20年後も30年後も名桜大学の卒業生として誇りをもって社会に巣立ってほしい。



野外ステージでのコンサート

なさくら大学

観光産業学科 第2期生

東江 益子

「純粹名護培養、

そう、私は、貴重な地元名護出身者として、開学間もない名桜大学に入学しました。

あっという間に過ぎた4年間は、たくさんの出会い・名桜祭・ゼミに彩られた毎日でした。

金無しヒマ有り車ナシの1～2年は、みんなもそうだと思いますが、友好拡大に全力でした。特に、2年間の英語Aクラスでは、一生のつきあいを感じさせる大切な友人たちと出会うことができました。Aクラス抜きに、私の4年間を語ることはできません。「みんなとの出会いをアリガトー！名桜!!」と叫びたいです。

そんな出会いを軸に、次は名桜祭実行委員会に活動の場は広がっていきました。

学生数も経験も少ない状況でしたが、これまた素敵な先輩・後輩に囲まれ、アットホームで、団結・自主性のある学祭になっていったと自負しています。これから続く後輩たちにも、「自分が楽しむ」「学祭の成功を担っている1人なんだ」との思いで、ますます楽しいものにしていてもらいたいと思います。

3～4年は、ゼミですね～。これまた素敵にハードなゼミでした（泣笑）。でも、一番覚えてますし、本当にいい思い出になっています。苦労した分、努力した分だけ、喜びも、人生も、成長も、深くなっていくことが分かりました。

「教育が進歩しなければ社会もまた進歩し得ない（米・教育哲学者デューイ）」

「教育が根本である。教育が進歩し、発展するならば、社会もま

た進歩し、発展を続けていく。教育は、本来、営利のための事業ではない。知識の遊戯でもない。人間の魂を揺り動かし、秘めた可能性を引き出して、勝利と幸福の人生へと向上させてゆく『推進力』でなくてはならない」との、尊敬する人生の師匠の言葉を母校の開学10周年に贈り、ますますの発展を祈っています。

思い出

国際文化学科 第3期生

平良 和義

’95年高3の夏、私は進路で迷っていました。英語が得意だからと漠然と英文科を目指しつつも、本当にこれで良いのか、周囲に流されていないかと真剣に悩んでいました。

そんなある日、進路相談を受けていた担任から名桜大学を受けてみれば？と勧められ、手渡された大学のパンフレットを手にした時が、私と名桜の出会いでした。

一瞬にして引き込まれた私は、翌年4月、名桜大学の入学式にいました。国際色豊かな教授陣やさまざまな国からの留学生、そして人とは違うものを求めて来た個性豊かな友人たちと一緒にキャンパスライフをスタートさせました。初めて学ぶ科目に奮闘しながらも、放課後は一人暮らしの生活費を稼ぐためにアルバイトを始めました。当時私は、学費以外の生活費はすべて自分で賄わなければならなかったため、奨学金を得るまでの3年間は勉強とアルバイトの両立に必死でした。

3年次に行った現地実習ではブラジルを中心に中南米を回り、壮大な大地や自然、特色溢れる人や文化、初めて会う日系・沖縄系移民やその子弟らに接した時は感動しました。どれもが刺激的でしたが、その時から私は金銭面であきらめかけていた留学を意

識するようになり、4年次に先生や先輩の応援を受け、ブラジルへの留学が叶いました。

半年間と短期間ではありましたが、語学を始め、人の豊かさ、人間として忘れかけていた温かさを学ぶことが出来ました。卒業後、県費で再びブラジルへ渡るチャンスにも恵まれ、さらに語学を磨き、それを生かして1年後には外務省在外公館派遣員として在リオデジャネイロ日本国総領事館にて勤務させて頂きました。このような貴重な経験が出来たのも、あの夏に名桜大学に出会えたからだと思いました。

最後に、お世話になりました各恩師に感謝の意を表すと共に、開学10年、まだまだ若い名桜大学ですが、エネルギー溢れる現役生と、開拓しつづける我々卒業生の手でますます発展させて行きたいものです。



メキシコ・エルカステージョ神殿ピラミッド

名桜大学開学10周年に寄せて

第4期生

銘苅 奈真

私が名桜大学に入学したのは、今からちょうど10年前の1994年になります。

大学に合格して実際に校舎を見学した際には、現在の校舎はまだ工事中であり、どのような学園生活を送ることができるのかとても不安になったことを覚えています。

学生のほとんどはアパート暮らしをしていたので、授業やバイトが終わった後には、みんなで飲みに行ったり、試験勉強をしたりと充実した生活を送りました。また、新設校であったため、職員や学生が試行錯誤しながら一丸となって学園祭や球技大会を実施したことがとても印象に残っています。

学校の授業に関しては、英語科目や海外での現地実習及び企業インターンシップを必須科目とするなど、他大学とは異なる独自のカリキュラムを設定することにより、沖縄から新しい人材を育成していこうという気概を感じるとともに、教授や職員が新しい歴史を創り上げて行こうという雰囲気が満ちていたのをとても新鮮に感じました。

私は3年次を修了した際に休学して米国へ留学しましたが、その際にも多くの先生や職員の方々から温かい励ましを受けることができました。

復学した際には以前にも増して施設整備が進んでいたとともに、授業のカリキュラムも充実しており、学生にとって学びやすい環境になっていることに対して感銘を受けました。

卒業してもう4年になりますが、名桜大学には卒業生を引きつける雰囲気でもあるのか、今でも北部を訪れた際には名桜大学を

訪問しています。

この開学10周年を節目に、名桜大学が北部地域における中核的な学術機関としての役割を担うとともに、今後とも多くの優秀な人材を輩出することを心より期待しています。

思い出

国際交流コース助手 第5期生

張 瑞

私は、この10年の中で4年間（2000年～'04年）名桜大学に在籍しました。そして、本学の学生であったことを本当に良かったと思っています。

1998年4月、中国から留学生として愛媛女子短期大学国際交流コースに入学。愛短卒業後、さらに日本語能力を高めるために、2000年4月、名桜大学観光産業学科3年次に編入学しました。名桜大では、ゼミの友人達との交流。留学生同士のパーティーなど楽しい思い出が数多くありました。その中で、02年10月の九州地区大学女子秋季ソフトボール大会に出場、初優勝したことは今も良い思い出です。学業では、2年間観光学について学びました。02年4月大学院観光環境研究領域に入学しました。論文指導教員は生見哲郎教授で、先生は、副学長という要職にあり多忙の中、私の論文指導をして戴きました。修士論文は「中国内陸地域を中心として地域経済格差について」と題し、発表しましたが、生見先生のご丁寧かつ厳しいご校閲を受け完成したことに深く感謝しています。学生生活では、苦悩したこともありました。特に私はスポーツ奨学生として実績をあげなければならず、また、良い成績を取らないと奨学金がもらえず、大学院1年次は米山奨学生に応募して推薦され奨学生になれ、大学院2年次は、修論に集中でき

ました。また、奨学生としてお世話頂いた方々に感謝申し上げます。大学院修了後、愛媛女子短期大学に採用され、国際交流コースの助手として忙しい毎日です。

最後に、私は愛媛にいても沖縄の太陽、空、海が大好きです。そして、私を育ててくれた本学を誇りに思います。10周年記念にあたり、これからの名桜大学のさらなる発展を祈念致します。

思い出

第6期生

沖山 貴志

ホーチミンの空港に降り立つと、ねっとりとした空気に包まれ、異国の香りが漂っていた。すこし暗めの街灯と無愛想な入国係官が、さらにその雰囲気をかもし出す。現地実習が始まったのだ。

参加の動機は不純だった。3回生になるまで少しハシャギ過ぎた私には、旅をして単位獲得というオイシイ(?)話に乗らずにはいられなかった。「これで、卒業できる」なんて考えていた私の未来が、この旅でこれほど変わろうとは、そのとき微塵も思っていなかった。

訪れたアジアの国々は、私の好奇心を大いに刺激した。道中にあふれる人々の活きる力に圧倒されたホーチミン、ゆったりとした時間の中に佇むタイの古都チェンマイ、ジャングルの中の近代都市クアラルンプール、混沌と欲望の大都市バンコクと巡り、私はすっかり東南アジアに魅了されてしまった。

翌年、私は協定を結んでいるタイのチェンマイ大学に留学することになる。実習後の私は、実に行動的だった。何かに惹かれるようにタイ語を勉強し、そして交換留学に応募した。タイでの留学生活の2年間は、とても充実したものだった。タイ語の習得、

タイ人や外国人留学生との交流、タイ国周辺の旅行など、一生涯忘れられない思い出と経験を得ることができた。帰国後、ひよんなことから構内の留学生センターに留学生と1回生に囲まれて生活することになる。

ここで留学の経験をさっそく生かす機会があった。例えば、みんなで食事をする時に、宗教上食べられない物はないかと自然に考えられるという行為は、留学しなければ身に付かなかっただろう。

最初は、気にも止めていなかった後輩たちが、そんな何気ない親切を実践してくれるようになったのは、とてもうれしいことだった。このような小さな国際交流を大切にしていきたい。今では、それが私のポリシーになっている。

私はすばらしい思い出を作る機会を与えてくれた大学にとっても感謝したい。

「名桜エイサー」から学び得た私

第7期生

伊波 あゆみ

2000年の4月、私は名桜大学に入学し、幼い頃から憧れていた女子大生になることに…。初めての一人暮らしに何もかもが新鮮であると同時に、わからないことも多く期待と不安で大学生活が始まりました。入学当初、そんな日々を送っていた私ですが、アルバイトを始めサークルに入部、習い事にも熱中し出すと、毎日が楽しく、とても充実した4年間があったという間にすぎました。

私は、外国語がとても苦手だったので異国の人と会話を交わすことが不安でした。しかし、名桜大学には留学生が多く在籍しており、グループ学習やサークルを通じて、何人かの外国人と触れ合うことができ、中国、ベトナム、アメリカなど様々な異国の人



名桜大学祭での演舞＝名桜エイサーサークル

たちと友達になることができました。卒業後、国際交流を図るには、名桜大学はとても良い環境だと実感し、異国の人たちと触れ合えたことも思い出に残っています。

私にとって最も印象深い活動であり、私を成長させたのは、エイサー活動でした。1年次の頃から名桜エイサーサークルに入部し、日々練習を積み重ね、名桜祭や県内外の祭り・イベントに参加、老人施設などでの演舞や県外修学旅行生へのエイサー体験交流など、エイサーを通して様々な人と出会い、沖縄の伝統文化を象徴するエイサーのすばらしさを感じたことはもちろん、多くのことを学ぶことができました。4年次には名桜エイサーの会長を務め、地域の方々や各関係者、サークルメンバーとの交流を図ることの大切さ、チームワークの重要性など、多くのことを学び、そして何より組織をうまく運営するためには、様々な仕事を各自が分担し、その役割を責任もって果たすことの大切さを学びました。

時折、会長という責任の重圧に、辞めようと思ったこともありましたが、先輩や顧問に励まされ後輩や友人、それに家族に支えてもらい無事役割を果たすことができたと思います。

名桜大学での4年間の生活は忘れることのできない思い出となりました。

今後は大学生活で学び得たことを、地域や職場で活かし頑張りたいと考えています。



教員・事務職員

開学と学年進行中の教育

教員

瀬名波 榮喜



1994年4月15日！これぞ私にとって一生忘れることのできない嬉しい日であった。北部に高等教育機関をという長年の夢がかなえられ、真新しいスーツを身にまとった393人の新入生を迎えて、名護市民会館で第一回入学式が盛大に行われた日である。競争率5.5倍という難関を突破してきたこれら第一期生たちは、この新しい大学の「新鮮さ」に惹きつけられてこの新しいキャンパスに集ってきた。本学は、既設の大学では見ることのできないユニークなカリキュラムと教育目標を設定して、外国語教育、国際理解、情報教育に重点をおき、国際化・情報化社会に対応できる人材を養成することを意図して開学した。したがって、この期待に応えるべく、外国人教員も多数採用して強力な国際的教授陣を整備することに成功し、外国人留学生を定員化して、大学を国際化することに努めた。

開学当初、特に強調されたのはバイリンガル教育であった。県内で英語による授業が学部レベルで試みられたのも本学が最初であった。外国人教員や米国留学の経験を持つ日本人教員はできるだけ国際語である英語で講義をするようにつとめた。(もちろん教授会や各種委員会も日英両語で運営され、時には異文化衝突を経験しながらも、教員はなんら抵抗なく発言し、貴重な意見を述べていた) 外国人教員の場合は、板書を多くするか、さまなけれ

ば、次の講義の概要をまえもって配布していた。私の場合、最初、きわめてシンプルな英語で講義し、さらに日本語で説明を加えることにしていた。学生達は、目を輝かせながら、一言一句聞き漏らすまいと熱心に受講していた姿が思い出されてならない。

大学の大衆化と学生の多様化に対応するために、授業方法の改善は緊急を要した。その最善の策は、第一にシラバスの導入であった。当時、全国的にシラバスとは何かが知られていない時代であったが、それによって学生は受講科目の全体像を把握することができるだけでなく、毎授業の予習が可能となり、難しい英語による授業もわりにスムーズに行われるようになる。そこで、全教員が一致協力して、シラバスを作成することになった。第二の授業改善策として考えたのは、学生による授業評価である。わが国では多くの教員にとって学生による授業評価は実に耳新しいことであり、ある種の抵抗感がなかったわけではない。しかし、私は学生から指摘されて初めて気づいたことがいくつかある。私の板書が読みづらいとか声が小さいとかはその好例である。県内でシラバス導入と授業評価を他大学に先駆けて全学的に実施したのは本学であった。

10周年を迎える今日、学年進行中、毎年行われる文部省の実地調査に戦々恐々と対応しながら教育していた頃を思い出すとき、私にとっては実に隔世の感禁じえないものがある。国際的な本学の卒業生が社会のあらゆる分野で活躍している事実を私は誇りに思う。



名桜大学第1回入学式
1994年4月15日

七人の侍

教員

住江 淳司



私が、名桜大学に初めて赴任したのは平成5年8月1日でした。この当時名護総合学園設立準備室は、国道58号線を挟んで名護市役所の斜め向かいにある屋部土建ビルの5階と6階にありました。我々教員は、このビル6階の廊下の一番右端にある一室をあてがわれ、その部屋は西日が差し込みまだ窓にブラインドも無く、加えて冷房もない灼熱の部屋だったのを思い出します。9月初旬には李鎮榮先生が私の横の机に赴任され、それまで一人だった私には心強い友を得た気分になりました。ただ、彼は調査研究のためと称してほとんど部屋には来ず、私は一人で南米の大学との学術交流協定締結のための準備に追われ、中南米地域の沖縄県人会長にファックスや電話で私の訪問を連絡していたのを記憶しています。当時、琉球大学の教員であった安井祐一先生と共に南米5カ国（パラグアイ、ブラジル、アルゼンチン、ボリビアそれにペルー）を9月初旬から歴訪し、交流協定大学の候補校を各国約10校ずつ県人会長の車で回りました。特にペルーでは当時センドロ・ルミノソなどのゲリラが町中を跋扈し、我々が市内を回っていると銀行などに手榴弾が投げ込まれ硝煙がまだ燻っている光景を目の当りにしました。宿舎のホテルに帰って来ると我々の車に爆弾がしかけられていないかどうかを調べるために、車体の下に円板型の爆弾探知機をホテルの警備員が差し込んで調査していました。今から考えると命がけの南米訪問でした。11月下旬に南米から帰国すると、我々が奴隷小屋と称していた6階の教員部屋には、芝野治郎先生と沢恒雄先生がIBMから来られ、その直後にキャロライン・レイサム先生、12月には新垣裕治先生それにグアム大学

から仲地清先生が赴任され、平成6年4月開学を準備する7人の教員が揃ったのです。我々7人は、開学準備のため沖縄県の各高等学校へ各学科の説明会に赴いたり、入試問題の作成や採点それにポスター貼りを行ったりとありとあらゆる開学準備をしたのです。それが縁で今も我々は「七人の侍の会」と称して年に二回集まり学長と副学長をお招きして親睦会を重ねております。

10年の思い出

教員

芝野 治郎



「ここに大学ができるのです。」案内されたところは名護の市街地から少し離れた原野の山の上だった。1年間で本当にできるのかなという不安を抱きながら、それでもここにできる新しい学び舎で、日本IBMでの25年の人生の集大成として、若い学生達に企業での情報の役割を教えていくことに、天賦の仕事としての意義と期待を感じたものであった。かつて原野だった大学の裾野が今賑やかに発展しているのをみると隔世の感がある。

設立準備室が港に面したコスモビルにオープンしたのは、開学半年前の10月だった。教員も5人招聘され、開学準備に取り組んだ。海に面した部屋で、10月でも日差しが強く、閉口したのを覚えている。最初の入学試験の倍率は7.3（経営情報学科）近くあり、期待の大きさを感じた。

名護桜祭りのイベント「二見情話大会」にレイサム先生と新垣先生が出演し、教職員みんなで宣伝のプラカードを持って応援したのも懐かしい思い出である。

開学3年目に郵政省通信・放送機構の衛星プロジェクトとして多目的ホールに衛星放送設備とマルチメディア機器が導入され、

早稲田大学の授業を受講したり、名桜大学からも授業を発信する実験を3年間行った。また地域の大学として、情報化の推進の為にマルチメディア・シンポジウムを開催したり、インターネットの啓蒙の為にやんばるネットを立ち上げたりした。

経営情報学科の特色の一つに企業実習（インターンシップ）があった。これは3年次の夏休みに、学生全員を3週間企業や役所に送り出し、実社会の厳しさを体験させようというものであり、3年目の6月、7月に引き受け企業を募るのに大変苦労した。最終的には60数社にお引き受け頂き、無事実施することができた。その後3年目くらいに文部省から聞き取り調査があり、翌年インターンシップはよいことだから、全国の大学でも実施するようというガイドラインが出された。日本の大学教育の変革の先鞭をつける動きが沖縄の名桜大学から発信できたということを誇りに思っている。

1年目の学生で、いつも教室の最前列で授業を受けている学生がいた。熱心だが、人擦れしておらず、講義の後、声をかけるとうつむいて返事もできないようだった。それが1年次秋の大学祭の実行委員長になり、その後、サークル活動も熱心にやり、卒業後はマレーシアを一人旅して、将来は現地で日本語学校を経営するという夢を持つようになった。

大学4年間でいかに人間が成長できるかを示す良い例だと思っている。都会で育った学生はいろいろな知識は持っているが、伸びきったゴムのようなもので、それ以上才能を伸ばすことができないことがある。それに引き換え、地方で機会に恵まれなかった学生でも、大学4年間の間に機会があれば生き生きとして力を伸ばし、可能性に挑戦していくことができるようになる。もともと意欲のある学生だけでなく、そんな学生達を発掘し、素質を伸ばしてやることできれば、地域に設立された大学としての大き

な意義があるのではないかと思っている。

思い出

名護市企画総務部参事

大城 弘行

名桜大学開学十周年、誠におめでとうございます。10周年の節目を迎えるに当たり設立準備に関わった者として、貴重な紙面に「思い出」として掲載させていただきますことは、感無量の思いである。

平成3年5月に企画部総合学園設立準備室に勤務を命ぜられ、少々戸惑いもありましたが、「もし、大学設置準備に関わっていなければ、今は？」と思うと、改めて名桜大学とのめぐり合わせを不思議に思う。私にとって名桜大学は心の拠り所となっている。北部に大学を設置しようという意欲に満ち、志を一つにした市長（当時）をはじめ多くの大先輩方や仲間があった。市職員として一般の職員が味わえないような醍醐味を大学設置準備というものから学び吸収することができた。また、それを通して人との出会いを巡歴できたことは非常に幸いなことであった。平成5年までの大学設置への期待と希望は、大学創設ということによる煩悶、日々多忙であることの憂いを一蹴していた。

大学に関する深い知識と情報ネットワークを有した嘱託員と二人で平成3年から大学設置事務の方は動き出した。最初の事務室を中央公民館での間借りでスタートし、総合学園準備委員会が発足、準備事務が繁雑で膨大になったため、平成4年8月から琉球新報北部支社2階に移した。職員2名と臨時職員2名が加わり、後に平成5年には準備室長が発令され、平成6年度の名桜大学開学まで屋部土建ビルの5～6階を借りきって本格的に始

動した。

当時は18歳人口が平成4年度を境に急増して急減する時期で、当時の文部省は「大学新增設の原則抑制」、「量から質への転換」を強調していた。大学新設は考慮せず、既設学部学科の入学定員の臨時増で乗り切る方針であったため、新設大学設置認可は至難の状況であった。そのため旧文部省との折衝は厳しさを増して、担当課長からは資金、土地、教員はどうかと迫られ、今後の大学設置には10年は必要だよとまで言われていた。大学設置審議会で当時推進していた公私協力方式で大学設置を進めることになり、公設民営という新しい形の私立大学設置となっていく。そこで大学設置審議会ヒアリングの創設資金の件で、当時の市長の答えた「沖縄の北部ではバブル崩壊はありません。大丈夫です」の言葉。私はこれに感動し市長（当時）の大学設置への思いの強さを再確認した。平成4年4月に第一次設置認可申請が受理され、設置準備委員会は独自の職員を採用し、平成6年度の開学に向けて昼夜の区別もなく邁進していき、ここに名桜大学の開学が成就した。

大学設置は、私の役所吏員としての人生に大きな変革をもたらし、発奮の導火線・源となっている。

在任わずか三年間であったが、生涯のうちでもう二度と経験できないであろうと思う。正しく活力に溢れ充実した毎日であった。21世紀に大きくはばたく名桜大学の躍進に大いに期待したい。





地域・海外

目を見張る施設整備

名護市商工会会長

萩堂 盛秀



北部住民念願の大学を設立して10年になった。昔から名護は教育の熱心なところである。終戦直後、名護英語学校ができた。那覇に琉球大学が開学すると同時に英語学校はやむなく閉校するが、だんだん若者が中南部に流れていった。過疎化は進む一方だった。この若者の流出を食い止め、中南部に負けない素晴らしい教育の場・高等教育機関を設置する話が持ち上がった。私は商工会の会長になって13年になるが、就任した時、総合学園設立準備委員会が設立された。幼稚園、小学校、中学校、高校、大学、大学院を設立するのが目的だった。バブル崩壊などで予算に支障をきたし、文部省との交渉も難航した。準備委員会や当時の比嘉鉄也市長らは、たいへんな苦勞をしたと思う。規模を縮小して大学一本の設立を目指すことになった。

1991年に準備委を設立して以来、足掛け3年という短期間で、どうにか開学にこぎつけた。最初の入学生、1期生が入ってきたのはいいが、キャンパスはまだ完全に整備もされておらず、交通事情も悪かった。でも1期生はすごかった。手探り状態で各部活も積極的に自分たちでつくり、学園祭も手づくりで素晴らしいイベントを多くの住民に披露し、感動させた。この1期生が卒業するころは、各施設も次第に整備され、キャンパスも緑に包まれた

風光明媚な学園に変わっていった。今では、基盤整備も進み、生涯学習センター、グラウンドも完成した。これぐらい整備されれば、大学としての教育、研究はスムーズにいくのではないか。これらの施設で伸び伸びと学んだ学生たちが、国際舞台で活躍するのは間違いない。

北部に若者たちが来るようになって街は活気づいた。さらに名護市の小、中、高校生たちに刺激を与えた。特に小さい子供たちの励みになり大学に夢を持ちはじめ、勉強をするようになった。こういう話を父母から聞くと、ほんとに名桜生に感謝したい。卒業生たちが地元就職して人口増につながっていけば、名護市だけでなく北部市町村全体の活性化になると思う。そのためには、多くの企業があり、職業も自由に選べて就職できる条件がそろっている話である。如何せん、北部には企業も少ないし、採用される数も限られてくる。商工会としても企業と話し合いなどして名桜生の優先採用をアピールしている。自治体を目指す学生が少しではあるが、出てきたのは、いい現象である。開学10周年を機に新しい人間健康学部も設置されるようだ。社会のニーズに応えた学部であり、期待してやまない。



海外からの声

元在伯沖縄県人会会長

宮城 滋



名桜大学創立10周年にあたり記念誌へ「思い出」のタイトルで寄稿依頼を受け有り難いやら、文才のない私に……と戸惑いながらペンをとりました。

1993年9月安井祐一先生、住江淳司先生が創立まじかな名桜大学とパラナ州立ロンドリーナ大学との学術交流協定打ち合わせにご来伯なさり、県人会を訪問頂いたこともあり、翌年の1994年6月郷里訪問の機会に、名護市の為又に4月に開学したばかりの名桜大学を訪問しました。

東江学長から名桜大学設立、外国人留学生受入れ、奨学金制度などについてのご説明を頂きましたが、ブラジルからは既にパトリシアミチコ具志堅さんが県人材育成財団やライオンズクラブ国際協会からの奨学金を得て在学しておるようでした。住江先生には学内施設を案内して頂きましたが、名護市名護湾を見渡せる緑豊かな高台に位置し素晴らしい自然環境、そして21世紀の国際化時代に相応しい国際性豊かな人材育成を目標に設立された大学であり、この大学で教育を受けた学生が世界を舞台に活躍することに大きな期待を抱きながらブラジルに帰って参りました。

9月には東江学長ご一行がロンドリーナ大学との学術交流協定調印においでになりました。南米4カ国は移民を通して密接な関係にあり、これらの国々の大学と交流協定締結の南米訪問でありました。そしてその翌年の1996年9月、第1回現地研修生80人の大団体でやってきました。県人会で歓迎昼食会を挟んで上原幸啓サンパウロ大学教授、西銘光男ブラジル日本文化協会副会長（当

時)のお二人にブラジルの大学教育と日系社会についてお話しして頂きました。交流大学所在地ロンドリーナ市は古く北パラナ開拓の拠点で日本人の大集団地であり、県人も多く荻堂オメロ国會議員、名嘉間ジョオン支部長をはじめ多くの県人子弟が政治、経済、教育と広くブラジル人社会で活躍しており、ロンドリーナ支部での歓迎会も婦人会の手料理で盛大に行われました。私も歓迎会の挨拶の中で「皆さんの名桜大学は国際的に活躍する人材を育成するため大学で学んだ理論を現地での研修を通して身に付けさせるということで80人もの大団体でおいで下さいましたが、このような大きな団体での現地研修は日系コロニア初めてのことであり、古くから国際感覚に長けた琉球民族ならではの発想だと思います。皆さんの研修が実り多きものであることを願います」と結んでおきました。

去る9月11日県人会本部の研修団歓迎会において住江先生から「今年で9カ年513人の学生が現地実習に来ました、卒業生の中にはリオ・デ・ジャネイロの日本総領事館勤務のもの、アルゼンチン、ボリビアで活躍の卒業生がおる」との報告を受け、名桜大学卒業生が国際社会で大いに活躍してくれるものと期待します。



ロンドリーナ大学副学長(中央)を囲んで

将来に 向けて

第五編



2004年9月18日（土）

於：名桜大学会議室

■出席者

理事長 比嘉 鉄也

学長 安田 晃次

観光産業学科教授 黒江 浩紹

学務部長 垣花 勝行

同窓会副会長 普久原アントニオ

大学院修了生 名城 義久

一期生 福地 恭子

司会 国際文化学科教授 山端 清英

第1章

座談会



比嘉理事長の話に聞き入る出席者＝名桜大学会議室

／ 名桜大の歩む道

本学は開学10周年を記念し、「将来に向けて」と題し、座談会を開いた。出席者は、比嘉鉄也理事長、安田晃次学長、黒江浩紹観光産業学科教授、垣花勝行学務部長、1期生の普久原アントニオ同窓会副会長、大学院修了生の名城義久さん、1期生で非常勤講師の福地恭子さんら7人。司会は国際文化学科の山端清英教授。出席者から本学の歩むべき道、将来どんな大学になってほしいか、将来の夢など大いに語ってもらった。

司会 本学を取り巻く経営環境には厳しいものがあることも事実ですが、座談会では本学の将来像が浮かび上がってくるように青写真をたくさん描いていただければ幸いです。では、序論として本論の前置きになるお話をお願いしたいと思います。比嘉理事長から口火を切っていただけませんか。どうぞ。

時代に合った学部を

比嘉理事長 最初は国立、公立の大学を設立する予定だったが、1969年頃、文部省と自治省が、財政圧迫を理由に指定都市以外の大学設立はしないという覚書を交わしていた。それではということで大学誘致運動もしたが、北部地域の現状、財政では大学経営は難しいとのことだった。結局、公設民営になった。そして県内の大学と競合しない、社会のニーズに即応した学部学科を設立することにした。できたのが現在の



比嘉 鉄也

3学科であるが、今日では少子化が進み、競合する大学も増えてきた。今後は、理事会と大学当局が一つになって話し合い、時代に合った新しい学部学科をつくり定員割れのないように対策を練り、改革していかなければならない。

司 会 安田学長に大学本来の像、姿についてお聞きしたいのですが。いかがですか。

市民生活の中に

安田学長 2年前に学長に就任した。結論から言えば、大学というのは、市民生活の中へ、いろんな形で入り込んで行くことがもっとも望ましい。大学の先生だからといういかめしい肩書きははずすことだ。年齢の差を問うこともない。そういう大学でありたい。特に名桜大では、そういう考え方や役割が求められる。そこに、いろんな問題の焦点を当てていけば、もっと自由で進取の気風が培われ、地域に開かれた大学になると思う。

司 会 黒江教授、どんな大学を目指したほうがいいとお考えですか。

21世紀最大の観光産業

黒江教授 大学設立時の公設民営をもっと大事にしなければならない。学長が言われたように、地域に密着し、地域に根ざした大学を目指し、地域住民から誇りに思ってもらえる大学が望ましい。観光は21世紀最大の産業といわれている。名桜がいち早くその学科を設置したことは、先見の明があったわけで素晴らしい。今では導入した

大学や来春から取り入れる大学もある。観光は沖縄の基幹産業で、本学へ人材育成の要請もあるほどだ。本学がアジアのナンバーワンといわれるように10周年を機に新たな戦略を組む必要がある。

司会 それでは垣花学務部長に、これまでの本学の歩みと将来の方向性について伺いたいと思います。どうぞ。

今後10年を発展期に

垣花学務部長 まず、10年の歩み、実績、現状を掴みたい。平和・自由・進歩を教育理念に、教育目標は、国際理解、高い情報処理能力、幅広い教養、社会情勢に精通し、創造性豊かな人材の育成を掲げ、'94年に開学した。2004（平成16）年までに4639人の学生を受け入れ、1期生を世の中に送り出し、'97年から7年間で卒業生は2437人に上る。就職率は高く83%を誇る。'01年には大学院が設置され、全国の大学で授業料が一番安い大学である。借金はないが十分な貯金もないのが現状である。



垣花 勝行

創設期に他の大学と競合しない学部学科を作ったが、2004年現在、県内のすべての大学が本学に競合してきた、といっても過言ではない。琉大が来春から観光科学学科の設置を申請している。また、本学は企業の現場を体験させるインターンシップは必修科目として取り入れ、先駆的に取り組んでいたが、全国の大学も追い掛けて来た。この10年間、試行錯誤もたくさんあった。もちろん創設期の10年、大学の教育、運営、経営をすべて軌道に乗せる事が第一の目標であった。おかげで県内大学の中でその地位は固まりつつある。大学が地域の経済効果を生み出しているのは名護市の変わりようで分かる。

これからは設立時代から飛躍の時代へ邁進していくが、地域に大学がある、という本来の意味を今後10年の発展期で明確にしていきたい。今はちょうど、その転換期にあると思う。

司会 普久原さんには、同窓会の現状と本学の将来に寄せる思いをお聞きたい。

同窓会会員わずか80人余

普久原さん ペルー出身の留学1期生で、現在、観光関係の仕事をしています。同窓会の立場から意見を述べます。2002年に同窓会を設立し、情報交換、大学生の支援などを柱に事業をしています。なかなか会員が集まらないのが現状です。卒業生は2400人余ですが、現在、会員は、わずか81人しかいません。運営に大きな支障をきたしているのが現状です。したがって、同窓会の組織づくりが当面の課題で、名桜大に期待することは、国際感覚と豊かな感性を備えた自由で進取の気概のある前途有為の人材を一人でも多く世に出してほしいのです。



普久原アントニオ

同窓会の立場から言えば、OBと在学生在が連携をとり社会のニーズに応え得る道筋を明らかにしていくこと。そのためにも、OBと在学生在が緊密に連絡をとりあい、協力し合っていくシステムをつくり上げること。また、教職員の方々、大学の経営にかかわっておられる皆さんにはぜひ、同窓生の生の声に耳を傾けていただきたいと思うのです。このことは、今後の大学の在り方に大いに役立つと思います。

司 会 非常勤講師の福地さんに留学をして得たものは何か。それを踏まえて、どんな授業をしているかお聞きしたい。

学生と気軽に話せる教員に

福地さん 1期生で卒業し、現在、本学をはじめ県内の大学で非常勤でスペイン語の講師をしています。スペイン語を選んだのは、普久原さんら中南米の留学生との交流の中で、親しく話したりする機会が多かったからです。中南米に交流協定大学があり、参加しているうちにスペイン語がますます好きになりました。現地実習で県人会の歓迎を受けたり、当時のフジモリ大統領にもお会いできました。他の人では体験できないことが出来ました。そしてペルーに留学しました。向こうでは教員と学生との距離が短く、気軽に就職などの相談が出来、アドバイスも受けました。2年間、留

学し、戻ってきて京都の大学で修士を終えて帰ってきました。卒業して6年になります。今は教員として本学とつながっていますが、留学時代に学んだ学生との距離を短くして、どんな相談にも乗ったり、微力ではあるが私なりのアドバイスもしています。

司会 大学院に社会人入学をした名城さんに大学院生活、本学への要望などがあれば伺いたい。

地域、国際に貢献を



名城 義久

名城さん '01年に大学院に社会人入学し、1期生として'04年に修士課程を卒業した。どういう大学にすればいいかを考える時、まず名護の地の利、時の利を思う。それは沖縄の中で名護は教育のメッカであったという事実がある。戦後、荒廃した沖縄を再建すべく、情熱に満ち溢れた若者が全島から集まった名護英語学校があった地である。英語を学び沖縄の激動の時代を導き、今尚、沖縄を支えている多くの人材を輩出している。

そこに本学があるわけで、この自然豊かな教育の歴史のある名護で、ローカルに且つグローバルに活躍できるコスモポリタンの養成ができることは、たいへん意義のあることだと思う。

時の利というのは2000年に沖縄サミットがあった。世界の名護として注目を集めた一大イベントの成功は名護市民をはじめ県民に大きな自信を与えた。本学の学生も目の前で国際的なサミットに触れ、学ぶ意欲に強く結びついたと思う。世界は今、ボーダーレスの時代である。国家の枠を超えた人的つながりが、注視されてきた。創造的に他者と向き合うことのできる、アイデンティティーを確立した国際人が真の平和を創る人材となると信じる。本学の大学院には国家の枠を超えた能力と言語を培うカリキュラムが必要である。それを通して知識、知恵を学んで自分たちの生まれた地に還元することを目指してほしい。大学院には現在、39人の修了生がいて、40人が在籍している。その中に24人の外国人留学生がいることは、いかに本学が国

際色豊かで、国際感覚を磨くのに優れているかが伺える。また、社会人の大学院生が31人を数え、社会に関わる大学院としての機能を発揮している。仕事を持ちながらの大学院生活だけに、講義と仕事の両立は厳しい面もあるが、大学側の配慮で、時間割を調整してスムーズに運んでいる。大学院で学んだ知識と知恵をもって活躍している社会人は15人。本学の大学院修了生で本学や他の大学で、より高度な研究をしているのが24人いる。優秀な学部生にも、もちろん大学院の門戸を開いて置くことは必要条件である。これからも本学の大学院で学び地域社会と国際社会に貢献する人材が輩出し、彼等が沖縄の平和と安全、繁栄に寄与する存在となることを願いたい。

2 名護総合学園の将来構想

司 会 これから本論に入りますが、今までのお話の中には、今日の座談会を盛り上げていただけるキーワードがたくさんあったようにおもいます。その中からまず、「名護総合学園の将来構想」について、法人の立場から理事長にお話しいただきたいと思います。

総合学園を目指そう

比嘉理事長 名城さんから地の利に恵まれているとの話があったが、今から10年前、沖縄には何百万人という観光客が来たが、素晴らしいヤンバルの自然、そして人情豊かなヤンバルということをいくら宣伝しても観光客は、恩納村でとんぼ返りだった。ヤンバル全体を売り込まなければならない、再認識してもらわなければならないと、大学の中に観光産業学科を取り入れたわけだ。タイミングを失することなく必ず実行しなければならない。伸るか反るか——いい言葉ではないが、「乾坤一擲（けんこん・いってき）」という言葉を使い、「大学を造ろう」と呼び掛け、皆と相談した。その時、皆に、知力やアイデア、経験を貸してくれ、と頼んだ。

当時のヤンバルの12市町村では、毎年、進学校を目指し中学生200人余りが中南部

に流出していた。これに歯止めを掛けるには、総合学園と銘打ち、まず中学を造り、そして高校、大学、大学院の順序で造った方がいいのではないか、と提言した。結局、大学、大学院を造ることになったわけである。これから目指すは総合学園であり、小学校、中学校、高校を造り、大学、大学院と一貫教育をしなければ、この素晴らしいヤンバルの発展、この沖縄県の均衡ある発展は望めないと思う。そこで皆さんの経験や知恵を借りて、ぜひ総合学園らしく完成させていただきそれを将来像としたい。日本全国共通だが、川の川上で水は集める。集めた水は下流の方へ流れる。下流の方では、この水を使い、いろいろな工場ができる。水も多く使う。同時に若者もどんどん都会の工場に吸収される。これが集団就職である。では地域の均衡ある発展という場合、国も行政も地域の方々も力を合わせて、どのようにすれば、共生できるか、ということを前向きに踏み込んで考えていかなければならないと思う。これが人材の流出を防ぐことになる。地域で育てて地域に還元するのが総合学園の構想である。開学10年を迎えた。10年は少年期、20年は青年期、壮年期、そして熟年期へ向かう。その歴史が大きな糧となり、総合学園は発展、定着していくことになる。将来の大きな構想はやはり総合学園を完成させることである。

司会 それでは、ここで安田学長に当面の本学運営の方針、諸計画及び達成状況、今後の課題についてお聞きしたいと思います。学長どうぞ。

人間健康学部を新設へ

安田学長 皆さんの話の中に将来に対する強い期待が表れている。名桜大の10年、過ぎ去った10年になるのか分からないが、とにかく今ある大学をさらに中身を濃く、質を保証するということを目標に、これからもやっていかなければいけないと思う。ちょうど今、1学部3学科であり、本学の諸条件からみてよかったと思う。しかし世の中が早い速度で変化、進化しつつある。教育においても学校づくりに対して文部科



安田 晃次

学省の指導は、事前の指導でなく後でチェックするようになった。現在、700の大学が400に減らされるだろうというぐらい大きな変革の結果が表れそうである。そう

いうものに本学が絶対に巻き込まれないように、今、対策を考え、そしてそれを進めているところである。既存の3学科については学生不足による定員割れを起こさないように対策を練っている。2000人余の卒業生に、今の授業の在り方でいいのかどうか、見直しの意見、提言を求めている。また、何をするにしても設備が大学の大きな要因となるが、幸い行政の支援を受け設備投資などをして充実を図っている。生涯学習センターも完成した。それに付帯した学生サービスなどの向上、満足度を高めたいこうと各所属の部課長が必死になってやっている。これまでの既存のものをどう生かすか、その商品を高め維持していくことがひじょうに難しいところである。

大きな環境の変化については、従来の3学科のほかに学部を新設していくことになった。いろいろ意見が出た結果、人間を中心にその健康をテーマにしながら将来をみると、かなりひどい問題が地域に山積している。政府もいろんな形で整備に動き出しており、この人間の健康については、本学の「人間健康学部」の新設が、沖縄の地理的条件からして十分に役に立つと確信する。また、本学の価値ある商品になり得るものと思う。ほかの大学でも健康を取り入れているところもあるが、自然環境を含めた沖縄、名桜大ほど立地条件に恵まれているところはない。ぜひ将来の青少年のために「人間健康学部」を申請し、どうしても文科省の認可を得たい。

琉球大学が新年度から新しい観光科学科を設立する予定である。他の大学でも観光研究学科のようなものをつくったようだが、本学の新学部学科は専門家らが10年掛けて設立したもので、決して琉球大学やほかの大学とバッティングしたり、追い抜かれるという心配はない。

人間健康学部の概要

人間健康学部・スポーツ健康学科の名称で1学部1学科である。この学科は、観光産業学科に設立当時から保健体育の専任教諭を1人配置して、スポーツウエルネスクースを設置、観光産業学科にプラスしてスポーツとウエルネスを融合させた独自の生涯健康基礎理論やスポーツ基礎理論、ウエルネス基礎理論を享受して職場や地域、学校などで指導ができるスポーツ健康専門家を養成してきた。これらの背景を生かして、今回、新たに沖縄の先端的な地域医療の実践と積極的な連携を図る。スポー

ツ健康学を基礎にして食物、栄養、保健医療、福祉を連携統合して先端的な教育研究の拠点を目指す。これは地域における連携推進の担い手になるような職業人の養成、健康支援人材を育てる学部を設置となる。

今回は、人間健康学部にはスポーツ健康学科の1学部1学科であるが将来的には、人間健康科学に関する学科の増も考えている。健康に関するキーワードは栄養とか管理栄養士などである。そういう学科がないので将来的には管理栄養士コースとか、看護士養成課程、看護学科などの増が可能になるようなカリキュラム構成になっている。それから健康支援人材では、資格としては中学校、高校の保健体育の1種免許状、養護教諭、一般企業（従業員50人以上）には衛生管理者の配置が義務付けられている。この学部学科では企業における健康に関する業務、指導を行う第1種衛生管理者免許を卒業と同時に受けることができる。この養成施設の認可を受けるための準備も厚生労働省に対し行っている。この学部は健康をキーワードに心の健康、心理学関係の科目、体の健康、医学的な科目、体育の実技科目などを用意している。さらに沖縄は長寿社会ということで社会福祉施設での会合、老人施設における福祉関係の仕事にも就けるような科目を用意している。これを'04年9月30日に向けて文部科学省に申請し、認可されれば、来年（'05年）の4月には1期生を迎えることになる。学部の定員は95人。3年次に5人の編入も予定している。合わせて390人。それに現在の学部の学生1410人から1800人の在席数で将来的には、2000人規模になる。

司 会 つづいて黒江先生から本学の現状と将来にかかわる課題などについて、独自の立場から自由にお話していただけますか。



黒江 浩紹

卒業生の動向調査を

黒江教授 10年経過して、これから重要な青年期に入る。本学が将来、どういう方向に進んでいくのか。教職員が一つになって再構築の論議をしなければならない。平和、自由、進歩という教育理念のほかにビジョンもっと分かりやすく示すべきだ。近年大学の現状はひじょうに厳しい。定員割れ、国立大の法人化、2007年には全入になる。国際競争も激し

く、それに打ち勝つ大学が求められ、なぜ専門学校に人が集まるのかなど、あらゆる観点から分析する必要がある。また、入学してくる学生が何を学び、どんな人生を歩むのか。これに本学はきちっと応えているのか。そういう点をしっかりと踏まえ、学生の立場に立って教育をしなければならない。

県内高校の卒業生は約1万7000人で進学率は31%、5000人余である。そのうち県外大学志望が3300人で、県内希望が少なく、しかも専門学校が伸びているのは、大学にとって、どういうことを意味するのか。それらを鑑みて本学の強み、そして弱みはどこにあるのか、真剣に考えなければならない。本学が把握すべき重要なことは、卒業生の就職先を調べることである。就職率がいいから、結構では困る。職業種など調べて、本当に本学で学んだことが活かされているかどうか、実態を把握し、今後の教育に反映しなければならない。また、大学の顧客は誰なのか。高校生だけではない。保護者や先生、先輩らにも十分、アピールしなければ、定員割れにもなりかねない。

司 会 大学を運営執行する立場から将来構想などの計画を垣花学部長にお聞きしたい。

急げネット利用の教育

垣花学務部長 これからは、大学の中身、レベルを再チェックしなければ競争に打ち勝つことはできない。将来構想、方向性を大学運営執行側から見ると、開設の趣旨の中に産業振興への対応が記されている。県内産業は第3次産業が全体の80%を占め、就業率も70%と高い。したがって本学は他の大学にない観光産業学科を設立したのである。さらに教育機会均等を打ち出した。中南部には大学があるが、大学進学率は開設当時、全国の43%に対し、県内は28.8%と低かった。開設の方針として人材の育成、教育、文化の向上、地域の活性化と産業振興を図り、若年層の定着に重点を置いた。教育機会均等は若い人たちだけの問題ではない。沖縄では戦争、米軍統治や経済事情から勉強する意欲がありながら、悔しい思いをした人たちがたくさんいる。放送大学に県内の社会人、お母さん、お年寄りらが1000人もいる。

大学運営を大きく変えることも将来構想のひとつである。18歳を対象にした大学運営でなく生涯学習を前面に出し、大学が地域にあることの意義を出さなければなら

ない。特に本学は他の大学とちょっと性格が違う。設置者である北部住民への責任を大学運営の中でも常に意識する必要がある。これは、国立の琉球大学とも、他の私立大学とも違う。公設民営は全国でも数少なく、先駆的に走っているのが本学である。普通の公務員以上に地域に対する忠誠、責任を意識せざるを得ない。そういう意味では、本学が行うすべてのものに「地域」という冠を付ける必要がある。地域の文化、教育、産業振興の拠点としての役割があるからだ。そういう観点からも大学運営を大きく変える必要があると思う。教育機会均等という意味からも「勉強したい方には誰れでもどうぞ」ということを言わなければならないし、これこそ経営戦略である。どういう人が入学しても「ここまでは勉強させる」という強い信念をもって対応しなければならない。

本学は地域の産業政策と連動する必要がある。名護市であれば、金融特区や情報特区、あるいは観光産業など地域の産業と結び付いた人材を育て送り出すということを明確にしていく必要がある。10年前と現在では、教育環境がだいぶ変わってきた。当時は、インターネットもなかった。現在ではネットを利用した遠隔教育やイーラーニング（E-learning）、さらに放送を利用した教育などが、どんどん入り込んできた。これまでの通学タイプの大学では時代に追いついていけない。それに対応するには大学規模の拡充、広域化を急ぎ進める必要がある。少ない数でたくさんの科目を持つより、科目によっては、他の大学の得意とする、そちらと、衛星を使った遠隔教育、共同ゼミや公開ゼミなどを進めた方がよい。そのやり方が学生の受けもいいといわれている。

それから資材の競争も激しくなっている。国内だけでなく外国からも、ものすごい攻勢が掛かっている。インターネットを使ってアメリカの大学が日本で教育ができる。日本も防止策をしているが、崩されるだろう。このように教育の進化はものすごく早い。だから本学も単位互換協定大学などと連携して、早急に対処する必要がある。

県内に住んでいても、世界を相手に仕事をする時代である。国際人をどう育てるか。語学力、コミュニケーション能力のほか、相手の異文化を理解し、人間としての差別、偏見を持たない客観的な広い視野を持つ人材を育て、「人を大事にする」という教育目標を掲げてもいいのではないか。国際文化学部として今後、力を入れたい国は中国

と中南米である。両国とも世界の中で唯一、豊富な資源を有しており、大きな可能性を持っている。日本政府も中南米に外交戦略を傾けている。中南米は、沖縄の人的ネットワークが一番多いところであり、国際文化学科では、他の大学にない中南米コースに力を入れている。これからも意識していきたい。

司会 大学側から中身の濃いアドバイスを受けました。次は本学で学び、卒業した若者の諸体験、本学への期待、後輩への提言を聞きたい。まず名城さんからどうぞ。

学生に励ましのエール

名城さん 学校卒業後は、インターナショナルスクールや高等専修学校で教職に就き1993年、名護市内にウィング英会話スクールを立ち上げた。英語教育学の理論的強化を求めていただけたに、名桜大学大学院が創設され時には胸が高鳴った。これまで実践的につくりあげた方法論とデータを大学院で学術的かつ理論的に学び、よりオリジナリティーの高い創造的研究ができた。確固たる理論を持った英語教育実践者になる道が示された。大学院では求めているものにいくつも出合った。専門分野の研究では、より深く、広く研究ができ、修士論文の作成のプロセスでは研究の醍醐味を味わった。

地域社会で語学スクールを経営しているが、大学院で学んだことは、いろいろな形で子供たちに反映されている。小学生や中高校生が、自分も大学、大学院に行きたい、と話している。修士論文では、小学生英会話クラスの模様をすべてビデオに収め、文章化して分析した。いつもやっている行動を理論的に裏付ける作業は容易ではなかったが、いい勉強になった。これも大学院で学んだ成果である。

'04年4月から本学の非常勤講師を勤めているが、学生たちを前に時折、激励のエールを送ったり、彼等の夢について語ったりしている。大学院で研究してきたからこそ講師の道も開けた。現在、大学生に語れるということを大事にして、自分自身もますます練磨していきたい。大学院ではかけがえのない友人、恩師に出会った。これらは人生の宝物である。大学院は、とても温かな空気が流れている。先生方はじめ職員の方々も本当に親身になってやってくれた。警備や掃除をするおばさんたちも、温かく、とてもいい感じだった。そういう雰囲気の中で、研究テーマは真摯な学問への眼差しにあふれている。お互い励まし合い切磋琢磨した日々は、それぞれの人生の中

でも貴重な時間であったと確信する。大学院の存在価値は修了生の今後の歩みによって証明されるに違いない。

司 会 語学力をつけるには、どうすればいいのか。福地さんの経験からどうぞ。

1 年から語学力をつける

福地さん 中南米に関して述べたいと思います。国際文化で現地実習に参加し、語学を学びました。中南米地域の基礎的な知識を学びました。語学力は1年からちゃんとやったほうがいい。短いスタンスで方向性を持たせた方がいいのではないかと思います。来年、ペルー同窓会の総会が4月にあります。語学のボランティアスタッフを募集しているので、ぜひ名桜大の学生にも観光などの案内をさせたいと考えています。2年生の彼等は基礎科目を始めたばかりで、まだ知識の面では不足していますが、そういうものを通して国際舞台でいろんな経験をさせたいと思います。それを生かして大学で研究活動などをして就職につなげていければ幸いです。



福地 恭子

司会 普久原さん、留学されて一番よかったことは何ですか。

異文化を理解し合う

普久原さん 名桜大学を地域の大学にしたいというのが、私の願いです。その中にOBも入れて大事にしてほしい。本学は単に高校生を受け入れて世の中に送り出すだけのプロセスではないと思います。学ぶのは4年だけでなく生涯学習です。個人的な話だがOB会の代表に社会の現状などの講義をさせる方法もあるのではないかな。もう一つは1期生として、本学で学んできたわけだが、その頃はまだ体育館や多目的ホールもできていませんでした。そんな時代から見てきたので、大学に対する思いは、より強いものがあります。本学は習うだけの大学ではないと考えています。それ以上に人と人が互いに理解できる環境に恵まれた大学であり、今後もこれは守り続けてほしい。外国、沖縄、日本のそれぞれの文化を一方的に押し付けるのではなく、異文化を理解し合う事が大事なことです。本で学べないことがあり、人と人が交流するだけ

で、すごく勉強になりました。そういった環境にしてほしい。習うというのは、知的生産の一步であり、物事を理解するまでには、努力が必要です。今後の大学のあり方は、これからはグローバルな時代になるのだから、単に異文化を習うとか知るだけではなく、その人たちとどう接するか、そのために理解力を付けないといけないと思います。

司 会 ここで、理事長におたずねします。第1点は「本学と地域社会との連携（つながり）」という問題を、将来どのように進めていくべきか、第2点は「海外諸地域（協定大学、県人会等）との連携」の問題を将来どのように進めていくべきか、この2点についてお考えをお聞きしたい。

中国との提携校を急げ

比嘉理事長 まず、海外との連携、本学は現在、どこに向いているのか。中国からの留学生が一番多いが、中国との提携校がない。ぜひ南米、中国との提携をしてもらいたい。提携校に行ったことがあるが、教員の皆さんは学長らと話が終わると、すぐ帰ってしまう。地域の文化、生活というの少なくとも2、3日を掛けて回るべきだ。何も調べないで、ただ行って帰るのでは実際に成果が上がらない。やはり教員、職員が行って、文化、生活、風俗などをしっかり把握してはじめて、提携を深めることができる。特に沖縄と中国は500年前から交流している。本学としては、中国との提携校を実現してほしい。地域との連携だが、学校だけで学ぶのではない。地域住民も利用できる生涯学習センターが完成した。そこで各地域の住民と交流をしながら実務を積み上げることもできる。大学には同窓会、後援会もある。協力会が結成された。さらに地域との関わりをよくするために北部全体で協力会をつくった。現在、2000人余だが、5000人を目標にしている。同窓会・後援会・協力会の3者が一体になれば、地域の名桜大になる。それから法人と大学があるが、自己財源の拡大を考えなければならぬ。そのためには収益法人を設立する必要がある。

収益事業については真剣に考えなければならぬ。学生募集をした時、名護市は家賃が高いと、学生から4万～5万円では生活ができない、と苦情が出た。そこで民間の方にアパートを造らせ、それを名桜大が借りる。そこが満室にならなくても満室状



事務局：屋嘉義和(総務課長) 金城正英(新学部学科新設準備室長) 渡具知伸(就職課長)
山城耕政(入試広報課長) 比嘉一成(総務課企画係員)

態の家賃を支払う。4万円のものを2万9000円で安く学生に提供している。現在、どこも満室で喜ばれている。アパートと大学を結ぶバスが走っている。これも学生の通学を助けている。やはり収益法人を設立して本学も宿泊施設からいろいろ収益をあげる事業について考えてみる必要がある。そこで視点を変えて企業的発想で大学を見ていかなければならない。これまでは教える、研究する、だけだった。企業的発想を入れて収益事業を考えていかねばならない。そして教職員にも還元すると同時に一番大事なのは学生に還元していくことである。



司会・山端 清英

司 会 ここで座談会の結論となることを話していただきます。

特に強調したいこと、追加したいこと、これまで話した内容を短くまとめていただくこと。この3点のうちいずれか1点だけを選んで、それを結論としていただきます。どうぞ。

有言実行で教育・研究を強化

普久原さん まず同窓会の立場からお願いしたい。同窓会を'02年に結成したが、まだ若い。会員状況が厳しい。運営について大学は支援してほしい。

福地さん 生涯学習センターは、地域との接点を持つということですが、今年から那覇にあるホスピスの会に参加しています。今、テーマになっているホスピスの勉強会にも医師のほかに地域の人たちも、かなり参加しています。地域の人たちに魅力的なテーマがあれば参加しやすいのではないのでしょうか。

名城さん 大学院が10周年を待たずしてできたことは大いに評価される。大学院生

に関して言えば研究者の卵であり、それぞれの研究テーマを持っている。研究者のテーマに絶えず刺激を与えて引っ張っていくことをお願いしたい。

垣花学務部長 大学の雰囲気というか、大学を、すべての面で地域住民の憩いのセンターにしたい。子供たちも大学に遊びに来る。お母さんたちは生涯学習センターで勉強する。そして高齢者の方々も、寝たきりの長寿ではいけないので体を鍛えに来る。そういうふうに大学が憩いの場になる。まあ、大学公園といってもいい。そういう風に環境整備をする。そういう位置を大学は確保すべきである。したがってヤンバルにおける文化、教育の在り方を常に大学が旗を振っている状態にして、名護市が将来、大学街となり、勉強する、生活するのに楽しい地域であるような雰囲気づくりのために大学の形を構築する。みんなの憩いの場となる大学になるようにしたい。

黒江教授 北部12市町村の名護の人口5万余の中にある大学である。イタリアのトリビソという町が7万人の人口でひじょうに住みやすい街で観光客も多く、21世紀のこれからの人間が生きていく街、観光のモデルになるところである。名護の名桜大学を取り巻く環境だけを取っても素晴らしいなあ、と強い思いがする。今の状況の中で大学全体も同じだが、名桜大学も教育改革の大事な時期にある。環境は県内大学の中では一番いい所にある。そういうことを大事にしながら、片一方で大学のマネジメント、カリキュラムの在り方など、健全な教育のリーダーシップを持って再構築していただきたい。

安田学長 一言で言えば、決めたことは実践していく。有言実行である。

比嘉理事長 素晴らしい座談会だった。特に卒業生の皆さんから立派な提言があった。一言で集約することは、難しい。どんな職場でも、ものが言えるような、揚げ足を取らない、そして明るい職場が一番よい。もう一つは、教職員も広く見回して360度見えるような人がいいと思う。学長も言われたように有言実行に尽きる。地域や企業が高度な技術を求めているので、素晴らしい人材を養成して送り出していきたい。それには教職員も立派な人材を集めなければならない。今後も理事会は大学と協調しながらやっていきたい。これが車の両輪である法人と大学である。

司会 有難うございました。本学が青年期の時代に入って、明るい長期的な展望を持って進歩、発展していくことを念願して座談会を閉じます。

第2章

将来計画

Ⅰ 学長の方針

私学経営は「三位一体」改革にみられる国の財政引き締めや少子化時代の到来などのあおりを受け、冬の時代真っただ中にある。本学としては、常に現状を真摯に受け止めながら、長所は伸ばし、弱点は1つ1つ克服していきたいと考えている。そして、刻一刻と進む大学改革の流れに埋没することのないよう、改革のペースを上げていきたいところである。

そのためには、経営の責任主体としての理事会と、教育現場組織である大学の権限と責任を明確に理解した上で、両者の意思の形成および決定がなされなければならない。そこでまず理事会の下で、今後の教育・研究の目指すべき方向性を含めた中長期的ビジョンとしての具体的な「基本構想」の策定が必要になってくる。この中には、緊急的な課題として平成17年度以降における学部・学科（人間健康学部スポーツ健康学科に係る）の再編計画も含まれる。

我々を取り巻く厳しい状況の変化に果敢に挑み、ただ、これまでのやり方、方法論に固執するだけでなく、経営と教学の自己改革によって、学生に対する教育的見地から真の意味でのサービスを高め、創造的な前進を遂げていかなければならない。

大学改革に共通する基本的な中、長期の検討課題として「学長アクションプラン」を次の通り掲げ、教職員一丸となって順次実施しているところである。

教育の活性化

- 外部評価の導入
- 教育COEへの積極的取り組み

学生の目標に立った教育の充実という観点から、教育の質を高める体制を整える。
(2004年度から順次実施)

- 英語教育の見直し
- 導入教育の必要性
- 各種指導体制の強化
- 教員の意識改革
- 組織的なFDの実施
- 教育評価の徹底
- 魅力あるカリキュラム開発
- 資格取得の充実
- 就職指導の充実 等



学部教育の活性化のために、きめ細かな施策を行っていく。英語教育においては、学生個々の実力、意欲に応じた柔軟性のある教育を施し、落伍者の出ない体制を整える。また、低学力の学生、学習意欲の低い学生への教学指導、生活指導、就職指導体制の強化を図る。教員スタッフ、教育プログラム等様々な教育資源の活性化を進める。
(2003、'04年度から順次実施)

学生確保に向けた取り組み

- 教育活性化・教育内容の改革
- 広報・広告活動の有効な取り組み
- 就職実績を向上させる取り組み
- 資格取得を支援する取り組み
- 施設・設備を整備充実させる取り組み
- キャンパスアメニティーの向上
- 他大学との連携を図る取り組み



私大の学生募集状況は2極分化しており、定員割れはますます悪化する環境にある。入試の多様化（軽量化）が進み、品質保証（入試）の役目は失っている。さらに入学定員を満たすには低学力の学生、学習意欲の低い学生まで底ざらいしなければならない。経済不況により、国公立大学へのシフトが顕著になるなど諸問題が山積している。

しかし、これらに対処していくには、大学自らの改革、即ち教学改善、経営改革なくして道は開けない。学生募集にかかわる取り組み事例として小道具は出そろっており、あとは組み合わせを工夫し、実践するだけである。（順次実施）

キャンパスの総合整備

- 生涯学習センター
- 学生会館
- 多目的グラウンド 他

キャンパス整備の考え方と方針を策定し、計画的戦略的にハード整備を進めていく。特に開学10周年記念事業において、理事長をはじめとする関係各位の多大な尽力により、施設の充実が図られることとなった。今後も大学院を含めた教育施設やスポーツ振興のために必要なハード整備について重点的に進める。（2004年度から順次実施）

研究推進体制の整備

- 総合研究所の機能強化・効率的運営
- 研究費の戦略的・効率的運用と評価制度の導入
- 外部資金の導入

研究活動や研究費の配分についても業務上、総合研究所を通じた一元管理が望ましい。研究条件の整備、研究成果に対する成果主義的な方向性、学長主導（プール）による戦略的な研究プロジェクトの展開等を図る。また、産学連携を積極的に進められるよう体制整備を図る。（2004年度から順次実施）

教授会の活性化

- 教授会規則の改定（審議事項、教授会構成員等）
- 各種委員会の合理化
- 代議員会制度の活用

教授会運営の迅速化と審議事項および意思決定（権限）を明確にし、教授会の活性化を図る。また、各種委員会の統廃合を大胆に進め、合理化する。さらに代議員会制度の活用による議事の短縮・迅速化を図る。（2004年度から順次実施）



生涯学習センター



滞在型研修室



名桜大キャンパス

2 中・長期計画



学長室にて

学生を確保、経営基盤強化

名桜大学が開学して10周年を迎えた。昨今の少子化や大学の新增設によって、ますます大学間の競争を激化させている。そういう厳しい中で、本学は少年期から青年期へ向かう重要な時期に入った。そこで本学の経営、教育・研究の在り方を展望する「中・長期計画」について安田晃次学長、平良芳一総務企画部長にインタビューした。その中で安田学長、平良総務企画部長は「中期、長期の計画の基本は、何と言っても経営基盤の強化、そして学生をしっかり確保することが第一である」と強調した。

開学10年を経過し、学校法人としての経営の現状、また学生の志願者数などに変化が見られるか。そして中期計画はスムーズにいったのか。

教育の在り方再チェック

安田学長 開学して6年後の2000（平成12）年ごろから、志願者減による入学者の減少が目立つようになってきた。その原因については、さまざまな要因が指摘されて



安田 晃次

いる。本学は、北部という人口過疎地に立地している立地条件、施設整備の不足、通学交通条件、居住条件などハードの問題が上げられる。さらに大きな問題は、本学に入学して4年間で卒業できた学生の比率は2003年度で平均67%しかなく、中途退学、除籍者数比率は18%にも上っている。これは、授業について行けなくて、安易にやめる学生もいるが、教育システム、学生をひき付けるだけの教育、研究がなされているのか、どうか。今後、それを解明し

ていく必要がある。

志願者が減り過ぎても困るが、本学の理想的な学生数は2000人規模である。教員と学生が直に何でも話し合える、こじんまりした大学が望ましい。つながりを密にしてこそ立派な教育・研究ができ、社会のニーズに応える人材の育成ができる。もちろん県内の優秀な学生をはじめ、国際的な名を挙げて、世界各国からも注目されるような大学で、さらに磨き上げ「ダイヤモンド」を社会に送り出していきたい。

全学の教育改革が急務

平良総務企画部長 開学当時は、県内の他大学にはない学部学科を設置して、当初は競争率も高かった。だが、次第に志願者が減っていったのは、ほかに要因があるはずである。社会の変化、進化は急速に進んでいる。大学間の競争に打ち勝つには社会のニーズに相応した教育改革をしなければならない。なぜ、定員割れを起こすのか。なぜ学生がついてこないのか。学部学科、全学的に論議に論議を重ね、統一した教育改革が必要かつ急務である。これまで本学の経営は、我が国の伝統的な大学経営を踏襲してきたといえる。というのは、大学経営を教授会主導のもとに理事会が追認してきたパターンである。これからは理事会と大学側が一つになって、諸問題を解決していくような強固な協力体制のシステムを構築したい。

中期計画としては、開学10周年記念事業として生涯学習推進センター、野球場、ソフトボールやサッカー、ラグビーの練習場である多目的広場などがあり、スムーズ

に進んでおり、来春から活用される。

大学を取り巻く情勢が厳しい中で、志願者を増やし、定員割れをふせぐ方法はあるのか。

健康支援の人材を育成

安田学長 新学部の設置をめぐり全学科の専門教授、教職員が論議を重ね、沖縄の特性を生かした人間健康学部をつくった。我が国は、ハイストレス社会ともいわれ、国民の関心が健康に向いている。しかも沖縄は、長寿県であり、癒しの島として県内外から注目されている。薬草などを活用した健康産業も脚光を浴び、陸ではスポーツキャンプ、海では海洋スポーツなど、沖縄はまさに健康、保養をマッチさせたスポーツアイランドである。だが、県内のほかの大学には、健康、スポーツ産業に従事する、人間の健康についてトータルな知識をもった人材を育成する学部がない。それだけに、この学科は、県民の期待に応えられるように専門教員を揃え、健康を支援する人材を育成したい。本学部は2005（平成17）年4月開講を目指している。人間健康学部の関連施設として、温水プールの工事が'04年11月に着手した。さらにスキューバダイビングの免許も取れる水深5mのプールも併設する。

また、地域に開かれた施設として北部「生涯学習推進センター」が10月に完成、もうすぐ供用開始される。本学は、名護市をはじめ12市町村と県が資金を拠出して造った公設民営の大学である。この施設は、学生をはじめ、地域住民の生涯学習の場としても使われる。今、地域に恩返しというか、貢献できると思う。また人間健康学部が文科省から認可されれば、この施設も使う予定である。

沖縄独特の学部学科を

平良部長 現在、本法人が経営する名桜大学は、国際学部の一学部である。このところ、本学に入学する学生が、だんだん減少してきており、経営的にも厳しさを増してきている。情報技術の進展、高齢者社会の到来などにより、社会、産業構造も急速に進んでいる。当然、学生の大学に対するニーズも変わってくる。本学の一学部だけで

は、学生や企業、父母らのニーズに応えられないと思う。経営基盤の強化のためにも、沖縄独特の地域特性を生かした新たな学部設置が必要である。来年から新しい人間健康学部スポーツ健康学科を設置する予定であり、地域住民からも健康に対する要望が多かった。



平良 芳一

これまで、述べられたのは、数年前から進めていた中期計画だが、長期的な計画の目玉、例えば、施設、学部など新たな設置計画があるのか。

有用微生物学部の設置へ

安田学長 比嘉照夫琉球大学教授が開発した有用微生物群は、EM産業として農業分野から健康、環境、医学の分野まで幅広く活用され、産業化されている。

本学は、長期計画の目玉として、「有用微生物学部」（仮称）を設置し、3年後の2007（平成19）年から学生募集を開始する予定だ。名護市出身の比嘉教授を学部長に、EM産業と共同で有用微生物の研究や有用微生物の応用技術を持った人材を育成する。これによって海外で注目されているEM、有用微生物は本学から全世界に発信できるという特色ある大学になるわけである。

微生物を利用した産業は、古くから発展し、活用されてきた。例えば、発酵産業、乳製品やビール、酒類など多い。EM産業は、業績を着実に伸ばしており、海外でも注目され、そのネットワークは全世界を結んでいる。沖縄で生まれた有用微生物群の応用技術は今後、ますます発展を続け、人間の健康や環境問題の解決に世界でリーダー的役割を果たしていくものと確信する。

大学間競争に打ち勝つ

既存学部の改革 開学した当時、国際学部の国際文化学科、経営情報学科、観光産業学科は、県内大学にはなく、それぞれ特色のある学科として注目を集めた。それから



右より安田晃次学長、平良芳一郎長

10年経った現在、本学と似たような学科が他大学にも設置され、琉大には、来年から観光科学科が設置される予定であり、大学間の競争は、一層激しくなってきた。理事会では、2003年に各学科に改革を求め、進めているが、難航している。

北米、中南米、東南アジアに重点

国際文化学科 本学科の特徴は、環太平洋の地域文科の教育研究にある。特に沖縄と関係の深い、北米、中南米（ブラジル、アルゼンチン、ペルー）、アジア（中国、タイ）の3地域に重点を置くべきである。育成する人材像も、それぞれ3地域で就職できるか、あるいは、それぞれの地域に関係する仕事に就職できる人材育成に的を絞るべきである。それによってカリキュラムを組む必要がある。例えば、現地の言語、日本と現地の交流史、現地の基本的な法律知識、現地の商慣行、貿易の基本的知識、現地企業や日系企業での長期インターシップなどがある。英語教育については特別のプログラムを組む必要がある。

望まれる経営者コース

経営情報学科 経営情報学科の特徴は、高度な情報処理能力を持った経営的センスに優れた人材を育成することにある。このような特徴、人材育成像を再確認し、モデル

コースの見直しやカリキュラム階層化などを行う必要がある。例えば、情報処理技術を駆使した会計処理→会計コース→主に経営哲学を教える経営者コースが望まれている。

観光産業に誇りと自信を

観光産業学科 県の基幹産業である観光産業に資する人材の育成を図ることが本学科の特徴である。しかし、育成する人材像が明確になりすぎて、即戦力になる実務的なコース、例えば、ホテルコースなどが専門学校と同じような印象を与えるコース設定になっている。学生がもっと観光産業に誇りと自信を持つようなコース名とカリキュラムを準備すべきである。例えば、観光産業に従事する幹部候補生を育成するコース、カリキュラムもイギリスにおける執事の歴史、その精神など、人間を迎えるホスピタリティーの哲学コースがある。

世界に発信できる校風を確立

全学共通 校風の確立。例えば、フロンティア精神にあふれた大学、若い自由な才能があふれる大学、国際人があふれる大学。著名な大学にはそれぞれの校風が息づいている。校風とは、建学の精神と人材育成の理念が具現化したものである。本学は地域の力を結集してできた大学であり、地域の持っている資源、県民のホスピタリティー、長寿、空手など琉球の文化、海外に進出した移民の歴史など、世界に誇れる資源があるので、これら沖縄県の文化を継承発展させ、世界に発信できる校風を築いていかなければならない。



第3章

期待の言葉

北部市町村会会長（東村村長）
宮城 茂



住民との交流を活発に

名桜大学が、開学して10年を迎えた。少年期から一番、重要な青年期に入った。大学教育に必要な施設も整備され、これからは、北部地域の住民が誇りに思うような学園都市の大学を期待する。開学し7年間で2000人余の卒業生を出し県内はじめ本土、さらに海外で活躍されていることは、心強い限りである。

北部は、本島の60%の広大な地域で、人口が全体の1割にも満たない。それが大正時代から少しも変わっていないというのは、何に起因するのか。復帰した時

の100万から30万人増え、県人口は130万人と急増するが、内閣府の統計によると北部は、この10年で4000人しか増えていない。雇用創出も約1000人の微増。北部振興策を含め、国の北部に対する支援事業、高速道の開通や海洋博、サミットなどのイベントが多少、影響している。我らが目指す北部振興というのは、極端な言い方すると、一つ屋根の下で3世代、せめて2世代でも、一緒に住んでみたい。でも北部には仕事がないから、結局、高校を卒業すると中南部に出て行く。親子が、ばらばらになってしまう。これに歯止めを掛け、若者の定着を図ることが大学設立の発端だった。

名桜大学の理事会に企業経営者も参加してもらい、ここ2、3年、大学運営も徐々によくなったのではないか。特に北部振興による留学生の宿舎、生涯学習センターも完成し、記念事業であるグラウンドなどの施設整備も着々と進んでいる。これからは地域に開かれた学校、地域の大学として運営していくには、教諭陣も含めて地域の振興の在り方などを探るネットワークを結び真剣に考えていけば北部振興につながる。そして卒業した人たちも、できるだけ地元で就業できるシステム、その基盤づくりが今、求められている。

東村も今年、名桜生を1人採用した。公募による試験を受け、優秀な成績だった。大学の教員、学生らはもっと地域に入り込んで住民との交流、イベントなどのボランティア活動を通して、地域の歴史、文化を知ることができる。また、学部学科についての情報なども得られるのではないか。今年、健康学部も申請されている。地域住民にとっては医療保健、福祉部門の看護師を養成する学科がほしい。医療関係者は北部の僻地には来ないのが現状である。北部はいろいろ政策展開をしているが、大きな経済の幹にはなっていない、枝葉に過ぎない。学園都市としての名桜大学が、北部振興のリーダーとしての役割を發揮できることを期待したい。

北部振興会会長（伊江村村長）
島袋 清徳



地域に好かれる人材を

北部の振興という立場から、名桜大学が開学10周年を迎えたのは、ひじょうに意義深いものがある。北部は県都那覇に比べて産業、教育などいろんな面から不利な条件、環境にある。しかし素晴らしい自然に恵まれた、やんばるの環境を生かし名護市を中心にした学園都市は、着実に整備されつつある。宜野座村には国立の高専も開校した。恩納村には大学院大学の設立が決まっており、そういう意味から名桜大学は学園都市としての中核を担っていかなければならない大学である。

「平和・自由・進歩」を教育理念に国際舞台で活躍する人材の育成を掲げており、卒業生は、この10年で2000人を突破した。そして海外で就職し活躍している卒業生もいる。県内でも各種の企業、教育関係、観光産業、自治体などで幅広く活躍され、企業などの関係者から「名桜大卒は、よく働く、積極的だ」とおほめの言葉を聞かされる時、我が子がほめられているようで、ひじょうに気持ちがいい。今後も各界から注目されるような人になってほしい。伊江村出身で名桜大学に入学し、これまでに卒業した者は5人。那覇市や県庁などのほか、各種企業でも活躍している。一昨年、村の職員採用試験で全国から公募した。10人採用に県内大学から60人、本土の大学から40人の合わせて100人が応募、10倍の競争率だった。だが名桜大からはいなかった。まだ北部の若者は、都会志向的なところがあるのではないか。これから卒業生が次第に増えていけば北部地域に必ず目を向けるようになる。ぜひ、ヤンバルのために活躍してくれることを北部振興会は期待したい。たまに名護市に来ると、大学の風を感じる。大学設置前には見られなかったが、若者たちが街を往来するだけで、にぎわいを見せる。

名桜大学の学生たちが、北部の実態、歴史、文化などを知ってもらうために、もっともっと地域に浸透してもらいたい。大いにイベントなどにも自主的に参加して、ボランティア活動をして地域住民と交流を深めることも大事だと思う。市政「100年の計」と言われるように大学効果は、すぐ出るものではない。地域が大学を政事にして、最高学府としての環境づくりを北部市町村が一体となって取り組んでいかなければならない。また、大学側もその認識を持って、21世紀を担う人材育成という使命を果たしてほしい。最後に今、地域から好かれる人材、地域が必要とする人材を育ててほしい。

資料

第六編



大学の歩み

1991年 7月14日	第1回学校法人名護総合学園創立準備委員会発起人会開催
8月6日	第1回大学設置専門委員会開催
11月9日	第1回学校法人設立専門委員会設置
1992年 3月31日	名護市総合学園設立審議会より名護市長へ大学の基本計画の策定および大学の位置、敷地の選定について答申
4月30日	文部省一次申請、一次申請受理される
5月20日	大学設置ヒアリング
5月28日	学校法人審議会ヒアリング
6月5日	第一次審査評定通知
7月20日	名桜大学設置認可申請および学校法人名護総合学園設立認可申請
7月31日	文部省のチェック受け受理される
9月4日	フォーラム「みんなでつくる名桜大学」開催
10月9日	文部省（学校法人審議会・学校法人の寄付行為の認可に関する説明聴衆）
10月23日	文部省（大学設置審議会）面札審査・大学設置認可にかかわる面接審査
1993年 1月8日	文部省調整 ①名桜大学の設置一次申請通知書にかかわる口頭指示 ②法人一次申請通知書にかかわる口頭指示
4月30日	名桜大学敷地造成工事入札
5月6日	名桜大学敷地造成工事地鎮祭
6月30日	文部省への二次申請受理
7月12日	名桜大学校舎建築工事地鎮祭
9月28日 ～29日	文部省現地調査実施
12月21日	文部省が学校法人名護総合学園寄付行為認可
1994年 4月15日	名桜大学開学・第1回入学式
1995年 4月15日	開学記念式典
1996年 4月2日	名桜大学総合研究所設立
1997年10月14日	名桜大学後援会設立
11月28日	名桜大学完成記念植樹
1998年 3月20日	第1回卒業式
1999年 4月29日	沖縄県植樹祭
6月28日	多目的ホール完成
7月17日	開学5周年式典
2000年 6月30日	名桜大学大学院設置申請
12月21日	名桜大学大学院設置認可
2001年 4月1日	名桜大学大学院開学

歴代役員

理 事	
氏 名	役職名（当時）
東江 平之	名桜大学長
東江 康治	名護総合学園理事長・名桜大学長
阿部 充夫	放送大学学園理事長
新垣 誠福	新垣産業(株)代表取締役会長
稲嶺 恵一	(株)りゅうせき代表取締役会長
上間 博安	今帰仁村長
小谷 達男	名桜大学研究所長
崎間 晃	(株)琉球銀行代表取締役会長
尚 弘子	放送大学沖縄学習センター所長
砂川 榮右	名桜大学事務局長
仲井眞弘多	沖縄電力(株)代表取締役社長
比嘉 茂政	恩納村長
比嘉 幹郎	ブセナリゾート(株)代表取締役社長
外間 守善	沖縄学研究所長
嶺井 政治	沖縄電力(株)代表取締役会長
屋比久 浩	名桜大学副学長
山里 將晃	名桜大学名誉教授

監 事	
氏 名	役職名（当時）
崎濱 秀則	本部町収入役
島袋 利治	名護市収入役
高嶺 善包	新日本監査法人沖縄事務所代表社員

顧 問	
氏 名	役職名（当時）
稲嶺 恵一	沖縄県知事

評議員	
氏 名	役職名（当時）
東江 平之	名桜大学学長
東江 康治	名護総合学園理事長・名桜大学長
安里 進	名護市議会議長
新垣 誠福	新垣産業(株)代表取締役会長
伊江 朝章	名桜大学附属図書館長
伊集 盛久	北部市長村議会議長会会長
宇江喜達也	琉球新報(株)(本学卒業生)
上江洲 均	名桜大学国際文化学科長
上間 博安	北部市町村会会長
運天 富三	国頭地区中学校校長会会長
垣花 郁夫	名護市国際交流会館館長
我喜屋宗弘	名護市議会議長
岸本 建男	名護市助役
岸本 正治	名護高等学校長
喜納 安武	本部高等学校長
金城 龍生	北部地区小・中学校校長会会長
古波倉正偉	名桜大学教授
小濱 哲	名桜大学観光産業学科長
沢 恒雄	名桜大学経営情報学科長
重原 保	海上保安庁来島海峡海上交通センター（本学卒業生）
芝野 治郎	名桜大学附属図書館長
島袋 義久	国頭地区市町村教育長協会会長
白井 晴男	名桜大学経営情報学科長
新城 繁正	北部市町村会会長
新城 敏雄	名桜大学国際文化学科長
砂川 榮右	名桜大学事務局長

評議員	
氏 名	役職名（当時）
砂川 寛昭	名桜大学事務局長
瀬名波榮喜	名桜大学副学長
高多 清在	名桜大学教授
玉城 正則	北部地区小・中学校校長会会長
照屋 全吉	北部市長村議会議長会会長
豊元佐知子	名桜大学職員（本学卒業生）
仲田 和夫	国頭地区教育長会長
仲地 清	名桜大学附属図書館長
中村 明	名護高等学校長
西島 一將	国頭地区市町村教育長会会長
比嘉 茂政	恩納村長
比嘉 敏雄	名護市教育長
平敷 浩邦	名桜大学国際文化学科長
平識 善盛	名桜大学観光産業学科長
外間 守善	沖縄学研究所長
又吉 宗慶	名護高等学校長
松川 守	名護市商工会イベント放送局（本学卒業生）
松田 憲和	名護高等学校長
宮城 愛子	浦添総合病院薬局長
宮城 里子	名護市議会議員
宮城 保繁	名護高等学校長
宮平 安德	北部市長村議会議長会会長
森川 豊	オリオンビール(株)専務取締役
安井 祐一	名桜大学教授
屋比久 浩	名桜大学副学長
山内 晴子	北部地区連合婦人会会長

評議員	
氏 名	役職名（当時）
山里 清	琉球大学教授
山城 正	北部市長村議会議長会会長
山端 清英	名桜大学国際文化学科長
吉元 嘉正	名護市助役

現役員

理 事	
氏 名	役職名（現在）
比嘉 鉄也	名護総合学園理事長
安田 晃次	名桜大学長
岸本 建男	名護市長
宮城 茂	北部市町村会会長
荻堂 盛秀	名護市商工会会長
瀬名波榮喜	名桜大学名誉教授
前田 裕継	(株)屋部土建代表取締役会長
仲泊 弘次	(株)東開発代表取締役会長
仲田 和弘	沖縄電力(株)代表取締役副社長
森谷伊三男	公認会計士・税理士森谷事務所
生見 哲郎	名桜大学副学長

監 事	
氏 名	役職名（現在）
屋良 宣廣	宜野座村収入役
玉城 辰彦	弁護士法人ていだ法律事務所代表社員

顧 問	
氏 名	役職名（現在）
阿部 充夫	財団法人放送大学教育振興会理事長
崎間 晃	(株)琉球銀行相談役

評議員	
氏 名	役職名（現在）
安田 晃次	名桜大学長
伊佐 若子	名護高等学校教諭
上江洲 基	名桜大学国際文化学科長
上江洲安幸	名桜大学職員
浮島 明進	(財)名護市観光協会理事長
荻堂 盛秀	名護市商工会会長
垣花 勝行	名桜大学学務部長
神山 正樹	(株)東開発
岸本 吏	(株)沖縄三菱電機販売
岸本 恵光	沖縄県議会議員
金城 真紀	本部家具
芝野 治郎	名桜大学大学院国際文化研究科長
島袋 吉和	名護市議会議員
末松 文信	名護市助役
平良 芳一	名桜大学総務企画部長
仲里幸一郎	名護市役所
仲泊 弘次	(株)東開発代表取締役会長
中山 哲	名護市役所
生見 哲郎	名桜大学副学長
比嘉 幹郎	ブセナリゾート(株)代表取締役社長
比嘉 依子	名桜大学職員
普久原アントニオ	第46回米州開発銀行年次総会沖縄開催実行委員会
宮城 茂	北部市町村長会会長
宮平 栄治	名桜大学経営情報学科長
山里 全用	前名護市教育長
李 鎮榮	名桜大学観光産業学科長

教員紹介

国際文化学科

教授



内間 直仁



Timothy C. Guile



Donald M. See kins



新城 敏男



仲地 清



中村 誠司



山端 清英



Caroline C. Latham

助教授



上江洲 基



Farrokh Shayesteh



住江 淳司



Stephen Arthur Templin



渡慶次 正則



名嘉 泰



山田 均



与那覇 恵子

経営情報学科

教授



石川 清治



芝野 治郎



清水 則之



宮平 栄治

助教授



Peter Arathoon



Fathelalem F. Ali



木村 堅一



金城 亮



仲尾次 洋子



中里 収

講師



大石 節



大城 渡



佐久本 功達



山口 夕妃子



林 優子

観光産業学科

教授



黒江 浩紹



小濱 哲



平良 勉



西平 守孝



平識 善盛

助教授



新垣 裕治



上間 篤



曽山 毅



花城 洋子



朴 在徳



宮城 敏郎



山城 秀之



李 鎮榮

講師



村上 光信

職員紹介 (平成16年12月現在)

総務 企画部



部長 平良 芳一



課長 屋嘉 義和



係長 荻堂 盛淳



主任 山川そのみ



新川 悦子



玉城 信弘



岸本 奈々



係長 根間 朋江



中村 奈月



比嘉 一成



鈴木 邦治



比嘉 力



上運天梨恵



宮城奈々子



室長 金城 正英



主任 大城こずえ



上江洲安幸



課長 米須 義秀



係長 喜瀬 直樹



兼次千恵美



係長 大城 洋



伊計 耕一



仲松 健二

学務部



部長 垣花 勝行



課長 池原 秀人



係長 比嘉 辰己



主任 新垣 直美



浦崎 淳也



係長 上原 康成



上江洲 剛



又吉 和江



大城 章紀



係長 比嘉 能正



主任 赤嶺 達也



儀部 毅



又吉 寛子



課長 山田 義孝



係長 新里 晴美



真栄田義竜



中村 香織



松本 幸枝

学務部



係長 武村 朝吉



志喜屋さゆり

就職部



部長 知念 一郎



課長 渡具知 伸



崎浜 宏信



照屋 信次



比嘉真恵美

入試 広報部



部長 又吉 純



課長 山城 耕政



主任 市原 修



松田 勇



國吉 憲昭



上間 久雄

図書館



館長 石川 清治



係長 神谷 順子



遠越 享子



名城 弥生



比嘉 潤子



松田 鉄平

総合 研究所



所長 仲地 清



副所長 山城 秀之



大城美樹雄



岸本 裕光



松田亜紀子

言語学習 センター



津嘉山淳子

外国語教育科目

科 目	H 6	H 7	H 8	H 9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
英語Ⅰ	2	2	2	2	2	2	3	3	3	3	3
英語Ⅱ	2	2	2	2	2	2	3	3	3	3	3
英語Ⅲ	2	2	2	2	2	2	3	3	3	3	3
英語Ⅳ	2	2	2	2	2	2	3	3	3	3	3
英語Ⅴ	2	2	2	2	2	2					
英語Ⅵ	2	2	2	2	2	2					
英語Ⅶ	2	2	2	2	2	2					
英語Ⅷ	2	2	2	2	2	2					
初等英語Ⅰ							2	2	2	2	2
初等英語Ⅱ							2	2	2	2	2
総合英語							2	2			
総合英語Ⅰ（応用英語Ⅰ）						2			2	2	2
総合英語Ⅱ（応用英語Ⅱ）						2			2	2	2
英語購読							2	2	2	2	2
英作文							2	2	2	2	2
オーラルコミュニケーション							2	2	2	2	2
ビジネス英語							2	4	4	4	4
ドイツ語Ⅰ							2	2	2	2	2
ドイツ語Ⅱ							2	2	2	2	2
ドイツ語Ⅲ							2	2	2	2	2
ドイツ語Ⅳ							2	2	2	2	2
フランス語Ⅰ	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
フランス語Ⅱ	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
フランス語Ⅲ	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
フランス語Ⅳ	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
スペイン語Ⅰ	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
スペイン語Ⅱ	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
スペイン語Ⅲ	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
スペイン語Ⅳ	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
ポルトガル語Ⅰ					2	2	2	2	2	2	2
ポルトガル語Ⅱ					2	2	2	2	2	2	2
ポルトガル語Ⅲ					2	2	2	2	2	2	2
ポルトガル語Ⅳ					2	2	2	2	2	2	2
中国語Ⅰ	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
中国語Ⅱ	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
中国語Ⅲ	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
中国語Ⅳ	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2

外国語教育科目

科 目	H 6	H 7	H 8	H 9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
韓国語Ⅰ					2	2	2	2	2	2	2
韓国語Ⅱ					2	2	2	2	2	2	2
韓国語Ⅲ					2	2	2	2	2	2	2
韓国語Ⅳ					2	2	2	2	2	2	2
タイ語Ⅰ	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
タイ語Ⅱ	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
タイ語Ⅲ	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
タイ語Ⅳ	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
インドネシア語Ⅰ	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
インドネシア語Ⅱ	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
インドネシア語Ⅲ	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
インドネシア語Ⅳ	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
日本語Ⅰ	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
日本語Ⅱ	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
日本語Ⅲ	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
日本語Ⅳ	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
日本語Ⅴ					2	2	2	2	2	2	2
日本語Ⅵ					2	2	2	2	2	2	2
日本語Ⅶ					2	2	2	2	2	2	2
日本語Ⅷ					2	2	2	2	2	2	2
日本事情Ⅰ	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
日本事情Ⅱ	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
日本事情Ⅲ	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
日本事情Ⅳ	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2

基礎教育・情報処理教育科目

科 目	H 6	H 7	H 8	H 9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
言語表現論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
文学と人生	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
生活と音楽	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
美術の歴史と鑑賞	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
歴史学概論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
哲学の基礎	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
心理学	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
法学入門	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
憲法	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
民法と市民生活	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
政治学	2	2	2	2	2	2			2	2	2
経済学	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
経営学	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
社会学	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
人文地理学	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
職業と社会							2	2	2	2	2
基礎数学							2	2	2	2	2
統計学概論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
物質の構造と運動	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
生命の科学								2	2	2	2
ヒトの生物学	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
生物の物理的基礎	2	2	2	2	2	2	2				2
環境科学					2	2	2	2	2	2	2
沖縄の野生生物									2	2	2
情報科学概論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
計算機概論	2	2	2	2	2	2					
プログラミング概論	2	2	2	2	2	2					
プログラミング演習	2	2	2	2	2	2					
コンピュータ・リテラシーⅠ							2	2	2	2	2
コンピュータ・リテラシーⅡ							2	2	2	2	2
デジタルアニメーション概論								2	2	2	2
デジタルアニメーション演習								2	2	2	2
ネットワーク技術Ⅰ								4	4	4	4
ネットワーク技術Ⅱ								4	4	4	4
ネットワーク技術Ⅲ								4	4	4	4
ネットワーク技術Ⅳ								4	4	4	4
インターネット					2	2					
プログラミング入門					2	2					

総合教育科目

科 目	H 6	H 7	H 8	H 9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
大学と人生					2	2	2	2	2	2	2
沖縄の歴史と文化	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
異文化接触論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
平和論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
地域の環境とその保全	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
国際機構論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
地域社会演習						2	2	2			
比較宗教論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
国際関係論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
日本事情概説	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
国際環境と日本	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
ジェンダー学										2	2
女性学概論					2	2	2	2	2		
アジア事情概説	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
国際経済論	2	2	2	2	2	2					
沖縄の文学	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
沖縄の言語	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
特別講義					2	2	2	2			
特別講義Ⅰ								2	2	2	2
特別講義Ⅱ										2	2
特別講義Ⅲ										2	2
国際コミュニケーション論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
国際政治論	2	2	2	2	2	2				2	2
現代日本マスコミと出版の問題点Ⅰ								2			
現代日本マスコミと出版の問題点Ⅱ								2			
沖縄の自然								2	2	2	2

保健体育教育科目

科 目	H 6	H 7	H 8	H 9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
運動生理学	1	1	1	1	1	1	1				
保健衛生学	1	1	1	1	1	1	1				
体育実技	1	1	1	1							
健康・スポーツ科学								2	2	2	2
体育実技Ⅰ					1	1	1	1	1	1	1
体育実技Ⅱ					1	1	1	1	1	1	1
体育実技Ⅲ										1	1

専門教育科目 国際文化学科

科 目	H 6	H 7	H 8	H 9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
地域研究方法論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
比較言語論	2	2	2	2	2	2					
宗教学概論	2	2	2	2	2	2					
言語学概論							2	2	2	2	2
文化人類学	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
比較映像文化論							2	2	2	2	2
国際文化コミュニケーション論							2	2	2	2	2
比較文学論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
比較思想論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
比較芸術論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
比較史学	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
総合文化概論								2	2	2	2
日本文化概説	4	4	4	2	2	2					
日本文化概論							2	2	2	2	2
日本の言語	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
沖縄地域文化論Ⅰ							2	2	2	2	
沖縄地域文化論Ⅱ							2	2	2	2	
日本の文学	4	4	4	4	4	4					
日本の文学Ⅰ							2	2	2	2	2
日本の文学Ⅱ							2	2	2	2	2
日本の歴史	4	4	4	4	4	4					
日本の歴史Ⅰ							2	2	2	2	2
日本の歴史Ⅱ							2	2	2	2	2
日本の社会	4	4	4	4	4	4					
日本の社会Ⅰ							2	2	2	2	2
日本の社会Ⅱ							2	2	2	2	2
日本の思想	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
日本語情報処理								2	2	2	2
日本文学概論								2	2	2	2
日本文学史										2	2
国語学概論										2	2
南島歌謡										2	2
古典講読										2	2
国語史										2	2
文学とジェンダー										2	2
メディアリテラシー										2	2
漢文購読										2	2
書写・書道概論										2	2
東南アジアの歴史と文化	4	4	4	4	4	4	4	4		4	4

専門教育科目 国際文化学科

科 目	H 6	H 7	H 8	H 9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
東南アジアの言語と文学	4	4	4	4	4	4	4	4		4	4
東南アジアの宗教	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
東南アジアの政治と社会	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
英語音声学					2	2	2	2	2	2	2
英文法					2	2	2	2	2	2	2
高等英語購読					2	2	2	2	2	2	2
高等オーラルコミュニケーション							2	2	2	2	2
高等英作文					2	2	2	2	2	2	2
英米文学史					2	2	2	2	2	2	2
英米文化概説	2	2	2	2	2	2					
英米文化概論Ⅰ							2	2	2	2	2
英米文化概論Ⅱ							2	2	2	2	2
英米の歴史	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
ロマン派の詩					2	2	2	2	2	2	2
英語学概論					2	2	2	2	2	2	2
英米の文学	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
英語統語論					2	2	2	2	2	2	2
中南米の言語と文化	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
中南米の歴史	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
移民と異文化	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
中南米の社会	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
中南米の民俗	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
国際文化特別講義							2	2	2	2	2
東アジアの歴史	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
東アジア文化概説	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
オセアニア文化概説	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
オセアニアの言語	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
地域文化演習							2	2			
基礎演習							2	2	2	2	2
現地実習	4	4	4	4	4	4	4	4			
外書講読	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
地域・総合文化実習									4	4	4
地域・総合文化演習									2	2	2
演習	4	4	4	4	4	4					
基礎演習Ⅰ					2	2					
基礎演習Ⅱ					2	2					
演習Ⅰ										2	2
演習Ⅱ										4	4

専門教育科目 経営情報学科

科 目	H 6	H 7	H 8	H 9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
国際経営論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
国際マーケティング論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
比較経営史	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
国際流通論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
多国籍企業論	2	2	2	2	2	2					
ミクロ経済学							2	2	2	2	2
マクロ経済学							2	2	2	2	2
経済原論	2	2	2	2							
経済原論Ⅰ					2	2					
経済原論Ⅱ					2	2					
財政学									2	2	2
日本経済論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
国際経済論							2	2	2	2	2
国際金融論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
国際投資論	2	2	2	2	2	2					
経済政策	2	2	2	2	2	2	2	4	2	4	4
証券市場論							2	2	2	2	2
経営学総論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
経営管理論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
商法					2	2	2	2	2	2	2
企業取引法							2	2	2	2	2
租税法							2	2	2	2	2
動機づけの心理学	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
人間関係論					2	2	2	2	2	2	2
社会心理学					2	2	2	2	2	2	2
ビジネスプレゼンテーション							2	2	2	2	2
人的資源論							2	2	2	2	2
経営組織論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
産業心理学	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
企業論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
経営統計学	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
労務管理論	2	2	2	2	2	2					
問題解決の心理学							2	2	2	2	2
経営戦略論							2	2	2	2	2
職場のメンタルヘルス									2	2	2
行政法									2	2	2
ベンチャービジネス									2	2	2

専門教育科目 経営情報学科

科 目	H 6	H 7	H 8	H 9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
簿記原理	2	2	2	2			4	2	4	4	4
簿記原理Ⅰ					2	2					
簿記原理Ⅱ					2	2					
上級簿記					4	4	4	4	4	4	4
会計学原理	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
原価計算	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
コンピュータ会計学	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
経営分析論							2	2	2	2	2
経営財務論	2	2	2	2	2	2					
経営情報論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
経営情報特別講義							2	2	2	2	2
経営システム論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
中小企業論	2	2	2	2	2	2					
経営工学	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
経営戦略情報システム方法論	2	2	2	2	2	2					
産業情報論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
金融システム論							2	2			
総合的品質管理（TQM）	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
計算機概論							2	2	2	2	2
プログラミング入門								2	2	2	2
情報処理論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
プログラミング言語論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
プログラミング方法論	2	2	2	2	2	2					
システムソフトウェア論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
コンピュータ・グラフィックス							2	2	2	2	2
グラフィックデザイン（CAD）	2	2	2	2	2	2					
上級プログラミング							2	2	2	2	2
システム設計論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
アルゴリズム論							2	2	2	3	2
コンパイラ理論	2	2	2	2	2	2					
情報管理論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
データベース概論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
国際ネットワーク論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
ネットワーク構成機器論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
システム監査論	2	2	2	2	2	2					
経営情報セミナー									2	2	2
外書講読	2	2	2	2	2	3	2	2	2	2	2

専門教育科目 経営情報学科

科 目	H 6	H 7	H 8	H 9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
インターンシップ							4	2	4	4	4
演習	4	4	4	4							
演習Ⅰ					4	4	4	4	4	4	4
演習Ⅱ					4	4	4	4	4	4	4
職業指導Ⅰ					2	2	2	2	2	2	2
職業指導Ⅱ					2	2	2	2	2	2	2
情報と職業									2	2	2
企業実収	4	4	4	4	4	4					
アドバンスト・プログラミング					2	2					
ソフトウェアの基礎							2				

専門教育科目 観光産業学科

科 目	H 6	H 7	H 8	H 9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
観光学概論	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
観光文化概論					2	2			2	2	
地誌学Ⅰ									2	2	2
地誌学Ⅱ									2	2	2
観光事業論	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
文化人類学							2	2	2	2	2
地域社会論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
余暇社会学	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
社会心理学					2	2	2	2	2	2	2
観光行動論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
観光情報論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
観光行政法	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
観光関連法規							2	2	2	2	2
交通地理学							2	2	2	2	2
西欧経済史									2	4	2
地域文化論							I 2 II 2	4	4	4	4
観光文化論							4	4	4	4	2
基本経済学Ⅰ							2				
基本経済学Ⅱ							2				
日本経済史									2	2	2
観光調査法	2	2	2	2	2	2	2	4	4	4	4
観光政策論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
観光計画論	4	4	4	4							4
地域経済学	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
経済政策							2	4	4	4	4
観光経済学	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
国際観光資源論	2	2	2	2	2	2					
国際観光地理学	2	2	2	2	2	2					
国際経済発展論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
国際貿易論							2	2	2	2	2
地域開発論	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
観光開発論						4	4	4	4	4	4
ホテル計画論	4	4	4	4	4	4	2	4	4	4	4
観光環境計画							4	4	4	4	
ゴルフⅠ										1	1
ゴルフⅡ										1	1
ダイビングⅠ										1	1

専門教育科目 観光産業学科

科 目	H 6	H 7	H 8	H 9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
ダイビングⅡ										1	1
スキー・スケート										1	1
野外活動演習										1	2
スポーツマネジメント							2	2	2	2	
ウェルネス概論									2	2	2
健康と長寿										2	2
環境生態学	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
植物生態学							2				
生物地理学							2				
沖縄の植物と保護								2	2	2	2
環境調査法								2	2	2	2
動物の構造と機能								2	2	2	2
地球の陸と海と生物								4	4	4	4
環境関連法規Ⅰ								2	2	2	2
環境関連法規Ⅱ								2	2	2	2
自然保護論										4	4
エコツーリズム					4	4	4	4	4	4	4
人文地理学概論									4	4	4
自然地理学概論										4	4
旅行業経営論							4	4	4	4	4
ホスピタリティマーケティング論	4	4	4	4	4	4	4	4			4
ホスピタリティ事業論	2	2	2	2	2	2					
ホテル経営論	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
リゾート開発論	4	4	4	4	4	4					
観光施設デザイン論	4	4	4	4							
航空産業論							4	4	4	4	4
観光実用英語	2	2	2	2	2	2	4	4	4	4	4
観光産業特別講義							2	2	2	2	2
観光施設計画論	4	4	4	4							
旅行業法と約款									2	2	2
商法					2	2					
国際コンベンションビジネス										2	2
基礎演習Ⅰ									2	2	1
基礎演習Ⅱ									2	2	1
基礎演習Ⅲ									2	2	1
基礎演習Ⅳ									2	2	1
外書講読	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2

専門教育科目 観光産業学科

科 目	H 6	H 7	H 8	H 9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
インターンシップ							4	4	4	4	4
ホテル実務									6	6	6
演習Ⅰ	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
演習Ⅱ	4	4	4	4	4	4	4	4	2	2	4
職業指導Ⅰ					2	2	2	2	2	2	2
職業指導Ⅱ					2	2	2	2	2	2	2
旅行業論	4	4	4	4	4	4					
商学概論							2	2			
社会人類学概論	2	2	2	2	2	2					
国際生活文化論	2	2	2	2							
比較民族論	2	2	2	2	2	2					
環境関連法規	2	2	2	2	2	2	2				
企業実習	4	4	4	4	4	4					

年度別入学志願状況

年度	学科名	国際文化学科			経営情報学科			観光産業学科			学科合計		
	性別	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
平成6	募集人員	110			110			110			345		
	志願者	311	200	511	653	146	799	394	119	513	1,358	465	1,823
	合格者	89	89	178	134	51	185	99	71	170	322	211	533
	入学者	68	59	127	93	35	128	82	47	129	243	141	384
平成7	募集人員	110			110			110			330		
	志願者	237	141	378	417	107	524	292	100	392	946	348	1,294
	合格者	114	98	212	134	70	204	110	60	170	358	228	586
	入学者	78	56	134	92	44	136	92	45	137	262	145	407
平成8	募集人員	110			110			110			330		
	志願者	302	159	461	345	98	443	297	84	381	944	341	1,285
	合格者	101	111	212	139	66	205	120	60	180	360	237	597
	入学者	71	67	138	90	44	134	85	44	129	246	155	401
平成9	募集人員	110			110			110			330		
	志願者	177	128	305	298	65	363	234	74	308	709	267	976
	合格者	103	115	218	165	55	220	134	58	192	402	228	630
	入学者	72	71	143	104	36	140	100	40	140	276	147	423
平成10	募集人員	110			110			110			330		
	志願者	122	116	238	133	54	187	143	53	196	398	223	621
	合格者	85	104	189	101	50	151	117	49	166	303	203	506
	入学者	65	73	138	85	40	125	86	40	126	236	153	389
平成11	募集人員	110			110			110			330		
	志願者	160	119	279	238	77	315	170	67	237	568	263	831
	合格者	127	106	233	160	69	229	132	57	189	419	232	651
	入学者	80	57	137	102	44	146	100	35	135	282	136	418

年度別入学志願状況

年度	学科名	国際文化学科			経営情報学科			観光産業学科			学科合計		
	性別	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
平成 12	募 集 人 員	115			115			115			345		
	志 願 者	73	71	144	161	56	217	139	50	189	373	177	550
	合 格 者	68	64	132	141	52	193	111	46	157	320	162	482
	入 学 者	47	52	99	101	37	138	96	39	135	244	128	372
平成 13	募 集 人 員	115			115			115			345		
	志 願 者	79	56	135	169	42	211	111	65	176	359	163	522
	合 格 者	66	46	112	143	33	176	85	54	139	294	133	427
	入 学 者	52	36	88	118	30	148	72	48	120	242	114	356
平成 14	募 集 人 員	115			115			115			345		
	志 願 者	83	87	170	195	45	240	148	64	211	426	195	621
	合 格 者	71	76	147	150	36	186	118	45	163	339	157	496
	入 学 者	55	64	119	137	31	168	107	38	145	299	133	432
平成 15	募 集 人 員	115			115			115			115		
	志 願 者	104	109	213	126	40	166	105	70	175	335	219	554
	合 格 者	92	91	183	111	27	138	92	55	147	295	173	468
	入 学 者	70	74	144	106	22	128	85	50	135	261	146	407
平成 16	募 集 人 員	115			115			115			115		
	志 願 者	80	66	146	116	33	149	186	77	263	382	176	558
	合 格 者	72	58	130	95	33	128	146	54	200	313	145	458
	入 学 者	54	46	100	86	25	111	135	51	186	275	122	397

国際文化学科 志願者出身高等学校所在地県別内訳

都道府県名		年度	H 6	H 7	H 8	H 9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
東 北	北 海 道		2	2	3	2	2	6	3	1	3	1	3
	青 森					2				1			
	岩 手												
	宮 城				1	2			1	1	1		4
	秋 田						1					1	3
関 東	山 形								1	1			
	福 島				1		1					2	1
	茨 城					5			1				
	栃 木			1	2	2	1	2			2	1	
	群 馬		1	2	1	2	1	2	1	1			
東 奈	埼 玉			1	1		3	4	2		1		1
	千 葉		3	4	1	3	2	3	1	3	1	1	3
	東 京		2	2	6	6	6	8	5	5	4	3	5
	神 奈 川		1		4	1	4	8			2	3	3
	新 潟			1	2		1		1		1		
甲 越 東	山 梨			3		2							1
	長 野			1	1	2	1	4		3			
	岐 阜			2	3		1						1
	静 岡			2	5	2	1	2		1			3
	愛 知		1		10	3		3	1		1	4	1
海 北 陸	重 慶				1		1						
	富 山												1
	石 川				1			1					
	福 井												
	滋 賀					4		1	1				
近 畿	京 都			3	4	2	3	1	1		1		1
	大 阪		2	2	10	5	1			1	3		1
	兵 庫		1	2	4	1	3	4					1
	奈 良					2	4						
	和 歌 山		3		1							1	1
中 国	鳥 取				1						1		
	島 根				2				2				2
	岡 山		1	1	1	1						2	
	広 島		1	3	6	3	2		2		2	3	
	山 口			2	3	3	1	1	1				
四 国	徳 島			2	2				1				
	香 川								1				
	愛 媛			4		1		1					1
	高 知					1				1			
	福 岡		1	4	6	3	5	2	2	3	1	4	2
九 州	佐 賀		2		2	1		1					
	長 崎				5	1				1		1	
	熊 本		2	2	1	5	4	2	1	2	3		1
	大 分		1	2	1	3		1		1		2	
	宮 崎		2	1	1		1	1		1			1
鹿 児 島			3	3	5	1	2	3	1	4	1	2	2
沖 縄			476	321	353	226	179	211	108	90	138	171	98
大 学 検 定			2	1	2	1	1	6	3	2	2	10	1
外 国			4	4	8	7	6	1	3	11	2	1	4
合 計			511	378	461	305	238	279	144	135	170	213	146

国際文化学科 入学者出身高等学校所在地県別内訳

都道府県名			年度	H 6	H 7	H 8	H 9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
北海道	北	道		1		1		1	2		1	3	1	2
	青森						2							
	岩手													
	宮城						1			1				2
	秋田												1	1
東北	山形									1	1			
	福島													
	茨城						3							
	栃木					1	1		1				1	
	群馬			2					2			2		
関東	埼玉							1	2	2				
	千葉						1	1	3		2	1		
	東京		1	4	1	1	1	3	2	2	5	1	1	1
	神奈川			1	1	1	1	1	1			4	2	4
	新潟					1				1		2		1
甲信越	山梨				1		2					1		
	長野			2					1		2			
	岐阜													
	静岡							1	1					1
	愛知						1		2	1		1	3	2
海北	三重													
	富山													
	石川													
	福井													
	滋賀						1		1			1		
近畿	京都			2				2		1		3		
	大阪			2	1	1	1				1			1
	兵庫			1				1	1					
	奈良						2	1				2		1
	和歌山	2										1		
中国	鳥取													1
	島根									1				
	岡山											2	1	
	広島			1	2	1	1						2	
	山口					2			1	1				
四国	徳島									1				
	香川									1				
	愛媛			3										
	高知						1				3			
	福岡		1	1			1	2	1	1		1		
九州	佐賀								1		1	3		1
	長崎					1					1		1	
	熊本		2				1	2		1		3		1
	大分		1	1			1				1	1		
	宮崎		1					1			1	1		1
鹿児島				1	1	2	1		2	1	19	1	1	1
沖縄				112	109	118	112	115	110	78	58	138	127	74
大学検定				1		1			2	2	1	21	2	1
外国				4	3	8	6	5	1	3	10	21	1	4
合計				127	134	138	143	138	137	99	88	70	144	100

経営情報学科 志願者出身高等学校所在地県別内訳

都道府県名			年度	H 6	H 7	H 8	H 9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
東 北	北 海 道			2	1	2	2				1		2	
	青 森													
	岩 手													
	宮 城						1				1			
	秋 田													
関 東	山 形												1	
	福 島					1	1	1						
	茨 城							3						
	栃 木		6			1	2		1	1				
	群 馬					1				1				
東 奈	埼 玉			2	3	2				1				1
	千 葉		1			1	1	1	1	1		3		
	東 京				2	3	4	2	5	3	4	1	1	
	神 川				1	1		2	6			2		2
	甲 新					1						2		2
信 越	山 梨		2			2	1							
	長 野			1			1	2	1				1	
	岐 阜				1									1
	静 岡				1	4	3	2	2		1			
	愛 知		4	5	4	4	4	2	2			2		
海 北	三 重			1			1						1	
	富 山									1				
	石 川													1
	福 井		1	1			1	1				1		
	滋 賀					1	2							
畿 歌	京 都		1	1	2				1					
	大 阪		1	3	7	5	1	4			2			
	兵 庫		3	3	4	3								1
	奈 良						2					1		
	和 山					1	1							
中 国	鳥 取			1	2	1	1							
	島 根		1			1								
	岡 山		4			3	1	1				1		
	広 島			4	1	2			1		3			
	山 口			2	3	1							2	
四 国	徳 島								1					
	香 川					1	1							
	愛 媛		2	1			1							1
	高 知					1	1				2		1	
	福 岡			4	2	6	1			1			1	
九 州	佐 賀													
	長 崎		2	4	3	1								
	熊 本		2	3	3	1			2			1		
	大 分				3									
	宮 崎		3	2	1	1	1					1		
鹿 児 島			10	3	1	1			3			5	2	1
沖 縄			746	469	371	298	158	282	207	191	214	150	131	
大 学 検 定			1			2	4	1			4	2		4
外 国			7	5	9	6	7	3			2	4	4	4
合 計			799	524	443	363	187	315	217	211	240	166	149	

経営情報学科 入学者出身高等学校所在地県別内訳

都道府県名		年度	H 6	H 7	H 8	H 9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
東 北	北 海 道				2					1		2	
	青 森												
	岩 手												
	宮 城									1			
東 北	秋 田												
	山 形											1	
	福 島												
	茨 城						3						
関 東	栃 木		1			1							
	群 馬												
	埼 玉				2				1				1
	千 葉				1		1		1		2		
東 京	東 京			2	1			1	3	2	1	1	
	神 奈 川				1			1			2		1
	甲 新 潟										1		1
	山 梨				1								
信 越	長 野						1	1				1	
	岐 阜			1									
	静 岡				1		1						
	愛 知				1								
海 北	三 重								1				
	富 山								1				
	石 川												
	福 井										1		
近 畿	滋 賀												
	京 都												
	大 阪			1		2		2		1			
	兵 庫			1	1								
畿 東	奈 良												
	和 歌 山												
	鳥 取						1						
	島 根												
中 国	岡 山		3		1						1		
	広 島				1	1				2			
	山 口												
	徳 島												
四 国	香 川												
	愛 媛												1
	高 知					1							
	福 岡			1		1	1		1				
九 州	佐 賀												
	長 崎			1									
	熊 本		1					1			1		
	大 分			1									
学 校 検 査	宮 崎					1	1				1		
	鹿 児 島		2		1	1		1			4	1	1
	沖 縄		116	124	116	127	111	138	130	56	151	119	101
	大 学 検 定									1			2
外 国	合 計		5	4	3	5	5	1		4	3	3	3
	合 計		128	136	134	140	125	146	138	71	168	128	111

観光産業学科 志願者出身高等学校所在地県別内訳

都道府県名			年度	H 6	H 7	H 8	H 9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
東 北	北 海 道		2						3	1		1	1	3
	青 森			1	1			1			1			
	岩 手			1										
	宮 城				1	1			1					4
	秋 田													3
	山 形			2	2					1		1	1	
関 東	福 島				3	2		3	1				2	1
	茨 城		2	1	2	2		2	2	1				
	栃 木		4	1	1				1			1		
	群 馬				2				1	1	2	1		
	埼 玉		2	2	1	2		5	3	1	2	1	3	1
	千 葉				5	2	1	3	3	3		5		3
東 奈 川	東 京		5	10	5	5	5	5	9	6	9	6	11	5
	神 奈 川		3	3	5	4		1	4	5	1	6	1	3
	新 潟				1				1			1	1	
	山 梨											4		1
	長 野					2		3	1					
	岐 阜		2	2	1	2		2	2	2		3		1
海 北	静 岡		3		5	1		1	1		1	1	2	3
	愛 知		4	4	3	5		4	2		2	2	2	1
	三 重		2		2	1			2				1	
	富 山				1				1					1
	石 川					1		1		1				
	福 井		1	1								1		
近 畿	滋 賀		2	2				1				1		
	京 都			2	5	2		4	1	1			1	1
	大 阪		5	6	6	7		1	7	1	3	3	2	1
	兵 庫		1	35	3	5		5	2			3		1
	奈 良		1	1	3	1				1				
	和 歌 山			2	3	4							1	1
中 国	鳥 取					1				1				
	島 根				2	1			3			1		2
	岡 山		2			2					2		1	
	広 島		3	2	9	3		2	5			1	1	
	山 口		1	5	2				2					
	徳 島		1			1	2		2	3				
四 国	香 川		2	1		2						1	2	
	愛 媛		1	2	1	2			6	1				1
	高 知			1	2	2								
	福 岡		4	4	5	5		2	4	6	1	2	3	2
	佐 賀			2	3	1					1			
	長 崎		5	5	6			3						
九 州	熊 本			2						1			1	1
	大 分			1	1					2			2	
	宮 崎		2	1	2	1				3			1	1
	鹿 児 島		7	1		7		1	1	2			3	2
	沖 縄		442	306	286	221	137	164	142	136	155	122	98	
	大 学 検 定			3		3		1			1	3	2	1
大 外 国 計			5	5	4	8	6	2	2	9	10	4	4	
合 計			513	392	381	308	196	237	188	171	211	174	146	

観光産業学科 入学者出身高等学校所在地県別内訳

都道府県名		年度	H 6	H 7	H 8	H 9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
北海道	北 海	道	2					4	1			1	2
	青 森	森											1
	岩 手	手											
	宮 城	城						1					
	秋 田	田											
	山 形	形							1		1	1	
福島県	福 島	島			1	1	2	1					
	茨 城	城				2	2		1				1
	栃 木	木	1								1		1
	群 馬	馬			1				1		1		
	埼 玉	玉	1	1	1	1	3	3	1			2	1
	千 葉	葉		1		1		2	1		3		1
東京都	東 京	京		3	2	3	2	4	4	4	4	9	4
	神 奈 川	川	1	2		1	1	3	3	1	5	1	3
	甲 新 潟	潟			1							1	1
	山 梨	梨									2		
	長 野	野					1	1					
	岐 阜	阜		2		1	1	1	1		3		
静岡県	静 岡	岡					1			1	1	1	
	愛 知	知		1	2	3	2	1		2		2	
	三 重	重			1								
	富 山	山						1					
	石 川	川					1						
	福 井	井									1		
滋賀県	滋 賀	賀									1		
	京 都	都			1	1	1					1	
	大 阪	阪		4	3		1	3	1	3	3	2	2
	兵 庫	庫		4	1	2	1	1				2	1
	畿 良	良			1	1							
	和 歌 山	山		2	1							1	
中国	中 国	取 根				1							
	島 根	根			1			1					
	岡 山	山				2				2		1	1
	広 島	島	1		1	1					1	1	2
	山 口	口		2	1								
	四 徳	島	1				1	1	2				
香川県	香 川	川	1								1	1	
	愛 媛	媛				2		1	1		2		1
	高 知	知			1								
	福 岡	岡	1	2	1		2	1	2	1		2	
	佐 賀	賀				1							
	長 崎	崎	1	1	1		1						
九州	熊 本	本		1					1				
	大 分	分			1				1			2	
	宮 崎	崎	1		1				1			1	
	鹿 児 島	島				1		1				2	3
	沖 縄	縄	116	106	103	108	98	103	109	93	109	96	151
	大 学 検 定	定		1		2				1	1		3
外国	外 国	国	2	4	2	5	5	1	2	9	5	4	7
	合 計	計	129	137	129	140	126	135	134	117	145	134	186

全学科 志願者出身高等学校所在地県別内訳

都道府県名		年度	H 6	H 7	H 8	H 9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
北海道	北 海 道		6	3	5	4	2	9	4	2	4	4	6
	青 森			1	1	2	1			2			1
	岩 手			1									
	宮 城				2	4		1	1	2	1		5
	秋 田						1					1	3
	山 形			2	2				2	1	1	2	
福島県	福 島				5	3	5	1				4	2
	茨 城		1	1	2	7	5	2	2				1
	栃 木		10	2	4	4	1	4	1		3	1	2
	群 馬		1	2	4	2	1	3	3	3	1		
	埼 玉		2	5	5	4	8	7	4	3	2	3	3
	千 葉		4	5	4	5	6	7	5	3	9	1	5
東京都	東 京		7	16	14	15	13	22	14	18	11	15	12
	神 奈 川		4	6	10	5	7	18	5	1	10	4	11
	新 潟				4		1	1	1		4	1	3
	山 梨		2	1	2	3					4		1
	長 野			4	1	5	6	6		3		1	1
	岐 阜		2	4	4	2	3	2	2		3		2
静岡県	静 岡		3	3	14	6	4	5		3	1	2	4
	愛 知		9	11	17	12	6	7	1	2	5	6	1
	三 重		2	1	3	2	1	2	1			2	
	富 山				1			1	1				1
	石 川				1	1	1	1	1				1
	福 井		2	2		1	1				2		
近畿圏	滋 賀		2	2	1	6	1	1	1		1		
	京 都		1	6	11	4	7	3	2		1	1	2
	大 阪		8	11	23	17	3	11	1	6	6	2	3
	兵 庫		5	10	11	9	8	6				3	3
	奈 良		1	1	3	5	4		1		1		
	和 歌 山		3	2	5	5						2	1
中国	鳥 取			1	3	2	1		1		1		
	島 根		1		5	1		3	2		1		2
	岡 山		7	1	4	4	1			2	1	3	1
	広 島		4	9	16	8	4	6	2	3	3	4	2
	山 口		1	9	8	4	1	3	1			2	
	四 国		1	2	2	1	2	3	4				
九州	徳 島		1	2	2	1	2	3	4				
	香 川		2	1	1	3			1		1	2	
	愛 媛		3	7	1	4		7	1				3
	高 知			1	3	4				3		1	
	福 岡		5	12	13	14	8	6	9	4	3	8	2
	佐 賀		2	2	5	2		1		1			
九州	長 崎		7	9	14	2	3			1		1	
	熊 本		4	7	4	6	4	4	2	2	4	1	1
	大 分		1	6	2	3		1	2	1		4	
	宮 崎		7	4	4	2	2	1	3	1	1	1	1
	鹿 児 島		20	7	6	9	3	7	3	4	6	7	8
	沖 縄		1,664	1,096	1,010	745	474	657	457	417	507	443	439
大 学 検 定			3	4	4	8	3	6	3	7	7	12	10
外 国			16	14	21	21	19	6	5	22	16	9	15
合 計			1,823	1,294	1,285	976	621	831	549	517	621	553	558

全学科 入学者出身高等学校所在地県別内訳

都道府県名			年度	H 6	H 7	H 8	H 9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
東 北	北海道		3		3		1	6	1	2		4	4	
	青森	森				2							1	
	岩手	手					1	1	1	1			2	
	宮城	城										1	1	
	秋田	田								2	1	1	2	
関 東	山形	形			1	1	2	1						
	福島	島												
	茨城	城				5	5		1				1	
	栃木	木	2		1	2		1			2	1	1	
	群馬	馬		2	1			2	1		1			
東 海	埼玉	玉	1	1	3	1	4	5	1			2	2	
	千葉	葉		1	1	2	2	5	4	2	6		2	
	東京	京	1	9	4	4	5	7	2	11	6	11	8	
	神奈	川	1	3	2	2	2	5	9	1	7	3	5	
	甲信	新	潟			2				3		2	1	2
越 東	山梨	梨		1	1	2				1		2		
	長野	野		2				2	3		2		1	
	岐阜	阜		3			1	1	1			3		1
	静岡	岡			1			3	1	1	1	1	1	2
	愛知	知		1	3	4	2	3		2	3	5		
海 北	三重	重			1					1				
	富山	山							1	1				
	石川	川						1		1				
陸 近	福井	井										2		
	滋賀	賀					1		1			1		
	京都	都		2	1	1	3					1	1	1
畿 東	大阪	阪		7	4	3	1	5	1	5	5	2	2	
	兵庫	庫		6	2	2	2	2	1			2	2	
	奈良	良			1	3	1							
	和歌	山	2	2	1								1	1
中 国	鳥取	取					1	1				1		
	島根	根			1				1					
	岡山	山	3		1	2				1	2	1	2	1
	広島	島	1	1	4	3	1				2	2	3	2
四 国	山口	口		2			2		1					
	徳島	島	1					1	1	1				
	香川	川	1		1					3		1	1	
	愛媛	媛		3			2		1	1				3
	高知	知			1	2				1				
九 州	福岡	岡	2	4	1	2	5	2			4	1	2	1
	佐賀	賀					1		1	4				
	長崎	崎	1	2	2		1				1		1	
	熊本	本	3	1			1	2	1	2	1	3		
	大分	分	1	2	1	1				1			2	
州	宮崎	崎	2		1	1	1	2		1	1	1	1	1
	鹿児島	島	3	1	3	3			4	1	1	5	4	5
沖縄			344	339	337	347	324	351	317	288	363	342	326	
学検定			1	1	1	2		2	2	4	1	2	6	
外国			11	11	13	16	15	3	5	21	10	8	14	
合計			384	407	401	423	389	418	371	353	432	406	397	

国際文化学科 入学者県内高等学校別内訳

高等学校名	年度	H 6	H 7	H 8	H 9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
辺 土 名 高 等 学 校		2	2	4	3	1	1		2	1	2	
北 山 高 等 学 校		4	1	2	1		2	1	2		5	2
名 護 高 等 学 校		8	3	5	6	7	6	3	3	9	7	6
本 部 高 等 学 校		2	1	2	3	1	3	2		3	5	1
宜 野 座 高 等 学 校		3		1	1	1	3	1	1		2	
石 川 高 等 学 校		2	3		7	5	5	1	5	4	2	6
読 谷 高 等 学 校		2	5	8	2	6	5	4	2	5	1	2
嘉 手 納 高 等 学 校		2	3	3	1	3	1	1		6	3	1
具 志 川 高 等 学 校		6	2	4	4	6	3	2	1	3	1	1
前 原 高 等 学 校		1	3	3	1	4	3	8	4	3	4	1
コ ザ 高 等 学 校		3	5	11	1	11	12	9	23		15	5
美 里 高 等 学 校			1	2	3		6	1	1	5	3	1
球 陽 高 等 学 校		2	1	3		3			2		1	
知 念 高 等 学 校		6	4	3	2	4	3	1		2	2	2
与 勝 高 等 学 校		1	1			1	3	1	1		1	
北 谷 高 等 学 校		1	4	2	3	1	5	2	3	1	4	3
北 中 城 高 等 学 校		1	2	3	1	1	2	2	1	4		1
普 天 間 高 等 学 校		9	9	3	9	2	1	5	2	4	2	1
宜 野 湾 高 等 学 校			5	5	1		2	2	2	4	6	1
浦 添 高 等 学 校		5	4	9	5	6	7	1	5	7	2	1
陽 明 高 等 学 校		2	3			1	3		1	2	2	
那 覇 国 際 高 等 学 校										1		2
那 覇 高 等 学 校		5	3	7	5	1	4	3	1		1	
首 里 高 等 学 校		1	3	5	1	3		5		1		
首 里 東 高 等 学 校		3	4	4	2	5	3	4	1	4	2	1
那 覇 西 高 等 学 校		5	3	2	5	6			1	5	7	
小 禄 高 等 学 校		2	5	3	3	4	3	1		4	4	2
真 和 志 高 等 学 校			1	1	1		1	1	1			
泊 高 等 学 校					1						2	2
開 邦 高 等 学 校		1	1									
南 風 原 高 等 学 校		2	1		2	1	1	2	1		2	2
豊 見 城 高 等 学 校		3	2	1	2	2	2		2	3	1	2
豊 見 城 南 高 等 学 校		2	2	2	2	2				3		1
向 陽 高 等 学 校					1			2				

国際文化学科 入学者県内高等学校別内訳

高等学校名	年度	H 6	H 7	H 8	H 9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
西 原 高 等 学 校		3	6	3	4	8	4	2	1	4	3	1
糸 満 高 等 学 校		6	3	6	8	5	3	1		2	1	1
久 米 島 高 等 学 校		1		1		1	1					1
宮 古 高 等 学 校			2	1	3	2					1	1
八 重 山 高 等 学 校		1			2	1				1	1	
伊 良 部 高 等 学 校									1			1
沖 縄 尚 学 高 等 学 校		4	5	2	4	1	1		1	1	2	2
興 南 高 等 学 校		6	2	1	4	5	3	2	5		3	5
沖縄女子短期大学附属				1	1		2					1
昭 和 薬 科 大 附 属												
名 護 商 業 高 等 学 校							1	1			1	
具 志 川 商 業 高 等 学 校											2	1
中 部 商 業 高 等 学 校			1		1			1			1	1
浦 添 商 業 高 等 学 校				1		1	1	3		1	3	1
那 覇 商 業 高 等 学 校				1	1	2		1			2	1
南 部 商 業 高 等 学 校					2						1	
北 部 工 業 高 等 学 校											1	2
中 部 工 業 高 等 学 校										3	2	
美 里 工 業 高 等 学 校					1					1	2	1
沖 縄 工 業 高 等 学 校		1							1			1
浦 添 工 業 高 等 学 校			1					1		2	5	1
那 覇 工 業 高 等 学 校			1				1			1		1
南 部 工 業 高 等 学 校												
宮 古 工 業 高 等 学 校				1	1							1
八 重 山 商 工 高 等 学 校		1			1					1	1	2
北 部 農 林 高 等 学 校				1			1	1	1		2	
中 部 農 林 高 等 学 校				1							3	1
南 部 農 林 高 等 学 校						1						
宮 古 農 林 高 等 学 校		2								2		
八 重 山 農 林 高 等 学 校							1					
沖 縄 水 産 高 等 学 校							1					
翔 南 高 等 学 校												
八洲学園国際高等学校											1	
合 計		112	109	118	112	115	110	78	58	119	127	74

経営情報学科 入学者県内高等学校別内訳

高等学校名	年度	H 6	H 7	H 8	H 9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
辺 土 名 高 等 学 校		3	2	1	2	1	3	2	2	3	1	
北 山 高 等 学 校				2	2	1		2	2	5	4	4
名 護 高 等 学 校		1	2	2	6	5	7	5	16	11	3	4
本 部 高 等 学 校		2	3	2		2		6	3	3	5	
宜 野 座 高 等 学 校		2	2	1	1	1		2	4	2	1	4
石 川 高 等 学 校		4	5	7	5	5	7	12	8	14	7	6
読 谷 高 等 学 校		3	2	2	6	5	3	4	7	6	5	1
嘉 手 納 高 等 学 校		2	2	2	3	5	6	3		2	2	1
具 志 川 高 等 学 校		5	5	6	6	6	13	5	2	3	2	1
前 原 高 等 学 校		2	2	2	1	3	1	5	3	3	7	4
コ ザ 高 等 学 校		4	3	7	7	3	6	6	5	4	5	10
美 里 高 等 学 校		1	1	3	1	2	2	5	5	1	5	4
球 陽 高 等 学 校		3	4	1		1	1		1			1
知 念 高 等 学 校		1	5	2	3	2	4	5	2	5	3	1
与 勝 高 等 学 校		1		3				2		2		1
北 谷 高 等 学 校		3	1	4	4	4	4	1	9	5	3	4
北 中 城 高 等 学 校		4	3	4	3	4	5		1	6	5	
普 天 間 高 等 学 校		5	9	5	4	3	5	1	1	2	1	2
宜 野 湾 高 等 学 校			3	1			2		4	3	2	2
浦 添 高 等 学 校		4	7	4	5	3	1	2	3	9	1	2
陽 明 高 等 学 校		1		1	1		1	3	2		3	
那 覇 国 際 高 等 学 校											1	
那 覇 高 等 学 校		5	6	4	2	3	4	3	1	1		1
首 里 高 等 学 校		8	5	2	5	2		2	1		1	2
首 里 東 高 等 学 校		3	3	7	7	2	8	3	4	4	2	3
那 覇 西 高 等 学 校		2	2	4	2	4	1		2	1	3	1
小 禄 高 等 学 校		6	3	4	6		3	5	1	6	4	
真 和 志 高 等 学 校		1			1		1	2	1			1
泊 高 等 学 校											1	
開 邦 高 等 学 校		1										
南 風 原 高 等 学 校		1	1	3	3	3	3	4	2	1		1
豊 見 城 高 等 学 校		2	4	1	2	2	2			1	1	
豊 見 城 南 高 等 学 校		2	3	2	7	1	1	1	1	3		1
向 陽 高 等 学 校							1		1			

経営情報学科 入学者県内高等学校別内訳

高等学校名	年度	H 6	H 7	H 8	H 9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
西 原 高 等 学 校		2	2		2	5	7	3	3	3	3	
糸 満 高 等 学 校		2	4	2	2	1	5	4	7	8	2	
久 米 島 高 等 学 校									1			
宮 古 高 等 学 校		1	1	1	1	1	1		2			
八 重 山 高 等 学 校		2	1	3	3	1			1		2	
伊 良 部 高 等 学 校			2			1						
沖 縄 尚 学 高 等 学 校		5	8	4	4	3	2	1	2	4	2	
興 南 高 等 学 校		6	3	3	3	4	9	3		4	7	8
沖 縄 女 子 短 期 大 学 附 属			1	2		1		2	1		1	1
昭 和 薬 科 大 附 属								1	1			
名 護 商 業 高 等 学 校		5	3	3	5	5	6	8	11	3	2	
具 志 川 商 業 高 等 学 校		1	1			1	1	1	1	3		1
中 部 商 業 高 等 学 校			3		1	1	1	2		3	1	2
浦 添 商 業 高 等 学 校				2	3	7	6	2	3	5	6	13
那 覇 商 業 高 等 学 校		3	3	3	3	3	1	2	3		2	
南 部 商 業 高 等 学 校		2		1			1	1		2	4	4
北 部 工 業 高 等 学 校						1		1		2		2
中 部 工 業 高 等 学 校		1	1		1			2		2	1	1
美 里 工 業 高 等 学 校											1	1
沖 縄 工 業 高 等 学 校		1	1	2	2	3	1	1	1		1	1
浦 添 工 業 高 等 学 校								2		1	2	1
那 覇 工 業 高 等 学 校											1	
南 部 工 業 高 等 学 校									1			
宮 古 工 業 高 等 学 校		1								1		
八 重 山 商 工 高 等 学 校			1							1	1	
北 部 農 林 高 等 学 校		2	1	1	1		1	2	4	1	1	2
中 部 農 林 高 等 学 校							1					
南 部 農 林 高 等 学 校								1				
宮 古 農 林 高 等 学 校									1	1	1	
八 重 山 農 林 高 等 学 校												
沖 縄 水 産 高 等 学 校					1							
翔 南 高 等 学 校												
八 洲 学 園 国 際 高 等 学 校										1		1
合 計		116	124	116	127	111	138	130	137	151	119	101

観光産業学科 入学者県内高等学校別内訳

高等学校名	年度	H 6	H 7	H 8	H 9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
辺 土 名 高 等 学 校		1	1	1			1	1	1	3		6
北 山 高 等 学 校		1	1	2	2	2				2	2	3
名 護 高 等 学 校			7	2	4	6	2	3	8	7	5	4
本 部 高 等 学 校			2	1		1	2	2	1	3	1	1
宜 野 座 高 等 学 校		1		2		3	2	2		1	2	9
石 川 高 等 学 校		2	3	1	3		3	4	7	5	2	4
読 谷 高 等 学 校		3	3		3	4	4	3	3	5	1	2
嘉 手 納 高 等 学 校		1	5	2	2		1	2	2			1
具 志 川 高 等 学 校		7	8	2	5	3	3	3				2
前 原 高 等 学 校		1			5	4	2	1	2	3	2	1
コ ザ 高 等 学 校		3	8	6	6	8	11	4	3	4	10	5
美 里 高 等 学 校		1		2	1	6	5	2	5	1	1	4
球 陽 高 等 学 校		7			1				1		1	0
知 念 高 等 学 校		3	3	4	3	3	4	5	3	4	8	6
与 勝 高 等 学 校		3			1	3		3		1	4	1
北 谷 高 等 学 校		8	2	1	2	4	4	4	2	5	7	2
北 中 城 高 等 学 校		4	3	2	2	2	2	3	1	1	1	4
普 天 間 高 等 学 校		10	5	5	10	5	3	8	1	6	1	5
宜 野 湾 高 等 学 校		1	1	5	5	3	1	1	3	3	1	1
浦 添 高 等 学 校		5	3	9	7	10	1	1	3	4	4	7
陽 明 高 等 学 校						1	2	2	3	2		1
那 覇 国 際 高 等 学 校				4							1	1
那 覇 高 等 学 校		7	2	8	6	1	2	2		1	2	2
首 里 高 等 学 校		4	3	8	4	1	3	1		2	3	
首 里 東 高 等 学 校		2	5	8	5	4	5	5	3	3	1	8
那 覇 西 高 等 学 校		4	4	6	6	2	6	3	3	2	3	3
小 禄 高 等 学 校		2	3	2	2	1	2	6	1	2	1	9
真 和 志 高 等 学 校		2		1						1	2	1
泊 高 等 学 校				1					1			
開 邦 高 等 学 校		1										
南 風 原 高 等 学 校			2	1	2	1	1	3	4	3	2	3
豊 見 城 高 等 学 校			1	2	2	3	2	4		1	2	6
豊 見 城 南 高 等 学 校		3	2	4	1	1	1			2	1	3
向 陽 高 等 学 校					1	1	1					1

観光産業学科 入学者県内高等学校別内訳

高等学校名	年度	H 6	H 7	H 8	H 9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
西 原 高 等 学 校		4	3	4	4	2	4	2	4	4	4	3
糸 満 高 等 学 校		5	9	4	2	2	1	4	2	1	1	1
久 米 島 高 等 学 校												1
宮 古 高 等 学 校						2		1		1		4
八 重 山 高 等 学 校			1	1		1	1					1
伊 良 部 高 等 学 校										1		1
沖 縄 尚 学 高 等 学 校		4	3	6	4	1	2	1	5	5	4	4
興 南 高 等 学 校		2	3	4	1	2	6	4	5	2	2	3
沖縄女子短期大学附属		1	1				1			1	1	
昭 和 薬 科 大 附 属									1			
名 護 商 業 高 等 学 校			1	1			1	2	9	2	1	
具 志 川 商 業 高 等 学 校		1	1								2	
中 部 商 業 高 等 学 校					1	1	1	4	2	1	1	1
浦 添 商 業 高 等 学 校		4	3	2	2			3	7	3	2	9
那 覇 商 業 高 等 学 校		2	1		1		1	4	1		1	3
南 部 商 業 高 等 学 校		1			1	1	1			1	1	
北 部 工 業 高 等 学 校									1			
中 部 工 業 高 等 学 校			1			1	1		1		1	2
美 里 工 業 高 等 学 校							1		2	5		4
沖 縄 工 業 高 等 学 校							1	3				2
浦 添 工 業 高 等 学 校						1						1
那 覇 工 業 高 等 学 校										2		
南 部 工 業 高 等 学 校								1			1	
宮 古 工 業 高 等 学 校		1										
八 重 山 商 工 高 等 学 校			1								1	1
北 部 農 林 高 等 学 校		2	1	1			2	1	1			2
中 部 農 林 高 等 学 校								1		1	1	1
南 部 農 林 高 等 学 校										1		
宮 古 農 林 高 等 学 校												
八 重 山 農 林 高 等 学 校		1										
沖 縄 水 産 高 等 学 校					1	1	3				1	1
翔 南 高 等 学 校												
八洲学園国際高等学校										1		
合 計		116	106	103	108	98	103	109	93	109	96	151

学科合計 入学者県内高等学校別内訳

高等学校名	年度	H 6	H 7	H 8	H 9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
辺 土 名 高 等 学 校		6	5	6	5	2	5	3	5	7	3	6
北 山 高 等 学 校		5	2	6	5	3	2	3	4	7	11	9
名 護 高 等 学 校		9	12	9	16	18	15	11	27	27	15	14
本 部 高 等 学 校		4	6	5	3	4	5	10	4	9	11	2
宜 野 座 高 等 学 校		6	2	4	2	5	5	5	5	3	5	13
石 川 高 等 学 校		8	11	8	15	10	15	17	20	23	11	16
読 谷 高 等 学 校		8	10	10	11	15	12	11	12	16	7	5
嘉 手 納 高 等 学 校		5	10	7	6	8	8	6	2	8	5	3
具 志 川 高 等 学 校		18	15	12	15	15	19	10	3	6	3	4
前 原 高 等 学 校		4	5	5	7	11	6	14	9	9	13	6
コ ザ 高 等 学 校		10	16	24	14	22	29	19	11	8	30	20
美 里 高 等 学 校		2	2	7	5	8	13	8	11	7	9	9
球 陽 高 等 学 校		12	5	4	1	4	1		4		2	1
知 念 高 等 学 校		10	12	9	8	9	11	11	5	11	13	9
与 勝 高 等 学 校		5	1	3	1	4	3	6	1	3	5	2
北 谷 高 等 学 校		12	7	7	9	9	13	7	14	11	14	9
北 中 城 高 等 学 校		9	8	9	6	7	9	5	3	11	6	5
普 天 間 高 等 学 校		24	23	13	23	10	9	14	4	12	4	8
宜 野 湾 高 等 学 校		1	9	11	6	3	5	3	9	10	9	4
浦 添 高 等 学 校		14	14	22	17	19	9	4	11	20	7	10
陽 明 高 等 学 校		3	3	1	1	2	6	5	6	4	5	1
那 覇 国 際 高 等 学 校										1	2	3
那 覇 高 等 学 校		17	11	15	13	5	10	8	2	2	3	3
首 里 高 等 学 校		13	11	15	10	6	3	8	1	3	4	2
首 里 東 高 等 学 校		8	12	19	14	11	16	12	8	11	5	12
那 覇 西 高 等 学 校		11	9	12	13	12	7	3	6	8	13	4
小 禄 高 等 学 校		10	11	9	11	5	8	12	2	12	9	11
真 和 志 高 等 学 校		4	1	2	2		2	3	2	1	2	2
泊 高 等 学 校					1				1		3	2
開 邦 高 等 学 校		3	1	1								
南 風 原 高 等 学 校		3	4	3	7	5	5	9	7	4	4	6
豊 見 城 高 等 学 校		5	7	3	6	7	6	4	2	5	4	8
豊 見 城 南 高 等 学 校		7	7	6	10	4	2	1	1	8	1	5
向 陽 高 等 学 校					2	1	2	2	1			1

学科合計 入学者県内高等学校別内訳

高等学校名	年度	H 6	H 7	H 8	H 9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
西 原 高 等 学 校		9	11	7	10	15	15	7	8	11	10	4
糸 満 高 等 学 校		13	16	12	12	8	9	9	9	11	4	2
久 米 島 高 等 学 校		1		1		1	1		1			2
宮 古 高 等 学 校		1	3	2	4	5	1	1	2	1	1	5
八 重 山 高 等 学 校		3	2	4	5	3	1		1	1	3	1
伊 良 部 高 等 学 校			2			1			1	1		2
沖 縄 尚 学 高 等 学 校		13	16	12	12	5	5	2	6	10	8	6
興 南 高 等 学 校		14	8	8	8	11	18	9	7	6	12	16
沖縄女子短期大学附属		1	2	3	1	1	3	2	2	1	2	2
昭 和 薬 科 大 附 属								1	1			
名 護 商 業 高 等 学 校		6	4	4	5	5	8	11	12	5	4	
具 志 川 商 業 高 等 学 校		2	2			1	1	1	2	3	4	2
中 部 商 業 高 等 学 校			4		3	2	2	7	5	4	3	4
浦 添 商 業 高 等 学 校		4	3	5	5	8	7	8	10	9	11	23
那 覇 商 業 高 等 学 校		5	4	4	5	5	2	7	4		5	4
南 部 商 業 高 等 学 校		3			3	1	2	1		3	6	4
北 部 工 業 高 等 学 校						1		1	1	2	1	4
中 部 工 業 高 等 学 校		1	2		1	1	1	2	1	5	4	3
美 里 工 業 高 等 学 校					1		1		2	6	3	6
沖 縄 工 業 高 等 学 校		2	2	2	2	3	2	4	2		1	4
浦 添 工 業 高 等 学 校			1			1		3		3	7	3
那 覇 工 業 高 等 学 校			1				1			3	1	1
南 部 工 業 高 等 学 校								1	1		1	
宮 古 工 業 高 等 学 校		2		1	1					1		1
八 重 山 商 工 高 等 学 校		1	2		1					2	3	3
北 部 農 林 高 等 学 校		4	2	3	1		4	4	6	1	3	4
中 部 農 林 高 等 学 校				1		1	1	1		1	4	2
南 部 農 林 高 等 学 校								1		1		
宮 古 農 林 高 等 学 校		2							1	3	1	
八 重 山 農 林 高 等 学 校		1					1					
沖 縄 水 産 高 等 学 校					2	1	4				1	1
翔 南 高 等 学 校												
八洲学園国際高等学校										2	1	1
合 計		344	339	337	347	324	351	317	288	363	342	326

平成16年度在籍異動状況一覧表

学部学生数

平成16年度10月1日現在

学 科	年 次		1		2		3		4		合計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
国際文化	54	46	70	68	55	56	53	34	232	204		
	100		138		111		87		436			
経営情報	88	26	99	20	113	28	108	28	408	102		
	114		119		141		136		510			
観光産業	134	50	84	49	90	32	87	46	395	177		
	184		133		122		133		572			
合 計	276	122	253	137	258	116	248	108	1035	483		
	398		390		374		356		1518			

外国人留学生（再掲）

学 科	年 次		1		2		3		4		合計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
中 国	4	4 (1)	1		7 (1)	3	8	5	20 (1)	12 (1)		
	8 (1)		1		10 (1)		13		32 (2)			
台 湾											0	0
	0		0		0		0		0			
韓 国		2	1		1	2	1	1	3	5		
	2		1		3		2		8			
モンゴル				3							0	3
	0		3		0		0		3			
インドネシア											0	0
	0		0		0		0		0			
アルゼンチン	1 (1)										1 (1)	0
	1 (1)		0		0		0		1 (1)			
ベトナム				1	1		1		2	1		
	0		1		1		1		3			
アメリカ							1		1	0		
	0		0		0		1		1			
ブラジル					1				1	0		
	0		0		1		0		1			
ペルー			2		1				3	0		
	0		2		1		0		3			
合 計	5 (1)	6 (1)	4	4	11 (1)	5	11	6	31 (2)	21 (1)		
	11 (2)		8		16 (1)		17		52 (3)			

() 内は外国人学生数、内数

科目履修生
特別聴講学生
研究生

	男	女
科目等履修生	8	5
特別聴講学生	2	1
研 究 生		
合 計	10	6
	16	

科目等履修生・特別聴講生・研究生

国 籍	科目等履修生		特別聴講学生		研究生		合計	
	男	女	男	女	男	女	男	女
日 本	7	2					7	2
	9		0		0		9	
中 国							0	0
	0		0		0		0	
韓 国			1				1	0
	0		1		0		1	
フィリピン				1			0	1
	0		1		0		1	
タ イ							0	0
	0		0		0		0	
ブラジル		1	1				1	1
	1		1		0		2	
ペルー	1	2 (1)					1	2 (1)
	3 (1)		0		0		3 (1)	
イギリス							0	0
	0		0		0		0	
合 計	8	5 (1)	2	1	0	0	10	6 (1)
	13 (1)		3		0		16 (1)	

() 内は外国人学生数、内数

年度別卒業生内定状況

卒業年度	H 9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
内 定 率	86%	74%	82%	87%	82%	87%	85%	



10周年記念募金寄付者一覧
教育研究奨励基金、その他特定
・一般寄付金寄付者一覧

企業 10周年記念募金寄付者一覧

※名称は、50音順に記載

3万円未満		平成16年12月10日現在
会社名	役職名	氏 名
(有) イイトウク	代表取締役	又吉 剛
(有) 運天組	代表取締役	上運天景邑
大城花屋	店 主	大城 章一
(株) 沖縄県種苗センター	代表取締役社長	嵩原 安政
沖縄全日空ホテルズ (株)	代表取締役社長	柴田 光彦
沖縄ビル・メンテナンス (株)	代表取締役社長	城田 清
沖縄明治乳業 (株)	代表取締役社長	仲田 勝男
沖縄リコー (株) 北部支店	支店長	田港 朝直
(有) 翁長商事	代表取締役	平良 栄広
オフィス森羅 (有)	代表取締役	比嘉 伝英
(有) 我隆商事	代表者	我那覇 隆夫
(株) クリエイト	代表取締役	金城 健児
(資) 崎浜電工	代表者	崎濱 秀夫
(株) 第一医療器	代表取締役	嘉手納知尚
(株) 照正組	代表取締役	照屋 義実
(有) 図書教材	代表取締役	上間 昇
(有) とまとコーポレーション	代表取締役	金城 勇治
(有) 今帰仁酒造	代表者	大城 善男
社会福祉法人 名護学院	理事長	崎濱 秀政
名護スポーツ店	店 主	大城 安子
南西食品 (株)	代表取締役社長	名嘉 宏文
ニュークリーン沖縄	代表者	平良 忠昭
(医) ノーブル	理事長	藤原 浩男
(有) 福地組	代表取締役	福地 裕吉
(有) 富士産業 リゾートホテル・ベルパライソ	代表取締役	手登根順輝
(有) ホクトーサービス	代表取締役	又吉 一夫
ホテルリゾネックス名護	代表取締役社長	小橋川 聡
(有) 丸宮組	代表者	金城 清
(株) 明電舎 沖縄営業所	所 長	幸地 彰
(株) リウゼン	代表取締役	神山 康男
琉球真珠 (株)	代表取締役社長	小渡 信勝

3万円以上～10万円未満		平成16年12月10日現在
会社名	役職名	氏 名
新垣産業（株）	代表取締役社長	新垣 力太
ANAセールス&ツアーズ沖縄（株）	代表取締役社長	木村 健司
大宮保険事務所	代表者	比嘉 敬男
沖縄瓦斯（株）	代表取締役社長	湧川 昌秀
沖縄全日空リゾート（株）	代表取締役社長	柴田 光彦
（株）沖縄ダイケン	代表取締役社長	平良 哲
沖縄通信ネットワーク（株）	代表取締役社長	久場川 森男
沖縄ツーリスト（株）	代表取締役社長	東 良和
沖縄テクノクリート（株）	代表取締役社長	仲本 幸文
沖縄道路（株）	代表取締役社長	大城 嘉信
沖縄ポッカ食品（株）	代表取締役社長	水田 正明
（株）近畿日本ツーリスト沖縄	代表取締役社長	泉 康男
（有）金城印刷	代表取締役	金城 郁子
（株）具志堅建築設計事務所	代表取締役	具志堅 喬
（株）国際システム	代表取締役社長	南郷 辰洋
（有）里江	代表取締役	知名 里江
新星出版（株）	代表取締役社長	島袋 龍三
（株）人材派遣センターオキナワ	代表取締役社長	渡慶次 実
（有）水耕八重岳	代表取締役	渡久地政行
（有）全勝組	代表取締役	島袋 一郎
全日本空輸（株）	代表取締役社長	大橋 洋治
第1スポーツ社	代表者	宮城 弘
弁護士法人ていだ法律事務所	代表社員	玉城 辰彦
（株）当山土木	代表取締役	當山 憲一
ドライブインレストラン ハワイ	店 長	岸本 恵樹
長濱企業グループ	社 長	長濱 文子
（有）名護電機工業	代表取締役	屋嘉 宗敬
那覇鋼材（株）	代表取締役社長	上原 義雄
日本総合整美（株）	代表取締役社長	古川喜美男
博文館書店	代表者	神元 澄
パシフィック観光産業（株）	代表取締役社長	国吉 真徹
（株）比嘉建設	代表取締役	名護 朝輝
（株）秀KEN	代表取締役	崎浜 秀敏
ヘリオス酒造（株）	代表取締役	松田 亮

会社名	役職名	氏 名
北部港運（株）	代表取締役社長	宮城 松助
ホテル山田荘	代表者	大城 明
マルキ産業（株）	代表取締役社長	喜屋武 昇
（有）丸正工業	代表取締役	比嘉 正直
丸政商事（株）	代表取締役	仲松 由清
（有）名桜環境企画	代表取締役	岸本 直也
（有）名電システム	代表取締役	伊野波盛隆
（株）森のガラス館	代表取締役社長	稲嶺 盛福
（資）ヤナギ電設工業	代表者	仲宗根 勉
（株）ヤマナミエンジニアリング	代表取締役	城間 勉
（有）やんばるライフ	代表取締役	比嘉 良洋
琉球製罐（株）	代表取締役社長	石井 章二
林徳建設	代表者	岸本 林徳
（株）ロワジールホテルズ沖縄	代表取締役社長	阿形 和之

10万円以上～50万円未満		平成16年12月10日現在
会社名	役職名	氏 名
沖興開発（株）	代表取締役	山城 一三
（株）沖坤	代表取締役	宮城 勝
（株）沖成ガード	代表取締役社長	東江 正寛
沖縄協同ガス（株）	代表取締役社長	石川 強
（医）沖縄徳洲会	理事長	徳田 虎雄
（有）宜野座ビル管理	代表取締役	伊芸 美香
コンピューターネットワーク（株）	代表取締役	奥本 弘文
（株）崎浜商店	代表取締役	崎浜 秀清
ザ・テラスホテルズ（株）	代表取締役社長	國場 幸伸
三州観光開発（株）	代表取締役	川畑 幸雄
社会福祉法人松籟会 かりゆしぬ村	理事長	仲兼久文政
昭和製紙（株）	代表取締役社長	比嘉 克己
（有）田場組	代表取締役	田場 兼仁
（有）壺川自動車学校	代表取締役	邊土名朝春
（株）名護建設	代表取締役	仲宗根孝浩
（株）名護電水センター	代表取締役	岸本 晃
南部舗道（株）	代表取締役	山城 一三

会社名	役職名	氏 名
(株) ピーシー	代表取締役	比嘉 克己
(有) 東緑化開発	代表取締役	渡久地政男
(株) 双葉工務店	代表取締役	池原 英樹
フードセンター魚鉄	代表者	比嘉智恵子
(株) マルキガス名護	代表取締役社長	比嘉 功
丸磯建設 (株) 沖縄営業所	所 長	野崎 高雄
(有) 丸喜緑化	代表取締役	喜屋武忠信
(有) 宮里電気	代表取締役	宮里 徳彦
(有) 宮保建設	代表取締役	宮城 貢
(株) 山仁組	代表取締役	山城 仁立
(株) 幸男組	代表取締役	田場 理嗣
(株) リウコム	代表取締役社長	志良堂清治
琉球興産 (株)	代表取締役	山城 一三
琉興総業 (株)	代表取締役	山城 一三

50万円以上～100万円未満

平成16年12月10日現在

会社名	役職名	氏 名
(株)AMS 設計	代表取締役	石川 幸延
(株) 沖縄海邦銀行	頭 取	嘉手納成達
(株) 沖縄銀行	頭 取	安里 昌利
(株) 沖縄設計センター	代表取締役	松田 茂安
沖縄ビル管理 (株)	代表取締役	具志頭朝宣
北沖縄ビル管理 (株)	代表取締役	島袋 幸松
昭和化学工業 (株)	代表取締役社長	比嘉 克己
大同火災海上保険 (株)	取締役社長	宮良 直人
(有) 平良設備工業	代表取締役	平良 勝
(有) 東政建設	代表取締役	名城 政和
羽柴工業 (株)	代表取締役	岸本 正博
(有) 朋友	代表取締役	岸本 正博
(有) 北勝建設	代表取締役	新里 勝則
(株) 北部観光バス	代表取締役社長	岸本 正博
(株) 基土木	代表取締役	仲宗根 正
(資) 森岡産業	代表社員	森岡 秀一
琉球セメント (株)	代表取締役社長	西村 聰

100万円以上～500万円未満		平成16年12月10日現在
会社名	役職名	氏 名
梅林建設（株）	代表取締役	梅林 秀伍
沖縄コカ・コーラボトリング（株）	代表取締役社長	大原 博
沖縄ナショナル特機（株）	代表取締役社長	仲里 政幸
オリオンビール（株）	代表取締役社長	仲村 文弘
（株）カスチャペイリゾート	代表取締役	白石 武治
（株）金秀本社	代表取締役社長	牧野健治郎
（株）神元組	代表取締役	神元 康弘
（株）儀保碎石	代表取締役社長	儀保 正雄
コザ信用金庫	理事長	嘉陽田弘二
（資）コザボウリングセンター	代表者	上原 清善
（株）武国建設	代表取締役	喜屋武國男
（株）渡嘉敷組	代表取締役社長	座間味榮仁
（株）名護パイン園	代表取締役	安里 清
日本電信電話（株）沖縄支店	支店長	日隈 康行
（株）東開発	代表取締役社長	仲泊 栄次
東住宅産業（株）	代表取締役	仲泊 弘次
（有）富士企画	代表取締役	浦崎 康武
（医）はくと会 北部病院	理事長	前田 利夫
（株）北部道路	代表取締役社長	伊差川則雄
（株）前田産業	代表取締役	前田 裕継
（株）屋部土建	代表取締役社長	前田 雅康
やんばる物産（株）	代表取締役社長	荻堂 盛秀
（株）琉球銀行	頭 取	大城 勇夫
（医）琉心会	常務理事	島袋 茂照

500万円以上		平成16年12月10日現在
会社名	役職名	氏 名
（株）E M研究機構	代表取締役社長	安里 勝之

団体 10周年記念募金寄付者一覧

※名称は、50音順に記載

3万円未満		平成16年12月10日現在
会社名	役職名	氏 名
北部地区歯科医師会	会 長	金城 正和
北部地区薬剤師会	会 長	大橋 得二

3万円以上～10万円未満		平成16年12月10日現在
会社名	役職名	氏 名
沖縄県卸商業団地協同組合	理事長	儀間 紀善
(社) 沖縄県軍用地等地主会連合会	会 長	喜友名朝昭
沖縄県酒造協同組合	理事長	島袋 周仁
(財) 沖縄電気保安協会 北部支所	所 長	新里 稔
名護社交飲食業組合	組合長	仲宗根正光
北部電気工事業協同組合	代表理事	金良 宗幸

10万円以上～50万円未満		平成16年12月10日現在
会社名	役職名	氏 名
沖縄北部地区生コンクリート協同組合	理事長	比嘉 盛光
(財) 海洋博覧会記念公園管理財団	理事長	山田 勝巳
名護市管工事業協同組合	理事長	伊波 立夫
名護市喜瀬区	区 長	幸地 常一
名護市許田区	区 長	知念 良計
名護市久志区	区 長	島袋 庸雄
名護市軍用地等地主会	会 長	大城 松勇
名護市幸喜区	区 長	宮城 寿
名護市数久田区	区 長	久高 良宜
名護市豊原区	区 長	宮城 稔
名護ロータリークラブ	会 長	奥本 弘文

50万円以上～100万円未満		平成16年12月10日現在
会社名	役職名	氏 名
沖縄県北部設計監理協同組合	理事長	石川 幸延
名護市辺野古区	区 長	大城 康昌
名護市世富慶区	区 長	比嘉 宏夫
北部建築設計協会	会 長	石川 幸延

100万円以上		平成16年12月10日現在
会社名	役職名	氏 名
名桜大学後援会	会 長	荻堂 盛秀

個人 10周年記念募金寄付者一覧

※名称は、50音順に記載

3万円未満					平成16年12月10日現在
安里 正善	大城 洋	金城 安雄	田中 幸蔵	仲宗根一郎	
アズマタツヤ	大城美樹雄	小橋川英行	谷澤 俊英	ナカソネカズヒデ	
東 史子	荻堂 盛淳	崎浜 宏信	田野 秀康	仲田 昭勝	
新垣 勝明	荻堂 義和	崎山 用照	玉城 技子	仲地 修	
新垣 豊政	笠井 亨	座覇 立国	玉城 鉄也	仲地 尚樹	
新垣 光子	兼次千恵美	島崎 悦子	玉城 信弘	長濱 宗夫	
新川 悦子	菊池わかば	下地 一彦	タマシロマサカズ	中原 茂太	
石川 友紀	喜瀬 直樹	城間 正雄	タマシロマサジ	仲間 清順	
ウエズツグノブ	北川 登	新里 晴美	玉寄 寿一	仲松 健二	
上江洲 安幸	キナタダシ	シンジョウヒロト	チネンジュンジ	仲間 義男	
上原 辰雄	儀部 毅	鈴木 喬	チネンヒロカズ	名嘉 光吉	
ウエマアキラ	京谷 久子	鈴木 晴夫	チバナタケシ	中村 章	
上間 一紀	金武 幸一	砂川 浩次	桃原 善永	仲村 佳久	
上間 仁助	キンジョウキミヨ	砂川 幸三	トクヤマショウイチ	根間 朋江	
宇久田貞雄	金城 源治	関根 一夫	徳田 博信	ハマトモセイジン	
宇都 修一	キンジョウユウコウ	高橋 堅一	トクムラノフ	林 優子	
大城 明	金城 太樹	タカハシヒトシ	トヨサトツタエ	比嘉 一成	
大城 幸八	金城 仁	高良 情次	豊永 盛雄	比嘉 辰己	
大城こずえ	キンジョウマサノリ	武村 朝吉	仲里 秀雅	ヒガテツヤ	

比嘉 利尚	真壁 朝孝	宮城 敏郎	山口 貞子	與儀 幸英
比嘉 幹弘	牧野 永勝	宮国 健司	山口夕妃子	與古田光勝
古堅 勝	馬郡 義博	村上江利子	山里 稔	吉川 安一
真栄田篤彦	町田 宗夫	村上 光信	山城 耕政	ヨシダオサム
前田 一善	松田 勇	八幡 克巳	山田 登	吉永 安晃
前田 真顕	ミヤギケンイチ	屋富祖 朗	山根 穰	和田 俊彦

3万円以上～10万円未満

平成16年12月10日現在

新垣 進	木村 堅一	シャイヤステファロック	仲村 英和	宮平 栄治
新垣 裕治	金城 正英	新城 敏男	西平 守孝	森田 孟勝
池原 秀人	国吉 真政	瑞慶山良郁	花城 洋子	屋嘉 義和
上間 篤	黒江 浩紹	高良 一夫	比嘉 厚夫	屋富祖清子
内間 直仁	古謝 寛	玉那覇敏男	比嘉 忠正	山内 昇
梅澤嘉一郎	米須 義秀	知念 一郎	比嘉 稔	山川そのみ
岡村 光信	篠田 恵	辻 由利子	平識 善盛	山城 秀之
荻堂 秀子	芝野 治郎	渡具知 伸	本多 映久	山田 義孝
恩田 満	シマブクロヒロカズ	渡慶次正則	又吉 純	与那覇恵子
ガイエル・ティモシーC.	島袋 利治	仲尾次洋子	宮城 真宏	与那嶺豊見
喜久山朝宣	清水 則之	仲地 清	宮城 安行	レイサム・キャロラインC.

10万円以上～50万円未満

平成16年12月10日現在

赤嶺 勇助	勝木 雄次	玉城 浩孝	比嘉 利春	山里 清
新垣 淑哲	北城 善福	当山 清紀	比嘉 幹郎	山城 保成
猪股 潤一	砂川 寛昭	富田 伸夫	平田 嗣昭	
浮島 明進	瀬名波榮喜	豊里 宜康	三浦 和夫	
嘉陽 進	平良 芳一	中本 和子	宮里 政邦	
垣花 勝行	滝沢 次郎	生見 哲郎	森谷伊三男	

50万円以上～100万円未満

平成16年12月10日現在

伊計 安雄	比嘉 茂
-------	------

100万円以上

平成16年12月10日現在

東江 康治	仲泊 弘次	前田 裕継	山端 清英
石川 清治	比嘉 鉄也	安田 晃次	屋良 朝一

教育研究奨励基金、その他特定・一般寄付金寄付者一覧

平成16年11月30日現在

※名称は、50音順に記載

企業名

(資) 安里組	(株) 沖縄コクヨ
旭建設 (株)	沖縄サン・ビーチ開発 (株)
(有) あづま写真館	沖縄芝浦電気 (株)
(株) 阿波根組	沖縄信用金庫
(株) アラカキ建設	沖縄設計センター
(有) 新垣興産	沖縄全日空リゾート (株)
新垣産業 (株)	(株) 沖縄テレメッセージ
嵐山ゴルフクラブ	沖縄電力 (株)
(株) E M研究機構	沖縄道路 (株)
伊是名建設	沖縄トヨタ自動車 (株)
(有) 上宏工業	沖縄ナショナル特機 (株)
(資) 上間銅材	(株) 沖縄バヤリース
(有) ウエマ産業	(資) 沖縄ヒュウム管工業所
エッカ石油 (株)	沖縄ビル管理グループ
(株) オークス	(株) 沖縄ブックボックス
大城建設	(株) 沖縄松下クレジットサービス
(医) 太平会	沖縄松下ライフエレクトロニクス (株)
大宮保険事務所	(資) 翁長産業
(株) 沖縄	オパス (株)
(株) おきさん	オリオンビール (株)
沖縄印刷所	(株) カイコン
(株) 荻商事	カイコン商事
(株) 沖縄ガード	嘉数胃腸科内科医院
(株) 沖縄エジソン	(株) カスチャベイリゾート
沖縄オートメーション (株)	金秀商事 (株)
(株) 沖縄海邦銀行	金秀グループ
沖縄瓦斯 (株)	(株) 金秀本社
(株) 沖縄環境分析センター	金秀リゾート (株)
沖縄協同ガス (株)	亀寿司
(株) 沖縄銀行	(有) 岸本工務店
(株) 沖縄県種苗センター	北沖縄ビル管理 (株)
沖縄コカコーラボトリング (株)	宜野座建設 (株)

企業名

儀保碎石（株）	（株）大京カントリークラブ
喜屋武材木店	大東エンジニアリング
（資）球陽堂書房	大同火災海上保険（株）
（有）球陽物産	（株）大福産業
（株）協和ガス	（株）大米建設
（株）協和建設コンサルタント	（有）武国建設
協和工業（株）	（医）中部徳洲会
（有）具志堅建設	東亜運輸（株）
（資）国吉設計	（有）東邦建設
久保田照子チャームスクール	同和火災海上保険（株）沖縄支店
（医）敬愛会	徳松税理士事務所
幸地医院	（有）友屋工業
生活協同組合コープおきなわ	友寄内科胃腸科
（株）國場組	豊里組
コザ信用金庫	内外運輸（株）
コザボウリング	（有）仲程電工
崎浜商店	（株）仲本工業
（有）サクモト建機	（資）名護オートガス
里平電気工事社	（有）名護建設
座波建設（株）	（資）名護鋼材
（有）ザマミ	（有）名護自動車学校
（株）サンエー	名護スポーツ店
三州観光開発（株）	名護製氷冷蔵（株）
（有）紫光園	（株）名護電水センター
（株）ジミー	（株）名護パイン園
（株）ジムキ文明堂	（有）名護ペプシコーラ販売所
ジャパン・アンサンブル・カンパニー	（株）名城
（有）昌松組	（株）那覇カントリー
（医）仁愛会	南西食品（株）
新沖縄精器（株）	南部徳洲会病院
（有）砂辺テント	南洋土建（株）
大栄空輸（株）	日興タクシー（名）

企業名

日本テレコム（株）九州支社沖縄支店	（医）友愛会
（医）野毛会	（有）ユーテック
（株）白水堂	（株）ライトモータース 北部工場
博文館書店	（有）リウゼン
（有）浜端産業	琉球銀行大宮支店
（株）東開発	（株）琉球銀行
（有）東緑化開発	リュウキュウクラシックアカデミー
（有）備瀬組	琉球セメント（株）
（有）富士企画	琉建（株）
（有）ブックボックス名護	（医）琉心会
（有）朋友	りゅうせき商事（株）
（有）北部重機サービス	
北部食糧（株）	
北部製糖（株）	
（有）北陸運輸	
（有）真栄田	
（株）マルキガス名護	
（有）萬茂重機土木	
（医）道芝の会	
南開発サービス	
（資）南建設	
（資）宮原住設	
（株）メイクマン	
名建産業	
（株）基土木	
安田生命保険相互（株）	
（株）屋部土建	
山城時計店	
山田電気工事社	
（有）山戸建設	
やんばる農業協同組合	
やんばる物産（株）	

団体

安田区	許田区
アヤメバンドコンサート実行委員会	金武町役場職員一同
アルゼンチン 阿根廷台湾人公共事務會	久志区
伊是名村村長他役場職員一同	国頭教育事務所
稲田小学校	国頭地区社会教育委員連絡協議会
浦添市管工事事業協同組合	国頭地区小中学校職員一同
うらわ会	久辺中学校
大宜味村役場職員一同	県立第三中学校13期生一同
大阪沖縄県人会連合会	県立第三中学校14期生
大宮小学校	県立北部工業高校P.T.A
沖縄県印刷団地協同組合	幸喜区
沖縄県卸商業団地協同組合	呉我山区
沖縄県教職員共済会退職互助部国頭支部	國和会
(社) 沖縄県軍用地等地主会連合会	此花沖縄県人会
(社) 沖縄県歯科医師会	在亜沖縄県人連合会
沖縄県柔道連盟北部支部	(社) 茶道裏千家淡交会
沖縄県職業能力開発大学校	謝敷区
沖縄県婦人連合会	諸見12班
沖縄県北部支部技能士会	シルバー女声コーラス白ゆり 名護少年少女合唱団
沖縄電力労組	数久田区
嘉数 俊明 外14名	第14回名護市ゴルフ選手権実行委員会
がじまるの会	(財) 電気通信普及財団
上運天区	時の会絞り染同好会
嘉陽区	豊原区
漢那小学校	仲田区
喜瀬区	今婦仁村学校給食センター職員一同
宜名真区	今婦仁村役場職員一同
宜野座高等学校	名護想(うら)会
宜野座小学校	名護会
宜野座村役場職員一同	名護金融協会
宜野座中学校	名護クラブ
協和工業(株)役職員一同	名護高校14期会

団体

名護高等学校	名桜大学教職員親睦会参加者一同
名護高等学校27期生	名桜大学後援会
(社)名護高等学校後援会	名桜大学を支援する会
名護市軍用地等地主会	本部高等学校
名護市事務機・教材販売協同組合	本部町観光協会
名護市商工会	本部町役場職員一同
名護市商工会婦人部	屋我区
名護市役職員一同	屋部支部区長会
名護十字路商店街振興組合	やんばる農協役職員一同
名護地区交通安全協会	世富慶区
名護闘牛組合	(財)琉球財団
なごみ会	琉球ブクブク茶あけしの会
名護ライオンズクラブ	
名護ロータリークラブ	
二水会	
ピートゥ経営塾	
東村役場職員一同	
平敷区	
辺戸区	
辺土名高等学校	
北山高等学校職員互助会	
北部建築士事務所協会	
北部広域市町村圏事務組合	
北部工業高等学校	
北部地区薬剤師会	
北部地区連合婦人会	
北部農林高校(定時制)	
北部農林高校	
(社)北部農林高等学校後援会	
(宗)宮里キリストの教会	
宮里区	
名桜大学基金課募金箱	

個人

東江	悦子	伊差川	吉明	上原	貞男	大城	信子
東江	憲六	伊佐	嘉光	上原	清善	大城	秀雄
東江	盛栄	石川	清治	上原	二雄	大城	正也
東江	盛常	石川	友紀	上間	篤	大城	道子
東江	俊明	石川	義信	上間	清	大城	幸夫
東江	平之	石島	英	上間	幸有	大城	行成
東江	ミエ	伊志嶺	朝次	上間	隆則	大角	翠
東江	盛蔵	石嶺	常雄	上間	良光	大田	京子
東江	康治	伊是名	力	上村	幸雄	大田	孝金
安里	普泰	伊藤	美津子	宇座	徳正	大嶺	快昌
安座間	弘	糸数	勝彦	内間	梅正	萩堂	秀子
安座間	米子	糸数	剛延	内間	広樹	萩堂	盛淳
安次富	長明	糸数	光子	浦崎	康哲	萩堂	盛秀
阿波連	ナヘ	糸満	レイ	浦崎	千鶴子	小渡	一成
新垣	榮進	糸嶺	トヨ子	浦崎	政子	翁長	謙良
新垣	修	稲福	全三	宇良	千代	翁長	正吉
新垣	誠福	稲福	盛安	榎	治	翁長	健喜
新垣	善孝	稲嶺	盛治	栄野	元康重	翁長	良明
新垣	博克	稲嶺	たつ子	大兼久	こずえ	親川	博子
新垣	文儀	伊良波	長	大兼久	正四郎	親泊	博司
新垣	裕治	伊良波	史夫	大兼久	正義	ガイエル	ティモシー C
新垣	ヨシ	伊良波	光子	大城	永久	垣花	和子
新垣	芳一	伊礼	英一	大城	一子	垣花	勝行
新垣	涼子	伊禮	正榮	大城	勝正	垣花	辰勇
アラスーン	ピーター M	伊禮	正哲	大城	菊也	垣花	豊順
新田	ツル	上里	艶	大城	清昭	垣花	涼子
伊江朝章	・キミ子	上里	八重子	大城	清信	我喜屋	朝尚
井口	和義	上江洲	朝和	大城	順子	笠井	俊澄
伊計	耕一	上江洲	朝輝	大城	正治	桂幸昭	・正子
伊芸	新栄	上江洲	朝眞	大城	生子	嘉手川	重義
伊芸	朝春	上江洲	トミ	大城	清福	我那覇	明
池原	秀人	上江洲	均	大城	正	我那覇	浩
池間	和代	上原	康助	大城	千代子	兼次	久子

個人

兼元 春子	金城 哲成	崎 山 家	新里 里春
我部 政男	金城 信登	作田 和隆	新里 シズ
神元 澄	金城 初子	佐々木和子	新里 孝和
神谷 順子	金城 正英	佐渡山照子	新里 晴美
嘉陽 宗明	金城 稔	座覇 政一	新城 晃
狩俣 真彦	金城 康登	沢 恒雄	新城 繁正
岸本 喜順	金城 喜弘	シーキンスドナルドM	新城 博
岸本 好永	金武 暉子	潮平 順生	新城 安子
岸本 幸子	久志 章	識名 盛敏	末吉業右
岸本 泰吉	具志堅 用長	志喜屋 毅	末吉ツヤ子
岸本 正	具志堅芳子・宗章	芝野 治郎	杉山 崇
岸本千恵美	国吉 信義	島田 昭	鈴木光春・靖子
岸本 司	國吉 眞勝	島袋 恵子	砂川榮右
岸本 定昇	久場 ウト	島袋 哲	砂川ちよの
岸本 裕光	古謝 幸子	島袋 純弘	砂川 寛昭
岸本 正博	古波蔵眞一郎	島袋 伸三	砂川ミドリ
岸本 勝	古波倉正偉	島袋 清徳	住江 淳司
岸本 ミツ	小橋川 肇	島袋 輝夫	関 攻
岸本 実	小橋川ハナ	島袋 利勝	瀬名波榮喜
岸本 盛正	小橋川春昌	島袋 利治	祖慶 良夫
喜瀬 慎安	小橋川幸益	島袋 学	園原 繁
喜瀬 直樹	古波津桂子	島袋 満英	平良 梅吉
喜瀬 初子	小濱 哲	嶋袋 安昌	平良 英順
喜名 恒忠	米須 義秀	島袋 安行	平良 親徳
儀部 守朝	呉屋 永徳	下地 吉子	平 澄夫
喜屋武 浩	呉屋サエ子	シャイヤステ ファロック	平良 忠昭
喜屋武 満	呉屋 奉仁	ジャネット K フィンク	平 政也
喜友名カツ子	斉藤 武継	謝花 勝子	高石 利博
許田 純市	斎藤 陽子	諸喜田達雄	高江洲 惇
金城 昭夫	崎浜 勝子	諸喜田吉正	高江洲盛朗・瑩子
金城 清子	崎濱 秀榮	白井 晴男	高山 宏明
金城 清	崎浜 秀信	白保 台一	高良 トヨ
金城 武彦	崎浜 秀松	城間徳太郎	高良 文雄

個人

沢嵜 安文	照屋 善彦	長田 紀昭	野村 正哲
田中千恵子	當真 正幸	仲田 善明	朴 在徳
谷村賢一・のりえ	当銘 由金	中地 昭	花城 清林
田場 盛善	当山 清正	仲地 清	濱元 栄吉
田場 理嗣	當山 光英	仲泊 弘次	ビエンバンガニバン
玉城恵美子	当山 ツル	名嘉 正明	日置 恵
玉城 勝郎	渡久地 繁	仲松 源光	比嘉 晃
玉城カマド	渡具知 伸	中村 阪子	比嘉 勲
玉城 享子	渡具知武男	仲村 善栄	比嘉ウメ子
玉城 清	渡口 彦一	仲村 昇	比嘉 栄助
玉城 金栄	徳松 晃	中村 秀雄	比嘉 一雄
玉城 精喜	匿名 希望	仲村 宏春	比嘉 清人
玉城 盛徳	徳山 敏子	仲村 宏正	比嘉 仁一
玉城 徳源	渡慶次道信	中村 正巳	比嘉親一郎
玉木とし子	友寄 隆勝	仲本 興順	比嘉 真義
玉城 判	友寄 隆貞	仲本 徳友	比嘉仁起・喜久子
玉城 弘昭	友寄 隆二	中本 徳友	比嘉盛喜・弘子
玉城 政光	豊里 雄公	中本 昌子	比嘉セツ子
玉里ツネ子	豊田 初枝	中本 益人	比嘉 丈雄
玉元 栄吉	仲井間憲栄	中山 きく	比嘉 辰己
多和田真二	仲井間憲良	中谷 行雄	比嘉 民裕
知念 一郎	仲尾 茂治	名城 和子	比嘉 照夫
知念 正喜	仲尾次清勇	名城 嗣明	比嘉 敏雄
知念 義和	仲尾次八重子	並里 明達	比嘉 利充
知花 高信	仲尾次洋子	新島 正子	比嘉 トミ
知花 裕昇	仲里 眞光	西平 利子	比嘉 永夫
知花 實	中里 ハナ	西平 守雄	日賀 ハツ
知花 芳子	名嘉 鈴子	西平 義光	比嘉 英行
津波古清吉	名嘉 正栄	新田 保秀	比嘉 松徳
津波古 浩	仲宗根恭子	根路銘文子	比嘉 道念
津波 幸子	仲宗根孝秀	饒波 正男	比嘉美代子
津波 好美	仲宗根信夫	野原 幸子	比嘉 宗憲
照屋 正一	仲宗根伸樹	野原 良公	比嘉 元子

個人

比嘉 元幸	前田 正富	宮城 藤義	山川 亜季
比嘉 佑好	真栄田義和	宮城 フミ	山川 宗孝
比嘉 良雄	真栄田義隆	宮城 道政	山川そのみ
比嘉 良和	真栄田義弘	宮城 良伸	山川 昌伸
比嘉 能正	真境名結子	宮城 義幸	山川 宗彦
比嘉 リエ	又吉 純	宮里 勝之	山口 栄三
日高 清善	松田 京子	宮里 勝和	山里 清
日吉 松仁	松田 啓成	宮里 キヨ	山里 啓子
平田 永哲	松田 幸博	宮里 純永	山里 将晃
平田喜一郎	マリア・宮城・パートラフ	宮里 政順	山里 宗福
平山 良明	宮城 勇	宮里 武雄	山城 清永
普久原 淳	宮城 カナ	宮里 輝光	山城 正健
普久原朝光	宮城 源文	宮里 政邦	山城 孝信
普久原朝徳	宮城 幸栄	宮里 泰弘	山城 朝健
普久原朝松	宮城 里子	宮平 栄治	山城 保成
普久原トヨ	宮城 早苗	宮平 敏子	山城 吉達
福村 明子	宮城 秀治	銘荊 輝子	山城 良秀
藤田 辰矢	宮城 昌一	飯井 敏雄	山田 義孝
普天間 稔	宮城 常吉	森田 道子	山入端幸正
富名腰義幸	宮城 親哲	森 安子	山入端富吉
富名腰春子	宮城 進	諸見由美子	山入端信博
古田 達彦	宮城 清徳	屋嘉比康幸	屋良 朝光
平敷 浩邦	宮城 善永	安井 忠松	屋良 朝一
平識 善盛	宮城 善吉	安井 裕一	吉川 安一
平識 善盛	宮城 泰治	安田 和彦	吉田 光正
平敷 令治	宮城 タケ	安富 徳吉	吉元 ヨシ
外間 和子	宮城次夫・久子	安村 敏子	吉元 嘉正
外間 完和	宮城 恒雄	矢野 弾	米盛 英吉
外間 宏正	宮城 桃郁	屋比久武松	李 鎮榮
外間 政吉	宮城 俊男	屋比久 浩	レイサム キャロラインC
保利しのぶ	宮城 久勝	屋富祖清子	湧川 正義
前里 慎一	宮城 英雄	屋部 高志	
真栄田 文	宮城 広也	屋部 幸弘	

新聞に見る名桜大のあゆみ



1993年

1993年12月15日
琉球新報

喜びにわく北部住民 名桜大学 最終答申

【北部 十四日、文部省】一九七五年から名桜市の大学設置・学校法人審議を中心として構想が浮上、会名桜大学の設置最終審議したところ、北地域の実現することになった。名桜市の置業正財は、北への大学設置は「県や北部十二町村、関係者の力で、最終開校を確することができた。大学の設置は北地域の若人たちに夢と誇りを与え、教育の振興と地域の活性化に寄与すると期待している」と語った。

来春の開学決定

名桜大



やんばるの夢 サクラサク

認可決定を喜ぶ名桜大学設立準備事務局の職員ら（名桜市港）

【名桜】来春四月の開学に向け、名桜市を中心に設立準備が進められてきた私立・名桜大学は十四日、大学設置審議会からの答申を受け、今年十一月一日に文部省で大学設置の認可証が交付され、二十日には募集要項が発表される。名桜市では「市民が長年待ち望んでいた大学が、いよいよ実現する。街中への核として北地域の発展に大きく貢献する」と大々期待を寄せている。

募集要項22日に発表

名桜大学は名桜市を中心に設立準備が進められてきたとす。北地区十二町村で設立に向けて取り組んできた。一九九一年五月には設立準備委員会（東江康治委員長）が決定、設置認可に向け全力を挙げてきた。名桜市急ぎの校舎建設も順調に進み、講義棟、研究棟、学生宿舎、図書館などが来年二月二十日に完成する予定。

名桜市の吉元昭正助役は「長い間待ちかねていた認可が決定し、涙が出るほどうれしい。北部の経済的、距離的なハンデ、を克服する大きな力になると思う。残されている諸問題の解決に全力で当たり、県内はもとより、県外からも優秀な学生を募集したい」と喜びを表した。

地元の関心も 要望も高まる

【名桜】受験生を抱える地元関係者は名桜大学の開学が正式に決定したことを歓迎する一方、教員免許取得課程の早期導入や問題点の改善を要望する声も上がっている。

県立名桜高校進路指導室の古坂哲夫教諭によると、十一月に入ってから学側の説明会が始まり、同校でも生徒たちの名桜大に対する関心は高まっている。だが大半は、県内他大学とも併合しない。その特色を生かし、募集に全力を投入し、国際社会で活躍できる人材を養成する。準備校の奥田正子校長は特に、入内容に子供たちは特に入内容を上の志望を目標に学生募集に力を入れている。

学長就任予定でいる東江康治氏は「やんばるの人々の長年の夢がかなったと喜んでいる。今は地域にかかわる国際的な大学でないと発展していかない。名桜大学は教育、カリキュラム、学費構成などさまざまな面で国際的な大学を目指したい」と語った。

ぜひ教職課程を

校長は、教職課程がないのは欠点だと指摘する。同校に在籍する二百五十人のうち、四割程度の履修を希望する生徒は八割にも上るといふ。また開かれた大学づくりを目指すとの観点から「主人である高校生、浪人生を対象にした、ゆんだプログラムでも開いて、受験生の疑問に答えるヒントをつかんでは」と、本側に要請する。

名桜大学PTAの平良通子副会長は仕事を休む社会人の夜間コースの教職課程がないことは残念しながら、一躍の立場から言うと、経済的負担は大きい」と、地元の大学の利用に期待する。本学側の宣伝活動が不足しているとの認識は同様に「もう少し私学の推薦入試の割合が明かされてほしい。次に期切迫がなっている」とも指摘する。

1993年12月15日＝沖縄タイムス

1994年

投資部門で150億円以上



名桜大開学の経済効果

【名護】名護市はこのほど、市内為又に開学する私立名桜大学の経済波及効果について試算結果をまとめた。それによると、大学の校舎建

4年後に年56億円

課題は学生街の環境整備

名護市が試算

試算は、青森県の青森公立大学の経済効果に関する報告書を参考に、波及効果の比率などを適用した。

これらの工事・消費が發生することによる直接需要

投資部門では、九年度に於ての校舍等の建設費が十億円あるが、九八年生まれに民間の生半パート建設費(八百十戸を想)として二十五億円を投入す。

4月の開学に向けて工事が進む名城大学。大学設置による大きな経済波及効果が期待されている。名護市為又

果の比率を青森より低めに設定して投資部門で一・八倍、経常部門で二倍とし、それぞれ掛けあわせてはじいたのが百五十三億円、五十六億円となった。そのうち

えて試算書は「經常部門は毎年度続く経済波及効果であり、名護市に単年度べースで六十億円近い産業が生まれる意味を持つ」と指摘する。

岸本建男企画部長は「市の投資は景気の落ち込みの中で大きな効果となる。市民には、こうした投資の波及効果も相当程度見込めることを知ってほしい」と話す。

工会の秋草盛秀会長は「試算が表現するためには、行政が学生街としての環境整備をまじへてやるかが課題だ」と。例えは現在、大

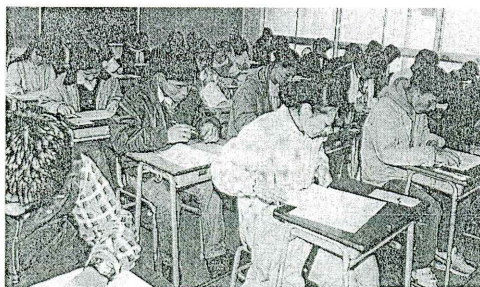
1994年2月27日
沖縄タイムス

「サクラ咲カスゾ」

名桜大初の一般入試競争率は7・45倍に

定員二百十人（三学科各七十人）に対し千五百六十人が出願、競争倍率七・四五倍の狭き門となった私立・名城大学（名古屋）の初めての一般入試が十一日した。

雨の影響もあって時間ぎりぎりに駆け込んで来る受験生もいたが、晴れの一期生を自指し、緊張した雰囲気の中で国語、英語の問題に取り組んでいた。



名大の晴れの一期生目指し、入試問題に取り組む受験生たち―名護試験場の名護高

志願者は男子千八百八十人、女子三百八十人で、県外高校出身者は八十二人。試験場別の志願者数は名護高三百九十六人、小禄高五百五十六人、普里高六百五十八人、宮古高四人、八重山高五人。全体で十八人が欠席

した。大学職員も緊張の中で初めての入試準備作業に取り組み、前日は夜遅くまで万全を期してのチェックを行った。終了後、津波古浩教授部長は「初めての入試が

大過なく終了してほつてゐる」と話していた。

合格発表は二十一日午後一時で、名松大学事務局内に掲示される。県内他大学と併願する学生がいることも予想されるため、合格者は定員より二割程度増やす見込み。

1994年2月12日
琉球新報

東江学長が企業訪問

来春卒1期生の就職推進

1997年4月16日
琉球新報

来る。第一生が卒業する名校では学生の就職を推進しようとする東江康治校長と就職の知念一郎理事長が十五日、銀行など県内企業五社を訪問。学生の採用を要請中、と写真。

午前中、川郷銀行を訪問した東江学長が「語学教育な特色あるカリキュラムを実践してきた。ぜひ名校の学生を一人でも多く採用してほしい」とPRすれば、応じた同行の上間日出夫取締役人事部長は「今年は昨年より十人ほど増の四十人程度を採用する予定だ。優秀な人材を送ってほしい」と答えていた。

同大は第一期生三百七十五人が来春卒業予定。一期生の就職率が注目される中、初めに就職協定締結で、今年からは就職協定が廃止され一先輩がいらないというフンディがある上に、企業動向が早く出遅れを感じている「東江学長」という。

そのために三月には就職



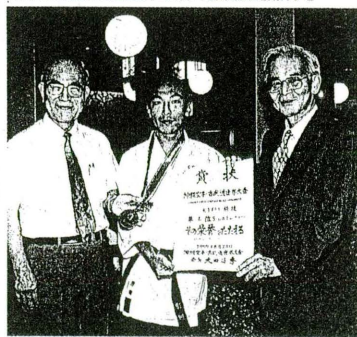
そのために三月には就職ガイダンスを実施。企業向けには「企業の皆様へ」と題したパンフレットを作り、同大の教育内容などをアピールする。また県内のほか首都圏などで企業訪問を行い、学生の採用を訴える予定。

ブラジル日系3世

津田さん（三井は八月に開催された新機軸を手吉武道選手界大会の興那がまた落つてやめ、といった表情で、傍らの銅メダルの大事そうに手をやった。

同大会の成男子の部で百六十人の中の三位入賞。故郷・

留学期間中に文武両道を貫いたセルジオさん。名匠大の東江陣治学友と親名成歩昇國際学度厚も今後の活躍に期待する。



名桜大学の交換留学生



地蔵のイベントにも名根大の友人と積極的に参加。8月の名護人エピソードスタディで

（目）月曜日掲載

(頁 月曜日掲載)

空手道世界大会で3位

あこがれた空手の道門下生とさまざまな立場の
祥地オキナワで、栄冠を手らメダルの重みを感じてい

[illegible]

1997年9月7日
琉球新報

5

1998年

式典後「名桜大バザー」の掛け声でキャップを空に舞い上げた第一期卒業生
名護市為又、名桜大体育館



【名越】名桜大学（東江康治学長）の第一期卒業式が二十日午後、名護市為又の同大体育館で行われた。北部やはるの悲願がかない、沖縄初の公設民営大学として一九九四年に開学した同大の第一期生は福岡・アルゼンチン、タイの留学生七人を含む三百一十七人。卒業生らは日本の大学では珍しい黒のキャップアンドガウンを身にまとい、名桜大のカラーである「国際色」を体現。一期生の誇りを胸に卒業証書を手にした。

名桜大1期生巣立つ

国際色あふれる式典

「私たちの未来輝け」

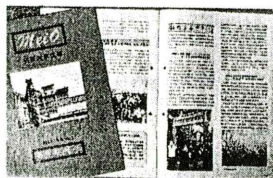
第一期卒業生は、国際文「セシ」を送った。
化学科九十八人、経済情報科九十八人、経営情報科九十八人、観光遊学科学科九十八人、北部初の大として地域の注目を浴びる中、進学や留学などを除いた就職希望者の就職内定率が八五％（三月二十日現在）をあげる好調な滑り出しとなった。
式は、名護市が招待したハワイホルル市ミヤシロ・ソイボイ十二人の舞踊で幕開け。国際交流協定校であるハワイ大学ヒロ校のウィリアム・ベアマン学長が来賓あいさつ、タイ・チェンマイ大学のジョーティ・イ・チットワラノント学長が卒業記念講演の弁士を務める国際色あふれる式典となった。
東江学長は「北部十二市町村関係者の協力のたまものが今日の卒業生の晴れやかな姿」と地域に感謝のあいさつ。また、卒業生には「平和、自由、進歩」という開学理念の下に教育を受けたみなさんは、私どもの宝。二十一世紀の主役として国内外で活躍すると確信している」と激励のメッセージを送った。
総代を務めた社会人学生重原さん（四）は「国際文化学科では「本学や現地で学んだことを活かして、社会に貢献する」という思いが、卒業生に託されている。卒業生は第一期生として、これからの人生で、この思いを胸に抱き、活躍の場を求め、社会に貢献する人になってほしい」と語りかけた。
式典後のガーデンパーティーでは、保護者や学生、教員らが入り交じって、地域の行事に参加した思い出を語り、留学生を中心に記念撮影。学生らが選ぶ「ティーチャー・オブ・ザ・イヤー」には、小濱哲助教、島本治助教、宮城公子講師の三人が選ばれた。

1998年3月21日＝琉球新報

名桜大が広報誌発刊

【名護】今年開学五周年を迎えた名護市の名城大学

（東東海報）は、このほど、大学広報「Meio」第二号を発刊した。留学生や県出身者らの「私のふるさと」紹介、写真をつづる開学からの歩み、新春座を題する本土出身者が通う寮生などキャンパスライフを紹介する内容。同大学は紹介一では中国、ポリビ



ア、阪、神寮川出身者が
が囂し、それをお国自
慢をビール。

昨年三月卒業、社会生
活躍する高松、期生が、就
職体験報告、夢と後進たち
にメッセージを託す。同大
学が南米、東南アジア、
国内で実施する現地研修参
加者も感銘を寄せ、生き
生きとした学生生活の様子
が伝わっている。

学生生活、大学取り組みを
紹介。情報満載の表紙大学広
報 [No.01]

開学5周年祝う

留学生センターも完成

【名護】名護大学（東江康治学長）は十七日、開学五周年と多目的ホール・留学生センター落成記念式典を行った。式典では関係者約三百人が参加した。

今日と學生を主とした、多目的の環とし遊楽のホールと誕生するシナは、沖繩軍基所所在面積は三八百七二平方ワーク、教館コンクリートワーク援装などが可能となる。三箇建で、総工事費は七億九千九百十四圓四角五分、席の大中小、マルチンテラ・ムルチエリに於ける教育文化座落した。

「名簿」／「秘文」

振興の拠点として、大きな期待を寄せられている」と話し、今後の発展を誓った。

その後、衛星通信を使って早稲田大学の石塚博司副総長があいさつ。「双方方向のコミュニケーションが図れるネットワーク構築で、お互いの知的好奇心を刺激し合おう」と名模大にエールを送った。



学長に東江平之氏

名桜大学の次期学長に、
東江平之・国際学部経営情

報學科教授兼が就任する
ことが、二十日の理事会
で承認された。任期は来年
四月一日から三年間。
東江教授は、一九五五年
米国・アイオワ大学心理學
科卒業、六年エール大学
大学院博士課程を修了。五
五年に琉球大学に採用さ
る。

1997年7月18日
沖縄タイムス

いぎな人 わが街

やんばるの若者が、もつと自然を体で感じたいとサークルを発足させた。会の名は「やんちャー」。先日、名護で自然保護活動家、C・W・ニコルさんのフォーラムが行われた。そのスタッフだ。

「やんちゃー」とは、面
白いネーミングだが、「や
んちゃ坊主」から取ったの
ですか

こから暮らしや環境のこ
と、自然を守っていくこ
と、自然との新しい付き
合い方などを考えていき
ます

「フォーラムで、ニコル
さんに対する質問を考える
のが難しかった。いい質問
がなかなか浮かばない。そ

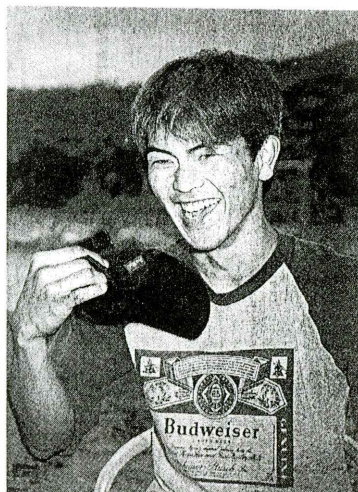
「それともていませう。やんばる、あつちや一歩く、ヤンヅ、ちや一遊び」といふいろいろ言葉が複合して決めた。ただ、普通の名前にはなかなかつた。というのには、今までのないことをやわらなかつたので、名前もそれまでではないにしろ、なを考えた。単純に「ニコルさん」ではない。大盛況だ。だが、裏方の「二コルさん」は、私たちが自然といへども知らないところの裏返し。そこで、名越市東隣の自然体験「じんぎ学校」

発足の契機は「ニコルさん」

れは、私たちが自然について何も知らないことの裏返し。そこで、名護市嘉陽の自然体験『じんぶん学校』

やんちゃ」名護で行われた「ニコさんウォーム」の代表委員として集まった上原さうか
 けで、発足したサークル。現在メンバーは中学二
 年生から二十九歳の社会人までの十三人。毎週
 何卒やらかし楽しんでいる人がリーダーになるというユ
 ニークな取り組みを行って、新潟県（じょう）さん
 ぽの「ニコさん」年が「取のあそび発表」。メン
 バー募集。

組みを
「三日間何も持たずに」
然の中心で暮らしてみる
か、二十四時間耐久かく
んぼなど、遊びの要素を
り入れたことをやりたい
従来の考え方にちがわれ
いというか、複眼的な物
児方ができるようになら
ば」と思う。やっている
はに、いろいろな工夫を
し、神童の自然に対する
りを育てていきたい」
（聞き手 北部報道 堂
原栄喜）



自然サークル
やんちゃー **新崎 聖さん**

楽しみながら
自然を学ぼう

に全員が参加、体験を通して、大成功だったと思いに生かすことができた。フオーラムは多くの人に来て、それ以上に実行委員が一つになって取り組めたことがとても

2000年4月30日
琉球新報

一設備委員の意見は、一九九四年に投資認可し下つてから、投資認可したのが四九年に、学費などが上がった。しかし、委員会がきたところはバブルのピーク。市は不動産を処分して、本校立の資金に充てるつもりだったがアルが「ほけい、なかなかねばない」と言っていた。この言葉外に無かった字が「おまかせ員」有能な事務職を要するものにもあつた。大企業にもある。

遊園地では、そのころの教養目上と専ら目的の基を取る学校設備を改訂した。太田洋行の題名で選挙校

あったのは遠い国だった。特色ある思い切ったカリキュラムを作る（と）ができた。例え英語のアジア

海外の7人 有能な教職

海外の7大学と交流 有能な教職員集めに苦労

— 今後の予定は、
二年前から順次夜業喜歡
授で中心になって実施して
いる「大学と人生」という
講義がある。外部の講師を
呼んで、その人の大学時代
を振り返ってもらうもので
評判が良い。あと半年か一
年(+)の講義を担当するの
がよい。

名按、大議長を三月末で退任した東江康治氏。開学の一九九四年から二期六年間、議長を務めた。設立準備委員時代を含めると九年間、同大の基礎づくりに携わった。東江氏に設立準備期、そして開学してからの六年間を振り返ってもらった。

（聞き手・文化部 高良利香）



名桜大の設立準備期から
これまでを振り返る東江
康治前学長一名護市高又
・名桜大

退任した東江康治
名桜大^前学長に聞く

に刀を入れ、また情報教室
については情報処理の科三
を全学生に課した。

[illegible]

2000年4月5日＝琉球新報

8

2001年



河原でニワトリから内臓を取り出し、調理する参加者
＝名護市・瀬河川

鶏のさばき方体験

山原孝
講座

「残酷」「おいしい」さまざま

名桜大学

「残酷」ニワトリを斬るまでには調理する上での調理が、調理場では聞かれた。名桜大学の第八回原講座として企画され、約10人が参加。自然の中で、動物を殺して食べるという「食の原点」を学ぶ機会となった。

調理したのは、卵をある程度まで煮た鶏肉。調理場では、鶏肉を調理する上での調理が、調理場では聞かれた。名桜大学の第八回原講座として企画され、約10人が参加。自然の中で、動物を殺して食べるという「食の原点」を学ぶ機会となった。

調理場では、鶏肉を調理する上での調理が、調理場では聞かれた。名桜大学の第八回原講座として企画され、約10人が参加。自然の中で、動物を殺して食べるという「食の原点」を学ぶ機会となった。

「食の原点」を見直す

2001年2月14日
沖縄タイムス

21世紀の長寿 探る

名桜大で国際フォーラム



健康長寿と食文化などについて話し合われた国際フォーラム＝名護市の名桜大学

「沖縄の食」を考察

6カ国・地域の研究者参加

【名護】平成十三年度沖縄国際フォーラム「伝統的食文化と健康長寿」（主催：国際交流基金、沖縄県、共催：名桜大学、沖縄国際長寿会議実行委員会、琉球新報）が十四日午前、名桜大学構内の名護市多目的ホールで開かれた。フォーラムでは日本、韓国、フィリピンなど六つの国と地域から食文化の研究者八人が発表された。

午前中は第一セッション「今日の健康長寿研究」があり、オーストラリア・フレザース大学長寿研究センターのゲイリー・R・アンドリュース所長と大阪国際女子大の健康長寿と食文化について話し合われた国際フォーラム＝名護市の名桜大学

2001年11月14日＝琉球新報

9

2002年

新垣 治美さん (26)



新天地へ決意も新たな
 難関の外務省在外公館派遣に合格し、今月中に南米・チリのサンティアゴに赴任する。生れはアルゼンチンで小学生の時、那珂市出身の両親とともに和歌山へ。名桜大在学中の現地実習や留学で再び南米に渡り、

▲2002年3月14日
 沖縄タイムス

2002年12月8日＝琉球新報▶

七日に琉大で開かれた南方資源利用技術研究会で報告された。山城助教によれば、伊平屋島沖での発見後、与那国島沖でも確認されており、被害がさらに拡大する可能性もあるという。外国はで発生した腫瘍は、人間や家畜排水に含まれるバクテリアが主な原因だが、今回は人的影響が考えられない地域での発生で、新たな原因が考えられるという。腫瘍はサンゴを白く変色させ、表面に浮き出るような形で、広がればサンゴの成長に重大な影響が出るという。実験で他のサンゴへの感染はなかった。しかし、外国では腫瘍が原因でサンゴが全滅した例もあり、さらに研究が必要という。山城助教は、原因不明の腫瘍だけでなく、地球温暖化の影響で、二〇〇〇年以降は毎年、白化現象が起きる可能性があるとし「温暖化防止策や病気の対策など、今すぐに対応しなければいけない」と警鐘を鳴らした。



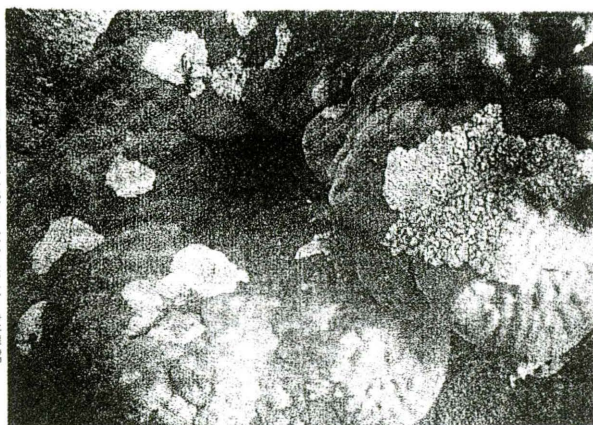
女子の部で名桜大がV

九州大学ソフトボール 沖国大は3位

ソフトボールの第2回九州地区大学秋季大会最終日は6日、那覇平和の森球場まで行い、女子の部で名桜大が優勝、沖国大が3位に入った。

【男子】
 ▼決勝 ナゴヤ東洋
 名桜大 7-0 勝 福岡国大
 九州国大 9-2 沖国大
 ▼開場券
 九州国大 30000000
 000100001
 久留米工大
 (九) 大石・高橋
 (八) 尾崎・我喜屋
 ▼本塁打 後藤(九)
 ▼三塁打 小川(九)
 ▼二塁打 阿重田(九)
 ▼盗塁 阿重田(九)
 ▼盗塁 阿重田(九)
 福岡大 8-5 沖国大
 名桜大 6-2 九州安大
 ▼順位 名桜大 優勝 九州安大 2 勝 福岡大 1 勝 鹿

▲2002年10月7日＝琉球新報社



（関係不明の腫瘍が発生し、一部が白く変色したサンゴの伊平屋島沖）（山城助教が撮影）

サンゴに原因不明の腫瘍

山城名桜大 世界初の症例か 助教教授確認

伊平屋と与那国



山城助教教授

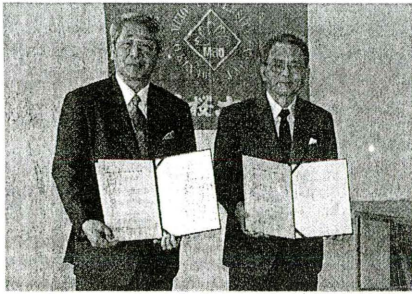
七日に琉大で開かれた南方資源利用技術研究会で報告された。山城助教によれば、伊平屋島沖での発見後、与那国島沖でも確認されており、被害がさらに拡大する可能性もあるという。外国はで発生した腫瘍は、人間や家畜排水に含まれるバクテリアが主な原因だが、今回は人的影響が考えられない地域での発生で、新たな原因が考えられるという。腫瘍はサンゴを白く変色させ、表面に浮き出るような形で、広がればサンゴの成長に重大な影響が出るという。実験で他のサンゴへの感染はなかった。しかし、外国では腫瘍が原因でサンゴが全滅した例もあり、さらに研究が必要という。山城助教は、原因不明の腫瘍だけでなく、地球温暖化の影響で、二〇〇〇年以降は毎年、白化現象が起きる可能性があるとし「温暖化防止策や病気の対策など、今すぐに対応しなければいけない」と警鐘を鳴らした。

10

2003年

横浜商大と単位互換

名桜大12校目の協定



【名桜】名桜大学（安）と横浜商大（安）は、単位互換協定を締結した。

単位互換協定は、学生が自分の大学に単位を履修しながら、協定を結んだ大学で特別聴講生として授業を受け、単位が履修できる仕組み。名桜大の単位互換協定生はこれで十二になった。また、国際交流協定は十四、十四大と結んでいる。調印式は、両大学長をはじめ職員ら関係者が出席。久保学長は「大学を取り巻く環境が難しくなっているからこそ、知恵を出し合い横浜と沖縄、単位互換協定を締結した久保学長（左）と安田学長（右）」と名桜大

▲ 2003年12月27日＝沖縄タイムス

屋良 県新で優勝

自転車県選権大会



屋良朝春

自転車の第18回県選手権大会（団体選手権）は13日、県総合運動公園自転車競技場で行われ、1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、11、12、13、14、15、16、17、18、19、20、21、22、23、24、25、26、27、28、29、30、31、32、33、34、35、36、37、38、39、40、41、42、43、44、45、46、47、48、49、50、51、52、53、54、55、56、57、58、59、60、61、62、63、64、65、66、67、68、69、70、71、72、73、74、75、76、77、78、79、80、81、82、83、84、85、86、87、88、89、90、91、92、93、94、95、96、97、98、99、100、101、102、103、104、105、106、107、108、109、110、111、112、113、114、115、116、117、118、119、120、121、122、123、124、125、126、127、128、129、130、131、132、133、134、135、136、137、138、139、140、141、142、143、144、145、146、147、148、149、150、151、152、153、154、155、156、157、158、159、160、161、162、163、164、165、166、167、168、169、170、171、172、173、174、175、176、177、178、179、180、181、182、183、184、185、186、187、188、189、190、191、192、193、194、195、196、197、198、199、200、201、202、203、204、205、206、207、208、209、210、211、212、213、214、215、216、217、218、219、220、221、222、223、224、225、226、227、228、229、230、231、232、233、234、235、236、237、238、239、240、241、242、243、244、245、246、247、248、249、250、251、252、253、254、255、256、257、258、259、260、261、262、263、264、265、266、267、268、269、270、271、272、273、274、275、276、277、278、279、280、281、282、283、284、285、286、287、288、289、290、291、292、293、294、295、296、297、298、299、300、301、302、303、304、305、306、307、308、309、310、311、312、313、314、315、316、317、318、319、320、321、322、323、324、325、326、327、328、329、330、331、332、333、334、335、336、337、338、339、340、341、342、343、344、345、346、347、348、349、350、351、352、353、354、355、356、357、358、359、360、361、362、363、364、365、366、367、368、369、370、371、372、373、374、375、376、377、378、379、380、381、382、383、384、385、386、387、388、389、390、391、392、393、394、395、396、397、398、399、400、401、402、403、404、405、406、407、408、409、410、411、412、413、414、415、416、417、418、419、420、421、422、423、424、425、426、427、428、429、430、431、432、433、434、435、436、437、438、439、440、441、442、443、444、445、446、447、448、449、450、451、452、453、454、455、456、457、458、459、460、461、462、463、464、465、466、467、468、469、470、471、472、473、474、475、476、477、478、479、480、481、482、483、484、485、486、487、488、489、490、491、492、493、494、495、496、497、498、499、500、501、502、503、504、505、506、507、508、509、510、511、512、513、514、515、516、517、518、519、520、521、522、523、524、525、526、527、528、529、530、531、532、533、534、535、536、537、538、539、540、541、542、543、544、545、546、547、548、549、550、551、552、553、554、555、556、557、558、559、560、561、562、563、564、565、566、567、568、569、570、571、572、573、574、575、576、577、578、579、580、581、582、583、584、585、586、587、588、589、590、591、592、593、594、595、596、597、598、599、600、601、602、603、604、605、606、607、608、609、610、611、612、613、614、615、616、617、618、619、620、621、622、623、624、625、626、627、628、629、630、631、632、633、634、635、636、637、638、639、640、641、642、643、644、645、646、647、648、649、650、651、652、653、654、655、656、657、658、659、660、661、662、663、664、665、666、667、668、669、670、671、672、673、674、675、676、677、678、679、680、681、682、683、684、685、686、687、688、689、690、691、692、693、694、695、696、697、698、699、700、701、702、703、704、705、706、707、708、709、710、711、712、713、714、715、716、717、718、719、720、721、722、723、724、725、726、727、728、729、730、731、732、733、734、735、736、737、738、739、740、741、742、743、744、745、746、747、748、749、750、751、752、753、754、755、756、757、758、759、760、761、762、763、764、765、766、767、768、769、770、771、772、773、774、775、776、777、778、779、780、781、782、783、784、785、786、787、788、789、790、791、792、793、794、795、796、797、798、799、800、801、802、803、804、805、806、807、808、809、810、811、812、813、814、815、816、817、818、819、820、821、822、823、824、825、826、827、828、829、830、831、832、833、834、835、836、837、838、839、840、841、842、843、844、845、846、847、848、849、850、851、852、853、854、855、856、857、858、859、860、861、862、863、864、865、866、867、868、869、870、871、872、873、874、875、876、877、878、879、880、881、882、883、884、885、886、887、888、889、890、891、892、893、894、895、896、897、898、899、900、901、902、903、904、905、906、907、908、909、910、911、912、913、914、915、916、917、918、919、920、921、922、923、924、925、926、927、928、929、930、931、932、933、934、935、936、937、938、939、940、941、942、943、944、945、946、947、948、949、950、951、952、953、954、955、956、957、958、959、960、961、962、963、964、965、966、967、968、969、970、971、972、973、974、975、976、977、978、979、980、981、982、983、984、985、986、987、988、989、990、991、992、993、994、995、996、997、998、999、1000、1001、1002、1003、1004、1005、1006、1007、1008、1009、1010、1011、1012、1013、1014、1015、1016、1017、1018、1019、1020、1021、1022、1023、1024、1025、1026、1027、1028、1029、1030、1031、1032、1033、1034、1035、1036、1037、1038、1039、1040、1041、1042、1043、1044、1045、1046、1047、1048、1049、1050、1051、1052、1053、1054、1055、1056、1057、1058、1059、1060、1061、1062、1063、1064、1065、1066、1067、1068、1069、1070、1071、1072、1073、1074、1075、1076、1077、1078、1079、1080、1081、1082、1083、1084、1085、1086、1087、1088、1089、1090、1091、1092、1093、1094、1095、1096、1097、1098、1099、1100、1101、1102、1103、1104、1105、1106、1107、1108、1109、1110、1111、1112、1113、1114、1115、1116、1117、1118、1119、1120、1121、1122、1123、1124、1125、1126、1127、1128、1129、1130、1131、1132、1133、1134、1135、1136、1137、1138、1139、1140、1141、1142、1143、1144、1145、1146、1147、1148、1149、1150、1151、1152、1153、1154、1155、1156、1157、1158、1159、1160、1161、1162、1163、1164、1165、1166、1167、1168、1169、1170、1171、1172、1173、1174、1175、1176、1177、1178、1179、1180、1181、1182、1183、1184、1185、1186、1187、1188、1189、1190、1191、1192、1193、1194、1195、1196、1197、1198、1199、1200、1201、1202、1203、1204、1205、1206、1207、1208、1209、1210、1211、1212、1213、1214、1215、1216、1217、1218、1219、1220、1221、1222、1223、1224、1225、1226、1227、1228、1229、1230、1231、1232、1233、1234、1235、1236、1237、1238、1239、1240、1241、1242、1243、1244、1245、1246、1247、1248、1249、1250、1251、1252、1253、1254、1255、1256、1257、1258、1259、1260、1261、1262、1263、1264、1265、1266、1267、1268、1269、1270、1271、1272、1273、1274、1275、1276、1277、1278、1279、1280、1281、1282、1283、1284、1285、1286、1287、1288、1289、1290、1291、1292、1293、1294、1295、1296、1297、1298、1299、1300、1301、1302、1303、1304、1305、1306、1307、1308、1309、1310、1311、1312、1313、1314、1315、1316、1317、1318、1319、1320、1321、1322、1323、1324、1325、1326、1327、1328、1329、1330、1331、1332、1333、1334、1335、1336、1337、1338、1339、1340、1341、1342、1343、1344、1345、1346、1347、1348、1349、1350、1351、1352、1353、1354、1355、1356、1357、1358、1359、1360、1361、1362、1363、1364、1365、1366、1367、1368、1369、1370、1371、1372、1373、1374、1375、1376、1377、1378、1379、1380、1381、1382、1383、1384、1385、1386、1387、1388、1389、1390、1391、1392、1393、1394、1395、1396、1397、1398、1399、1400、1401、1402、1403、1404、1405、1406、1407、1408、1409、1410、1411、1412、1413、1414、1415、1416、1417、1418、1419、1420、1421、1422、1423、1424、1425、1426、1427、1428、1429、1430、1431、1432、1433、1434、1435、1436、1437、1438、1439、1440、1441、1442、1443、1444、1445、1446、1447、1448、1449、1450、1451、1452、1453、1454、1455、1456、1457、1458、1459、1460、1461、1462、1463、1464、1465、1466、1467、1468、1469、1470、1471、1472、1473、1474、1475、1476、1477、1478、1479、1480、1481、1482、1483、1484、1485、1486、1487、1488、1489、1490、1491、1492、1493、1494、1495、1496、1497、1498、1499、1500、1501、1502、1503、1504、1505、1506、1507、1508、1509、1510、1511、1512、1513、1514、1515、1516、1517、1518、1519、1520、1521、1522、1523、1524、1525、1526、1527、1528、1529、1530、1531、1532、1533、1534、1535、1536、1537、1538、1539、1540、1541、1542、1543、1544、1545、1546、1547、1548、1549、1550、1551、1552、1553、1554、1555、1556、1557、1558、1559、1560、1561、1562、1563、1564、1565、1566、1567、1568、1569、1570、1571、1572、1573、1574、1575、1576、1577、1578、1579、1580、1581、1582、1583、1584、1585、1586、1587、1588、1589、1590、1591、1592、1593、1594、1595、1596、1597、1598、1599、1600、1601、1602、1603、1604、1605、1606、1607、1608、1609、1610、1611、1612、1613、1614、1615、1616、1617、1618、1619、1620、1621、1622、1623、1624、1625、1626、1627、1628、1629、1630、1631、1632、1633、1634、1635、1636、1637、1638、1639、1640、1641、1642、1643、1644、1645、1646、1647、1648、1649、1650、1651、1652、1653、1654、1655、1656、1657、1658、1659、1660、1661、1662、1663、1664、1665、1666、1667、1668、1669、1670、1671、1672、1673、1674、1675、1676、1677、1678、1679、1680、1681、1682、1683、1684、1685、1686、1687、1688、1689、1690、1691、1692、1693、1694、1695、1696、1697、1698、1699、1700、1701、1702、1703、1704、1705、1706、1707、1708、1709、1710、1711、1712、1713、1714、1715、1716、1717、1718、1719、1720、1721、1722、1723、1724、1725、1726、1727、1728、1729、1730、1731、1732、1733、1734、1735、1736、1737、1738、1739、1740、1741、1742、1743、1744、1745、1746、1747、1748、1749、1750、1751、1752、1753、1754、1755、1756、1757、1758、1759、1760、1761、1762、1763、1764、1765、1766、1767、1768、1769、1770、1771、1772、1773、1774、1775、1776、1777、1778、1779、1780、1781、1782、1783、1784、1785、1786、1787、1788、1789、1790、1791、1792、1793、1794、1795、1796、1797、1798、1799、1800、1801、1802、1803、1804、1805、1806、1807、1808、1809、1810、1811、1812、1813、1814、1815、1816、1817、1818、1819、1820、1821、1822、1823、1824、1825、1826、1827、1828、1829、1830、1831、1832、1833、1834、1835、1836、1837、1838、1839、1840、1841、1842、1843、1844、1845、1846、1847、1848、1849、1850、1851、1852、1853、1854、1855、1856、1857、1858、1859、1860、1861、1862、1863、1864、1865、1866、1867、1868、1869、1870、1871、1872、1873、1874、1875、1876、1877、1878、1879、1880、1881、1882、1883、1884、1885、1886、1887、1888、1889、1890、1891、1892、1893、1894、1895、1896、1897、1898、1899、1900、1901、1902、1903、1904、1905、1906、1907、1908、1909、1910、1911、1912、1913、1914、1915、1916、1917、1918、1919、1920、1921、1922、1923、1924、1925、1926、1927、1928、1929、1930、1931、1932、1933、1934、1935、1936、1937、1938、1939、1940、1941、1942、1943、1944、1945、1946、1947、1948、1949、1950、1951、1952、1953、1954、1955、1956、1957、1958、1959、1960、1961、1962、1963、1964、1965、1966、1967、1968、1969、1970、1971、1972、1973、1974、1975、1976、1977、1978、1979、1980、1981、1982、1983、1984、1985、1986、1987、1988、1989、1990、1991、1992、1993、1994、1995、1996、1997、1998、1999、2000、2001、2002、2003、2004、2005、2006、2007、2008、2009、2010、2011、2012、2013、2014、2015、2016、2017、2018、2019、2020、2021、2022、2023、2024、2025、2026、2027、2028、2029、2030、2031、2032、2033、2034、2035、2036、2037、2038、2039、2040、2041、2042、2043、2044、2045、2046、2047、2048、2049、2050、2051、2052、2053、2054、2055、2056、2057、2058、2059、2060、2061、2062、2063、2064、2065、2066、2067、2068、2069、2070、2071、2072、2073、2074、2075、2076、2077、2078、2079、2080、2081、2082、2083、2084、2085、2086、2087、2088、2089、2090、2091、2092、2093、2094、2095、2096、2097、2098、2099、2100、2101、2102、2103、2104、2105、2106、2107、2108、2109、2110、2111、2112、2113、2114、2115、2116、2117、2118、2119、2120、2121、2122、2123、2124、2125、2126、2127、2128、2129、2130、2131、2132、2133、2134、2135、2136、2137、2138、2139、2140、2141、2142、2143、2144、2145、2146、2147、2148、2149、2150、2151、2152、2153、2154、2155、2156、2157、2158、2159、2160、2161、2162、2163、2164、2165、2166、2167、2168、2169、2170、2171、2172、2173、2174、2175、2176、2177、2178、2179、2180、2181、2182、2183、2184、2185、2186、2187、2188、2189、2190、2191、2192、2193、2194、2195、2196、2197、2198、2199、2200、2201、2202、2203、2204、2205、2206、2207、2208、2209、2210、2211、2212、2213、2214、2215、2216、2217、2218、2219、2220、2221、2222、2223、2224、2225、2226、2227、2228、2229、2230、2231、2232、2233、2234、2235、2236、2237、2238、2239、2240、2241、2242、2243、2244、2245、2246、2247、2248、2249、2250、2251、2252、2253、2254、2255、2256、2257、2258、2259、2260、2261、2262、2263、2264、2265、2266、2267、2268、2269、2270、2271、2272、2273、2274、2275、2276、2277、2278、2279、2280、2281、2282、2283、2284、2285、2286、2287、2288、2289、2290、2291、2292、2293、2294、2295、2296、2297、2298、2299、2300、2301、2302、2303、2304、2305、2306、2307、2308、2309、2310、2311、2312、2313、2314、2315、2316、2317、2318、2319、2320、2321、2322、2323、2324、2325、2326、2327、2328、2329、2330、2331、2332、2333、2334、2335、2336、2337、2338、2339、2340、2341、2342、2343、2344、2345、2346、2347、2348、2349、2350、2351、2352、2353、2354、2355、2356、2357、2358、2359、2360、2361、2362、2363、2364、2365、2366、2367、2368、2369、2370、2371、2372、2373、2374、2375、2376、2377、2378、2379、2380、2381、2382、2383、2384、2385、2386、2387、2388、2389、2390、2391、2392、2393、2394、2395、2396、2397、2398、2399、2400、2401、2402、2403、2404、2405、2406、2407、2408、2409、2410、2411、2412、2413、2414、2415、2416、2417、2418、2419、2420、2421、2422、2423、2424、2425、2426、2427、2428、2429、2430、2431、2432、2433、2434、2435、2436、2437、2438、2439、2440、2441、2442、2443、2444、2445、2446、2447、2448、2449、2450、2451、2452、2453、2454、2455、2456、2457、2458、2459、2460、2461、2462、2463、2464、2465、2466、2467、2468、2469、2470、2471、2472、2473、2474、2475、2476、2477、2478、2479、2480、2481、2482、2483、2484、2485、2486、2487、2488、2489、2490、2491、2492、2493、2494、2495、2496、2497、2498、2499、2500、2501、2502、2503、2504、2505、2506、2507、2508、2509、2510、2511、2512、2513、2514、2515、2516、2517、2518、2519、2520、2521、2522、2523、2524、2525、2526、2527、2528、2529、2530、2531、2532、2533、2534



2004年

2004年 7月29日
琉球新報

県内から初チャンピオン



名桜大3年の喜納隆志さん

【北中城】地元から日本一に。二十四日に山梨県で開催された全日本学生選手権自転車競技大会のケイリン種目で、名桜大学三年の喜納隆志さん（北中城村出身）が初出場し見事、初優勝を取った。これまで、県外に進学し優勝した県出身者はいたが、県内からのチャンピオンは初めて。喜納さんは「うれしかった。入賞はできると思ってたが優勝は想像してなかった。練習の成果が表れたと喜んでいる」。

全日本学生選手権の自転車競技のケイリン部門で日本一に輝いた喜納隆志さん（北中城村出身）の姿。

全日本学生 自転車競技 次は日韓対抗戦

喜納さんは兄の影響を受け、中学二年から自転車に乗るの始めた。県総合運動公園で大学生に混じって練習に励み、すでに県内各地ロードレース中学生の部で優勝。高校一年から、インターハイに出場し、同一年からは国体に連続参加し、真実的な成績を残している。

進学した名桜大では、自転車部がなかったため、自身で設立部員一人ですたした。二年目から徐々に部員が集まり、現在は五人で活動している。毎日、大学から辺戸岬向けに七・五キロ走り、週末は総合運動公園のトラックで練習している。喜納さんの後、面の目標は、夏のインターカレッジで好成績を取め、日韓対抗大会に出場すること。練習をまっける（す）にスピードが落ちる。毎日走らないと試合で勝てない」と意気込み、梅田はすでに八月の試合に向けている。

名桜大、グアム大が協定

留学や共同研究で交流

【名護】名桜大学（安田晃次学長）は二十九日、グアム大学（ハロルド・アレックス学長）と交流協定を結んだ。グアム大が世界に誇る島嶼研究や海洋研究を中心に人材交流を図り、来年度にも学生や教授陣の交換留学、共同研究を進める予定だ。



協定書を手に握手を交わす名桜大の安田学長とグアム大のアレン学長＝名護市・名桜大学

グアムは太平洋南西に位置する総面積五百四十九平方キロの島。観光が主要産業で米軍基地があるなど、沖縄と産業・社会構造で共通点が多い。協定はグアム大の食品貿易調査研究員を介して三年前から調整してきた。

調印式の前にはアレックス学長が講演。グアムの全収入のうち観光業が六割、米軍基地関連が三割に達することなどを紹介しながら、さんご礁研究を進める海洋研究所や島嶼地域の歴史、文化交流、事務員の交換研修などを進める。

両大学は来年度から、単位交換を認めた学部学生の一年間留学、教授陣の学術交流、事務員の交換研修などを進める。

会、経済などを学ぶミクロネシア地域研究センターなど大学の概要を説明した。

アレックス学長は「学生減少は世界の各大学共通の問題。自然、社会状況が似ている沖縄と交流することで大学の魅力アップ、学術向上を目指したい」と期待を込めた。安田学長は「協定締結により、学生はアメリカと日本、グアムと沖縄を学べる。両大学が世界の大学になるよう期待したい」と話した。

2004年 3月30日＝沖縄タイムス

貴重な講演会



学生や地域住民が、幅広い知識と教養を共有していく機会として、本学は時宜をとらえて、国内外の著名人による講演会を開催している。開学5周年を記念してリヒャルト・フォン・ワイツゼッカー前ドイツ大統領の野外ティーチインを実施したほか、10周年の節目には、橋本龍太郎元内閣総理大臣を招いて講演会を開催した。

激動期の国際社会で活躍した両氏は、豊かな学殖識見に基づいて講話。聴講者に地元沖縄の魅力を再発見させるとともに、世界に向けて目を開かせる貴重な経験を与えてくれた。また、地元オリオンビールとのタイアップで行ったビール文化懇談でワイツゼッカー氏の見せたきさくな一面は、ドイツという国を身近に感じさせた。橋本元首相は、学生らと記念植樹するなどこやかな笑顔で名桜キャンパスでのひとときを楽しんでいた。両氏の講演会の要旨を抜粋して紹介する。

ワイツゼッカー前ドイツ大統領 若者と『沖縄の未来』を語る

1999年4月16日

於：名桜大学多目的ホール野外ステージ・中庭

主催：毎日新聞社、琉球新報社 後援：外務省 協賛：オリオンビール

今日、この沖縄にご招待いただいて、特にこの美しい島で若い人にこうしてお話ができますことを家内とともに感謝しています。

私は、沖縄に来る前に沖縄の人々が多くの苦難を味わわれたという歴史について知識を得て参りました。そして、実際に沖縄にうかがうと、この島の自然の美しさ、そして何よりも皆様方の心温まるおもてなし、心づくしに圧倒されました。

私は若いときに、皆様方が味わわなくて済んだ戦争体験というものを実際に体験しました。日本、ドイツとも過去からの教訓を得るということをしなければならなかったと思いますし、十分にその教訓を学んだと思っています。

ドイツの過去200年を振り返ってみますと、ドイツにとって常に敵国であったものが、西はフランス、東はポーランドでありました。しかし、そうしたヨーロッパも、今は欧州統合、EUという形になって「国ごとの紛争も平和的手段で解決する」という統合が成されています。この21世紀の課題としての最大のものである「グローバル化」に対して、よりよく対処していけるという体制が整ったことになります。

ドイツと沖縄はもう一つ共通点があるかと思います。ドイツは大陸の中心にある国で、多くの隣国に囲まれた地理関係になっています。そして、沖縄は東アジアという大きな圏内にあって、実は沖縄がその中心に位置しています。そして、この東アジア地域というものが平和裏に、その調和の中で生きるということ、これが我々の目の前に来ている大きな機会であると思っています。

多大な（戦争の）苦しみを味わった沖縄の方々が平和へのメッセージを発すれば、その意志、メッセージはより一層説得力のあるものになります。しかし、この平和というものを今後強化できるかどうかは若い人にかかっています。



ワイツゼッカー前ドイツ大統領の講演に熱心に耳をかたむける聴衆は野外ステージと中庭をうめつくした

若い人にとってまず大事なことは教育です。これほど素晴らしい（名桜大の）景観の中にある大学で学ぶということは、私自身、一度も経験したことがありませんでした。職業に就くための勉強も重要ですが、もう一つ、実際のその社会の動きに関心を持っていただいて、受け身でなく、能動的に行動していただきたいと思います。若い人たちが自分の手で能動的に、積極的に平和というものに関わってくだされば、それだけ平和というものはより良く確保されるものです。皆様方が、たとえば海外に出ていって世界を見る機会があれば大変よろしいと思います。韓国も中国も東南アジアも皆様から近い距離にあります。沖縄の経済状況が日本本土に比べてより厳しいものであるように、日本から東南アジアに目を向けるとそちらの経済状況の方がより一層厳しいことがわかります。世界には貧しい国があります。こうした国の人々を助けるためにはODA（政府開発援助）任せではなく、若い人たち自らが行動してその救済に当たるとことが望ましいのです。

ヨーロッパにはかつて様々な対立がありましたが、グローバルな世界に向かってそういう対立というものを段々と我々は克服していきました。韓国でも若い人たちが選んだ高齢の大統領による政府が、朝鮮半島における問題を平和的に解決するのだということで尽力しています。ですから、一国の政治を、そういうプロの高齢者の人、

あるいは古い制度に任せておくのではなく、若い人たちが積極的に関わっていくということが望ましいのであります。

米軍が駐屯している沖縄の若い人たちは、米軍に対しても色々な良いアドバイスができる立場にあると思います。未来というものを構築していくのに、私たちは武力に頼った未来を構築しようと思っているのではありません。平和というものを希求する意志、その意志に基づいて武力に頼らない未来を築きたいと我々は願っています。

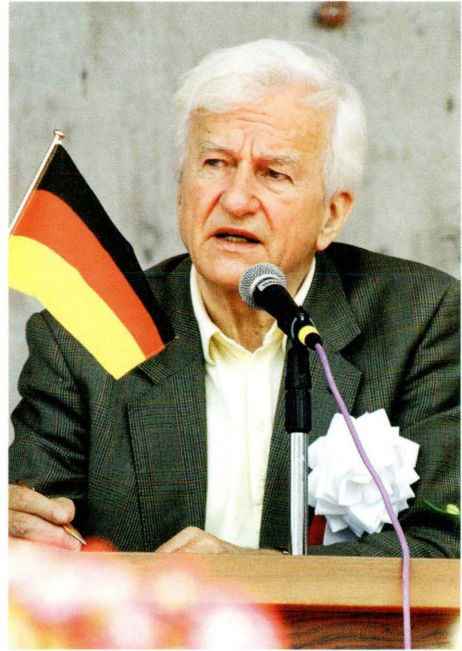
世界では「グローバル化」が進んでいます。これはいくつかの段階を踏んで進んでいることであります。1つには、国境というものを無視してどんどん広がっていったしまうもの。「自然環境破壊」がそれに当たります。平和裏に生きようとする者であれば、今後、大気が一方的に豊かな繁栄を遂げる産業国だけによってどんどん汚されていってしまいうことがないように、自分の努めるべきことを行わなければなりません。いたる所で自然保護、環境破壊を防止する動きに努めていただきたい。

2つ目に、国境を越えて広がっていくものに「テクノロジー」があります。情報技術の進化のおかげで、私たちは他の場所で人々がどういう暮らしをしているのかという情報を得ることができます。(テクノロジーを通じて知り得た情報で)皆様が自分の力で直接に、困っている人、飢餓に苦しむ人、自然災害に苦しむ人たちを助ける行動にでるなら、その行動は平和に貢献する行動です。

それから同じく世界的に今、展開しているもの、それは「経済」です。資本というものは国境の前で止まりません。しかし、資本が流通してその利潤を上げるだけでは平和に繋がらないのであって、社会的な公平というものが実現して初めて平和というものは達成されます。

そして4つ目は「異なる文化、異なる宗教に対して寛容な態度を取る」ということです。この「寛容」というものを実際に実行するというのは、個々人が自分たちで始めることであって、一国の政府であるとか指導者層から発するものではないのです。自分たちが過ちの中に完全に縛られている高齢の人をその呪縛から解き放して、平和な、いろいろな宗教・文化を寛容的に受け入れるという道へ導いてくださるのは、若い人たちの力であると思います。

私は思うのですが「過去について目をつぶる者は、その過ちをもう一度繰り返してしまう危険がある。そして逆に、過去に対して目を見開く者、この人は将来へ向けての平和の証を、まさに自分が体现できる人」ということになります。皆様方は繁栄の社会、または自由の中で育って来られました。自由というものは現在について、そして未来に向けて自分で責任を負わなければならないということでもあるのです。この繁栄の中で、ただ漫然とそれを享受するだけではなく、責任を全うしていく生き方をすれば、その人の生き方というのはさらに生きがいのあるもの、意味のあるものになります。



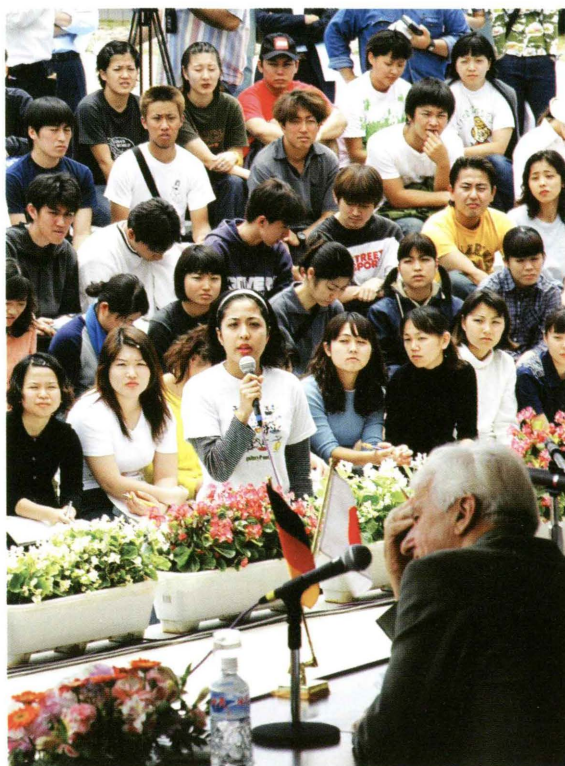
● ●

沖縄が未来へ向かっていくためには、日本とアメリカの間で合理的な、理性的な理解というものが得られることが必要です。また、沖縄は、独自の経済力というものも次第についていますし、これが必要です。経済力の中には、沖縄が魅力的な観光地として集客できるということも含まれると思います。もちろん、この観光客というのは経済的なファクターでもありますが、それだけでなく、その人たちが沖縄というものを知る、沖縄を愛する、そして沖縄というものに信頼を持ってくださる、このことが大事です。

この南西諸島は、地理的に中国、台湾に近いところに位置しています。もし沖縄の若い人が真剣に中国における問題、あるいは朝鮮半島における平和というものを真剣に望むのであれば、もちろん若い学生の方がすぐに政府の任務を担当できるわけではありませんが、皆様方がここで影響力を発揮して日米関係、そしてロシアにも働きかけができる、そういう位置にいらっしゃると思います。

私自身が若い頃、熱意を持って考えたことは、ドイツの隣国であるポーランドと平和的な関係を修復したいということでした。そして私たち若い人間は、我々でイニシアチブを取り、そこでまた宗教的な団体の動き等を使って、ポーランドとの平和に対していくつかの動き、きっかけを与えることをしました。私たちは政府の命令に従ったというよりも、政府に対して色々な要求を突き付ける立場にありました。私たち若い者の活動は、政府に未来に対してこういう行動を取らないといけないというふうに強要したといえれば強要したと言えますし、むしろ、政府も若い人が言ってくれたからよかったと、これで我々もこの難しい決断ができるということで、平和の方向に動いていってくれたわけです。

何か行動することによって、これができるのだという達成感、そして達成すると自分が行動することこそ意味があるという信頼を自分に持つことができます。これが大事です。人によってはこの達成感を得るために一生かかる人もいるかも知れません。ですから、そういった意味での自分の行動に自信を持つということをぜひ、望みたいと思います。



講演内容に対し
質疑を行う名桜大生



多目的ホールでの講演

橋本龍太郎元内閣総理大臣講演会

2003年7月5日

場所：名桜大学多目的ホール

主催：名桜大学 後援：北部広域市町村圏事務組合・北部市町村会・北部振興会

宜野湾スピーチとその後

ちょうど第2次大戦沖縄戦の時期というのは、私が小学2年のときでした。ラジオで「沖縄」という地名をそのとき初めて聞きました。そして、その激戦を伝える戦況の放送から、ある日突然、沖縄という言葉が出て来なくなった、そんな記憶がございます。それから長い間、沖縄というものを意識することなく進んできました。

たまたま大学3年のときに、対馬丸事件の遺族の方々が、大濱信泉氏（当時、早稲

田大学総長・石垣島出身)の紹介で私の父を訪ねて来られたとき、それが本当に沖縄というものをもう一度肌身に触れた感じで受け止めた時です。その日、夕食時に父から1400人余りの方が犠牲になられた対馬丸事件というものを初めて聞きました。父は「沖縄にはおそらく、こうして本土が気付いていない問題がまだたくさんあるに違いない」ということを、自分に言い聞かせるようにつぶやいていたのを、今でも忘れずにあります。

その後、父が病気で倒れ、後を継いで私が衆議院議員になりました。私が政治家として持った目標の1つは、この疎開船対馬丸の援助事業を何とかすることでしたが、昭和52年にやっと関連する特別支給金が支給されることになり、56年には戦傷病者戦没者遺族等援護法を使って、6歳未満で負傷された方々に対しても援護の手が差し延べられるようになりました。

平成8年9月、私は総理として宜野湾市の沖縄コンベンションセンターで「県民へのメッセージ」と題してお話をさせていただいたことがあります。今日は、この「宜野湾スピーチ」を振り返りながら、それを出発点として、その後の沖縄の振興、特に北部の振興がどのように発展してきたかについて聞いていただきたい。

「宜野湾スピーチ」で、私は沖縄の経済社会の課題について次のように整理しました。①通信・空港・港湾の整備、②国際交流や文化交流の拠点整備、③自由貿易地域の拡充などによる産業や貿易の振興、④観光施策の新たな発展と充実、⑤医療・環境・農業などの分野を中心とした国際的な学術交流の推進と関連産業の振興と沖縄の将来を担う若者の雇用問題に対する有効施策は何か—こうした問題の取り上げ方をしました。

通信・空港・港湾の整備

空港・港湾の整備は、平成11(1999)年5月に那覇空港ターミナルが開港しました。そして今年8月に沖縄都市モノレールが開業します。

また、平成9(1997)年以降、大きな政治的決断のもとに本土—那覇間の航空燃料税を半分に、空港使用料を6分の1に軽減した結果、航空運賃も1万円引き下げられました。これが引き金となって、沖縄への観光客数は飛躍的な増加を示すこと

になりました。

そして、北部振興にも資する対策として、沖縄自動車道の通行料金の3割引き下げが平成11年度から実施され、交通量が飛躍的に増大し、沖縄自動車道は身近に利用されるようになりました。県土の均衡ある発展という観点から、特に北部地域の皆様から高く評価される施策ではなかったでしょうかと考えています。

沖縄都市モノレールは那覇市内の渋滞問題の軽減にも役立つでしょうし、観光客誘致にも成果を上げるでしょう。そして、スピーチでは本土と沖縄の通信料金の格差を埋めるという観点から様々な情報通信手段を活用した低料金アクセスの実現を唱えました。県内通信各社の企業努力によって中継系の光ファイバーは那覇や名護といった都市部を中心に敷設が進んでいます。こうした基盤整備に加え「通信コスト低減支援事業」を平成11年度から実施、本土から県内への進出企業がより一層、低料金アクセスができるようになりました。

国際交流や文化交流の拠点整備

国際交流、そして文化交流の拠点整備ですが、国立組踊劇場「国立劇場おきなわ」が平成16（2004）年1月に開演いたします。また、国際ショッピング・モール構想は「沖縄型特定免税店制度」という形で実現し、既に那覇空港内に展開。新都心に平成17（2005）年1月にはDFSを中心とした大規模国際ショッピング・モールがよいよオープンします。これが実現すると、ブランドビジネスにおいて大変大きな魅力が追加されて、観光の一層の飛躍につながると思います。

平成10（1998）年には名護市に国際コンベンション拠点として万国津梁館が整備され、名護市をはじめとする地元の皆様の温かい歓迎のお陰で「九州・沖縄サミット」は大成功を納めることができました。私の良き友人であった小渕恵三総理が結局、自らの生命をかけたサミットでしただけに、無事終了できたことを何よりありがたく思っています。

国際会議では「九州・沖縄サミット」以降も平成14（2002）年度までに、政府関係だけで40件の国際的なコンベンションが沖縄で開催されました。平成17（2005）年には米州開発銀行総会が沖縄で開催されます。スピーチで提唱した国際コンベ

ンション都市の形成も、既に構想の段階は過ぎて現実のものになってきました。

自由貿易地域の拡充などによる産業や貿易の振興

「特別の自由貿易地域」については、沖縄振興開発特別措置法の改正（平成10年）で実現、中城湾新港地区が「特別自由貿易地域」に指定されて、立地企業は法人所得控除、投資税額控除、または特別償却の選択適用が可能になりました。名護市は'03年7月、金融関連企業が法人所得控除、または投資税額控除の選択適用が受けられる「金融業務特別地区」に指定されました。

また、那覇市に続いて名護市に104コールセンターが整備されました。104コールセンターのほかに沖縄県内には「情報通信産業振興地域」制度が'99年12月に適用され、24市町村が投資税額控除を受けることが可能になりました。さらに、IT企業の拠点として名護マルチメディア館を'99年4月に整備しました。その後、名護市に続き、県内11拠点のIT受け皿施設が整備。人材面で行政分野、産業振興分野において幅広い人材が育ちつつあることと思っています。



橋本元総理大臣の講演会には地域住民も多数参加した

観光施策の新たな発展と充実

そして、もう一つ大きなものは、観光施策の新たな発展と充実でした。スピーチの当時は観光客数も伸び悩み、今後の展望がいまひとつはっきりしませんでした。しかし、航空運賃の引き下げが引き金になり、観光客が大幅に増える中、99年には「観光振興地域」制度を創設。観光関連施設も投資税額控除を受けられるようになりました。本部町では'03年11月、海洋博公園水族館が沖縄美ら海水族館として世界最大級の水族館に生まれ変わりました。

また、'04年、沖縄デジタルアーカイブを構築。総計約15億円の我が国最大級の地域アーカイブを構築したこの事業には、参加企業81社中57社が県内企業として活躍しました。こうした活動は、私が願っていた日本全体を豊かにする沖縄発の取り組みで、将来に対する明るい希望も感じます。

東村のオートキャンプ場、村民の森整備事業が完成。本部町ではドルフィン・セラピーとマリンスポーツの拠点となる「海洋ウェルネス・リゾート」が整備されました。特に北部地域を中心として公設民営の長期滞在型施設が充実しつつあります。

医療・環境・農業などの分野を中心とした

国際的な学術交流の推進と関連産業の振興

久米島町の海洋深層水研究所の整備が先行する形で進みましたが、その後も名護市に国際海洋環境情報センター、恩納村に亜熱帯計測センターなどが整備。産学官共同研究事業を推進して、ITやバイオ、環境といった沖縄の特性を生かした分野で、新しい産業の種がまかれているのは喜ばしいことです。

沖縄ならではのウコン粒の加工、もろみ酢の製造といった健康バイオ産業は、小規模といいながら、'96年から2000年の間に産業規模は5倍増を示し、150億円の売上高になり、新しい基幹産業として発展する可能性が見えてきました。具志川市においては、健康バイオ企業の受け皿事業として沖縄健康バイオテクノロジーセンターが開所すると聞きます。

そして、沖縄科学技術大学院大学について、県や村と相談しながら、最高のものがつくれるようお互いに力を尽くしていきたいと考えます。

沖縄の将来を担う若者の雇用問題に対する有効施策

NTTの104コールセンターの誘致とともに国立沖縄工業専門学校が正式に発足。情報通信システム工学、メディア情報工学、機械システム工学、生物資源工学など、これからの沖縄発展のために必要不可欠なIT、バイオ4学科。我が国をリードする有為な人材が、この国立高専から巣立っていかれることを楽しみにしています。

国立高専の設置に加えて、沖縄の子女の海外の大学院への留学、同時通訳の養成、さらに県内高校生と米国の高校生の交換留学のために「沖縄人材育成海外派遣事業」「沖縄県同時通訳者養成事業」「沖縄県高校生米国派遣事業」をつくりました。

雇用の分野そのものについては、県と国が協力して一昨年から「産業・雇用対策会議」を開き、省庁間の連携による雇用対策を実施。「若年者総合雇用支援事業」「若年雇用開発助成金」といった若者向けの雇用対策も進めています。これら努力の中で、有効求人数が月間平均あたり'96年度の4800人から'02年度の1万人に倍増したことは注目しなければなりません。

国と地域が一体となった北部振興の取り組みの結果、'97年度以降の5年間で、北部地域で約1000人の直接の新規雇用を創出。北部地域の人口はこの間、約4000人の増加を示しました。これまでの北部振興策の効果によって、北部の人口減に歯止めがかかり、北部12市町村が力強く歩み始めたことを示し、人口動態は明らかに変化を見せつつあります。

北部の振興は沖縄の振興に、沖縄の振興は日本全体の活性化につながります。どうか、北部の特性を生かした産業の振興、北部の町々の活性化が、私の「宜野湾スピーチ」の中でお約束をし、継承し、発展していただきました沖縄振興の強力な取り組みの中で、北部のみならず沖縄の若い方々、そして子どもたちへの輝かしい財産になるということを心に深く留めて頑張っていただきたいと思います。

(写真・琉球新報社提供)

編集後記

現在の名桜大学を取り巻く状況はたいへん厳しいものがあるが、本学が生き残り、さらに発展を続けるために何をなすべきかは、これからも常に模索を続けて行かなければならないであろう。この記念誌を繙いていただければお分かりの通り、名桜大学10年の成果は、その草創期における諸先輩の並々ならぬご苦勞の賜物であり、その事実、ここに現在の名桜大学の礎として記録されたのである。

変化の著しいこの激動の時代において、先行き10年を見渡すことは容易ではないが、先人の勞苦に思いを致すならば、これから我々が経験するであろう幾多の困難も、何とか乗り越えられるのではなからうか。この記念誌が、我々に新たな勇氣と希望を与えてくれるものとなるならば、この上ない喜びである。また、そのようなものとなることを願いながら、ここに名桜大学10年の記念誌刊行までの経緯を記すとともに、ご協力ご支援いただいた関係各位にまず謝意を述べたい。

名桜大学の開学10周年記念事業の一つとして、名桜大学10周年記念誌の刊行が正式に決定されてから一年余が経過した。その間、記念誌編集部会は、6人の学内委員に、出版を委託した新星出版の3氏が客員として加わり、実質9人の体制でスタートした。同部会は、毎週木曜日を定例会議日と定め、本部棟4階の記念誌編集室において13回の記念誌部会を開催した。協議事項の主要な事項は、「部会長・副部会長の指名」「記念誌編纂の基本方針の確定」「記念誌の仕様」「部会の開催等スケジュールの策定」「目次の仮設」「各章・各項目の担当分担」「各章・各項目の関係資料の収集に関する協議」「原稿依頼及びインタビュー等の策定」「座談会のテーマ決定と出席者の人選等の策定」「諸計画の進捗状況の確認と調整」等であった。

理事会・評議員会の議を経て提示された文書「名桜大学開学10周年記念事業」に記載されている記念事業実施本部組織（本部長—学長）の図の上では、記念誌部会は、総務部会・財政部会・行事部会・事業部会に並ぶ一部会である。その構成員は、本部長指名による4人の委員（山端清英・小濱哲・木村堅一・大石節の4教員）、出版を委託した新星出版の3委員（島袋嘉夫・謝花敦・ジャン松本の3氏）であり、事務局

から総務課長（屋嘉義和）・総務企画係員（比嘉一成）が加わり、文書の授受・諸連絡・会議の準備等に当たった。

記念誌の「編集方針」は、次のように合意された。

- ① 名桜大学の10年の歩みを綴った歴史書とする。
- ② 名桜大学の10年の歩みを伝える資料（記録）を整理する書とする。
- ③ 名桜大学を支えてきた仲間の、本学への思い出と期待を綴った書とする。

記念誌の目次は、未刊となった「5年誌」の企画当時の資料を参考にして作成されたものである。その構成に従って、第一編を山端と木村が担当し、第二編を小濱が担当した。以下、第三編を大石・木村が、第四編を山端が、第五編を総務企画部長が、第六編及び編集後記を山端が、それぞれ担当した。担当者は、資料の収集及び印刷原稿の査読及び校正を業務とし、各編の文章表現は、その大部分をライターとして委託した新星出版が行った。この記念誌は、正確を期すべく諸資料及びインタビューに基づいて執筆されたものであるが、厳密な学術書とは位置づけていない。

大学がその歴史を編纂することの意義を考えると、それは大学が自らその歴史を誇り、自らを評価することである。また過去を省み、未来に資する上で、重要かつ貴重な試みを自らの意志で行うことである。このように思料すれば、記念誌編纂の基本方針や編纂部会の設置については、しかるべき時に学内のコンセンサスを得る必要がある。その点が十分ではなかったと反省している。また、資料の収集・分類・整理・保存については普段から意識的・組織的に行っておくべきである。これも反省点である。

最後になったが、当該記念誌の編纂には、新星出版の島袋龍三社長に並々ならぬ尽力を得た。その他、名護市・北部市町村会・北部振興会・海外沖縄県人会・本学後援会・協力会・同窓会のご協力を頂いた。学内の関係各位から多量の資料を提供して頂いた。数え上げれば、枚挙にいとまがない。ここに深甚なる感謝の意を表する次第である。

名桜大学開学10周年記念事業記念誌部会 部会長 山端 清英

名桜大学10年史

2004年12月10日 印刷

2004年12月21日 発行

〔非売品〕

編 集 名桜大学開学10周年記念誌部会

発 行 名桜大学

沖縄県名護市字為又1220-1

TEL (0980) 51-1100

FAX (0980) 52-4640

印 刷 新星出版

沖縄県那覇市港町2丁目16番1号

TEL (098) 866-0741



